
バカと速攻と昆虫少年

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと速攻と昆虫少年

【Nコード】

N2176S

【作者名】

榊

【あらすじ】

文月学園二年Fクラス所属、七伏博人。昆虫をこよなく愛し、昆虫少年の異名を持つ彼。そんな彼の兄や幼なじみ、そして級友達を交え、我が道を走りながらも愉快に学園生活をおくっていく。そして最近はいろいろ逃げ道がない。そんな彼の召喚獣の戦い方、それは『速攻』。駄文になりますが、お付き合いただけると嬉しいです。サブタイトルは使い道のない豆知識です。偶数日の定期更新です。

第一問く植物のクローンがよく見られるく（前書き）

第一話です。サブタイトルは気にしないでください。

第一問く植物のクローンはよく見られるく

第一問

校舎へ続く道が桜に彩られる新学期。

僕は双子の兄である行平ゆきひらと幼なじみの佐藤楓さとうかへで通称メープルと共に坂道を登っていく。

ちなみに桜の品種のソメイヨシノは全てクローンなので、条件が揃えば同時期に咲く。

他愛もない雑談をしながら歩くと玄関の前に西村先生、通称鉄人が立っていた。

「「おはようございます」「」」

「ああ、お前たちか。これがクラス割だ」

そういつて渡されたのは茶色の封筒。

適当に開けると中にはFの文字、つまりこの学校の最低クラスが書いてあった。

「そっちはどうだった？」

二人に聞いてみると、Aクラスだと返ってきた。

「残念だがこれもルールだからな」

そう西村先生に声をかけられる。

「うう：：ハクと一緒に良かったっす」

「っす」というのはメーブルの口調。

ちなみにハクというのは僕、博人のことだ。

「試召戦争、頑張ってください」

デフォルトで丁寧なのは行平の口調だ。

そして二人と別れ、今Fクラスの前に立っている。

ドアを開けると、畳と卓袱台、座布団という斬新な設備の教室がひろがっていた。

ああ、今日もいい天気だなあ。

……………ダメだ。ありきたりな現実逃避じゃ逃げ切れない。

こうなったら、現実逃避その2を使うしかない。

「……………（読書中）」

よし、これで問題ない。

第一問く植物のクローンはよく見られるく（後書き）

感想、ご意見をよろしくお願いします。

第二問くアリは働き者？ハッ！二割はさぼってるけどく（前書き）

第二問です。

第二問くアリは働き者？ハッ！二割はさぼってるけどく

第二問

しばらく現実逃避していると、僕を呼ぶ声が聞こえた。

「自己紹介をおねがいします」

いつの間にか自己紹介の順番になっていたようだ。

「七伏博人〔ななふしはくと〕です。趣味は昆虫採集です。よろしくお願いします」

席についてふたたび読書を始める。

すると、少したってから教室のドアが開かれた。

そこには息を切らせて胸に手を当ている女子生徒と、従姉である杉本秋音〔すぎもとあきね〕。ウチに居候中の物理教師だ。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんと杉本先生もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします：…」

つづいて秋音姉。

「私は杉本秋音。Fクラスの副担任の物理教師だよ♪よろしくね！」
その後本来Aクラスにいるはずの姫路さんが何故Fクラスにいるかという話になったが、風邪による途中退席が原因だそうだ。

僕の場合は色々あつての遅刻なんだけど。

教卓がぶっ壊れたり、なんやかんややっているうちに、最後の自己紹介になった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

坂本雄二。高身長で、タテガミのような髪が特徴の僕の悪友。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二は教室内の各所に目を移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸入れて静かに告げる。

「――不満はないか？」

『大ありじゃあっ！！』

ですよね。

そして雄二はその状況を改善するため、あることを提案した。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

第二問くアリは働き者？ハッ！二割はさぼってるけどく（後書き）

感想、ご意見等お願いします。

第三問く石油にはセキユバエく（前書き）

だいぶ省略した感があります。第三話です。

サブタイトルく石油は生物にとって毒と変わらず、生息が困難です。しかし、セキユバエの幼虫は石油を生活の場としています。

第三問く石油にはセキユバエく

第三問

Aクラスへの宣戦布告。

クラス内からも否定的な意見がでるほどAクラスとFクラスの戦力の差は明らかだ。

ここ文月学園では、上限の無いテストの点数に応じた強さの自身をデフォルトした召喚獣を使い、クラス間での戦争が行われる。

つまり、学力が最高のAクラスとFクラスでは天と地ほどの差があるということだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その戦力差を知りながらも、雄二は堂々と宣言した。

そして、Aクラスに勝てるという根拠をこれから説明したくれるらしい。

まず始めに呼ばれたのは畳に顔をつけて姫路さんのスカートを覗いていた土屋康太。

顔に残る畳の後を隠しながら壇上にあがる。

「こいつがあ有名なムッツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

ムッツリーニ、簡単に言うともムッツリスケベだ。

ただし、そのムッツリ度は常人の比ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

試召戦争に至るとしたら強力な戦力となるだろう。

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。演劇部のホープで、双子の姉の木下優子が有名だ。

そして途中にキングオブバカ、吉井明久をバカにした後ぼくのなまえがよばれた。

「七伏博人。こいつはこのクラスの秘密兵器といってもいい。皆も昆虫少年という名前は聞いたことがあるだろう」

『Aクラスレベルって話だよな』

『運動もすごいってきいたぜ』

『まさに秘密兵器って訳だ』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役

を果たせ！」

別に誤字ではないと思う。

明久は最初は渋っていたが、あっさり騙されて意気揚々とDクラスへ向かっていた。

「騙されたあっ！」

「やはりそうきたか」

満身創痍といった体の明久が転がり込んできたが、別に予想通りだったので特にリアクションはしなかった。

「あの程度でだまされる明久がわるかったんだよ」

さて、これで本格的にDクラスと戦争になるわけだが僕の役目は秘密兵器。

つまりなにが言いたいかっていうと、Dクラス戦では秘密兵器はズット秘密だったってことだ。

相手の代表に姫路さんが奇襲をかけておわったそうさ。

第三問（石油にはセキユバエ）（後書き）

感想、ご意見等ありましたらお願いします。

第四問〜ペットボトルは生ゴミと一緒に燃やしたほうがいいらしい〜(前書き)

第四問です。

第四問くペットボトルは生ゴミと一緒に燃やしたほうがいいらしいく

第四問

Dクラス戦が終わり、行平とメープルと一緒に帰る。

「試召戦争ご苦労様でした」

「最終目標はAクラスってどこですか？」

「うん、そうだよ。というかいつも通りのしゃべり方でいいんじゃない？」

メープルの『くす』という口調は本人曰わくキャラ作りだそうだ。

「ねえ、それじゃあさ、ちょっと勝負してみない？」

ふむ、勝負か…………。

「内容によるね」

「ハク達がAクラスに勝ったらハクの、負けたら私の言うことを聞くっていうのはどう？」

「うん、乗った」

実は結構賭事好きだったりする。

ちなみに一番好きなのはポーカーだ。

「それじゃ、また明日！」

メーブルの家の前で別れ、すぐ隣の我が家に入る。

明日は点数補充テストがあるので一通り教科書に目を通しておく。

翌朝、いつも通り学校に向かう。

今日は昨日試召戦争で消費した点数の補給テストになる。

僕としては、このテストが今後の戦力となるので少し気合いを入れてやっておく。

第四問くペットボトルは生ゴミと一緒に燃やしたほうがいいらしいく（後書き）

くサブタイトルく

生ゴミだけで燃やしても十分な熱が得られず、うまく燃えないので石油をかけて燃やしているらしいのですが、ペットボトルと一緒に燃やすとうまく燃えて、石油の無駄遣いになりません。

第五問　く子の方が親より大きいアベコベガエル　（前書き）

だ　い　ぶ　短　い　で　す　が　第　五　話　で　す　。

第五問く子の方が親より大きいアベコベガエルく

第五問

4教科のテストが終わり、昼休みとなったのでFクラスのいつものメンバーと行平とメーブルを加え弁当を食べていたのだがー

ガクガクガクガクガクガクガク

姫路さんの弁当を食べたムツツリーニと雄二が大ダメージを負って倒れていた。

生存者で作戦会議を行い、僕は一つの結論を出した。

（僕は自分の弁当あるから、姫路さんの弁当は遠慮させてもらう）

（私もまだ死にたくないっす）

（頑張ってください）

見捨てましょう♪

（そんな！ひどいよ！）

（俺達は仲間だろ！）

明久と復活した雄二が生贄を増やそうと必死だが、無視して三人で

和やかに食事を再開する。

雄二が犠牲となることで場がおさまったと思ったが、デザートがあり、秀吉がさらなる犠牲となった。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

姫路デザートで死にかけた秀吉に明久が大量に茶を飲ませている。確かに抗菌作用があるが、姫路さんの料理に入っているのは化学物質だから効果は得られないだろう。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

Aクラスを目標とするのに、なぜBクラスと戦うのかという島田さんの質問だが、おそらくAクラスと有利な状況で戦うためにBクラスを利用するつもりだろう。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃには勝てやしない」

雄二らしくもない戦う前からの降伏宣言。

Aクラスの約四十人はBクラスよりも少々点数が上のふつうの生徒だ。

しかし残り10人の点数はずば抜けて高い。

Fクラスのふつうのメンバーでは全員で取り囲んでもやられてしまうだろう。

だから雄二は一騎打ちに持ち込む作戦のようだ。

Bクラスはそのため脅しの使うつもりらしい。

今回も明久がBクラスへの死者（使者）にされ、役目を果たしてボロボロになって帰ってきた。

第六問く巢の外で働くハチは年長者く

第六問

Bクラス戦。今回はまずは防御側にまわり、雄二の護衛として掃除用具入れに隠れていた。俺が呼ぶまで出てくるなという指示通り、ずっと隠れていた。

現在、Cクラスに不穏な動きがあり、不可侵条約を結ぼうということになった。

しかし、引っかかる事がある。それは、Cクラスの代表とBクラスの代表が付き合っているということだ。

「雄二！不可侵条約を結ぶのに、僕も連れて行ってほしい！」

掃除用具入れの中なので、大きめの声で叫ぶ。

「……………分かった。出てこい」

意図を察してくれたのか、少し考えてから了解してくれた。

秀吉を残して、Cクラスに向かう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは、気が強そうな女子の小山友香さんだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根元クン？」

予想通り、教室の奥から根元恭二が現れた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根元君！Bクラスの君がどうしてこんなところで！」

Fクラスをはめるためです。

取り巻きも7人ほど見える。ちょうど良い。

4時までには決着がつかなかったら翌日に持ち越しという協定を盾にして、攻撃を仕掛ける……。か。残念ながら予想通りでしかないこの作戦はもう意味が無い。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をー」

「Fクラス、七伏が受けます。試獣召喚」

雄二達を教室から逃がし、相手と向き合う。

チャンスは簡単にピンチに変わるってことをしっかり教えてあげよう。

「Bクラスの皆さん。コレだけでは役不足なので、まとめてかかってきてください」

Fクラスの生徒にバカにされたからか、簡単に挑発にのってくる。

『試獣召還！』

残りの六人も召還をし、点数が表示される。

『Bクラス モブキャラ×7

数学 平均150くらい

Fクラス 七伏博人

数学 584点』

僕の召還獣は武器は両手のクロー、足の鉤爪、肘のブレード。防具はすねのアーマーと全身にフィットしている服だけだ。

相手が動き始める前に一人目に肉薄し、クローで頭を斬る。

そのとなりの二人目のは肘のブレードを突き刺す。三人目は膝蹴りを食らわせ、四人目と五人目は両手を広げてクローで同時に斬りつける。

六人目を七人目の方向へ蹴り飛ばし重なったところをかかと落としで決める。

流れを乱さず、4秒程度で始末を終える。

教室を見回すと、慌てて逃げる根元の姿が見えたが雄二達と合流する事を優先し、教室を後にする。

実際1分位しかCクラスにいなかったのも、すぐに追いつく。明久と島田さんがみえないが、教室外に配置された追撃部隊を引きつけているらしい。

作戦は把握しているし、行平とメープルが待っているので一足先に帰る。

第六問く巣の外で働くハチは年長者く（後書き）

サブタイトルく

成虫になったばかりの働きバチは、巣の中での仕事を担当します。

第七問くクロスツポンは生息地が人工池のみく（前書き）

第七話です。

第七問くクロスッポンは生息地が人工池のみく

第七問

この戦争の勝者に戦争を仕掛けるであろうCクラス対策に秀吉を要とした作戦を行う。

僕がつつこんでもCクラス相手だと殲滅に20分位かかるから、無駄な戦争はやらないに越したことはないだろう。

今回の作戦は秀吉に女子の制服を着せて双子の姉であるAクラスの木下優子の演技をして挑発してもらい、Cクラスの敵意をAクラスに向けようというものだ。

僕が行平の真似をするという意見は始めからない。顔は結構似ているが、身長が僕の方が明らかに低い。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

同性の着替えなのにガン見している明久の考えがよくわからない。

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツツリーニは指が擦り切れるんじゃないかってほどの速さで連写

していた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

僕にもなぜクラスの皆が複雑な表情をしているのかわからない。

「まあ、とりあえずCクラスに行こうよ」

「ああ、そうだな」

「うむ」

秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

その後を明久が慌てて追いかけてくる。

FクラスからCクラスまでは結構離れているので、しばらく歩く。

「それじゃあ秀吉、ここからは一人をお願いします」

Aクラスの使者になりすますので、僕達は同行できない。

よって、離れた場所から様子を窺う。

「気が進まんのう……」

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方ないのう……」

「とにかくCクラスを挑発してAクラスに敵意を抱くように仕向けて。頼んだよ、演劇部のホープ」

「あまり期待はせんでくれ」

ガラガラガラと秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

……おおう。

「流石だな、秀吉」

「意外とノリノリだね」

「うん。これ以上はない挑発だね……」

この時点でCクラスの敵意はもうAクラスに向いていることだろう。

『な、何よアンタ!』

この声は昨日会ったCクラス代表の小山さんのものだろう。

当然だが、いきなり豚呼ばわりされて怒気を含んでいる。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

自分から来くせに豚臭いというツツコミどころ満載のセリフだが、

Cクラスからツツコミの声はあがらない。

まさかCクラスはツツコミが不足しているのか？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

知名度としては秀吉よりAクラスの優子のほうが高い。

そもそも女装しているので簡単には見分けがつかない。その上挑発して冷静に判断ができないようにしている。

かなり良い作戦と言える。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですっ！？』

いや、誰もFクラスとは言っていないうえに、豚小屋の方がFクラスより衛生的だと思う。

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！』

そう言い残し、靴音を立てて教室から出てきた。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした顔で秀吉が近寄ってくる。

「それはもう素晴らしい仕事ぶりだったよ」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めよう！』

「作戦もうまくいったし、僕達も今日の戦争の準備をしよう。あと10分で始まるよ」

第八問ゝ烏合の衆って実は凄いゝ（前書き）

第八話です。

サブタイトルゝ

カラスは餌のみつけないくなる秋頃から集団をつくり、
目の数を増やして確実に餌をとろうとします。

カラスはあまり攻撃してこないのですが、大きなクチバシを持った
カラスの大群は恐ろしいものです。

第八問く烏合の衆って実は凄い

第八問

Bクラス戦が始まってからしばらくすると、戦線にいるはずの明久が駆け込んで来た。

「雄二っ！」

「うん？どうした明久」

「脱走だったらチョキでシバくよ」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

どうやら今は冗談に付き合っている暇はないらしい。

それを察して真面目な顔で向き合う。

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

明久は真面目な顔で男子の制服を欲しがる変態だったのか……。

「ま、趣味は人それぞれだからね」

「そうだな、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

「で、話はそれだけ？」

本当にこれだけだったら半殺しにしても文句は言われないうだろう。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は？」

「理由は言えない」

どうやらこっちが本題ってことかな。

「どうしても外さないダメなの？」

「うん。どうしても」

雄二が顎に手を当てて考え込む。

貴重な戦力である姫路さんを戦闘から外すなんて自殺行為といってもいい。

「頼む、雄二！」

明久は深く頭を下げてくる。

ノーリターンでハイリスク。はっきり言って無謀だ。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路がやるはずだった根元に攻撃をしかける役目をお前がやれ。」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

おっと、そろそろ僕も行動開始の時間のようだ。

「明久。お前にはお前の強みがある。それをうまく使ってみな」

一言残し、教室を出て行く。

第八問く烏合の衆って実は凄いく（後書き）

感想や誤字脱字の指摘等お願いします。

第九問くカラスはマヨネーズを好むらしいく(前書き)

第九話です。

第九問くカラスはマヨネーズを好むらしいく

第九問

『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くから根元の声が聞こえてくる。

『どうした？ 軟弱なBクラスの代表サマはそろそろギブアップか？』

姫路さんを戦闘に参加させていないので、雄二率いる本隊も出動せざるを得なくなったのだろう。

『はア？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

『……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！一旦さがるぞ！』

さてと、そろそろ出番かな。

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか？』

退却を始める雄二達と入れ替わるように廊下の窓から校舎に入る。

「Fクラス、七伏博人がここにいるBクラス全員に化学勝負を申し込めます。試獣召還！」

『Fクラス 七伏博人

化学 632点』

「アハハハ！」

フィールドを駆け抜けながら殲滅をする。

こんなヤツらじゃ弱すぎて話にならない！

「だああーっしやあーっ！」

明久がDクラス側の壁をぶち破って入ってくる。

物理干渉能力をもつ、観察処分者ならではの作戦だ。

しかし、彼らはBクラスの近衛兵に囲まれてしまう。

こちらはBクラスの殲滅が終わった。

ちょうどそこに保体教師を連れてムツツリーニが窓からやってくる。

「……Fクラス、土屋康太」

「待った！ムツツリーニ！こいつは僕が片づける！先生、根元恭二に勝負を申し込みます」

保体の先生はまだフィールドを展開していないので、化学で勝負する。

明久達が近衛兵を引きつけたので、丸裸になった根元。これで詰みだ。

『Bクラス 根元恭二

化学 198点

Fクラス 七伏博人

化学 632点』

「少しは面白い戦いができると思ったんだけど、残念だ」

先ほど召喚した召喚獣をそのまま引き連れてクローで一閃。

これでBクラス戦は終結した。

第十問くヒガンバナは飢饉に備えた非常食だったく（前書き）

サブタイトルく

球根を水にさらして毒を取り除くと食べられるそうです。

第十問くヒガンバナは飢饉に備えた非常食だったく

第十問

「ずいぶん思い切った行動にでたね。明久」

終戦後、拳をおさえている明久に、声をかけておく。

「うう……。痛いよう、痛いよう……。」

100%全てがフィードバックしないとはいえ、素手で鉄筋コンクリートを壊したのだからその痛さは並みじゃない。

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことは考えず、自分の立場を追い詰める男気溢れる作戦だったね」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

何を行っているんだ明久は？

「その通りだけど」

「ウキィー！」

いきなり襲いかかってくるので、鳩尾に拳を叩き込んで黙らせる。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと明久の肩をたたく。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根元。さっきまでの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素手な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲が騒ぎ始める。

「静粛に！ 静粛に！ 前にもい言ったけど僕達の目標はAクラス。ゴールはここじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

その言葉でクラスの皆が納得したような顔になった。

Dクラス戦でも同じことを言っただろうから、雄二の性格を皆理解し始めたんだろう。

「……条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だど？」

「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「凄い言いようだが、誰もフォローしない。それだけのことをやっているからだ。」

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

「おそらくこれがAクラス戦との取引材料になるのだろう。」

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「それだけな訳がないでしょう。」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

「そう言つて雄二が取り出したのは秀吉の時と同じ、女子用の制服。」

これは明久の要望を叶えるためと、雄二の個人的感情だろう。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……」

根元が慌てふためく。そりゃあ嫌だよな。

ま、嫌がっても関係ないし。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

何よりBクラスからの声援もある。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で根元を見限って腹部に拳を打ち込むBクラスの男子。いい仕事するね。

「では、着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」

「了解っ」

明久はぐったりと倒れている根元に近づき制服を脱がせる。

ここからは見ていて毒なので身を翻して帰宅を決意した。

第十一問く昔はゴキブリは金持ちの象徴だったく（前書き）

サブタイトルく

ゴキブリは温暖な気候に適しているので、江戸時代などは冬でも暖かい裕福な家に住んでいました。わざわざゴキブリを買って家に放して裕福になれるよう願った人もいたようです。

第十一問（昔はゴキブリは金持ちの象徴だった）

第十一問

Bクラス戦が終わり、2日たった。

残すはAクラス戦のみとなり、もうすぐ別れる予定のFクラスの教室で最後の作戦の説明をしている。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」

まあ、Fクラスなのにここまでこれたのはたいしたことだと、僕も思う。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいもんじゃないという現実を突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

勉強だけじゃないからって疎かにしていいわけじゃないけどね。

「今日のAクラス戦だけど、一騎打ちで決着をつけたいと思う」

雄二の隣で説明すると、教室中にざわめきが広がった。

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバンと机を叩いて静まらせる。その衝撃で壊れないか心配だ。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

実際誰が考えても不可能だと思うが、それをあえて作戦とするのだから裏があるのだろう。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ！？」

裏を読めない馬鹿は雄二からの洗礼としてカッターが頬を掠めた。

「次は耳だ」

「顔面じゃなくて良かったね、明久」

耳なら当たっても生きていけるだろう。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「だけど、それはDクラスとBクラスの時も同じ。まともにやりあったら勝てなかった」

だけど僕達は勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

最初は皆勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いた雄二の言葉だ。それを否定する人間はこのクラスにはいないだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

霧島さんが日本史が不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いたことはない。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり。この内容だと満点が前提になり、ミスをした方が負けるといった注意力が勝負の鍵となる。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうになったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「??？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

先生の監視がある中での妨害程度で主席がミスするとは思えない。

「雄二、あまりもったいぶらないでそろそろタネ明かししてたほうがいい」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

「雄二がこのやり方を採ったのは、ある問題が出れば、霧島さんは確実に間違えるから、だよな？」

「ああ、ある問題――『大化の改新』が出ればアイツは必ず間違える」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

小学生レベルで出てこないって自分で言っているんだから、ほかの問題だよ。勝手に結論を出すのは愚かしいぞ。

「もっと単純に、何年に起きた、とかじゃないかな？」

「ビンゴだ博人。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

こんな基礎的な問題を学年主席が間違える……雄二がそのことを知ってるってことは、何か繋がりがあるはず。

「大化の改新が起きたのは、645年」

「こんな簡単な問題、明久ぐらいじゃないと間違えない」

「だが、翔子は間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

さっきから少し気になっていたけど――

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

さっきから霧島さんのことを、アイツとか翔子とか呼んでいた。

ここで解答を間違えると明久達に襲われるだろう。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「待て、そんなこと言うなら博人はAクラスの佐藤と毎日一緒に登下校しているぞ」

「うん。メーブルとは幼なじみだからね」

「聞いたか！？今愛称で呼んでいたぞ！狙うならコイツが先だろ！」

愛称って言うほどじゃないと思うけどなあ。

佐藤楓↓さとうかえで↓サトウカエデ↓メーブルってだけだしね。

現在ほとんどの男連中が僕に向かって上履きを構えている。

「なに？やるつもり？」

スタンガンをバチバチ鳴らしながら笑顔で問いかける。

このクラスをまとめるには武力が一番だと思い、持ってきていた。

『……………』

よし、鎮圧成功。

何故か明久が島田さんと姫路さんに戦闘態勢を取られているがこの際無視していいだろう。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

幼なじみだから弱点を知っていたということか。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

でも今回はそれが仇となるってわけだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

『システムデスクだ！』

第十一問く昔はゴキブリは金持ちの象徴だったく（後書き）

感想、誤字報告などよろしくお願いします。

第十二問〈奇想天外のウエルウィッチア〉（前書き）

サブタイトル〈

ウエルウィッチアは砂漠に生息する植物で、園芸名は『奇想天外』です。

現在もつとも最古のものは樹齡二千年をこえるといわれています。

第十二問〈奇想天外のウェルウィッチア〉

第十二問

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二と、僕、明久、姫路さん、秀吉、ムッツリーニと首脳陣が勢ぞろいだ。

しかしこれでは明久がボロボロにならない。かなり残念だ。

「うーん、何が狙いの?」

雄二と交渉のテーブルについてるのは秀吉の姉、木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子が訝しむのも当然だろう。下位クラスの僕達が一騎打ちで学年トップに挑むのはあまりに不自然だからだ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたい

けどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……。昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」

試召戦争の決まりである、準備期間。

泥沼化を防ぐために、敗北したクラスは3ヶ月間試召戦争を申し込む権利を失うというものだ。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もない……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは今まで設備を入れ替えなかったからこそできる方法だ。

「……………それって脅迫？」

「もちろんさ！」

自信満々で答えてやれば、相手は何も言えないだろう。

「……………何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

代表同士の対決だったら雄二に勝ち目があるとは思えないだろう。

「え？ 本当？」

あまりにあっさり決まったからか、明久が驚いて声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

微妙なところで根元が役に立ったな。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……………」

やはり警戒されているようだ。

「なるほど。こっちから姫路か博人が出てくる可能性を警戒してい

るんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし、博人相手だとどうなるかわからないからね」

優子が僕のことを呼び捨てなのは、メールと優子がよく一緒にいるので必然的に交友があるからだ。

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を吞んでも良い」

一騎打ち五回か……。結構いけそうだね。

「ホント？嬉しいな♪」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズデ はあってもいいはずだ」

「え？ うーん……」

さすがに戦争の勝ち負けが係わって くる内容なだけに悩んでいるようだ。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久は、静かに現れた霧島さんに驚いたようだ。別に驚くほどのことでもないだろうに。

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件だと？」

「……うん」

霧島さんは雄二を見た後、姫路さんをみて再び雄二を見た。

「……負けた方は何でも一つ 言うことを聞く」

後ろで馬鹿二人が何かやっていたが、雄二も気にしていないようなので無視することにした。

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

全部とはいかなかったが、妥協案が得られた。

「そのぐらいなら問題ないよね？」

「ああ。交渉成立だ」

「ゆ、雄二、博人！何を勝手に！まだ 姫路さんは了承していないじゃない か！」

は？なんでそこで姫路さんが出てくるの？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

姫路さんに迷惑はかけないってことは誰かが犠牲になるのか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

「交渉は成立したし、一旦教室に戻ろう」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

第十二問〈奇想天外のウェルウィツチア〉（後書き）

指摘等ございましたらお願いします。

第十三問 くヤモリはファンデルワールス力を使って壁にはりついているく

第十三問

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はAクラスの担任で学年主任である高橋先生が立会人を務める。
暇なのか秋音姉も教室内で観戦している。

「ああ」

「……………問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。オンボロ教室じゃあ狭すぎるからね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉の姉の優子。

対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟である秀吉だ。

姉弟だからこそ、弱点や集中力の乱し方を知っているはず。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ、姉上？」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

小山――Cクラスの代表で秀吉が優子の演技をして豚呼ばわりした人物。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

おそらく抹殺するつもりだと思います。

「姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしたことになるのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらな……！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用できたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「それじゃあ、僕がいこうかな」

ハンカチで返り血を拭う優子の前にでる。

「急にこっちが代わっちゃったから、お詫びとして三対一でやらせて」

「自分がいくっす」

「では私も」

名乗り出てくるのはメープルと行平。

「ちょ、ちょっと！いくら相手が強敵だからって三対一は……」

「本気でこないと、負けるよ？それでは物理でお願いします」

「それでは召喚をしてください」

「」「試獣召還」「」

魔法陣が現れ、四体の召喚獣が出現する。

一体目、おなじみの僕の召喚獣。

二体目、西洋風の鎧にランスを持った優子の召喚獣。

三体目、左手に盾、右手に刀を持ち、和服姿のメープルの召喚獣。

四体目、スーツとシルクハットを装備し、手には銃のようなシルエットで、弓のようなパーツのついた---

「繚乱の対弩!？」

銀と金のフレームを持ったボウガン。なんであんなものを持っているんだ。

よく見たらメープルのある片手剣に似ている。

『Aクラス 木下優子

物理 321点

Aクラス 佐藤楓

物理 398点

Aクラス 七伏行平

物理 399点

Fクラス 七伏博人

物理 798点』

「あれ?メープルも行平も振り分け試験は調子悪かったの?」

今表示されてるのはAクラスの人振り分け試験の点数のはずだ。

いつもは450点ぐらいのはずなんだけど。

「ハクのことを心配だったす」

確かにあの日は遅刻しちゃったからなあ……。

「ありがと。それじゃあ、始めよう」

400点っていないというのありがたい。400点オーバーでなければ腕輪の使用はできないからね。

三対一は分が悪いので、やっぱり作戦は――

「始め！」

先手必勝だ。

一瞬で優子の前まで移動し、クローをクロスさせて全力で攻撃する。

完全な不意打ちなので、ランスの腹でかろうじて防がれたが勢いよく吹っ飛ぶ。

行平とメープルの方を見ると行平は弾の装填を終え、メープルは盾を構えていた。

『Aクラス 木下優子
物理 102点』

ふむ、一撃では倒せなかったか。

今度は盾を構えているメーブルの前に行き、回り込もうとするが、行平により妨害される。

若干ぎこちない動きから、召喚獣に慣れていないことがわかる。

しかし楽観してはいられない。おそらく一分もしたら二人とも慣れてしまうだろう。

必然的に短期決戦に持ち込むしかない。

少し離れている行平に距離をつめ、クローで斬りつける。

すんでのところでかわされ、結果は肩を切り裂くだけとなった。

『Aクラス 七伏行平

物理 273点』

もう一撃加えようとするが、後ろからメーブルが切りかかってくる。それをブレードで受け流し、メーブルが武器を持っている右手をつかみ、行平との対角線上に動かす。

行平が放った銃弾がメーブルに迫るが、盾で弾かれたので、蹴り飛ばして距離をとる。

復活した優子がランスで突進してくるが、横にステップして回避。

行平により銃弾が放たれたので、優子に追撃するのを諦めて弾をは

じく。

僕は今のところノーダメージで戦っている。操作の危うい相手に対して、素早い動きの僕は戦いにくいのだろう。

僕の武器は素早さ。防具がほとんど無いかわりに、高速戦闘が可能だ。

速さに乗れば力が弱くとも重く、攻撃に当たらなければ防御は必要ない。それが僕の戦い方。

優子とメープルが同時に攻撃を仕掛けてくる。

ランスは近い間合いだと突くことができない。

よって、優子を最初に仕留めることにした。

メープルの剣を左手で弾きながら、突いてきたランスを紙一重でかわし、その腹を踏み、地面に押さえつけてランスの動きを封じる。

無防備なその体に、ブレードを一閃。撃破する。

しかし、疎かになっていたメープルの盾による打撃と、行平の狙撃を受けてしまった。

『Aクラス 佐藤楓

物理 314点

Aクラス 七伏行平

物理 273点

Fクラス 七伏博人
物理 403点』

一旦距離をとり、再び攻撃する。

しかし、メープルは刀で防御し、クローの刃と刃の間に刀を入れてきた。

速さを充実した戦い。しかしヒットアンドアウェイではなく、勢いを殺さず流れで攻撃する。無駄を省き、攻撃を繋げているので、動きを攻撃を受け止められると動きが止まってしまう。

今がまさにそれだ。

動きを止めた僕に、行平は容赦なく狙撃してくる。

すぐに回避にうつるが、2、3発当たる。

『Fクラス 七伏博人
物理 301点』

だいぶ慣れてきた二人は始めに比べだいぶ厄介だ。

まずはサポート重視の行平を倒すことを目標にする。

牽制で放たれる銃弾をかわし、肉薄する。

右手の攻撃は銃身で防がれるが、左手の攻撃は当たる。

しかし一人に集中することは、もう一人を疎かにすること。

メーブルの刃が今にも当たるというところで、腕輪の能力を発動する。

「来い、ジャコウアゲハ」

メーブルの剣は、突然現れた蝶『ジャコウアゲハ』に防がれた。

攻撃を防がれ、無防備なところにフェイントをいれ、後ろに回り込んで蹴り飛ばす。

盾で防御姿勢をとっていたメーブルは、なすすべもなく後ろをとられ、飛ばされる。

武器として昆虫を呼ぶ『昆虫召喚』。それが僕の腕輪の能力。ちなみに攻撃を受けても昆虫は死なない。

『Aクラス 佐藤楓

物理 163点

Aクラス 七伏行平

物理 42点』

起き上がったメーブルが、再び攻撃してくるが、ジャコウアゲハで防ぐ。

その間に行平にトドメをさすため肉薄する。

だがその瞬間行平は銃身を持ち、ボウガンを振り回してきた。

それを左手で受け流し、懷に潜り込む。クローを突き刺すことに成功するが、最後にカウンターとして蹴りを入れた。

『Fクラス 七伏博人

物理 231点』

蹴りによって少し宙に浮いたところにジャコウアゲハを振り払った。メープルが上から刀を振り下ろしてくる。

かろうじて防御に成功するが、無理な体勢な上にそのまま地面に叩きつけられてしまう。

「来い、キイロスズメバチ」

もう一度腕輪をつかい、キイロスズメバチで追撃を防ぐ。

『Fクラス 七伏博人

物理 146点』

体制を立て直し、キイロスズメバチと共に攻撃をする。

メープルは盾で攻撃を防ぎ続けるが、腕をキイロスズメバチに噛まれ動きが阻害される。

止まったところに勢いをつけ、全力で攻撃を叩きつける。

『Aクラス 佐藤楓

物理 0点』

これでFクラスの一勝目が決まった。

第十三問 くヤモリはファンデルワールス力を使って壁にはりついているく（後妻

感想、誤字脱字報告等よろしく願います。

第十四問くコオリウオは血液が透明く

第十四問

Aクラスのトップクラスに対して三対一での勝利。

このことでFクラスの志気は最高潮に達していた。

「流石だな、博人」

「お褒めにあずがり光栄です、代表」

待機場所で迎えてくれた雄二とハイタッチする。

「よくやった♪さっすが博君!」

観戦していた秋音姉が頭をなでてくる。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?! 僕!?!」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。

やっぱり明久が負けることを信じているんだろうな。

というかいまだに頭を撫でられているのは何故だろう。

「そろそろやめて?」

秋音姉は中学生と言われても納得できる容姿と身長だ。それに頭を撫でられているというのはどうも良くない。

「この撫で心地はやめられない、止まらない」

むう、撫でられると少し気持ちいいから困る。

「あれ、気づいた? ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

おや、明久がまだくだらない戯言を言っているようだ。

処刑準備しておくか……。

「それじゃ、あなたは……!」

なんでこんな嘘を信じるんだろう？

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――」

大きく息を吸ってこの場にいる皆に告げてきた。

「――左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤美穂

物理 389点

VS

Fクラス 吉井明久

物理 62点』

一瞬で勝負が終わった。

「人がせっかく上げた志気をどうしてくれるのかな？」

「か、関節が！ 関節がああああ！」

ついでに頸動脈を絞めて意識を刈り取っておく。

「よし。勝負はここからだ」

「そうだね。これからが本番だよ」

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムッツリーニが立ち上がる。

科目選択権のある今回は圧倒的にこちらが有利だ。

「じゃ、僕が行こうかな」

対してAクラスからは工藤愛子さん。ショートカットの髪の毛のボーイッシュな女子だ。

「一年の終わりに転校してきた工藤 愛子です。よろしくね」

「科目はなににしますか？」

「……………保健体育」

ムッツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

転校生って言っていたから、ムッツリーニの力を理解していないのだろうか？」

「でもボクだってかなり得意なんだよ？……………キミとは違って、実技で、ね？」

実技？それってやっぱり怪我の治療とか？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フッ。望むところ————」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」

「そうです! 永遠に必要ありません!」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣召喚っ」と

「……………試獣召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って現れる。ムツツリーニは小太刀の二刀流。そして工藤さんは、

「なんだあの巨大な斧は!?!」

見るからに破壊力満点の巨大な斧。おまけに腕輪を装備している。

『Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点

VS

Fクラス 土屋康太

保健体育 572点』

しかし点数ではムツツリーニのが上、腕輪も両方が付けているので、点数で劣っている工藤さんの方が不利だろう。

「こ、こうなったら……（ピラッ）」

「……………！（ブシャアアアア）」

何だ！？何が起ったんだ？いきなりムツツリーニから鼻血が間欠泉のように吹き出したよ！？？

ムツツリーニが鼻血で倒れている間に、工藤さんはムツツリーニの召喚獣を倒した。

……………この勝負は一体何だったのだろう。

第十五問く春の七草のホトケノザの正式名はコオニタビラコく(前書き)

サブタイトルく

七草のホトケノザとは別にホトケノザという植物があります。

七草の方はホトケではなくオニです。

第十五問く春の七草のホトケノザの正式名はコオニタビラコく

第十五問

「これで二体一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらから出るのは、当然姫路さんだ。

今Aクラスと真っ向から戦えるのは彼女のみだ。

「それなら僕が相手しよう」

Aクラスから出てきたのは学年次席の久保利光君。

「やはり来たか、学年次席」

姫路さんに次ぐ学年トップクラスの實力の持ち主である。

明久のことが好きな同性愛者という話も聞くが、気にしないでおう。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのは、姫路さんと久保君の実力がほぼ互角だからだ。

互角の戦いでは、負ける可能性も大ということだ。

「科目はどうしますか？」

雄二が科目選択をするので、今回こちらは科目選択をできない。

「総合科目でお願いします」

総合科目。科目を選べるなら、自分の得意なものを選ぶのは定石だが、久保君はここで実力をハッキリさせたいと思っているのだろうか。

「それでは……」

「「試獣召喚っ！」」

『Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点』

決着は一瞬でついた。

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

至る所から声があがる。

点数差が400点オーバーなのだから無理も無い。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

まあ、人の（不幸）の為に行動するのはよく見かけるね。

「これで二体二です」

高橋先生にも若干変化が見られた。FクラスがAクラスと渡り合っていることに戸惑っているのだろうか?

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは代表の霧島翔子さん。

対するこちらからは当然、

「俺の出番だな」

Fクラス代表、坂本雄二だ。ここまでは作戦通り。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けるわけないと思っているのか、Aクラスの皆は特に騒いでいない。

深く考えれば危機的状況だと思うけど。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ………！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが広がる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル、万点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ………』

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じて、高橋女史は教室を出ていく。

その背中を見送り、雄二に近づく。

「最終決戦。頑張って」

「ああ、勝ってみせるさ。」

手を挙げて思いっきりハイタッチする。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

明久が差し出した手を、雄二はグッと握る。

次にムツツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

口の端を軽く上げ、ゆっくりと戻っていく。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

高橋先生が戻って来て、雄二と霧島さんに声をかける。

そして、決戦の会場へと向かった。

僕はモニターで視聴覚室の様子を見る。

『では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の先生が問題用紙を二人の机においた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、初めてください』

二人により、問題用紙が表にされる。

そして、ディスプレイに問題が表示される。

平城京、平安京、鎌倉幕府……大化の改新

「あ……!」

「よ、吉井君っ

「うん」

「これで、私たちっ……!!」

「うん！これで、僕らの卓袱台が」

『システムデスクに!』

Fクラス皆が声を揃える。

「最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ!!」

『うおおおおおおお!!!!』

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた。

しかし、ついさっき重要なことに気づいてしまった。僕は苦笑いしかできない。

（あれだけ自信满满だったから忘れてたけど、雄二が百点取れなかったら意味ないよね?）

「あれ?どうしたの博人?せっかくの勝利なんだから、もっと喜ぼうよ」

少し変な僕の様子に気づいたのか、明久が声をかけてくる。

「水を差すようで悪いけどさ、雄二はこのテスト百点とれるんかね?」

「ははっ、まさかそんな……」

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 53点』

Fクラスの卓袱台が、みかん箱になった。

第十五問く春の七草のホトケノザの正式名はコオニタビラコく（後書き）

誤字脱字報告、感想等ありましたらお願いします。

第十六問く哺乳類は全て絶対音感を持っているらしいく（前書き）

サブタイトルく

耳の構造的に音の高さを聞き分けられるのですが、ヒトは言葉を使う際に、違う高さの音でも同じ言葉としてとらえられるように絶対音感を捨てたそうです。

第十六問く哺乳類は全て絶対音感を持っているらしいく

第十六問

「三対二で、Aクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだFクラスの面々に対する高橋先生の締め
言葉。

まさかこんなことが予想通りになってしまうとは…………。

「…………雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「…………殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

雄二に制裁を加えようとしている明久にあるものを渡す。

「はい、ナイフ」

別に殺傷用ではなく、いざという時の十徳ナイフだ。

「吉井君、落ちついてください！」

ナイフを受け取ろうとした明久に姫路さんが後ろから抱きついた。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら、30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「もしくは『否定できない』、だね」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！と何故止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を斬り裂くと言う体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなく処刑です！」

「明久、ナイフは使い終わったら返してね。明久も負けたんだから同罪だし」

「ドンマイ雄二！気にするな！」

切り替え速いな。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

つまり凶星だと。

「……ところで、約束」

「………！（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの言葉で、突然ムツリニと明久が撮影準備を始めた。

そういえば僕もメーブルと約束してたな。どんな要求なのだろう。

「………それじゃー」

霧島さんは小さく息を吸って、

「………雄二、私と付き合って」

言い放った。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

ぐいっ　つかつかつか

霧島さんは雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙が教室に訪れた。

今の出来事に言葉が出ないようだ。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

それを破ったのは、とある教師の声。

「あれ？　西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

『我が』Fクラス、ということは――

「西村先生。もしかして担任が福原先生（現担任）から西村先生に変わるんですか？」

「そのとおりだ。良かったな、お前ら。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なに！？』

クラスの男子生徒から悲鳴があがる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、ないがしろにしているものじゃない」

負けた僕達には言い返す言葉もない。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！　なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には、悔い改めるといふ発想はないのか」

明久はああ言っているが、実際は次の試召戦争に向けて勉強する気だろう。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

放課後こそ学園生活を最も満喫できる時間なのに……。

それに、もし休日まで補習を入れられたら、昆虫採集の時間が減るじゃないか！

こうして、僕らの最初の試召戦争は憂鬱を残して終わった。

第十六問く哺乳類は全て絶対音感を持っているらしいく（後書き）

感想、誤字脱字報告等よろしく願います。

第十七問　地球の自転は少しずつ遅くなっている

第十七問

戦争が終わった日の、七伏家。

リビングに、僕、行平、メープルが集まっていた。

「いやあ、楽しかったねえ試召戦争」

「うん。いろいろあったけど、本当に楽しかったよ」

「そうですね。本気で戦うというのは気分の良いものです」

あ、そういえば――

「メープル、あの約束は？」

「私の言うことを聞いてくれるんだよね？」

「賭は僕の負けだからね」

「それじゃあ、今から私が言うことに、逃げないで、正直に答えて。それがお願い」

それぐらいならおやすいご用だと、首を縦にふる。

「あのね……………私はハクのことを、小さい頃から好きだったの。だから、付き合ってほしいの」

……………え？

好き？あの可愛くて綺麗で明るくて優しくて勉強もできる通称メープルこと佐藤楓が僕のことを？

……ハッ！少しトンでしまった。

これに逃げずに正直に応える。それが僕のとる行動。

少し息を吸って、答える。

「僕も、小さい頃から、メーブルのことが好きだったーーと思う」

「『思う』？」

「自分のことは良くわからないからね。けど、僕はメーブルのことが好きだといえる」

「そう。それじゃ、その思いを確信にしてあげる」

そういつて、僕の前に来て唇を合わせてきた。

「それじゃあ、また明日。ユキ、それと私の恋人さん♪」

メーブルはそういい残して、去っていった。

ちなみにユキとは行平のことだ。

その後5分間僕は顔を真っ赤にしたまま、動けなかった。

ちなみにその日は危なかしくて任せられないということで台所から追い出された。

第十七問く地球の自転は少しずつ遅くなっているく(後書き)

感想等よろしくお願いします。

次回はキャラ紹介です。

設定1

設定

『七伏博人』（ななふしはくと）

身長161cm 幼い顔立ちなので、小さい印象を受ける髪は短めの黒髪

得意科目…理数系

趣味…昆虫採集、科学系の本の読書

特技…運動全般（人並み以上）、記憶、ポーカー

好きな物（事）…昆虫、甘いもの、疑う事、科学、難しい事

嫌いな物（事）…苦い物、信じる事

召喚獣…クロー、足の鉤爪、肘のブレードが武器。

防具は脛のアーマーのみ。

腕輪は『昆虫召喚』で、武器として昆虫を召喚し、自由に操る。

その他…周りを気にせず我が道を行く。『信じるよりも疑う方が確実に真実にたどり着ける』という。『昆虫少年』や『速攻』の二つ名がある。折りたたみ式の捕虫網を常時装備。

『佐藤楓』（さとうかえで）通称メープル

髪形…灰色がかったサイドポニー

身長…159cm

得意科目…国語、英語

趣味…読書、折り紙

特技…速読、細かい作業

好きな物(事)・・・文学、よく考える事、博人

嫌いな物(事)・・・付和雷同

召喚獣・・・着物(防御力高)、盾、刀

その他・・・瑞希ほどではないが、スタイルが良く、人気がある。『くっす』という口調はキャラ作り。結構な策士。博人との仲は公表を避けている。理由は『デレた私はハクの物。衆愚には晒さない』とのこと。しかしついつい見せつけるように行動してしまう。

『七伏行平』(ななふしゆきひら)

身長・・・178cm 博人とは反対で大人びた印象を受ける。

肩にかかるほどで少し長めの黒髪

得意科目・・・社会系

趣味・・・散歩、旅行

特技・・・射撃、ブラックジャック

好きな物(事)・・・歴史や文化、面白い物

嫌いな物(事)・・・平穩すぎる事

召喚獣・・・スーツとシルクハットを装備し、ライトボウガンが武器。

その他・・・博人の双子の兄。丁寧な口調に反して、弄るのが好きなSの人。面倒見がよく、好かれやすい。

『杉本秋音』(すぎもとあきね)

身長141cm 中学生のような容姿 明るい髪の色で、ストレート

趣味・・・物体の運動観察

特技・・・球技、暗算

好きな物(事)・・・科学、のんびりする事

嫌いな物(事)・・・面倒事

召喚獣・・・白衣にツインチェーンソー

その他・・・二年Fクラスの副担任。小さい身長に対してスタイルは良

い。のほほんとした雰囲気。

短編 僕とメーブルと殲滅戦（前書き）

僕と暴徒とラブレターの関連話です。

短編 僕とメーブルと殲滅戦

短編く僕とメーブルと殲滅戦く

明久がラブレターを貰うという騒動の翌日、僕はいつも通り三人で登校していた。

「ところで二人の恋仲は公表するんですか？」

「する必要はないと思うけど」

「それどころか、学校ではいつも通り幼なじみの関係よ」

『デレた私はハクだけの物だから』というのがメーブルの理由。

「おや、残念。学校でもいいじれるかと思ったのですが」

そんなとき、僕達の話聞ける距離に誰かの足音が聞こえた。

「あれ、雄二。おはよう」

その人物は、Fクラス代表坂本雄二だった。

「雄二君じゃないっすか。おはようっす」

メーブルは他の人が来たので、『くっす』という口調になっていた。

その後雄二も交えて雑談しながら学校へと向かった。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

毎朝の恒例行事の出席確認。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

いつも騒がしい教室にのどかなひとときが訪れている。

今日は平穏に過ごせー！

「坂本」「……………博人が佐藤楓と付き合い始めたようだ」

『殺せええっ！！』

そうもなかった。

「やっぱり聞いていたんだね、雄二」

あのときもつと速く雄二の気配に気づくべきだった。

『以前からイチャイチャしてやがったが、付き合い始めるなんて』

『これはもう殺すしかないな』

『弁明の余地はないな』

「手塚」「七伏クロス」「藤堂」「七伏クロス」

「返事は『はい』だ！」

西村先生が殺意をこめた返事をした奴らを注意する。

「ちょっと待って先生！昨日はそんなこと言わなかったよね！」

昨日明久はまったく同じ展開になったが、そこは生活態度の差だろう。

出席確認が終わり、西村先生が出席簿を閉じる。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

教室を出て行く西村先生に、後ろからついていく。

西村先生のいる状態では手が出せないのか、Fクラスの連中も攻撃してこなかった。

そのまま職員室前まで行き、次の授業の先生と一緒に教室に入った。

そんなことを繰り返してなんとか昼休みまで逃げ切った。

時間はたっぷりあるので、殲滅を開始する。

「見つけたぞ！誰か応援にぶっへっ！」

早速一人目が来てくれたので、注意がそれた隙に足を払い転ばせる。

手足を縛ってから西村先生に連絡し、補習室に送る。

「いたぞ！B部隊に連絡して挟み撃ちにするぞ！」

昨日と同じく部隊編成までしている。

少し厄介なので、ダッシュして逃げる。

僕を追うためにバラバラになった奴らを一人ずつ縄で縛り、補習室に送ってやる。

これで雑魚は殲滅完了。

そんな時、いやな気配を感じて横に動くとしさっきまで立っていた場所にペンが刺さっていた。

「…………裏切り者には、死を」

文房具を手に構えてこちらを狙っているのは、ムッツリーニ。動きが素早いので、敵の中では一番厄介だ。

「いくよ、ムッツリーニ」

「…………次はカッターを投げる」

脅迫は気にせずつつこんでいくと、宣言通りカッターを投げってくるが、刃が出ていないので手で弾く。ムッツリーニが次の行動に移る前に足払いをして、転ばせてから縛りあげる。

昼食をゆっくり食べるため、早めに殲滅することにし、敵を探している」と木刀を持った須川がいた。

「ここまでだ、七伏！」

「うっさい速くくたばれ」

腰から取り出した捕虫網の柄で須川の木刀を弾き飛ばし、やっぱり足払いで転ばせてから縛る。

「ぐふう！」

丁度良くバカが現れたので、何か言う前に潰した。

これで残るは後一人、坂本雄二だ。

これは一番簡単に始末できるので、わざと最後に回した。

携帯電話を取り出し、ある人物にかける。

「あ、もしもし。霧島さん？雄二が霧島さんと昼食を食べたいんだって。恥ずかしがり屋だから霧島さんから迎えにいつてあげて」

はい終了。

「ハク！大丈夫だったすか？」

「いやはや、面倒なことになりましたね」

丁度メーブルたちと合流できたので、昼食を食べるために、Aクラ

スに向かう。

メーブルとの関係がばれたのは予想外だったけど、これはこれでいいんじゃないかな。

第十八問くエミューは水を求めて雲のあるところにダッシュするらしいく(前事

エミューはオーストラリアに生息する飛べない鳥です

第十八問くエミューは水を求めて雲のあるところにダッシュするらしいく

第十八問

とある日の七伏家。

居候である杉本秋音が、僕、行平、メープルをリビングに集めた。

「皆さんには重大な話があります」

「一体何ですか？」

行平が聞くと、秋音姉が自信満々に答えた。

「いやあ、実は私ね、試験召喚システムの腕輪の開発を手伝ったのね。そこで、清涼祭の『召喚大会』の賞品として学園長の作った『白金の腕輪』とは別に『黄金〜こがね〜の腕輪』っていうのを作ったんだけど、欠陥があってね」

「それで、欠陥はどんなもののなの？」

暴走が起きたりするのだろうか？

「500点以下の点数で使うと99, 5%の点数を失っちゃうんだよ♪」

「酷すぎる！」

たとえ400点とっても、使った瞬間2点になるとか不良品すぎだ。

「というわけで、君たちには私のミスをもみ消して欲しいのだ♪」

「今さらって大人の事情を言いましたね」

失敗の隠蔽とかなんてことを頼むんだこの人は。

「君たちなら、得意科目はよゆーで500点突破してるもんね」

「その依頼の私達メリットは？」

そうメーブルが聞くと、フッフッフと笑ってから、

「優勝者には『如月ハイランド』のペアチケット二枚が進呈されちゃいます！」

「絶対やってみせる」

メーブルは即答していた。

「え？どうしたのそんな急に？」

「博人、つまりこういうことです。メーブルは博人と如月ハイランドでデートがしたい、と」

「ほえ？そんな……」

「まったく、博人は恋愛話の弱すぎです。反応が面白すぎて弄りたくなってしまうがありません」

最近は恋愛話の話になると赤面したり言葉がでなくなることで、頻繁に行平にいじられている。

行平は丁寧な口調とは裏腹に、弄るのが好きなSなのだ。

「ちなみに、企業側が訪れたカップルを無理やり結婚させようとしてるって噂もあるよ」

「これはもう受けるしかないわ。この依頼」

結婚……かあ。

「さて、博人が処理落ちしかけていますが、召喚大会はペア出場ですよね？どう組み合わせるんですか？」

「私としては、近接型の博君と、遠距離型の行君のペアが良いと思うな」

「それじゃあ私は他の人を誘ってみる」

どうやら、方針は決定したようだ。

「んじゃ、これで解散！」

こうして召喚大会の出場が決定した。

……その後いろいろ面倒事を押しつけられたけど。

第十九問くチヨウとガに明確な差はないく（前書き）

サブタイトルく

日本ではあまり知られていませんが、実際チヨウの仲間にシャクガモドキ上科というガと考えられていたグループも入ります。

第十九問くチョウとガに明確な差はないく

第十九話

新学年になって最初の行事である『清涼祭』。

そして今は、その準備の為のLHRの時間。

どの教室も活気づいているのだが……。

『吉井！こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

我がFクラスのほとんどの生徒は野球をしていた。

さつき西村先生が連れ戻しに行ったからじきに戻ってくるだろう。

ちなみに僕は秋音姉に任された清涼祭のパンフレットのレイアウトを考えている。

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃ

いけない時期が来たんだが――」

野球を中断して戻って来た雄二はだるそうにござの上に座っている僕達を見下ろしながら宣言した。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

ふむ、要約すると『俺はやる気ないから、誰かやっといてくんね？』ってことだね。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？　ウチがやるの？　うゝん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんとか博人の方が適任なんじゃないの？」

「え？　私ですか？」

「姫路には無料だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

少数派の意見を切り捨てられない姫路さんでは時間がかかりすぎる。雄二はその辺のことを雄考えて島田さんに任されたのだろう。

「僕は杉本先生からの仕事が入っていて忙しい」

その存在を示すためトントンとミカン箱（超補強）の上の紙を叩く。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「あ、ちなみに僕も」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。三人とも物好きだなあ」

召喚大会は、ぶっちゃけると試験召喚システムのPR企画だ。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけで バカにするんですよ？ 許せませんっ」

「……………」

Fクラスをよく知っているからこそ言える事がある。

このクラスはバカばかりだ。

「僕は賞品の腕輪目当てかな？」

「あー、4人とも、こっちの話を続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

チラッと雄二は明久の方を見た。

なるほど。明久を生け贄にするつもりか。

「んゝ…………。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど…………」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決戦投票したらいいだろう」

皆もいいな、とクラスメイトに告げると、ちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『いや、七伏のほうがいいだろう』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやってもらった方が』

一回変なの混じってたな。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

秀吉が明久に一票投じてくれる。

「秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな〜なんて
ここでたたみかけて納得させてしまおう。

「それは他の皆も同意見だよ。それだったら適任の人にやってもら
ったほうが良いと思うよね？」

「むう……。それはそうだけど……」

島田さんのサポートなんだから、明久以外の適任がいるはずはな
かろう。

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね〜。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がったところで、島田さんはボロボロの黒
板に候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

予想通り明久だ。

『候補？……明久』

こっちも明久だ。

それにしても斬新な候補の挙げ方だ。

「さて、この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

そこは気にしても無駄なんだよ、明久。

『どうする？どっちが良いと思う？』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わらないんだが……』

「こらあっ！真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

それを言ったら明久もクズになると思うんだけど。

まあ結局明久が副実行委員になり、壇上にあがった。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあゝ……」

入れ替わりに席に戻る雄二だが、欠伸をこらえる気もなくダルいオ
ーラを纏っていた。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん。了解」

第二十問くイルカが可愛い？集団で雌襲って血が出るほど攻撃する生物だぞ！

第二十問

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田さんが言うと、何人かが手を挙げた。

少し位やる気のある人はいるようだ。

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

名前を呼ばれてムツツリーニが立ちあがる。

「……………写真館」

「…………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

僕も同意見だ。裏で写真の売買が行われるのは必至だろう。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる」

「あいよー」

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

黒板に書かれた候補には、謎な名前がつけられていた。

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶ー」と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

ウェイトレスっていつでも、このクラスに女子は二人。秀吉を合わせても三人だけだ。ウェディングドレスを主役に持つてくるのは厳しいだろう。

でも、ウェディングドレスか……………

……………ハッ！結構トリップしてたみたいだ。

慌てて黒板を見ると、候補？が書かれていた。

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

集客力の低そうな名前だな。いや？興味本位で来る客もいるか。

「さて、他に意見はーはい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川は立ち上がった。

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは――」

確かに中華料理は地域差が大きいって話だから、奥の深いジャンルというのも頷ける。それにしても随分こだわりがあるんだな。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

明久は返事したのは良いが、話を全く聞いていなかったので、何を書いたら良いのかわからないようだ。

「どうなの？早く書いてよ」

「りよ、了解」

【候補？中華喫茶『ヨーロッパアン』】

頭に残った言葉を適当に書いたようだ。

明久がちょうど書き終えた時に、西村先生と秋音姉が教室に入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです。

黒板に書いてあるのは――

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

当然の反応といえるが、流石に倍はきつい。

「あゝ、西村先生。『』の中は無視してください」

「それなら妥当なところだな」

ふう、回避成功だ。

「しかし、吉井にこんな大役を任せていいのか？稼ぎを出せば設備を向上させられるぞ？」

溜息混じりの鉄人の声を聞いて、クラスの皆の目が光った。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に教室内が活気づく。ランクが下がる前の設備でさえ不満があったんだ。この設備に不満がないわけがない。

僕も最近はこの教室から避難するためにAクラスに入り浸っている。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

姫路さんが手を胸の前で握り、立ち上がっていた。

……どうやら色々問題があるようだ。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命的じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

皆がやる気になったのは良いが、あまりにもまとまりが無さすぎる。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田さんが手を叩いて注意するが、あまり効果はなく、それぞれ好き勝手言っている。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

うーん。これだけまとまりのないクラスをまとめるのは難しいだろうなあ。

それにそろそろ五月蠅くなってきた。

「この中から一つだけ選んで手を挙げて！」

業を煮やした島田さんが決を採りにかかる。

結果は僅差で中華喫茶の勝利だった。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

と、須川とムツツリーニが立ち上がった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士のたしなみなんてのは聞いたことがない。

おそらくチャイナドレスを見るため中華料理店に通っていたら見様見真似でできるようになったのだろう。

まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところを集まって！」

いつの間にか明久はホール班のトップにされたようだ。

「それじゃ、私はホール班にー！」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

平然と厨房に入ろうとした姫路さんを明久が呼び止める。

自覚がないので質が悪い。

『良くやった、明久』

『明久、グッジョブじゃ』

『……………！（コクコク！）』

アイコンタクトで明久の功績を褒め称える。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

本当のことをいうと、料理の腕を向上させるために毎日作ってきたなどというのだろう。死の危険をおさえるためにも、うまくごまかさなくちゃいけない。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あ”っ！ み、美波！ 僕の背中にはサンドバックじゃないよ！」

「か、可愛いだなんて……。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

「いや、効率的にもホールに専念して」

もってもらしい理由で排除しておく。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

明久、そこは気を使ったほうがいいぞ。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃあっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

本当に学習しないと死ぬぞ、明久。

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

Fクラスらしく、ドタバタした状態で設備のかかった重要な学園祭が幕を開けた。

第二十問くイルカが可愛い？集団で雌襲って血が出るほど攻撃する生物だぞ！？

感想、指摘等ありましたらよろしくお願いします。

第二十一問　〱オーストラリアと言えば？コアラ？カンガルー？違う！毒蛇だ！

サブタイトル　〱

オーストラリアには三百八十種ほど陸棲ヘビが生息していて、そのうち二十五種ほどが毒を有します。
ちなみに毒も強力なものが多いです。

第二十一問くオーストラリアと言えば？コアラ？カンガルー？違う！毒蛇だ！

第二十一問

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

『失礼しまーす！』

『……当に失礼……どもだね……返事を待つ……』

『やれやれ……だ……というのに……ですね……話を続け……差し金
ですか？』

『……言わないでくれ……このアタシが……手を使わなきゃ……
のさ。……ないというのに』

『……だか。学園長……隠し事が……ですから』

『……言っているように……なんて無いね……違いだよ』

『…………ですか。……否定される……そういうことに……ましょ
う』

『……では、この場……させていただきます』

教頭の竹原が踵を返して学園長室を出て行くのを確認する。

「ふう。疲れた」

「まったく、ねちっこい男は嫌なものねえ」

そう言って、学園長室の『本棚の下の書類を入れるスペース』から秋音姉と共に出てくる。

「……………」

「……………」

そして、学園長室にいた明久と雄二と目があった。

「あれ？どうしたの二人とも」

「学園長に何か用事？」

「さっさと用件をいいな、ガキども」

平静を装いつつ話題を変える。学園長との連携も完璧だ。

「今日は学園長にお話があって来ました」

僕たちの連携に流され、用件を話し始める雄二。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

学園長が礼儀知らずなので、説得力はない。

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこっちが――」

雄二が明久を指差し紹介する。

「――二年生を代表するバカです」

随分わかりやすい説明だね。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言っていないませんよね！？」

明久といえばバカ。バカといえば明久なのは誰でも知っている。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

映画の悪役のように口の端を吊り上げて笑う学園長。少し妖怪っぽい。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

今のところ雄二は敬語を保っているけど、崩れるのは時間の問題だ

ろう。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

やっぱり予想通りだった。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれはともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調を崩さず、危険な言葉をちりばめていた。これでお願いに来ているというのだから驚きだ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

そんな雄二の説明を受けて、学園長は思案顔をしていた。

何度か話に出てきた体調を崩す生徒ってのは姫路さんのことだろう。おそらく、このままの教室の設備じゃ転校することになるのだろうな。

「あの、学園長……?」

明久が雄二の発言に学園長が機嫌を損ねたのではないかと心配そう

に発言する。

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……」

学園長は小声でそう呟いた。どうやら面倒事をやらせるつもりのようにうだ。

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

姫路さんの転校が関わっている以上、明久も真剣なようだ。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

雄二がそれを言うのは間違いだ。

と、そんなときに肩をトントンと叩かれる。

（どうしたの秋音姉？）

（もしかして学園長はあの二人に『白金の腕輪』を任せるつもりなの？）

（準優勝の可能性がある低得点者だからね。丁度いいんじゃない）

（学園長はひねくれてるから欠陥を正直に話さないだろうね）

白金の腕輪には欠陥がある。

それは、高得点者が使うと暴走するというものだ。

（そう言えばこの部屋の盗聴器は？）

（竹原が仕掛けたのは全部破壊しちゃったよん♪）

雄二たちは学園長と取引をしているが、それを妨害するであろう竹原に情報が伝わらないのは良いことだ。

（そろそろ取引が終わったみたいよ）

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おうよっ！」」

教室の改修との交換条件を引き受け、話は決まったようだ。

「……………ところでなんで、博人はあんなところから出てきたの？」

明久がさっきからずっと思っていた疑問をやっと口にしたようだ。

『黄金の腕輪』の欠陥は言えないことなので、誤魔化す。

「変な噂のあるチケットを勝ち取ってくれていう学園長からのお願いを聞いたただだよ」

「それじゃ、僕達と同じだね」

明久は気づいてないだろうが腕輪が本当の目的ってところもおなじだ。

雄二は薄々気づいているようだが。

まあ、当日にならなきゃ詳しいことは気づかれないだろう。

第二十一問くオーストラリアと言えば？コアラ？カンガルー？違う！毒蛇だ！

感想、誤字報告お願いします。

第二十二問〈YESレジ袋！NOエコバッグ〉（前書き）

サブタイトル〈

今流行りのエコバッグですが、エコバッグをつかうと石油の使用量が増えるそうです。

レジ袋は石油の中でも使い道のないただ同然のものを使っています
が、エコバッグは石油の中でもそれほど量の無い成分を使って作られます。

レジ袋が廃絶されると、使い道のなくなった石油は処分され、汚れ
などで買い換える必要のあるエコバッグを作るために石油を無駄に
します。

……………もともとただ同然だから、レジ袋も無料なんです。

第二十二問くYESレジ袋!NOエコバッグく

第二十二問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「それはお前たちが言えることじゃないよ」

「そうっすよ」

清涼祭初日の朝。

いつもの汚い教室は、中華風の喫茶店へと姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内に設置されているテーブルは、最初はクラスのみかん箱を使
うつもりだったが、時間が余った僕が木材で作ったテーブルを使っ
ている。

「あ、それは七伏君が作ったテーブルに、木下君が綺麗なクロスを
持ってきて、手際よく作ってくれたんですよ」

クロスの布は演劇部で使っている小道具なので、なかなか良さそう
な生地だ。

「うーん、ハクはさすがっすね」

なぜAクラスのメープルがここにいるかという点、霧島さんに頼んでFクラスの手伝いをする許可をもらったそうだ。

「時間がなくてニスは塗れなかったけどね」

いつの間にかムツツリーニが胡麻団子をもって近くに来ていた。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

ムツツリーニは気配が薄いので、明久はいきなり現れたように思えて驚いていた。

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そうやってムツツリーニは手に持っていた。胡麻団子を差し出した。きた。

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

「いただきます」

秀吉達と一緒にお盆の上の胡麻団子を手取る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「……………（モグモグ）」

「ハクも満足してるみたいっす」

僕の中では甘い＝うまいが成り立つ。

よってこれは甘い（うまい）。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

「ハク、食べかけで良いならこれ食べるっすか？」

「もちろん」

すると、口のまえに胡麻団子が差し出される。

「はい、あーんっす」

「……………（パク）」

かなり恥ずかしいので無言で食べる。

周りから強烈な殺気を感じるが睨みつけたらある程度緩和された。

一人で殲滅したのがこんなところで役に立ったようだ。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。お帰り」

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「無論だよ」

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリーニに任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね」

学園長から出場理由についての口止めはされているので、下手なこととは言えない。

「もしかして、賞品が目的とか…………？」

「うーん。一応そういうことになるかな」

詳しく言うと、賞品と設備の交換が目的だね。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

島田さんの目が細くなった。これは攻撃色だ。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」

気がつくと姫路さんも戦闘モード。

「だ、誰と行くって言われても……」

「明久は俺と行くつもりなんだ」

明久が返答に迷っていると、雄二が助け船？を出した。

「え？坂本とペアチケットで『幸せになり』に行くの……？」

「俺は何度も断っているんだがな」

助け船というよりは明久を追い詰めたかったただけだな。

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引かかる！

それと秀吉！少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」

このままこの誤解が広まると明久は同性愛の似合いそうな人ランキングが上がることになるのだろう。

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それができれば明久だって苦労はしていないさ」

「雄二、もっともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになってないから！」

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

自分の意見を真っ向から無視される明久を見て、僕はある決心をした。

それはともかく、僕もそろそろ試合なので行平と合流するため教室を出る。

第二十三問 フタバスズキリュウ? いいえ、フタバサウルス・スズキイです

サブタイトル

日本では、恐竜の名前は学名で呼んでいるので、呼び方を統一する
ならフタバスズキリュウはフタバサウルス・スズキイです。

第二十三問／フタバスズキリュウ？いいえ、フタバサウルス・スズキイです／

第二十三問

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージで、召喚大会は催される。

僕達のBブロックは、立ち会いの先生の関係上、明久達のDブロックとは科目が異なる。

僕達の一回戦は英語。行平も僕も得意科目ではない。

「では、召喚してください」

「――「試獣召喚」――」

さて、こらへんで僕達の召喚大会の目的を整理しておこう。

まず、僕達の目的は優勝賞品の『黄金の腕輪』。

腕輪の能力は召喚フィールド作成と、特殊能力『攻撃追加』と『不可視盾』だそうだ。

フィールド作成をするには500点以上必要だが、特殊能力の使用には400点あれば問題ないらしい。

次に、明久達を準優勝させなくてはいけない。学園長の作った『白金の腕輪』は高得点者が使うと暴走してしまう。腕輪を使っても暴走しない、準優勝することのできる低得点者、それが明久達。

つまり、明久達とは決勝以外で当たることはない。

明久は準優勝との交換条件で、姫路さんの転校を防ぐことが本当の目的だが、僕にとってはどうでも良いことなので、とにかく優勝することが目的だ。

ある程度考えをまとめたところで、点数が表示される。

『Bクラス 田中太一
英語 165点

&

Bクラス 平林拓人
英語 173点

VS

Aクラス 七伏行平
英語 452点

&

Fクラス 七伏博人
英語 448点』

開始と同時に走り出し、相手が動くまえに胴を真っ二つにして、おまけで四肢と頭を切り落とす。

これで一体目撃破。

すかさず二体目の背後に回り、羽交い締めにする。
いきなり倒すのも面白くないので、行平の訓練をする。

「右手」

僕がそう言うのと、相手の召喚獣の右手が行平のボウガンによって撃たれた。
少し中心からずれているが、召喚獣でこの精度なのはすごいことだろう。

「左手」

今度は左手の中心に風穴ができる。
というか召喚獣を使ってこの銃弾を弾いたことのある僕って結構人外なんじゃ……………

「両足」

続けざまに二発の銃弾が放たれ、2つの風穴があく。
相手の召喚獣の上に放り投げ、次の被弾場所を指定する。

「両手両足の付け根」

またも寸分違わず命中する。
行平のボウガンの一度に装填できる弾は8発なので、次の弾の装填をしていた。

「額」

最後の一撃が召喚獣の頭を貫き、勝負が決まった。

「勝者、七伏兄弟」

「いやあ、それにしても楽しかったね」

「Bクラス相手に無傷で勝てる方がおかしいんですよ」

まあいいや。僕がおかしいのは元からだし。

それよりもクラスの喫茶店がどうなっているかが気になる。

「それでは私は教室に戻らねばなりませんので」

「うん。次もしっかり暴れよう」

行平と別れて教室に行くと、中から大きな声が聞こえてきた。

『こんなモン食えるわけないだろ!』

『まずいしな!』

なるほど、営業妨害か。

「責任者はいないのか! このクラスの代表ゴペツ!」

「代表は今はいませんので、私が代わりとさせていただきます。何かご不満な点でもございましたか?」

ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる。口調は行平の真似をすれば良い。

「不満も何も、今連れが足払いされたんだが……」

そんな些細なことは気にするまでもない。

「それは私の『足払いから始まる交渉術』に対する冒瀆ですか？」

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！何が交渉術ふぎゃあっ！」

ガスッ！

「そして『鳩尾強打でつなぐ交渉術』です。最後には『鳩尾強打（強化版）で締める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか！？」

夏川の髪型は坊主。常村の髪型はモヒカン。
記憶完了だ。

「それで、交渉はまだ続行しますか？」

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

賢明な判断だけどーー

「そうですか。それではーーー」

手遅れだ。

「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんなげぶるあつ
！」

「ーーこれにて交渉は終了です」

膝で思いつきり鳩尾を強打。短時間で二度食らったわけだから痛いだろうな。

「お、覚えてろよっ！」

倒れた夏川を抱えて走り去っていく常村。ありきたりな捨て台詞で覚える気にもならない。

客に少なからず迷惑がかかったので、謝罪と商品を半額にして提供することで場を治めた。

第二十四問　竹の花が咲くと災いが訪れる　（前書き）

サブタイトル　

竹の花は約六十年に一度咲きます。

竹はアサガオ等と同じく、花が咲いた後に枯れます。

竹は地下でつながっているのです、竹林一つが一個体ということもあり得て、それが一斉に開花してしまいます。

花の後には実ができますよね？

その実を食べて、本来食料が足りず繁殖が制限されていたネズミが爆発的に増えます。そうすると、ネズミが穀物などを食い尽くし、飢饉が訪れるということです。

現在はその心配はありませんが。

第二十四問く竹の花が咲くと災いが訪れるく

第二十四問

召喚大会二回戦は、一人一殺で一撃で片付いた。

クラスに戻ってみると、明久達と小さな女の子がいた。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにー」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ぶあっ！」」

ナイスコンビネーションだ。

「瑞希。そのまま首を真後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

このままだと明久が殺されるので、介入する。

「落ち着いて、二人とも。だいたい明久がそんなことするわけないと思うよ」

「仕方ないわね。包丁を五本差したら話を聞いてあげるわ」

包丁×5＝致命傷

「絶対話聞く気ないよね」

「じゃあ一本で良いわ」

包丁Ⅱ刃物……一本でも危険。

「本数の問題じゃない」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、葉月といていた女の子が島田さんを見て涙を引っ込めていた。島田さんに対してお姉ちゃんと言っていたことと、容姿から、島田さんの妹と思われる。

「ああっ！あのとときのぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

どうやら明久は島田妹のことを忘れていたようだ。

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

「うん。去年ちよっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

やはり予想通りか。

「それにしても博人、さっきは助かったよ」

「今までは明久が酷い目にあうのを見るのはまあまあ面白いな〜とか思ってたんだけど、明久を幸福にするという超難問をやってみようと思ったんだよ」

「超難問って言われるほど僕は不幸なの？」

なにをいまさら。

「まあ、というわけでこれからは明久の味方をするよ」

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

確かにこの教室には客が少ない。いくら何でも不自然だ。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話をきいたよ？」
「ん？どんな話だ？」

雄二が屈み込んで視線を合わせながら島田妹に問う。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

と、そんなことを聞いていると僕の携帯が鳴った。

カナカナカナカナ

着信音はヒグラシ。ということはメープルからだ。

「どうしたの？」

『Fクラスに対しての営業妨害っす！』

「場所は？」

『ちよっと挨拶にいった、Aクラスっす』

「わかった。すぐに向かうよ」

明久達は島田妹からの情報をうけて、すでに走り出していた。短いスカートという単語が聞こえた気がするがこの際無視だ。

第二十五問くイワサキセダカヘビは右巻きのカタツムリしか食べないく(前書き

ヘビは偏食のやつが多いです。

第二十五問くイワサキセダカヘビは右巻きのカタツムリしか食べないく

第二十五問

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来てなにいつているのさ！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

Aクラスの出し物は【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】というウチの【中華喫茶『ヨーロッパアン』】と良い勝負のネーミングセンスだった。

「ハク、ここでモヒカンと坊主が営業妨害してるっす」

モヒカンと坊主というと常夏コンビか。

「またあいつらか……」

「『また』ということは以前も？」

「うん。僕が追い出したけどね。そういえば召喚大会の方は？」

「問題ないっす」

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

話をしていると、島田さんを先頭にして中に入っていくので、それに続く。

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

僕たちを出迎えてくれたのは霧島さんだ。
それを知ってか雄二が渋々入ってくる。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

これはマニュアル通りの対応ではないはずだ。

席に案内され、立派な装丁のメニューを渡される。
Aクラスは学校行事にも真面目なようだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

この三人は仲良くシフォンケーキのようだ。

「『アイスココア』っす」

「僕は『アイスティー』。ガムシロップは二つで」

ガムシロップは一つでは足りないので、いつも二つ入れる。
なんてったって無料だし。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺はー」

「……ご注文を繰り返します」

雄二の注文を霧島さんが途中で遮る。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『アイスココア』『アイスティー』『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

え？何も問題なかったと思うけど。

「では食器をご用意いたします」

もちろん雄二の食器は実印と朱肉だ。

「しょ、翔子！これ本当にうちの实印だぞ！どうやって手に入れたんだ!？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

霧島さんがお辞儀をしてキッチンに歩いていくと、入れ違いに行平がやってきた。

「おや、博人。いらっしやいませ」

「あ、行平。何か新情報あった？」

「そうですね……次の対戦相手の情報が少しあります」

対戦相手の情報か。知っておいて損はないだろう。

「次の相手はDクラスのペアですが、一人はAクラスレベルの実力です」

「Aクラスレベルなら試召戦争のときに難関となったはずだけど」

「どうやら試召戦争の日は風邪だったようです。それと、Dクラスにいる理由ですが、聞いた話だとテスト中にシャーペンが折れたり解答欄を間違えたりと、恐ろしく不幸だったようです」

そんな不幸スキルを持っているなら口癖は『不幸だぁー！』だろう。実際そんなことはないだろうけど。

そんなことを考えていると常夏コンビ対策のためか雄二がメイド服を持っていた。

「着るのは明久、お前とー」

「いやぁぁぁっ！」

絶叫する明久を無視して雄二の首腕を回していつでも締められるようにする。

「で、雄二？明久とだれナノカナ？」

おそらくこいつのことだから僕にもメイド服を着せるつもりだったのだろう。

「くっ！こうなったら……楓、お前は博人のメイド服を見たくはないか？」

卑怯な！メーブルを味方につけようとするとは。

「なにいつてるすか雄二君。そんな大切なものを衆愚にさらす必要はないっす」

「助けてくれてありがとうだけど否定はしないんだ」

つまり二人きりだったら見たいということだろう。

「というわけで明久。メイド服を着て醜態をさらしてください。大

丈夫ですよ。あなたの人生に忘れられない汚点がつくだけですから」
行平がニツコリ笑顔で明久の心を抉る。

とりあえず明久を女装させるためAクラスを出て、トイレへ向かった。

明久の女装姿は酷いものではなく、秀吉のメイク技術のおかげもあり、なかなか似合っていた。

そんな明久を行平が写真に撮り、良い交渉材料が手に入りましたと
いって笑っていた。

明久がバックドロップを決めてから、痴漢されたと大声をあげたことにより、痴漢退治という名目で雄二が攻撃を仕掛けたが、最終的には逃げられてしまった。

第二十六問くマルハナバチは飛ぶときに空気の粘り気を利用しているらしいく

第二十六問

召喚大会第三回戦。科目は数学。

「「「試獣召喚」」」

おなじみの魔法陣から、召喚獣が現れる。

『Dクラス 清水美春

数学 94点

&

Dクラス 浅井 海渡

数学 411点

VS

Aクラス 七伏行平

数学 439点

&

Fクラス 七伏博人

数学 621点』

「うっわ、これは厳しいな」

「大丈夫です。海渡がいますから」

相手の召喚獣は、清水さんは剣と日本風の鎧という標準的な装備な

のだが、もう一人は急所に突いている装甲が防具で武器は――――
ーネギだ。

「……………なんでネギ？」

思ったことを素直に口に出してみる。

「なんかバグだって話だ。格好いいだろ、これ。『ネギ』の『ナギナタ』つまり『ネギナタ』というわけだ」

浅井はネギナタを回転させてポーズをとってくる。

「それでは、良い試合をお願いします」

軽い雑談が終わり、勝負が始まる。

僕はもちろん開始と同時に攻撃を仕掛ける。

初撃をかわされるが二撃目はネギナタと打ち合った。

ネギとぶつかったはずなのに、金属同士をぶつけた音がする。

……………意外と強いかもしれない、ネギナタ。

僕が浅井を攻撃している間に、清水さんは行平に走っていった。

遠距離型の行平は近距離戦に持ち込まれると戦いにくい。

しかしそこは行平の実力でカバーする。

ボウガンを槍のように構え、突きで攻撃した。

清水さんの召喚獣は剣で攻撃を防いだが、点数差があるので吹き飛ばす。

ちょうど僕の方に向かってくるので、浅井の方を向いたまま肘のブ

レードで後ろから飛んできた清水さんを串刺しにする。

清水さんに注意が少し逸れたので、防戦一方だった浅井が反撃してくる。

相手の攻撃を全て捌くが、体勢が悪いので一旦退く。
距離をとる隙は行平が狙撃して作る。

二体一で不利な状況だからか、浅井は別のアクションをしてきた。

「武器追加！」

どうやら腕輪の能力のようだ。

その言葉の通り、浅井の召喚獣はもう一つ武器を手に行っていた。

……………ゴボウ

今度の武器はゴボウだった。

「あれ！？俺イメージでは剣だそうと思ったんだけど！？」

能力を使った本人もゴボウに驚いていた。

「まあ良い、これで仕切り直しだ！」

ゴボウとネギを構えてつつこんでくる。

攻撃をすべてかわすが、相手もそれを予想していたようで、次の攻撃を仕掛けてきた。

「武器追加！」

.....ジャガイモ

空中に現れたジャガイモをゴボウで叩きつけて、ものすごい勢いでジャガイモが飛んできた。

体勢が悪く避けきれないので、防御する。

しかし、鈍い音を立てて当たったジャガイモに弾き飛ばされてしまった。

.....なぜジャガイモで鈍い音がするのかわからない。

「よっしゃもう一発！武器追加！」

.....ニンジン

瑞々しいニンジンが現れ、それは行平へ一直線に進んでいった。行平はこれを撃ち落とし回避する。

ニンジン投擲で隙ができたので、接近して斬り続ける。

防御姿勢の浅井にネギとゴボウでふせがれるが、僕は囧だ。

僕の召喚獣の頭のすぐ横を通り、弾丸が浅井の召喚獣の頭を打ち抜く。

これで僕たちの勝利だ。

『勝者、七伏兄弟』

「いやー良い勝負だったぞ」

ステージを降りた僕たちは、浅井と雑談をしていた。

「うん。僕も面白かったよ、浅井」

「海渡でかまわねえよ、博人、行平」

「わかったよ、海渡」

「ところで、どうして清水さんと組んで出場していたんですか？」

「ああ、俺と美春は幼なじみなんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「盛り上がってきたところですが、私もクラスの手伝いをしなければなりません。ここで失礼します」

「また戦えるのを楽しみにしてるよ」

「おう、また戦ろうぜ」

勝負の中で仲良くなった海渡とわかれ、Fクラスの教室に向かう。

Fクラスに戻ると、出迎えたのはチャイナドレスだった。

第二十六問　マルハナバチは飛ぶときに空気の粘り気を利用しているらしい

榊はお気に入り登録が増えたり、感想が来ると喜びます。

第二十七問／＼フレミングは右手の法則もある／＼

第二十七問

「ハク、おかえりーっす」

教室に戻った僕を出迎えてくれたのはチャイナドレスに着替えたメープルだった。

「……………」

「おや、どうしたっすか？ 私のチャイナドレス姿に見とれたっすか？」

「え？ あ、あ、うん」

しまった！ っていうっかり本音が！

「ふえっ！？ な、なにいつてるすか！」

メープルも僕の言葉に驚いたのか、二人とも顔が真っ赤になってしまった。

赤面したメープルも可愛いと思う。

「フッフッフ、ハクもついに素直になったっすか。このまま欲求に素直になっちゃう？」

「それはない」

節度を守ったお付き合いをしましょう。

「ま、冗談はここまでにして、試召大会勝ち抜きお疲れ様っす」

「うん、ありがとう。メーブルも勝ち続けているんだよね」

「当たり前っす」

こうやって平和な会話をしていると、教頭竹原の陰謀とかはどうでもよくなってくる。実際それは明久達が解決する問題だし。

「おゝ、召喚大会は順調だねゝ」

それより僕たちの問題はいま登場した秋音姉からの依頼だ。

ちなみに秋音姉は手伝いということでチャイナドレスに着替えていた。

「これで私の給料ダウンが一步遠のいたねゝ」

はつきり言って一発シバきたい。

しかしここは大人な対応をしなければ。

「あ、そういえば一日目の清涼祭の様子をHPに載せるから、見回りにして写真撮ってきて」

そう言ってデジタルカメラを渡された。

それじゃあメーブルと一緒に行ってこようかな。

雄二に見回りの旨を伝えて教室を出て行く。

「どこ行きたい？」

「まずは外の運動系に行った方がいいんじゃないっすか？」

うん、やっぱりそうだよね。

というわけでやってきた野球部のストラックアウト。
召喚大会の会場の近くとあってなかなか盛況だ。

「そんじゃ、いきます」

第一球を振りかぶって軽めで投げる。

肩が暖まってないのでいきなり速く投げてはいけない。

ボールは左上の一番を打ち抜く。

続いて二球目三球目で2，3番を打ち抜く。

そろそろなれてきたので細かい技をやる。

四番と五番の間のフレームに当てて、二枚落とす。これにはまわりから歓声があがる。

残りも四枚も二枚抜き二回で簡単におわってしまった。

その後野球部から勧誘されたが丁寧に断っておいた。

「さすがハクっす！」

メープルはこの状況を利用して抱きつこうとしてくるが、軽く受け流す。

色々な出し物をまわって、現在3－C。クイズ大会だ。

二人一組のペアで、クイズに答えていくという簡単なものだ。

「それでは第一問。第二次世界大戦で初めてつかわれた兵器を三つ

あげよ」

「戦車、飛行機、毒ガス」

「正解です！」

よし、一問クリアー。

「第二問。農薬の危険性について書かれた『沈黙の春』の著者はだれか」

「レイチェル・カーソン」

「正解です！」

今回はメープルが答えた。

「第三問です。マグニチュードが一大きくなるごとにエネルギーは何倍になる？」

「約三十二倍」

「またまた正解です！」

これで僕たちのペアは三問連続正解だ。

ピンポン

「文芸復興」

「正解です」

ピンポン

「ウェルウィッチア」

「正解です！」

ピンポン

「竹取の翁」

「またまた正解です」

ピンポン

「1392年」

「正解です！」

ピンポン

「フビライ・ハン」

「せーかいです」

ピンポン

「fall」

「正解」

ピンポン

「三疊紀、ジュラ紀、白亜紀」

「正解です！」

問題内容は適当に想像してほしい。
なんか適当にやってたら十問連続正解で他の人に一回も答えさせなかった

「それでは商品の『図書券』です」

係の生徒から賞品を受け取る。

まだまだ見回りをしなくちゃいけないので、先を急ぐ。

第二十八問くスッポンは防御を捨て、素早さを得たく（前書き）

スッポンは甲羅が他のカメに比べ、柔らかいのですが、その分陸上での機動力が高いです。

第二十八問　スッポンは防御を捨て、素早さを得た

第二十八問

ちょうど見回りが終わった頃に召喚大会第四回戦になった。

相手は三年生のAクラスだったが、難無く撃破。これでつぎは準決勝だ。

教室に戻ると、みんなあわただしく行動していた。

「ハク！大変っす！」

僕の姿を確認するなり、メイプルが近づいてきた。

メイプルは周りに聞こえないよう小さめの声で話してきた。

「ウェイトレスがさらわれちゃったっす」

ほほう、これはまた予想通りな……

「メイプルは大丈夫だったんだよね」

「もちろんっす。秋音さんは事前に察知して、私と一緒に少し席を外していたっす」

全員を逃がすと誘拐犯がどんな行動をとってくるかわからないから、喫茶店の戦力として一人を残したというわけか。

「何にしてもメーブルが無事で良かったよ」

「誘拐されそうになったということは心に深い傷をのこしていったっす♪」

……………どうしよう、なんかいやな予感がする。

選択肢？スルー

選択肢？心の傷について聞く

？は後々怖そうなので2番を選択。

「その心の傷はどうすれば治るの？」

「ハクとイチチャイチャしたらっす」

うん、だいたい予想通り。

「じゃあ、後でね」

「やったっす。約束っすよ？」

「うん、だからはやく秋音姉を手伝ってあげて」

メーブルが僕のところにいると、現在動けるウェイトレスは秋音姉だけになってしまう。

「了解っす！」

メーブルは上機嫌な様子で接客を始めた。

……………帰ったらどうしよう？

少し時間がたったら、また召喚大会の時間になった。
準決勝は僕達とメンバーの試合。

正直とても楽しみだ。

中華喫茶をFクラスのメンバーに任せ、会場に向かう。誘拐された人たちも明久達が助けに行ったから、そろそろ戻ってくるだろう。

『それでは、召喚大会準決勝を始めます』

ステージの上で、メンバーと向き合う。

真剣勝負ゆえに特に雑談はしない。

『Aクラス 工藤愛子

保健体育 463点

&

Aクラス 佐藤楓

保健体育 428点

VS

Aクラス 七伏行平

保健体育 444点

&

Fクラス 七伏博人

保健体育 438点』

点数に大きな開きはない。

つまりこの戦いで重要なのは、召喚獣の扱い方だ。

目前の勝負に向け、集中する。

『始め！』

いつも通り、開始と同時に攻撃を仕掛ける。

狙いはメープルだ。

しかし、メープルもこの一手を読んで、僕の召喚獣に刀を全力で叩き込んできた。

お互いの攻撃は相殺したが、僕の召喚獣は軽いので、少し弾き飛ばされた。

体勢が崩れた僕に攻撃を仕掛けようとしてくるが、行平の援護射撃で体勢を立て直す。

その間に愛子が行平に向かっていったので、僕はメープルに集中する。

とにかく連続攻撃で相手の攻撃の隙を奪うが、さすがはメープルと云ったところで、時々僕の攻撃の合間を縫って攻撃してくる。

両方決定打はなく、お互いの点数を少しずつ削り合っている。

side 行平

博人を援護したのは良かったのですが、愛子さんにだいぶ接近されてしまいました。

相手が振り回してくる巨大な斧に対して、ボウガンを使って受け流します。

相手が武器を振り切ってきた隙に弾丸を一発打ち込みますが、さすがに一撃とはいかず、大きく点数を削るだけでした。

点数を大きく削られた愛子さんは短期決戦に持ち込むため、腕輪の能力を使い、斧に電撃を宿してきました。

……………どうしようかね。

side 博人

メープルと点数を削りあっていると、行平達の方に動きがあった。

点数を大きく削られた愛子が腕輪を使って勝負に出たのだ。

その斧が当たる瞬間、行平はあるキーワードを口にした。

「防御」

愛子の斧は行平の召喚獣に当たることなく弾かれた。

行平の腕輪の能力『絶対防御』だ。

当然弾かれれば隙はできるので、行平は正確に頭を打ち抜き勝負を決した。

試合の流れが変わったからか、メープルは一度距離をとってきた。

僕とメーブルが今持っている武器は近接用。距離がぁいたら、攻撃はできないはずだ。

しかし、メーブルにはこの距離で攻撃する方法がぁった。

「砲撃！」

メーブルの刀の先から紫色の球が飛んでくる。

いやな予感がして、それをかわすと、目前にメーブルが迫っていた。

「来い、マイマイカブリ」

召喚獣の半分ほどの大きさの昆虫で攻撃を受け止める。

「拡散！」

メーブルがさっきとは違うキーワードを言う。

今度はさっきとは違い、紫色の霧がメーブルの周りに広がった。

僕はそれに当たってしまい、点数を確認すると点数が減っていった。

「私の能力の『毒』っす。砲撃、拡散と攻撃方法は色々あるっす」

説明を聞きながらも攻撃する。

時間がたつごとに点数が減っていく。

もう時間がないので、最後になるであろう攻撃をする。

まずは行平がこちらに突っ込みながら狙撃をする。

動きが止まったところで全体重でクローを叩き込む。

決死の攻撃はメーブルの盾によって防御されてしまったが、これで詰みだ。

後ろに回ったマイマイカブリがメーブルの召喚獣胴体を切り裂く。

『勝者、七伏兄弟』

第二十九問くある地域では、オリオン座とさそり座と一緒に見える時があるら

第二十九問

清涼祭一日目が終わり、僕達の貸し切り状態となっているFクラスの教室。

テーブルでお菓子を食べていると、急に雄二が告げた。

「明久。そろそろ来る時間だぞ」

「？来るって、誰が？」

「ババアだ」

というか学園長が来ないんだったらこんな教室に残っている必要はない。

「学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」

「話ねえ……。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

一応ではなく、確実に目上だ。

「用事もクソも……。この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因がーえええっ!？」

雄二が当然のように告げた当然の事実にも明久は驚いていた。

「あ、あのババア!僕らに何か隠してたのか!」

そもそも何をもってババアー学園長に隠し事が無いと判断したんだ。

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

声と同時に教室のドアが開いて学園長が、続いて右脇に秋音姉を抱えた行平が入ってきた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め!」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい?」

まあ学園長はどうでも良い。気になるのは別の方だ。

「行平、利き手が見えるように抱えるのは左脇が良いと思う」

「いや、そもそも抱えていることにつっこむべきす!」

こっちでワイワイやってるのを無視して雄二は学園長と話をしていた。

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

「ふむ……。やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引きを持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を出せるヤツーーそれこそ『七伏兄弟』とかを使えばいいわけだからな」

「あ、そういうええそうだよ。準優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

「話を引き受けてきた教頭の手前おっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋ったりしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が必要なはずだから。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってこと？」

「そういうことになるな」

話が長くなったのでまとめると、教頭が準優勝賞品の『白金の腕輪』を暴走させ、学園長の失脚を狙っていて、それを阻止できる明久達の妨害をしたということだ。

話が一旦終わって今度は秋音姉が話し始める。

「一応優勝賞品の『黄金の腕輪』も欠陥があって、その影響を受けない博君達に優勝をしてもらうんだよ。こっちが妨害を受けなかったのは、優勝の阻止が難しいのと、欠陥が大したことないからだね」
「これでアタシ達の説明は終わりだ。二人とも、明日は頼んだよ」

明久達にはまだ、準決勝が残っている。相手は教頭側の人間。これ

に勝たないと学園の存続が危うい。

「腕輪の色はカラスプレーで誤魔化せるし、能力の発表もしていないから、どっちが優勝しても良い。だから、明日は本気で戦おう」
「もちろん！」

無事帰宅、したはずなのだが――

「さあて、何して貰おっかなあ？」

ベットで寝てたらいきなりメーブルに馬乗りされて動けない状態だ。結構頑張れば抜けられなくもないが、メーブルに怪我をさせてしまう可能性があるのでやめておく。

さて、どうする？ 僕。続きはwebで。なんて言ってられない。

「ええと……まずはゆっくり話がしたいから――」

口をキスによってふさがれたため、最後まで言い切れなかった。
……え！？ 何この状況？

「……………ん……………む……………」

舌まで入れられた。いったいどうしろっというんだ！？

「えーと、一応ここは僕と行平の共同の寝室だから……」

部屋に標本や飼育ケースを置きまくっていたら、寝るスペースがなくなってしまったからだ。

行平もだいたい似たような感じで色々置いてある。

「根回しはもうしてあるから気にしないでいいの」

万事休すと言いかない。

「フッフ、それじゃあー」

その後はまあ………そういうことがあったということでご想像にお任せします。

第三十問く蝶の鱗粉は蛹の時の排泄物からできているらしいく

第三十問

清涼祭二日目。僕たちはステージの上で、準決勝を勝ち目的を果たした明久達と向かい合っていた。

『召喚大会決勝戦、勝ち上がってきた中にはFクラスが三人！これはFクラスが最低であるという認識を改める必要があるかもしれない』

司会の声を無視して意識を集中させる。ただ目の前の敵を倒すために。

『それでは召喚を開始してください』

「」「」「試獣召喚」「」

『Fクラス 吉井明久

現代国語 67点

&

Fクラス 坂本雄二

現代国語 183点

VS

Aクラス 七伏行平

現代国語 453点

&

Fクラス 七伏博人

現代国語 458点』

点数の差は一目瞭然。圧倒的だ。

『開始!』

合図と同時に走り出す。クローで斬りかかるが明久は予想していたのか大きく横に跳んだ。

僕の攻撃を予測していたのはいいが、回避動作は大きかった。その隙を逃さず攻撃を掛けるが、雄二が割って入ってきた。

「しっかりしろ! 明久!」

雄二の点数は高い方だが、それでも僕には劣る。一対一なら三十秒持てばいい方だ。

ドンドン点数が削られている雄二の援護に明久が木刀で突きを繰り返して出る。

それにピッタリ位置をあわせクローの突きを放つ。

真正面からクローとぶつかった木刀は二つに裂け、明久自身もダメージを追った。

雄二が構えをつくって攻撃準備をしているので、ある指示を行平に出す。

それを受けた行平は『僕』に銃弾を放った。

飛んできたそれをブレードで雄二の方向に弾く。
弾丸は肩に当たり、雄二の攻撃は失敗に終わった。

明久、雄二が傷つき動きを止めたところに突っ込み、暴れる。

斬り、貫き、刻み、潰し、砕き、裂く。圧倒的な力で、場を支配する。

ちなみにこの技を生身でやろうとすると、激痛で動けなくなるだろう。現に点数も50程減ったし。

最終的にフィールドに残ったのは、僕と行平。

『七伏兄弟の勝利です!』

これでミッション完了。残るは腕輪のデモンストレーションだ。

学園長から表彰を受け、もらった腕輪を着ける。
ステージの上なので、観客の方に四人で並ぶ。

アウエイクン
「起動!」

まずは雄二の白金の腕輪で召喚フィールドを形成する。

「試獣召喚! それに…二重^{ダブル}召喚!」

続いて明久が二体の召喚獣を呼ぶ。

一旦歓声がやむのを待ち、僕達の番。

アウエイクン

「起動」

黄金の腕輪が形成したフィールドが雄二の作ったフィールドを消し去る。

これが黄金の腕輪の能力の一つ『干涉不可』だ。

「試獣召喚！」

続いて召喚獣を呼び出し、武器を振るうと、武器の通った外側にエフェクトが出た。

『攻撃追加』、攻撃範囲を広げる能力だ。エフェクトの出た場所は攻撃が発生している。

モーションによって特殊効果もあるらしいが、今回は省く。

一旦フィールドを消し、行平が腕輪を起動する。

アウエイクン

「起動……………」
「試獣召喚」

行平の召喚獣はボウガンを構えたまま足を動かさずにフィールドを動き回った。

能力『滑走移動』。その名の通りフィールドを滑る力だ。ちなみに1mにつき1点消費する。

以上でデモンストレーションは終わりだ。

召喚大会は終わったが、まだまだ清涼祭は続くので、教室で忙しく仕事をする。

第三十問く蝶の鱗粉は蛹の時の排泄物からできているらしいく(後書き)

博人達を使いたいなんて人がいたら、遠慮なくどうぞです。

第三十一問　人間は深海でもペチャンコにはならない（前書き）

サブタイトル）

空気の入っている部分は潰れますが、体の大部分は水が占めているので、それほど潰れません。

第三十一問　人間は深海でもペチャンコにはならない

第三十一問

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

ノックと挨拶をして、明久達が学園長室に入ってくる。
さすがにもう少し気を遣うべきだ。

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「そう？ きちんとノックをして挨拶をしたけど？」

確かに雄二よりはマトモだった。

「明久。返事を待ってから部屋に入るんだよ」

「あ、そうだったね。ところで学園長、準優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかってるよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思っているんだい？」

学園長ももうちょっと言葉遣いを気をつけてほしい。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい
拝んでもばちはあたらなはずだ」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」
「む？ 不具合とはなんじゃ？」

「あ、そっか。秀吉は知らなかったんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」

「そうじゃったのか」

それにしてもどうして明久はそんな重要な事をただ被害にあったっただけで他人に話すのかな。

「明久、言葉には気をつけた方がよい。この部屋には盗聴器が仕掛けられていたんだ。もし破壊していなかったらこんな話を録音されてまた学校の存続の危機だよ？」

「まあ、結果的には良かったんだから、これでいいさね」

「話は終わったことだし、早く打ち上げにいつてきな。僕もすぐに追いつくよ」

「ああ、わかった」

雄二が礼もせずに部屋を出ていく。明久達はキッチンと礼をした。

学園長の椅子の右後ろから、明久達を見送る。
ちなみにここが僕のいつもの立ち位置だ。

あ、そういえば学園長に話があったんだ。

「学園長、教頭の悪事の資料、集めておきましたよ」

脇に抱えていたファイルを机の上に置く。

「そいつはありがたいね」

「でさ、博君にはもう一つ用事があるんだよね。じつは召喚獣の実

験を生徒に手伝ってもらおうとおもってね？『無作為』に選んだ結果、博君となったのでした！」

秋音姉は無邪気な面で微笑みかけてくるが、明らかに故意的に選んだだろう。

「それってどんなの？」

メリットを聞かなくちゃ受ける気にはならない。

「まずは暴走対策として、システムの別領域になるのと、召喚獣に何かあっても強制的に動かせるように召喚者との繋がりを強くするの。これで操作性は大幅に向上するけど、フィードバックが発生しちゃうね」

操作性の向上か……僕にとってはとても良い話だ。

「ま、面白いならいいよ」

「そう言うと思ってたよん」

「それじゃあ学園長。僕も打ち上げなので、これで失礼します」

「ああ、楽しんでおいで」

というわけで打ち上げ会場の公園。

手渡されたコップに何故か入っていた酒を捨て、持参したココアを飲む。

というかこいつらはなんで酒を買ってきたんだ？

するとそこに、背中から軽い衝撃が来た。

「ハク！遅いっす」

と、メープルがにっこり笑みを浮かべていることに油断して足払いをされていることに反応できなかった。しかも馬乗りさえたし。いつもなら軽く避けられるはずなのだが……。どうやら最近は一プルと一緒にだと、少し気が緩んでしまうようだ。

「で、なんでこうなったの？」

「とくに理由はないっす」

キレて良い？キレて良いよね！？

……まあ、メープル相手にそれはできないんだけど。

「フッフ。今の私はお酒で酔ってるから、何しちゃうかわかんないなあ？」

「全く酔ってないように見えるのはどうしてだろうね」

おそらく飲んだとしても、ほんの少し口を付けたくらいだろう。

「おや、信じてくれないの？」

「もちろん」

「それでこそ私の好きなハクだよ」

僕は昔から信じると言ったことはない。そもそも僕は何も信じたくない。

信じることは可能性に限られる。それでは真実にたどり着くのは難

しい。だから疑う事で得られる数多の可能性あら真実を探りたい。
それが僕の考え。

だって僕は知ることを常に望んでいるから。

「そんなことは置いといて、私は今何をしようかって考えてるところなの」

「僕を解放するってのは？」

希望を込めて言ってみる。

「どうしようかな………周りの目があるから……」

華麗にスルーされた。それと周りの目がなかったらどうする気なんだろう？

と考えていたところで、いきなりキスされた。二分くらい。

「ご馳走さま。んじゃ、みんなと一緒に楽しんでこよう？」

「……………うん。そうだね」

少し間が空いたのはドキドキしていたからではない。決して。

その後、暴行されそうになった明久を助けたり、面白く過ごした。

コラボ話 くのんきと速攻く（前書き）

糖分摂取魔さんの作品『バカとのんきと召喚獣』の月野造とのコラボです。

バカとのんきと召喚獣、とても面白いので是非見てください。

あまり出来は良くないですが、見てくれるとうれしいです。

コラボ話 くのんきと速攻

のんきと速攻

「うわああああ!!!!」

ダダダダダダダダダ

ここ、文月学園は高校だ。だけど、今全力疾走していったのは小学生くらいの身長だったような……………? ?

「へいへい!面白い物拾ってきたよ」

見た目中学生な物理教師、杉本秋音は召喚実験室で待っていた僕たち、

手を引いて連れてきた小学生?を見せてきた。

「で?その低身長君の何が面白いって?」

「低身長君ではなく月野造です。よろしくお願いします」

「七伏博人。よろしく」

「佐藤楓っす。よろしくお願いするっす」

「七伏行平、博人の双子の兄です。よろしくお願い致します」

これで各自の自己紹介は終了。

それでは、本題に入ろう。

「もう一回聞くけど、月野君の何が面白いの？というかどうかといった経緯で連れてきたの？」

「造君は女性の先生方に大人気でね、今日も洋子先生達に追われてたから、暇つぶしに連れてきたってわけ。で、面白いのは……………物理フィールド展開！」

秋音姉がフィールドを展開すると、ポンっと音を立てて月野君が消えた。

よく見てみると、消えた月野君のかわりに召喚獣いた。

「ほらほら！体が消えて召喚獣に意識が移っちゃうんだよ♪」

へえ…………それは面白いな。是非とも実験…………じゃなくて観察…………でもなくて、調べてみたいな。

「召喚獣に意識ですか……………虐さ…………コホン。手合わせしてみたいですね」

などといきなり行平が言い始めた。

僕も手合わせしたかったのだが…………

「うーん、召喚獣勝負ねえ……うん、許可するよ！ちなみに造君は観察処分者だからね」

「フィードバックありなんてまさに好都合ではないですか。試獣召喚！そして、起動！」

行平は現在物理フィールドがあるのにも関わらず、黄金の腕輪を起動した。

黄金の腕輪のフィールドは干渉が起きず、他のフィールドを破壊する。

よって、現在は地理フィールドとなった。

行平……得意教科で苟めてみたいとかSっ気全開だな。

ちなみに月野君の装備は魔法使いの格好に武器が箒だった。

まあ、召喚獣の強さは見た目では判断できないから、武器だけで弱いと判断はできない。

海渡なんかが良い例だ。

しかし、あの箒で遠距離攻撃は難しいだろう。

そう踏んで、行平は遠距離から正確な狙撃を開始していく。

はっきり言って行平は最も得意な地理では、無敵と言っても良い。

月野君もうまく避けようとしているが、点数を活かして高速で動き回りながら射撃をする行平の前では点数がだんだん削られていく。

行平が弾の装填中に、月野君は行動を起こした。

「どりゃあああああああああ!!」

月野君の掛け声と共に、行平が吹き飛ばされる。

「クッ……厄介ですね!」

ギリギリの所で体勢を立て直して、『滑走移動』で足場がない状態でも、踏みとどまった。

一旦攻防が終わり、両者共に睨み合いの状況となった。その静寂を破ったのは――

ドン!

「「造君、大丈夫ですか!?!」」

造君LOVEな先生方だった。

……………何このカオス。

「ふむ、形成不利。というよりこの後の展開が予測できるので戦略的撤退させていただきます」

行平は恭しく礼をして、颯爽と去っていった。

そうになると、先生達の怒りは行平に向けられることはなくなり、今度は方向性を変えて別の人物へと襲いかかった。

「造君！何かおかしな部分があるかもしれないので、保健室に行きましょう。いえ、なにもなくても行きましょう！」

「嫌です！」

この会話から、月野君の苦勞が窺えるようだ。

しょうがない、助けよう。

メーブルと秋音姉に目配せして、合図を送る。

まずは秋音姉が閃光弾で軽く視界を奪う。
何故持っているかは聞くべきじゃない。

「ほら、行くよ！」

ぼけっとしていた月野君を拾って肩に担ぐ。

それほど身長が高いわけではない僕でも楽に運べるくらい、月野君は小さかった。

行平にいつも身長で負けてるからちよつと優越感。

後ろから黒いオーラが感じられる恐怖の鬼ごっこだったが、なんとか撒くことに成功した。

「なかなかスリリングでしたね」

いつの間にか合流した行平が全くスリリングを感じたように見えな
い顔で感想を言ってくる。

「さて、今日はせっかく逃げきれたんだから、早く帰った方が良
いだろう」

「今日はありがとうございました七伏君、佐藤さん、杉本先生」

「七伏は二人いるから、僕のことは博人と呼んでもらってかまわな
いよ」

「わかりました。えーと、ハクさん！」

ハクさん……どうやらあだ名のようなだ。

「それでは、私も名前で呼んでください」

「私もメーブルと呼んでもらうっす」

「了解です。ユキさん、メーさん。自分のことも、呼び捨てにして
ください」

これで結構親睦は深まったかな？

「何か困ったことがあったら呼んでよ。興味があったら助けるから
さ」

「バイバイっす」

手を振って造と別れる。なかなか面白い人物だったな……………。

また合うときが楽しみだ。

ちなみに余談だが、用事があつたので校内に戻ったら、先生達にエ
ンカウントして、鬼ごっこ第二弾がスタートした。

コラボ話 くのんきと速攻く（後書き）

閲覧ありがとうございました。

僕とメーブルと遊園地（前書き）

なんかいろいろおかしい気がします、どうぞ読んでください。

僕とメープルと遊園地

僕とメープルと遊園地

「ねえねえハク。如月ハイランドはいつ行く？」

「そうだねえ……今週末は空いてるけど」

「じゃあ、今週末にしよう？　そういえばこんな普通っぽいデート始めただね」

「うん、確かに」

今までのデートは山か図書館か博物館のどれかだ。

お互いの好きなことをした方が楽しめるから、というわけだ。

そして週末、如月ハイランドのゲート前にて。

「ところでメープル」

「うん、なに？」

「遊園地ってどう楽しむ物なの？」

遊園地ってなにが楽しいんだ？　よくわからん。

「私もアトラクションの楽しみ方ってのは微妙だけど、とりあえず、私はハクと一緒に楽しいよ」

ふむ、なるほど。たまにはのんびり一緒に過ごすのも良いだろう。

当日はプレオープンということで、あまり待つことなく係員の前まで進めた。

「いらっしやいませ！如月ハイランドへようこそ！本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「はい、これです。あ、ウェディングシフトは必要ありませんよ」

「了解です」

メーブルがチケットを手渡す。学園長に頼んで上の方に話をしてもらったのだ。もちろん、ここで式を挙げるのを条件で。

……………できれば僕にも話を通して欲しかった。

「じゃあまずは…………ってあれ？Fクラスのメンバーがいるよ？」

広場の方を見ると、明久、秀吉、ムッツリーニ、島田さん、姫路さんがいた。

「何してんの？」

「あ、博人達も来てたんだ」

このメンバーがここにいるとなると、目的は一つだろう。

「坂本夫妻の結婚の手伝いか……面白そうだね」

「私達も手伝うっす」

「え？でも二人はデートなんじゃ……」

「私達は面白いのが一番っすから」

というわけで協力が決定。

また後で連絡すると言うことで一旦別れた。

ジェットコースターの運動の計算や、文学的なお化け屋敷のお化けの解説をメープルから受けたりして楽しんだ後、明久から電話がかかってきた。

『もしもし博人？ちょっとお願いがあるんだけど』

「うん、どんな内容かな？」

『雄二達の前でイチチャイチャして、霧島さんを動かして欲しいんだ』
「了解っす！」

何故かメープルが返事していた。

というかイチチャイチャって……………

まあ何言っても仕方ないので作戦決行となった。

雄二と霧島さんが向こうから歩いてきて、タイミングを見計らってメープルが抱きついてきた。

さらさらのメープルの髪が僕の首をくすぐる。

チラッと雄二の方を見るとこちらを観察していた。
さらにメープルは唇を奪ってきた。

「……雄二」

「目を瞑って迫ってくるな！」

霧島さんが感化されたのか、雄二に迫っていたが、ダッシュで逃げていってしまった。

これでだいたいミッション成功なんだけど……

「……んむ………はぁ………」

いまだにキスされていた。どうすればいいんだろう？
というかいつもいつでも主導権握られっぱなしのような気がする。

「ふう………ご馳走さま♪」

「………で？次はどうするの？」

「うーん………ってユキじゃないあれ？」

メープルが指差した方には、行平と秋音姉がいた。
どうやら行平のプレミアムチケットを使ったようだ。

「これは……追跡するしかないね？」

「うん。なかなか楽しめそうだ」

結果……結構良い感じだった。

「どうしようハク。まさかこんな展開になるなんて」

「まあ、あの二人はあれで良いと思うよ。少なくとも何か言う気は

ないね」

「うん、そうだね。……カメラカメラ」

メープルはカバンの中のカメラを探しているようだ。

証拠写真か？それとも後々の交渉材料か？

行平には弱みを握られまくっているから、少しでも役に立つものを集めないと、抵抗すらできない。

ふと時計を見ると、そろそろ帰宅するべき時間となっていた。

「そろそろ帰ろう。メープル」

「うん、楽しかったね」

友人を嵌めたり、追跡したりと普通のデートとは全く違うだろうが、僕にはとても楽しかった楽しかった

手を差し伸べられたので、きちんと手をつないで帰った。

僕とメーブルと遊園地（後書き）

感想をいただけると嬉しいです。

僕とプールと水着姿？

僕とプールと水着姿？

如月ハイランドのデートの翌週、僕は明久の家にいた。

現在はハンティングアクションゲームを楽しんでいる。

「おい、明久！ 罨こっちあるんだから速く来い！」

「いまが攻撃チャンスなんだよ！」

「罨にかけたほうが楽だろうが！」

「あっ！ ピヨった！」

「ふざけんな！ もう二落ちしてるんだから後がねえぞ！」

「そう思うんなら粉塵でも……あ」

「くそ！ 明久の所為で失敗じゃねえか！」

「雄二がサポートしないから悪いんだろ！」

「何だと！ 自分の失敗を人に押しつけるのか！」

「その言葉そっくり返してやる！」

どちらにしても僕がほとんどダメージあたえたんだが。

明久と雄二がテーブルの上のコーラを取る。

「何だ、やるのか？」

「いつかは決着をつける必要があると思っていたからね」

ちなみに明久に良いゲームの選び方や、中古の買い方などを教えた
ら、だいぶ生活が潤ってきたため、飲み物程度なら常備してあるの
だ。

両方ともコーラのボトルを構え、機をうかがう。

台所の水滴が落ちるとともに勝負にでた。

シャカシャカシャカシャカシャカ（ペットボトルを振る音）

ブシャアアアアアアアア（コーラを噴出する音）

バタバタバタバタ（コーラが目に入った明久と雄二がのたうち回る
音）

「目がっ！目がああああっ！」

こいつらの頭はまるでゴミのようだ。

「全く、こんなことでふざけてないで。雄二はそのままだと気持ち
悪いだろうから、先にシャワー浴びてきな」

「ああ、そうする」

「明久はまずは雑巾で床を拭く」

「はい」

これ以上変な戦いを続けても意味ないので、とつとつ処理をする。

「あ、そういえば————お金払い忘れてたから今日はお湯が出な
いんだった」

『ほわああーっ!?!?』

ガチャッ　ズカズカ

「……先に言えやコラ」

「ごめんごめん。言い忘れてたよ。えっとね、心臓に近い位置にー」

「冷水シャワーの使い方は説明しなくていいから」

「え?でも僕の家のお湯が出ないという事実は変わらないし……」

「仕方ない。明久、外に出るぞ」

「外?あ、そっか。雄二の家に行くんだね」

「それでもいいんだけどな。どうせならシャワーだけじゃなくてプールもあるところに行こうぜ」

「プールもあるところ?」

スパリゾートはちょっと遠いから違うし……。

「ああ。シャワーもプールもあって、ここから近くて、尚且つ金もかからないところがあるだろうが」

シャワーもプールもあって、金がかからないといえば学校だね。

「オツケー。すぐに用意するよ。雄二は水着どうするの?」

「僕はこのまま帰るね」

「俺はボクサーパンツで泳ぐさ。水着と対して変わらないだろ」
「りょーかい。それじゃ博人、また学校で」

「つてことがあって、おかげで散々な週末だったよ」

週明けの教室で、明久がプールで西村先生に捕まってプール掃除を任されたことについて愚痴っていた。

「そうじゃったのか。それは災難じゃたのう……」

秀吉は氣遣うような表情を浮かべているが、明久達のあれは自業自得だ。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」

「まあそう言うな。褒美ってほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？ そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムツリーニと博人も今週末にプールに来ないか？ ただし、ムツリーニと博人には掃除を手伝ってもらうけどな」

「……………」

「うん、別に構わないよ」

ムツリーニは掃除ということで返答に悩んだようだが、プール掃除程度は問題ないので軽々しく受ける。

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「あ、雄二。メーブルと行平も呼んで良い？」

「もちろんだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

どうやら女子が来るということでムツツリーニは引き受けるらしい。

「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじやろうし、相伴させてもらおうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

秀吉も参加してメンバーが結構増えたので、プール掃除も結構楽になるだろう。

「んじゃ、あとは向こうの二人だな。おーい、姫路、島田ー」

「どうしたの坂本？何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「二人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「「え……？」」

プール、という単語に二人は一瞬反応した。メープルに話したときはどんな反応されるだろう。

「あ、さては二人とも予定があったりする？」

そういうことではないぞ、明久。

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？プールっていうと、やっぱり水着だし……」

「そ、そうですよね。水着ですよ……。その、えっと……」

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っておくと、秀吉は来るぞ、水着姿を明久に見せに、な」

「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」

それにしても水着、かぁ……………

メープルはどんなのだろうか？

べ、別に気になってなんかないんだからねっ！

ツンデレっぽく言ったのと、メーブルの水着が気になっていないということで二重の意味で冗談だ。

ま、水着は当日になればわかる。

「とにかく全員オツケーのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

そんな雄二の締め言葉と同時に、西村先生が教室に入ってきた。

僕とプールと水着姿？

僕とプールと水着姿？

「おはよー。絶好プール日和だね」

やってきた週末。

抜けるような青空の下、校門前で待っている僕たちに明久が手を挙げて挨拶したきた。

「おはようじゃ明久。良い天気じゃな」

「おはようございます明久君。今日は良い一日になりそうですね」

「雲量0、快晴だね」

「おはよっすー」

「今日は良い天気で良かったですね」

なにやら明久が拳を握って喜んでいるが、放っておこう。

「ムツツリーニ。おはー」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

明久はムツツリーニに声をかけようとしていたが、やめた方が良さだろう。なにせここまで鬼気せまっているのだから。

「ムツツリーニは鼻血で倒れないように輸血の準備をしているんだ

って」

「最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」

準備といえば、メープルは新しい水着を買ったらしい。

買い物についていこうかと訪ねたが、秘密にしたいからと断られた。

……後ほど更衣室に連れ込んだけばよかったなどと言っていたのは気がかりだったが。

まあ、家を出る時から気合いを入れていたので、楽しみだ。

その後島田さんと島田妹が現れ、着替えに移った。

ーそして十分後ー

「ハークッ！」

ドンと後ろから軽い衝撃とともにメープルがやってきた。

……背中に柔らかな感触がする。

「メ、メープル！ちよつと離れー」

最後まで言葉を継げなかった。

紫を基調としたビキニ。布の面積もどちらかと言えば小さめだ。

メープルの整ったスタイルと合って、見惚れてしまった。

「見惚れちゃったすか？ハク」

「……………うん。とっても良く似合っているよ」

メープルがニヤニヤしているので、素直に言うことでペースをこつ

ちに持ってこよう。

「…………ふえ？」

こうかはばつぐんだ。

「今までも何回か見てきたけど、今回のが一番良いと思うよ」

「……ハク……ありがとう♪」

すっかり赤くなっただけ、流石はメープルといったところで、自分の水着姿をさらに有効活用するため、またくつついてきた。

……わかっていた……わかっていたんだよ。この程度じゃメープルのペースを完全に崩すことはできないって！

「さあさあ今日のプール掃除の監督という建前でやってきた杉本先生だよ♪」

何故か秋音姉も来ていた。

「おや、なかなか似合っていますよ」

「にゃははー、ありがとー」

行平がなかなかうまく褒める。

自然な流れで褒める、これは重要かもしれない。

抱きつかれたままメープルと一緒に雑談していたら、（お二人とも見せつけてるんですか？by行平）はて？何のことだろう。残りの人も来て、明久がトチくるったり、ムッツリーニが死んだり、雄二の目が大ダメージを受けたり色々あったが、今は落ち着いてプール

を楽しんでいる。

すると、いきなり足を掴まれて、水中に引きずりこまれそうになった。

少し抵抗すると、あっさり諦めてくれたので、水中から足をつかんだ人物を引き上げる。

「何やってんの？メープル？」

「明久君が『水中鬼』ってゲームを提案したんだけど、水中に引きずり込んで、人工呼吸をしたら勝ちなんだって」

「僕は溺れてないから人工呼吸は必要ないよ。残念でした」

するとメープルは口をニヤリと歪めて、

「おや、私の目には今にも助けが必要なように見えるけど？」

と言った。

なるほど。事実はどうでも良いから、とにかくキスをするということか。

ならば――

たたかう バッグ

ポケオン ↓にげる

逃げるしかない。

「逃がさないっすよー」

水の中をクロールで進む。

……プールから上がらなきゃ逃げ場くない？

その後僕の心配通り、プールサイドに手をかけたところでタイムロスして、やられてしまった。

何がとはさっき説明した通りだ。

そして、いつの間にか工藤さんが来ていたが、特に問題ないだろう。

そんなことより重要なのは――

「――実は、今朝作ったワッフルが三つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「「ガチンコ水泳対決――っ!!」」（明久と雄二の声）

「「イエーッ！」」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

この殺人ワッフルだ。

でもまあ、水泳対決なら丁度良い。おそらく生き残れるはずだ。

「明久、ルール説明だ！」

「オッケー！ルールはとっても簡単。ここのプールを往復、速くゴールしたひとの勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう、普通の水泳勝負だ。三位以内に入らねば死ぬということをのぞけば。

「ハク！がんばるっす！（大丈夫、いざとなったら、うまくフォロー入れるから）」

「うん、がんばるよ（お願い）」

建前を貼り付けてのアイコンタクト。長年一緒にいたので、意志の疎通は楽々できる。

しかし、重要なのは明久と雄二の動きだ。妨害にでるか、本気で勝負してくるか。

「位置についてー！ーよい、スタートっ！」

「くたばれええっ！！」

工藤さんの合図と同時に明久と雄二はお互い全力で跳び蹴りを放っていた。

「くそっ！やっぱり雄二も同じことを考えていたね！？」

どうやら僕たちを妨害するのは難しいので、残る一枠に入るため他のヤツを蹴落とすつもりのようなだ。

それなら好都合。とつととゴールするだけだ。

ゴールまであと数メートルというところで明久たちがプールに入ってきたが、楽々ゴールする。隣を見ると行平も同着だった。

プールから上がって水を見ると、真っ赤に染まっていた。

どうやら秀吉の水着がとれたのが原因で、ムッツリーニが鼻血を出したらしい。

……流石にこの量は死ぬんじゃないか？

「き、木下っ！とにかく胸を隠しなさい！土屋の血が止まらないから！」

「いいイヤじゃっ！ワシは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじゃ！」

「木下君、我が儘言っちゃダメです！土屋君が死んでいます！」

「……愛子。救急車の手配、頼める？」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたと、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

というか今気づいたんだけど秋音姉がいない。おそらく処理が面倒だから逃げたんだろう。

僕も今すぐにでも逃げ出したい。

結局ムツリーニは懸命な手当でなんとか生き延びた。

……ああ、水上ござ走りやりたかったなあ……

こういう機会じゃないとできないだろうし。

バカテスト？（前書き）

すっかり忘れていたバカテストです！

バカテスト？

バカテスト？

第一問（化学）

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為、危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけなのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

七伏博人の＋α

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

七伏博人のツツコミ

そもそも化学の問題なんだから、経済的なことは問題としていない。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

七伏博人のツツコミ

せめて『未元物質』くらい言ってくれないかな。

七伏博人の豆知識

『ウッド合金という合金は、融点が低く、七十度で溶ける』

第二問（国語）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』

『(2)悪いことがあった上にさらに悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら、『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら、『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

佐藤楓の+α

弘法つながりですが、弘法は筆を選ばずということわざがあるっすが、後に本人が訂正していて、弘法も筆を選ぶっす。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

七伏博人の豆知識

『蜂に関連して。ミツバチとかの社会性のハチは周りに仲間がいな
いと寿命が短くなるらしい』

第三問（化学）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

七伏博人のツツコミ

化学式でカタカナを使うお前にビックリだ。

吉井明久の答え

『B—E—N—Z—E—N』

教師のコメントあとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

七伏博人のツツコミ

そもそもお前は化学式をどんなものだと思っているんだ？

僕とバイトと頼まれ事

僕とバイトと頼まれ事

『スマン！助けてくれ！』

電話で第一声がそれでもわかるわけがない。

「いきなりどうしたの？海渡」

『いや、実は俺喫茶店ラ・ペデイスの副店長やってるんだよ』

「前にも聞いたね」

確か幼なじみの清水美春さんの父親の手伝いをしているうちに任せられたらしい。

『で、店長が奥さんと娘さんに逃げられた』

「清水さんとお母さん？」

『ああ、理由は聞かないでくれ。とにかく、そのショックで店長がいかれてバイトの人がいなくなっちゃったんだ』

「僕に手伝ってほしいと？」

『ああ。できれば行平も頼む』

確かに行平は接客に向いていそうだ。

「わかった。僕は問題ないけど、行平には確認とってみる」
『助かる』

「じゃあ、また後ほど」

行平に聞いたところ問題ないそうで、海渡からバイトの詳細を聞き、土曜日の開店一時間前に『ラ・ペディス』に集合した。

「どうして博人がここにいるの？」

バイトの人が来るとは聞かされていたが、それが明久達だったようだ。

「僕は海渡に頼まれたんだよ。明久達はバイトだよね」

「さて、皆集まったな。今日は店長が美春達に逃げられたショックでグロッキーだから、俺が仕切ることになる」

そう言って持ってきた制服を渡してくる。

……秀吉には女子用のヤツだ。

「性別が合わないのじゃが」

「ここにいるのは全員男子だ。華がなくなるから最も適した木下が女装してくれ」

どうやら海渡は秀吉をきちんと男子と認識しているようだ。最近性別を些細なこととして捉えているヤツが多いから少しほっとした。

「そうじゃな、ここにいるのは『全員男子』じゃから仕方あるまい」

きちんと男子として認識されたのが嬉しいのか、上機嫌で了解してくれた。

ロッカー室はあまり広くないので、まず僕と行平から着替えた。

「博人と行平。お前たちは少しキツイと思うが、ホールと厨房を掛け持ちしてもらう。……奴らは何するかわからないからな」

最後の一言には激しく同感だ。

全員着替え終わり、再集合する。

「ホールは吉井と木下。厨房は俺と坂本と土屋が担当する。博人と行平は最初は厨房で作り方を覚えてくれ。その後臨機応変に対応してくれ。今日仕切ってるのは俺だが、立派な仕事だ。気を引き締めてやってくれ」

「「「了解!」「」」」

現在僕は厨房、行平はホールだ。

『エスプレッソ1、レモンティー1、シャーベット2じゃ』

「わかったよ。あ、三番にこれ持ってって」

客が結構来ていて、休む暇なく料理を作り、渡していく。

『ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホットケーキ、モンブランを一つずつと、頑張つてを三つ』

「なんでお前は客に励まされているんだ？慣れないだろうけど落ち

着いていこうよ」

そして、時間が流れ、

――カーランコロン

「いらっしやいませー」

現在ウェイター中の僕は入り口付近で明久と一緒に挨拶した。

「ハク、遊びにきたっす」

「こんにちは、明久君」

「メープルいらっしやーい」

「え？ 姫路さん？」

やってきたのは、メープルと姫路さん、続いて島田さんと霧島さんだ。

……霧島さんはもの凄い勢いで厨房に向かっていったが。

「やってるわね、アキ。へえ、結構似合ってるじゃない」

「あれ？ 美波まで？」

明久が思わぬ来客にボーっとしてるが、仕事中だということを忘れてもらっちゃ困る。

「何名様ですか？」

「六人っす。一人はここにいて、後一人は遅れてくるっす」

メープルが体をずらして影から秋音姉が出てきた。

「やっほ。しっかりやってるね？」

この土曜日に仕事は無いのだろうか？

『……ゆうじ。妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ！？いるはずのない翔子の声が聞こえるぞ！？呪いか！？』

『霧島、厨房は関係者以外立ち入り禁止だ』

『……でも私は雄二のーー』

『だから坂本、お前ちょっと休憩。早めに話付けてこい』

『は？イヤイヤイヤイヤイヤ俺はまだ仕事かー』

雄二を連れて霧島さんが戻ってきた。海渡め、なんて良い仕事をするんだ。

「ご注文はお決まりですか？」

「うーん……何がいいでしょうか？」

「……どれも美味しそう」

あの人達の接客は明久に任せて、他の客を捌くでしょう。

数分後ーー

「な、なんだ！？どうして翔子がいきなり戦闘態勢になっているんだ！？」

「明久君！やっぱり美波ちゃんとデートしたんですね！？」

ゴキッ

「秀吉、ちょっといいかしら？」

なにこのカオス？

こいつらの関係者だと思われたくないのか、メープルと秋音姉は離れた席でゆっくり談笑していた。

というかこの状況をどうおさめろと？

無理難題に頭を悩ませていると、

「お前たちはなにをやっているんだ！！ここはふざける場所じゃない！マナーが守れないなら出ていけ！」

だいぶ怒った様子の海渡が出てきた。

さすが副店長。全員静かになったよ。

「お客様、大変失礼致しました。どうぞお気になさらずごゆっくりとー」

海渡が客に頭を下げ、フォローを入れたところで、

ーカーランコロン

店のドアが開いた。

「どう、海渡？お父さんは反省してた？」

「ああ、だいぶショックを受けてたぞ」

「そう、それならそろそろ戻りましょう」

「それよりも美春。手伝ってくれないか？」

「ええ、わかりました」

「OK。仕切り直しだ」

その後もバイトはつついて、結構うまく仕事ができるようになった。

明久達は給料が少し減額されたが、まあ妥当だろう。

それにしても、今日は変なことが起きなくて良かったなあ……

私と彼と主導権と――（前書き）

これから三回はオリジナルの短編で、その後三巻に入ります。

私と彼と主導権と――

私と彼と主導権と――

皆さん今日は。佐藤楓、渾名はメープルです。

今回は、私の視点でいきます。

今回の主役ですから。サブタイ通り。

さて、今回は私たちの日常を紹介する話です。

それでは、開始です。

「ハク、起きて〜」

定番イベント、幼なじみに起こされる……はいいんだけど現在六時。
正確には五時五九分。

ハクは六時になると起き出すので、それまでに起こさないとイベン

トにはならないのだ。

まあ、七伏家に泊まっていたから、それほど難しくはなかったわ。

それにしてもハクの寝顔は可愛いなあ〜♪

「うん？朝なの？」

全く眠そうでなく目を開けてすぐに起きあがってくる。

隣を見るとユキも起きてきた。

六時になると起き出すとかこの家の人間はやっぱりどこかおかしい。

「おはよう、メープル」

「おはよう♪」

私の恋人さんはもう覚醒して、さっきの可愛らしい顔より少し凛々しくなった。

……これだけ格好良くて可愛いんだけど自己紹介で

『好きな昆虫はルリタテハ、好きな爬虫類はサイドワインダー、好きな鳥類はハシブトガラス、好きな両生類はアベコベガエル、好きな魚類はヤマメ、好きな軟体動物はタガヤサンミナシです！』

と言ったら台無しだと思う。

私はそれも含めて愛しているけど。

「それじゃ、僕はちよつと外行くけどメープルも来る？」

ハクの朝の日課はランニングがてら昆虫採集だ。

「もちろん。着替えるからちよつと待っててね。あ、覗いても良いよ♪」

ハクは顔を紅く染めて着替えを取りに行ってしまった。

ああ……こういうところも可愛いな。

ランニングも終わり、休日なのでハクと一緒にまったりしていると、良いことを思いついた。

本を読むのに集中していて、周りあまりよく見れていないハクに気配を消して近づく。

たとえば集中していても、気配を消さないとすぐに気づかれるのがめんどくさい。

「…………ふーっ」

「ひゃうっ！」

そつと耳に息を吹きかけると、可愛らしい声をあげて反応してくれた。

部屋の隅を見ると、ユキがキチンとビデオ撮影したくれていた。

グッジョブ！流石わかってるね。

「ななな、何！？いきなり！」

「ねえねえ、ゲームしない？」

「うん、いいよ。何やる？」

「えっちいことをやろう」

「却下あああああ！！」

「冗談だって……。44ダブルで勝負しない？」

44ダブル……四対四のダブルバトル。ハクが一番得意なルールだ。

ハクの戦法のスピードと火力の両立をしたトリパはかなりやりづらい。

耐久も結構あるし。

ゲーム名はあえて出さない。

「OK。それじゃ、始めよう」

よしよし、うまくのってきた。

「ハクが一体倒すごとに私が一枚脱いで、私が一枚倒すごとに一枚

脱ぐね♪」

「…………冗談は置いて、何でそんなに僕を誘惑しようとするの？ そんなことしなくても僕は…………その…………メーブルのこと、ちゃんと好きだよ」

「それはわかってるけど…………ハクは魅力的だから、どうなるかわからないから。だから、私から逃げられないようにしないと」

すると、ハクは私を引き寄せてキスをしてきた。

「もうメーブルから、逃げられないよ。本当に好きだし。……………
……………ってああああああ！！死にそう！何これ！恥ずか死ぬ！」

格好いいセリフも最後で台無しだ。

「それじゃ、これからはみんなに見せつけて、ハクが私を愛しているってことを知ってもらわないとね♪」

「いや、外では止めてほしいんだけど……………」

「イヤ」

「……………はあ……………」

ハクは主導権を握ろうと頑張っているけど、こんなんじゃないつまでたっても私の尻に敷かれたままだよ？

でも、本当に今は楽しいなあ。

願わくば、ハクといつまでも共にいることを。

少女は昆虫少年と共に歩み、彼を支え、愛し、抱擁する。
そして共に笑いあう。

僕と紳士と弱点と――

僕と紳士と弱点と――

「行平！お願いがあるんだ！」

ある休日、僕は行平に泣きついていた。

「ほう、なんででしょう？」

「僕ってさ、いつもいつもメーブルに主導権握られているよね？」

「ええ、そうですね」

アッサリ即答された。自分から問いかけたとはいえ、なんか悔しい。

「だから、少しはなんとかしたいということだよ」

「ふむ、いつかはそんなことを聞かれるんじゃないかと思ひまして、回答は用意しておきました」

おおっ！さすがマイブラザー。気が利いている。

「私の回答としては――」

無理です。あきらめましょう」

「……………は？」

『無理です。あきらめましょう』ですと？

「行平にはマル秘弱点帳があるんでしょ？」

「ええ、確かにメールについての交渉材料はありますね。しかし、脅迫材料は一つありません」

「じゃあ、その交渉材料で良いから！」

「メールに対しての交渉材料の内9割は博人を犠牲とするもので、残りは過去の失敗程度で、有力といえるカードではありません」

僕を犠牲に交渉するってどういうことだ。

「それに対して、博人への脅迫材料はメールとのキス画像が13枚。同じくメールとのキス動画が2本。黒歴史が一つ。メールにばらしたく無いような会話の録音データが一つ。どちらが不利か一目瞭然ですね」

怖い、怖いよこの人！

「まあ、もしもメーブルに対しての良い材料があったとします。それを突きつけたあと、どうなると思います？ 私の予想はお仕置きと称して色々なことをしてくると思うのですが」

『こんなことを調べちゃうなんて……悪い子にはお仕置きだね♪』
と言いながら迫ってくるメーブルが鮮明に想像できる。

マル秘弱点帳が最後の頼みの綱だったのに……

「しかし、まあなんとかする方法がないとは言いませんよ？」

「そんな言い方をするってことはなんにか裏があるんでしょう？」

それもおそらくモロに僕が犠牲になるヤツが。

「別にそんなに難しいことはありませんよ。ただ博人が積極的に出て、襲うぐらいの勢いで行けばいいんですよ？」

「できるかぁ！」

茶目っ気たっぷりに爆弾投下した行平に、せめてもの抵抗として大きな音を立ててドアを閉めて逃げ出した。

『クククッ。少なからず今の言葉を気にするでしょうから、どんな展開になるか楽しみですねぇ』

僕が出て行った行平の部屋には、そんな呟きがあったそうな。

「お邪魔しまっすー」

軽快な声と共にメープルが家にやってきた。

「いらっしゃい、メープル」

「お出迎えご苦労様、旦那さん♪」

最初っからメープルペースだ……………

「入籍はしていない」

「そうだね。入籍予定だからね」

『ただ博人が積極的に出て、襲うぐらいの勢いで行けばいいんですよ』

「おりよりよ？反応がないね？」

積極的に……………か……………

「あれ？本当にどうしたの？」

襲う……はなしとしても、少しぐらいは効果あるかもしれない。

「おい、聞いてー」

僕の顔を覗き込むようにしていたメーブルの唇を奪う。

そのまま抱き寄せて、舌を入れる。

ヤバイ恥ずかしいでしょう嫌われないかな大丈夫かなこのあとどうすればうわああああ!!!!

だいぶ一人で悩んでいると、いつの間にかソファアの上にメーブルを押し倒しているような格好になっていた。

すぐさま離れて、土下座する。

「自分調子くれてました!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

ガシッ

額を床にすり付けていると、メーブルにしっかりと掴まれた。

「どうしてそこでやめちゃうの?期待してたのに……!もう怒ったからね!」

そのまま襟首を掴まれて寝室に連行される。

「今日は全面的にハクが悪いんだよ?しっかり代償は払ってね?身

体で」

結論、積極的に出でもやっぱ無理。おとなしく尻に敷かれるしかない。

「まさかここまでうまくいくとは思いませんでしたよ。それにしても今日は運が良いですね。まさか博人がメーブルを押し倒す動画を入手できるなんて」

七伏行平。紳士で名の通っている彼はサディスト成分も含んでいる。

そんな彼のいじり相手は主^{おもちゃ}に博人。

そして、彼の持つ弱点帳。

そこには文月学園に在籍するほとんどの人間の弱みがかかわれているらしい。

少々Sを含んだ紳士は、過去も今日も未来も昆虫少年《半身》と、最高の相棒であり続けるため、日々に刺激を求める。

僕と従姉とお義姉さんとー(前書き)

はい、いつも通り甘く仕上がりました。

そろそろまともにやらねば……

僕と従姉とお義姉さんと――

僕と従姉とお義姉さん？と――

「さて、今回は新しい召喚実験、やってみよう♪」

「「「おー！」」」

召喚システムの実験室に呼ばれ、ノリノリで無駄にテンションをあげていく。

「テーマは『召喚獣の装備』。今から召喚獣の装備をランダムで変更するから、それで操作してね」

「「「試獣召喚」」」

キーワードに合わせて幾何学模様が浮かぶ。

現れた召喚獣はいつも通りの武器を持っていた。

「変更するよう！」

言葉と同時に召喚獣が光に包まれる。

そして、僕の装備は皮の鎧と、短剣になっていた。

メープルは鎖鎌、行平は投げナイフに変わっていた。

動作を確認してみても、特に異常はなく、動かしやすかった。

メープル達も同じような様子だ。

「次いくよ!」

また召喚獣が光に包まれる。

今度の武器はジャージとアイスピックだった。

今度はメープルと行平は、蛇腹剣とダーツだ。

「ふむ……やっぱりある程度召喚者の特徴が出るみたいだね」

確かに僕の装備は、機動性が高いもの、メープルはテクニック、行平は遠距離系の武器だった。

「うん、今日はここまでデータ取れば良いかな。また後で実験して、回数を重ねてみよう」

というわけで、今日は解散となった。

今日はメープルの両親の帰宅が遅くなるので、メープルも交えての食卓となった。

そこまでは良い。

ただ、もったいないからという理由で、秋音姉が貰い物の酒を飲んでしまったのを止められなかったのが間違いだった。

「ふっふっふ♪良いではないか良いではないか」

「ちょっ……秋音さん!？」

秋音姉が酔っ払ってしまい、手がつけられなくなってしまった。

「あっ……ダメだって……!」

メープルが胸を揉まれて、身動きがとれなくなっている。

……ゴメン、僕を標的にされたくないから、そのまま置いて。

「彼氏さんはちゃんと助けないとだめだぞ」

……なにっ!？

高速移動する秋音姉に襟を掴まれて、引っ張られる。
なんて力だ!

力なく地面に座り込んでいるメープルの方に引っ張られる。

……まずいっ! なんとかスピードを殺して、激突しないようにせねば!

メーブルに覆い被さるような形で床に手をついてしまったが、なんとかセーファー

ガチャン

左手を見ると、床についた手とメーブルの手が、手錠で繋がっていた。

「はい？」

ガチャン

……………右手も繋がれた。

もういや……………

「二人仲良く、お風呂にトイレ♪頑張ってね！」

流石に両手塞がれたら無理でしょ？

っと思ったら、テーブルの上に鍵が一つだけ置いてあった。

まずは両手封じて無力化してから、後でイベントを楽しむってことか……………

「そろそろ落ち着いてください、秋音さん」

「行君……………だぁ〜いすき♪」

「ありがとうございます」

秋音姉の告白を難なくスルー。救世主だ！その調子で鍵を取り返してくれ。

「断ります」

まだ口に出してないんだが……………

「むう、私は真剣なんだよ！ねえ、キスしたらわかってくれる？」

「わかりました。いいでしょう」

行平の答えを聞いて、秋音姉がゆっくり顔を近づける。

あと数センチ、といったところで行平は手刀で秋音姉の意識を刈り取っていた。

「すみません……………その思いに応えるのは、あと二年待ってください」

二年後……………つまり卒業後か。

「行平、鍵探して」

「もちろん断ります♪」

このくそがああああっ！！！！

教師は紳士と約束をする。紳士が彼女の思いに応えられる時がくるまで、彼らの関係は今のまま。

僕と従姉とお義姉さんとー(後書き)

感想、誤字報告等よろしく願います。

第三十二問くどうやらカモシカはウシらしいく

第三十二問

新学年になってから2ヶ月がたち、日の沈む時刻が段々遅くなっている今日この頃。

僕たちはいつも通り三人で登校していた。

「明日から学力強化合宿だね、ハク」

「うん。準備は昨日のうちに終わらせたから、万全だよ」

明日からは学力強化合宿。四泊五日で卯月高原にいくのだ。

「四泊五日なんて、修学旅行みたいで面白そうですね」

「僕としてはFクラスに不安があるんだけど」

理由…ヤツらは何をしでかすかわからないから。

「それも含めて面白そうではありませんか？」

はっきり言ってそれには共感できない。

少々の不安もしくは多少の不安または微量の不安でもなく現実から目を逸らせずに実は結構大きく的中しそうだと思えた不安を抱え、

その元凶であるFクラスの教室に向かっていった。

教室のドアを開けると、明久、雄二、ムッツリーニのメンバーが額を寄せていた。

ここで選択肢発生。

？危険なので見なかったことにして席でおとなしくしている。
？危険なので少しでも関わって改善できるように声をかける。

……？だな。

「三人とも何やってんの？」

「博人か……丁度良い。話がある」

「あ、僕のほうもお願い」

雄二と明久が事情説明中――

各相談を一行ずつでまとめると、

雄二『結婚が目前に迫っている』

明久『変態として周囲に認識されそう』

詳しく言うと、

雄二『プロポーズ（偽）が録音されていて、霧島さんに結婚の話を進められそう』

明久『清涼祭のときのメイド服に女装した時の写真が盗撮されていて、脅迫されている。無視したら写真を公表』

………若干今更感があるのは言わないでおこう。

「明久は盗撮写真の犯人、雄二は盗聴の犯人を探せばいいんだね」

「ああ、頼む」

まあ、このぐらいの頼みならいいだろう。

「わかったよ。力を尽くしてみる」

話が終わって丁度良いところに、西村先生がやってきた。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだが」

イヤイヤ。トランプ系統は必須でしょうよ。

ちなみにトランプの絵柄は四季を表していて、数字を全て足していくと364。これにジョーカーの一枚を足して365で一年を表しているらしい。2枚目のジョーカーは閏年だそうだ。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

しおりの集合場所と時間の書かれているページを探す。

どれどれ……Aクラスなんかだいぶ豪華だな。

Fクラスは………

「いいいいあ、他のクラスと違って我々Fクラスは―――現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ!?!?』』』

さすがにこれはあんまりだと思う。

第三十二問くどうやらカモシカはウシらしいく(後書き)

感想等よろしくお願いします！

第三十三問　冬に飛ぶ蛾、フユシヤク（前書き）

昆虫は基本冬には活動しませんが、フユシヤクは冬を狙って活動します。

ちなみにメスは翅が無く、脚で動きまわります。

第三十三問／冬に飛ぶ蛾、フユシヤク／

第三十三問

強化合宿一日目の日誌

七伏博人の日誌

『電車から降り、感じた気温が低いことから、標高が高いことが感じられた。合宿所の辺りには木がけっこうあり、チラツとだが、キタテハが見えた』

教師のコメント

博人君が普段どんなことを考えているかわかりました。

七伏行平の日誌

『行きのバスの中、メープルが博人について熱弁をふるっていました。微笑ましい光景でした。最近弄るネタが少なくなってきたので、今回の合宿は良い機会になりそうです』

教師のコメント

いつも紳士的な行平君ですが、意外な一面を見ました。

佐藤楓の日誌

『バスの中、優子と愛子にハクについて話すのに熱中してしまっただけ、行平がいつも以上にニコニコしていたけど、握られる弱みもないし、

からかわれても開き直れるので問題なしかな』

教師のコメント

彼との仲が良好なのは良いことですが、節度を守ってお付き合いしてください。

電車に揺られ、一時間程。

「あと二時間くらいはこのままですね」

姫路さんが携帯で時刻表を確認したようだ。

僕の後ろの席に座っている明久はやることなく暇そうだが、僕はまったく問題ない。

「異議あり！」

これだけ聞けば何をしているかわかりだろう。

どんな状況でも逆転させる裁判だ。

これでプレイは十五週目だ。現在は目を瞑ってでもクリアできる。

ストーリーを楽しみながらクリアすると、時刻は一時十五分を指し

ていた。

「あ、お昼ですね。それならー」

と、姫路さんが鞆の中から何かを取り出そうとしていた。
嫌な予感がする。

「実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら……」

まずい、目の前に化学兵器が出現した。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまつての」

「……調達済み」

「僕も、お弁当があるんだ」

皆自衛策は万全だ。

「そういうわけで、明久にでもご馳走してやってくれ」

雄二が勝ち誇った顔をしているが、昔に比べ今の明久の財力はまともになっているから明久も何か用意してあるだろう。

「ごめん。僕も実はこうして惣菜パンを」

「おっと、手が滑った（パシッ）」

「……足が滑った（グシャッ）」

「ああっ！パン！僕のパン！」

雄二が叩き落としてムッツリーニが踏み潰した。
びっくりするほどの連携プレーだ。

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末にー」

「ーしてはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらってくれ」

「「……………！！（ガンのくれ合い）」」

「おっと、ゴメン雄二。僕も手がー」

「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

「「……………（メンチの切り合い）」」

さすがに現在は明久に分が悪い。助け舟をだそう。

「せっかくだからその四人で分け合えばいいと思うよ」

明久から『グッジョブ』というアイコンタクトが、雄二からは『俺を殺す気か！？』というアイコンタクトが返ってきた。

うまく雄二を巻き込めたと思ったが、結果的に明久が姫路さんの弁当を食べて生死の境をさまようことになった。

Aクラスのバスの中々

『せっかくだからハクと一緒に電車で行きたかったっす』

『アタシ達はAクラスなんだからきちんと決まりは守らなきゃだめ

よ』

『そこに守らなきゃいけない規則なんてあるなら、そんな幻想はブチ殺すべきっす』

『……はあ。それにしても博人も大変ね。Fクラスで一年間過ごすなんて。Fクラスなんてバカの集まりじゃない』

『ボクは楽しくっていいとおもうけどね』

『愛子の言うとおり、結構楽しいクラスっすよ。それにハクはFクラスを嫌だなんて思っていないっすよ』

『でも勉強のレベルがー』

『《机の上で学べることもあれば、僕のように昆虫と触れ合うことで学べることもある》ハクが言ったことっす。だからハクは今Fクラスでバカなことをやって学べることを吸収しているっす。ハクにとっては勉強というのは机の上だけじゃないっす。いつでも勉強なんすよ。だからクラスがどうかは関係ないっす。そりゃ、確かに一緒の方が嬉しいけど……』

『そこまでアツアツだと、もうあんなことからこんなことまで経験ずみなのかな？』

『いや、まだあんまりー』

『待ちなさい楓。まだあんまりってことは少なからあるってことよね？』

『………そうだったのはまだ二回っす』

『え！？どんなことやったの？』

『ヒミツっす』

『えー。教えてよー』

『この話はこれで終わりっす。変わりにハクの苦手な物の話をするっす』

『博人の苦手な物なんて想像しにくいわね』

『虫とか蛇が大好きって言ってたもんね』

『まずは苦い物っす。本人曰わく『苦味というのは本来有毒物質を感知するための味覚なんだ。だからそれを嫌うのは正当だ！』だそ

うっす』

『科学のないわけだね』

『次に犬が嫌いというか苦手っす』

『へえ？どうして？』

『それは『あんな凶暴な肉食獣じゃれあえるヤツの気が知れない』
って言ってたっす。ついうっかりすると蹴り飛ばしそうになるとい
ってたっすね』

ふむ、新情報が聞こえることはありませんでしたね。

面白い話は終わってしまいましたので、ゆっくり景色を楽しむとしまし
ょう。

第三十四問く蝶は死体や腐った果実にもくるく

第三十四問

旅館に到着ーは良いのだが、明久がかえってこない。
現在AED（自動体外式除細動器）を使って蘇生を試みている。

「反応があったぞ！」

「よし、そのまま続けて！」

その後も懸命な処置を続け、なんとか明久の蘇生に成功した。

「……昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

実際の死から逃れることができたので、今は社会的な死について会議中だ。連続で死の危険について考えるなんてこの学園はハッキリ言ってどうかしてる。

「……手口や使用経路から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる」

「そんなことをする人はそうはいないから、断定してもよさそうだね」

まあ、この学年に二人もいる時点でおかしいけど。

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

明久が訪ねるが、ムツツリーニは首を横に振った。さすがにこの短期間の調査では犯人まで割り出せなかったのだろう。

「あ、やっぱりまだ犯人はわからないの？」

「……………すまない」

「僕の方もこれだけの情報じゃ、犯人予測は難しいかな」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」

「……………」『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

明久の意見に同感だ。普通知り合いでもお尻の火傷の痕の有無なんて知らない。

「……………校内に網を張った」

そう告げながらムツツリーニが取り出したのは小型録音機。これで盗聴を行ったのだろう。

「ーピッ 《ーーらっしゃい》」

スイッチを押すとノイズ混じりの声が聞こえてきた。

「随分と音が悪いね」

「校内すべてを網羅したのなら仕方ないだろう」

「音質や精度にこだわる余裕もないしね」

辛うじて女子の声だとわかるが、人物の特定はできない。

《……雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

これはおそらく霧島さんだ。

独特の話し方とセリフの内容から判断できる。

「しょ、翔子……！アイツ、もう動いていたのか……！」

「よっぽど早く手に入れたんだね」

《毎度。二度目だから安くするよ》

《……値段はどうでもいいから、早く》

《流石は太っ腹だね。それじゃあ明日ーと言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから引き渡しは来週の月曜で》

《……わかった。我慢する》

「あ、危ねえ……。強化合宿があって助かった……」

「タイムリミットが月曜まで延びたね」

実際は土日に行動ができないから、後四日だ。

「……………それで、こっちが犯人特定のヒント」

《ー相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮ってるのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？》

《文字通りお灸を据えられたらよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

《それはまた……》

《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？》

それ以降も他愛もない商談が続いた。

「……わかったのはこれだけ」

「なるほど。それでお尻の火傷の痕ってことか」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかっていただけ女子なのは間違いないだろうね」

「……確かに火傷の痕は有益な情報だけどさ、確かめる手段がないよね？ 赤外線でも無理だろうし……」

僕の言葉に対して明久と雄二は真剣に女子のお尻を見る方法を考えていた。

「おぬしら、さっきから何の話をしておるのじゃ？」

「秀吉、実はねー（以下略）」

秀吉はおそらく事情を話せば協力してくれるだろう。
使える駒がふえるのは良いことだ。

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは……」

「そうだ！ もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。何故にワシが女子風呂に入るこちが前提になっておるのじゃ？」

秀吉のツツコミはもつともだ。

「それは無理だ、明久」

「そもそも秀吉は男だし、しおりの三ページを見てみな」

・Fクラス木下秀吉：20…00～21…00 個室風呂？

「……くそっ！ これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだよ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ!？」

……おや、何か大勢の足音がこちらに向かっている。

足音を消す気配もないし、危なくはないだろう。

しかし、嫌な予感がするので布団の入っている押し入れに隠れる。

ーードバン!

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい!」

第三十五問く発見を予言された昆虫キサントパンスズメガく（前書き）

マダガスカルに生息するキサントパンスズメガは長さ二十センチ以上の距をもつランが存在することから、この密を吸える花粉媒介昆虫はいるはずだと予言されました。

けっこう有名なネタでしたね。

あとがきにアンケートがあります。

第三十五問／＼発見を予言された昆虫キサントパンスズメガ／＼

第三十五問

何が起ったのかと隙間から覗いてみると、女子の大群が乗り込んできていた。

「な、何事じゃ!？」

「木下はこっちへ! そっちのバカ三人は抵抗をやめなさい!」

どうやら明久たちは咄嗟の判断で窓から脱出しようとしたようだ。この状況なら、誰かを生け贄にして隠れるのが一番効果が高いが、明久と雄二はピンポイントで狙われるから、窓から脱出が良い手なのだろう。

「なぜお主らあ咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ……?」

それは今問題じゃない。まあ、強いて答えるなら、『慣れ』だろう。

「仰々しくぞろぞろと。いったい何の真似だ?」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるというのに」

集団の中から一歩前に出て高圧的に言い放ったのはCクラスの代表の小山さんだ。

「犯人？犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

ここからじゃよく見えない。いったい何だ？

「……………CCDカメラ小型集音マイク」

お、ナイス解説だムツツリーニ。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

なるほど、盗撮か。

「え！？それって盗撮じゃないか！一体誰がそんなことを」

「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」

「異議あり！」

そろそろこのバカみたいな状況を打破するために押し入れの中から飛び出した。

ちなみに今の僕のポーズは思いっきり指を指している格好だ。

「一つ聞けどさ、どうして明久たち以外盗撮をしないって言えるの？」

「そんなの決まってるじゃない！コイツらの生活態度が――」

「あのさ、なんでそんなものが証拠になるんだい？ハッキリ言って一つも道理にかなっていない」

「それでも、コイツらが疑わしいことには――」

「ほんとにくだらねえね。君たちは何一つ疑っちゃいない。疑うつ

てのはすべての可能性について考えることだ。否定的なことを信じるってことじゃない」

ああ、くだらない。全く持ってください。

「ならば美春が証言します！」

……は？

「美春はこの人たちが脱衣所に入るのを見ました」

ほう……面白い、叩き潰してやる。

「裁判長、弁護側からも証言を要請します」

「わかりました。それでは検察側は証人を入廷させてください」

ちなみに裁判長はいつの間にかいた行平だ。きちんと木槌をもっている。

～証言開始～

『あれは合宿場についてすぐのときでした』

『この旅館の中を散策していると、怪しい影を見つけました』

『その影を追っていくと、その怪しい影は脱衣所に入っていきました』

『その怪しい一団は約三分後にそこから出てきました』

『人数は三人でした。その三人組と同じです!』

よし、まずは気になったところを揺さぶっていこう。というか証拠品がないので『つきつける』はできない。

『その影を追っていくと、その怪しい影は脱衣所に入っていきました』

「待った!一つ聞きたいんだけど、どうしてそのとき先生を呼ばなかったの?」

「それは―――そんな暇がなかったからです!」

「異議あり!君はこうも証言している。『その怪しい一団は約三分後にそこから出てきました』と。つまりきみは三分間脱衣所の前にいたわけだ」

「ぐうっ!それは―――そうです!その人達を見張ろうとしたからです」

「異議あり!見張ろうとした、という割にはその後何もしてないようだけど。少なくともそんな怪しい人物なら、先生に報告するべきだ」

「そっ、それは―――」

よしよし、ここまではうまく攻められた。

しかし、さっきも言ったように僕は今証拠品を一つも持っていない。

これでは清水さんを犯人として告発する事はできない。
ならば、明久を助けるのを優先すべきだ。

「裁判長、ご覧も通りこの証人の証言は信用できません。再度調査

を要求します」

「そうですね、この状況では犯人のヒントすらありません。よって弁護側と検察側に更なる調査を命じます」

よし、これでだいたいうやむやにできた。明日になったらみんな忘れていくだろう。

「よし、これでひとまずは安心――」

僕が後ろを振り返ると、そこにはボロボロの明久と雄二とムツツリーニがいた。

……いつのまに拷問されていたんだ？

第三十五問く発見を予言された昆虫キサントパンスズメガく（後書き）

アンケートです。

四巻の内容についてなのですが、美波がキスするあたりのイベントの発生についてどうしようかと悩んでいます。

そこで、皆さんの意見を聞きたいとおもい、アンケートをする事にしました。

次の選択肢から選んでください。

- 1, オリキャラを美波の位置に入れてイベント進行
- 2, 美波のまま原作通りイベント進行
- 3, 四巻の内容はスルー
- 4, その他

できれば参加してください！

三十六問く割り箸は使った方が良くく（前書き）

割り箸は木材を切り出した後の端材から作られます。
なので、森林の破壊にはなりませんし、むしろ端材を使うので、森林がきれいに保たれます。

三十六問く割り箸は使った方が良いく

第三十六問

「明久、大丈夫？」

「ああ、うん。心配してくれてありがとう」

それにしても、証拠不十分なのに拷問なんて、ヤツらはどうかしている。

「それにしても、今日はなんだかいつもより更に命の危機が多いよ……」

いつもよりと言っているが、いつもは命の危機がないのが普通だ。

「ところで雄二。さっきから黙っているけど、何かあったのかい？」
「……………上等じゃねえか」

少し怒りを含んだ声が響く。

「え？雄二。どうしたの？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねえか」

「まさか、本当について……」

「ああ、そのまさかだ。あっちがそう来るなら、本当に覗いてやろうじゃねえか！」

「雄二。そんなに霧島さんの裸がみたいなら、個人的にお願いしたらいんじゃない？」

確かにこのタイミングで覗きに行って成功すれば犯人までたどり着けるが、失敗すれば社会的な死だ。

「ハクは私の裸は見たいっすか？」

「うーん、まあ……………」

「良いこと聞いたっす♪」

ってうえい！？何故ここにメープルが？

ああ、僕がいるからか。

メープルは風呂から上がったばかりなのか、頬は上気していて、肌もほんのり湿っていた。

……………なんというか、こう、色っぽい。

「ハク、そんなにみられると照れるっす」

「…………あっ！ごめん」

いつもと違う魅力なので、までも見とれていたようだ。

「あゝ。俺たちは任務を遂行してくるから、好きにやってくれ」

「え？ちょ待っ！」

「了解っす！留守番っすね？」

「…………殺したいほど、妬ましい」

「ダメだよムツツリーニ。博人の邪魔しちゃ」

そういつて明久たちは速やかに部屋を出て行った。

この状況で僕を置いていかないで（懇願）。

そんな思いもむなく、部屋の扉が再び開くことはなかった。

「さて、いい感じに二人つきりね」

「待つんだ。いつの間に僕の上に馬乗りになったんだ!？」

少なくともさっきまでは普通に目の前にいたはずだ。

「もう、あんまりさわがないでよ。先生が来ちやうかもしれないから」

「よし、今すぐ叫ぼう」

大きく息を吸って声を出そうとするが、口を開く前にメーブルの顔が目の前にあった。

僕の口はメーブルの唇にふさがれている。すぐ目の前にあるメーブルの髪から、良い香りがする。

「……ん……ちゅ……ふぁ……」

ダメだ。こうなったらもう僕にはどうしようもない。せめて先生が来ないのを願おう。

二分ほど経ってキスから解放された。

「さすがにここじゃ、できるのはここまでね」

「例えどこだろうと断固拒否する」

「そんなの流れに逆らえず無駄になっちゃうのに」

……確かに今までもそうだった。

「さて、それじゃハク。私は満足したからそろそろ帰るよ」

「あ、ちよつと待って」

「え？ やっぱりまだ足りなかった？」

ここはスルーが吉だ。

「実はねーー」

明久たちの事情説明中

ーーというわけなんだ」

「わかった。じゃあ明日の入浴の時にできる限り確認してみるね」

「ありがとう」

これでメーブルの協力が得られた。

男子だけで活動するより、グッと調査しやすくなるだろう。

………というかメーブルのことだから、なにか情報をつかんで、それで僕らがどう動くかを確認しに来たんだろう。

ちなみに、明久たちは先生達に迎撃されて捕まり、補習を受けていた。

三十六問く割り箸は使った方が良くく（後書き）

アンケートは次回の更新（7月4日）で締め切ります。

第三十八問くアリも毒針を持つやつがいるく

第三十七問

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな；クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「ハクと平日に一緒なんて、最高っす」

「待ってメール。僕に抱きついていたら、勉強できないと思うんだ」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同学習となっていた。学習内容は自由で、先生や周囲に質問しても良い。要するに自習だ。その為、机も生徒同士が向かい合う形になっている。

「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

明久はこの学習形態の意図に気がついていないようだ。

「授業？そんなもんやるわけないだろ」

明久の独り言を聞きつけて、これ幸いと雄二が霧島さんを置いて明久の隣にやってきた。

「やらない？どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるか？」
「むっ。失礼な。雄二にとってはそうかもしれないけど、僕にとつてはFクラスもAクラス也大差ないよ」

おそらくどちらも理解できないからだろう。

「この合宿の趣旨は、モチベーションの向上なんだよ」

「つまり、AクラスはFクラスを見て、『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考えるっす。そういうメンタル面の強化がこの合宿の目的っす」

「だから、授業は問題じゃないんだよ」

僕たちの説明に、明久は納得といった顔で頷いた。

「あ、代表に楓ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

そこにある友人の声が聞こえてきた。いそいそとメーブルの隣で勉強道具を広げているのはメーブルと特に仲の良い愛子だ。最近メーブルと一緒にたまに家に遊びに来ている。

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君立ったよね？久しぶり」

ニツと歯を見せて笑う愛子。その雰囲気と相まってとても爽やかそうだ。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで、好きな食べ物はシュークリームだよ」

パンチラは特技では無いだろう。

「ハク……私がやってあげるっすよ?」

「お願いだからやめて」

「そんな! ハクは私には魅力がないって言うの?」

少し目を潤ませて上目遣いで見てくる。なかなかの演技だ。

「いや、魅力たっぷりだよ」

「ありがとうっす」

適当に返事をしたからか、メープルは少し膨れていた。

しょうがないじゃないか、大勢の前で本気で魅力的だなんて言うのは恥ずかしいし。

「おや、こちらはだいぶ賑わっていますね」

続いて行平も登場した。

「ああ、ちょうど良かった。少し世界史で聞きたいことがあるんだけど」

「かまいませんよ。それと、生物で聞きたいことがあるのですが?」

「うん、どこどこ?」

「ハク、私も化学で質問っす」

まずは僕から説明をするため、参考書を開く。

昔から二人に理科関係を教えているので、最適な教え方がわかる。

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ!」

どうしたいいきなり!?

見ると、学習室のドアを清水さんが開けていた。

……………この処理は海渡任せだな。

「ほら、美春。先生に見つかからないうちに帰るぞ」

「まだお姉様とーちよっ! 何して……………!?!」

清水さんが入ってきたと同じ所から海渡が入ってきて、清水さんを連れ帰るため、お姫様抱っこしていた。

……………あの二人はいったい何しに来たんだ?

でもまあ、これで少しは平穏が訪れるな

「ハク、言い忘れていたことがあったっす」

「なに? 実は風呂の脱衣場に本命と思しき盗撮カメラがあったっす」

「やっぱりか。ところでメープルはそれに映ってないよね?」

「もちろんっす。私の裸はハクのものっすから」

「……………んじゃ、その話はまた後で。今は勉強しないと周りに聞かれるからね」

「まったくハクったらそんなに私の裸がー」

「僕が話があるのはカメラの方」

なんだかいつもメープルのペースに乘せられている気がする。そのうち尻に敷かれるようになるのかな?

第三十八問くアリも毒針を持つやつがいるく（後書き）

アンケートは締め切りです。

結果、一番になりました。

四巻の内容は現在執筆中です。

第三十九問く手から糸？ああ、シロアリモドキねく

第三十九問

明久達が出陣した後、意外な来訪者が来た。

「おっすー、入るぞ」

一人目は海渡、そしてもう一人、

「し、失礼します」

清水美春さんだった。

「どうしたんだい？こんなところに来るなんて？」

僕の質問に清水さんは少し躊躇い、海渡の方を一回見た。

海渡はその視線を受けて、一回頷いた。

「実は……初日のカメラ設置は美春がやりました！すみませんでした！」

ああ、矢張か。

……ミスった、矢張さん家の政志くんじゃない。
ワンモアテイク！

ああ、やっぱりか。

まあ、大体予想はできていた。

「僕は特に謝られる必要はないよ。まあ、とりあえず先生に事情は話してもらわないとね」

さすがにカメラ設置を見逃すことはできない。

「そうだな……」

「まあ、一番楽そうな秋音姉……杉本先生に話をしてみるよ」

「ああ、助かる」

「それじゃ、明久達には僕から言っておくよ」

「何から何まですまないな」

僕だってタダでこんなことをやる訳ない。

「報酬は後々でいいからね」

「やっぱり報酬を要求するところがお前らしいというか……まあ良い。後で店に来てくれ」

よっし！これで甘いものが手に入る！

「んじゃ、そろそろ戻るわ」

「うん。約束は忘れないように」

軽く念を押してから海渡達を見送る。

……………明久達の覗きはもう意味がないんだよなあ……………

わざわざ補習を受けることになるなんて、ドンマイだ。

その後、明久が部屋に戻って来たけど、すぐに呼び出しを受けていた。

……………何だったんだ？

翌朝。

「~~~~♪~~~~♪~~~~♪」

ヒャッハー~~~~~！！これはもうテンションMAXですたい。

先生の目を盗み、日が昇る前から昆虫採集に勤しんだ結果、それはもう最高だった。

ガチャ

「なんだ！？朝から明久が決まっているぞ！？持病か！？」

「ええい！落ち着くのじゃ明久！博人、西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……………！（コクコク）」

「……………お前らは朝から何をやっているんだ」

「……………同感です」

本当に何がしたいんだ？

現在は朝食中で、覗きについて作戦会議をしているのだが、はっきり言って意味がない。

しかしまあ、普通にバラしても面白みがないので、後で明久と秀吉だけに教えて、雄二達はそのまま無駄な努力をしてもらおうと思う。

しかし、明久は演技に向いていないので、機を見て教えることにした。

「ねえハク、お願いがあるんだけど？」

自習中、メーブルが小声で話しかけてきた。

「うん、なに？」

「覗きの妨害、一緒にやらない？」

覗きの妨害……つまり召喚獣勝負か……明久達は今日の戦闘から外すとして、戦闘経験が積めるのは良いな。

「わかった。僕も参加するよ」

さて、これからどんどん楽しくなりそうだ。

第三十九問く手から糸? ああ、シロアリモドキねく (後書き)

途中のは逆○裁判ネタです。

第四十問く深海魚オニボウズギスは体長より大きい胃を持つく

第四十問

さて、覗き防衛戦だ。

明久と秀吉は別任務ということで今回の戦闘からはずさせ、今は部屋でまったりしてもらっている。

配置についたし、後は敵がくれば良いだけだ。

『うおおっっ!!』

『ぶっ潰せー!!』

前方より敵発見。殲滅を開始する。

『試獣召喚!!』

覗きの防衛の為の女子たちと、男子の声が重なる。

「試獣召喚」

一息遅れて僕も召喚する。

敵は………多くがここを迂回して逃げたので一五人程度。何秒もつ

だろうか？

まずは一番近い敵に接近し、回し蹴りを放つ。

死亡報告

敵男子一体

味方女子二体

……………しまった！

大丈夫だ。もう一回やればちゃんといくはず。

死亡報告？

敵男子一体

味方女子三体

……………悪化した。

面倒なので、味方も気にしないようにしよう。

敵目掛けてクローを振るうと、黄金の腕輪の『攻撃追加』が発動する。

攻撃範囲が広がるのはいいが、仲間がたくさん死ぬな。

「さーて、ここからは杉本先生のターンだよ！」

このフィールドを作っている秋音姉が、戦いに参加してくる。

秋音姉の装備は白衣とツインチェインソーだ。

回転している刃を振り回す度に敵が死んでいく。

それに乗って僕もクロー、ブレード、足の鉤爪を回転するように振り回すと、敵味方問わず吹き飛んでいく。

フハハハ！まるでゴミのようだ！

……………ゴメン調子乗った。

それはともかく、僕と秋音姉の活躍（虐殺）によってこのエリアは全滅した。

明日は巻き込んで殺す数を減らせるように努力しよう。

「てめえ、博人！裏切りやがったな！」

「裏切った訳じゃない」

「じゃあ何だって言うんだ？」

「ただメープルに頼まれたから」

「……………そうだな。お前は尻にしかれているんだもんな」

その納得の仕方はムカつくな。

しかし、半分以上事実なので言い返す気はない。

「……………この妻帯者が」

言い返せないので、無関係の暴言を吐くことにした。

「お前だって同じようなもんだろ!？」

何を言っているんだか。

「残念ながら、坂本夫妻と違って結婚なんて話はない」

「……………ちっ」

良い度胸だ。明日、徹底的で妨害してやんよ!

そんな感じで明日の作戦を練るために、一旦部屋を出て行った。

消灯時間ぎりぎりまで散歩しつつ考え、明日に備えて指示を出しておいた。

「あれ!?! やたらと単純!?!」

夜中に一体どうした？

なんとなくイヤな予感がするが、明久が関連しているので、首を突っ込んでおこう。

第四十問く深海魚オニボウズギスは体長より大きい胃を持つく（後書き）

バカテスの二期が始まりましたね。

第四十一問くオオメジロザメは淡水でも出現するく

第四十一問

明久のバカな声で目を覚まされると、部屋に広がっていた光景は――

- ・寝ている秀吉
- ・カメラを構えているムツツリーニ
- ・浴衣で雄二の布団に侵入使用としている霧島さん
- ・島田さんに迫られている明久

……………おかしいな。

もう一度見てみよう。

- ・メールの着信がある携帯
- ・みんなの荷物
- ・空に出ている三日月
- ・あどけない顔で寝ている秀吉

……………よし、異常はないようだ！

「「僕（俺）を助ける気はないのかっ!？」」

一応メールの確認をしておこう。

どれどれ……………

【From…佐藤楓 To…七伏博人

夜這いしてみようかなあと思ったけど、その後が期待できないからやめてみました☆】

助かった! 本当に助かった!

ありがとう、流石メール!

「「現実逃避するなあああ!!」」

『なにごとだっ! 今吉井と坂本の声が聞こえたぞっ!』

あ、西村先生の声だ。

「「「「……………」」」」」

「…………ふう、やれやれまったく雄二は駄目だなあ」

「はっはっは。謙遜すんなよ明久。今のはお前が原因だろ」

「どうしても良いけど女子を逃がした方が良いんじゃない? あ、僕もう寝るから。おやすみ〜」

これ以上関わらない方が身のためだ。早く寝よう。

「ふぁ……あふ……」

結局西村先生に捕まって補習を受けた明久と雄二は、朝から眠そうにしていた。

「流石に眠いぞこら……」

まあ、朝まで教育について（拳で）語られたのだから、眠いのは当然だろう。

ちなみに僕はぐっすり眠れて頭が冴え渡っている。

早寝早起きバンザイ☆

「お主ら、災難じゃったのう……」

「災難といえば災難だったかもー！ーふわぁあぁあゝゝ」

「俺も駄目だ……。全然気合いが入らー！ーふおおおっ！？」

「いきなりどうした雄二！？」

ダルそうにしていた雄二が写真のようなものを見た瞬間、いきなり覚醒しだした。

「……………効果は抜群」

何っ！？二倍ダメージか！？

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

明久の後ろの出入り口からムツツリーニがやってきた。手に持っているのは……………写真だな。

「ムツツリーニ。今しがた雄二に見せたのは何じゃ？えらく興奮しておるように見えるのじゃが？」

「……………魔法の写真」

いつも物静かなムツツリーニには珍しく、誇らしげに胸を張っていた。

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの？」

「少し興味があるよ」

「……………（スッ）」

手にしている写真を手渡してくる。どれどれ……………

「魔法の写真だって？何を言っているんだか。僕らもう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合いなんか入るわけがふおおおっ！」

「ほう。これはまた……」

「なかなかうまいね」

ムツツリーニの写真の一枚目には、姫路さんと秀吉が浴衣姿で写っていた。

「……………これは博人用^{ボソツ}」

そういつて、渡してきたのはメールルの写真。

おそらく初日の時に撮ったもので、髪が湿っていてとても色っぽいやつだ。

へえ……………こんなの撮っていたんだ……………

「今すぐこの画像のデータを消せ。そして今後メールルに関するものを販売または公開するな」

「……………！！（コクコク）」

僕はいつの間にか僕が常に携帯している便利品ストラップの中から、小型カッターを選び、ムツツリーニの首に突きつけていた。

まあ、一応承諾してくれたわけだし、今後契約違反したらいろいろ攻撃していくでしょう。

「……………あ、今までに撮ったメールルの写真があるなら全部提出してね」

「……………」
わかった（ガタガタ）
」

第四十二問くデンキウナギは人間の喉にあたる部分に肛門があるく

第四十二問

現在7時59分。

雄二たちが行動を開始すると思われる8時の一分前だ。

ピピッ

腕時計から電子音になる。

『うおおおおおっ!』

上の階から雄叫びが響いてくる。

いい気合いだが、目的が覗きであることが馬鹿らしい。

まあ、とにかく殲滅だ。

まずやってきたのは、Bクラスの生徒。

「試獣召喚!」

まずは僕ではなく、秋音姉が召喚する。

緊急の書類仕事があるので、早めに抜けるからだそうだ。

『物理教師 杉本秋音

物理 994点』

900点代とは……これはけっこう楽になりそうだな。

ちなみに今日のここの布陣は、僕、行平、メープル、秋音姉、海渡、高橋先生だ。

……………何この無理ゲー。

「さーて、一掃するよ!」

どうやら腕輪の能力を使うようで、召喚獣が手を前に構えていた。

その掌が光ったと思ったら、敵が半分ほど消し飛んでいた。

秋音姉の腕輪の腕輪『電撃』。

その名の通り前方に一直線に電撃を放つのだが、量が多く、範囲も広めなので、かわしにくい。

さらに、攻撃の瞬間光を放つので、一瞬視界が潰される。

ちなみにガード不可で、貫通する。

弱点といえば燃費が悪く、一回の使用に70点ほど必要とすること

だ。

「連続十連射！」

その高い燃費を気にせず、連続で打ち続け敵を一掃した。

残っているのは、後ろの方にいた召喚をしていなかった者だけだ。

「それじゃ、私は帰るね！バイバーイ」

点数をある程度消費したからか、そういい残して秋音姉はすたころと去っていった。

さっきまで秋音姉がフィールドを展開していたので、今度は高橋先生がフィールドを展開し直す。

「「「「試獣召喚」」」」

僕、行平、メープル、海渡、高橋先生が試験召喚獣を呼び出す。

「くそっ！駄目だ！圧倒的すぎる！」

「援護はまだか！？」

はっきり言ってBクラス程度の戦力では、僕達に太刀打ちできない。

一人、また一人と相手の数が減っていく。

昨日と違い、仲間が強い人なので僕の攻撃に巻き込まれることがな

いので、存分に攻撃できる。

クローで右フックをして、その勢いのまま左足で後ろ回し蹴り。正面を向く際に、肘のブレードで薙払う。

これだけで10人近くが死亡。

さて、次の獲物は誰かな？

誰に攻撃しようか物色していると、待ち望んでいた敵が来た。

「待たせたな！ Bクラス！ 援軍として、 Fクラスと Aクラスが参戦しに来てやったぞ！」

『うおおおおおおっ！！』

さて、雄二に Aクラスも加わったようだが関係ない。

メーブルと行平までいるんだ。速攻で切り刻んでやる。

第四十二問　デンキウナギは人間の喉にあたる部分に肛門がある　（後書き）

閲覧ありがとうございます。

感想、ご意見、誤字脱字報告等よろしくお願いします。

第四十三問く地下水脈にはメクラゲンゴロウが生息しているく（前書き）

サブタイトルく

開発などにより、地下水が枯渇している地域もある上に、地下であるため調査が難しいので、絶滅危惧種です。

第四十三問く地下水脈にはメクラゲンゴロウが生息しているく

第四十三問

「悪いがここは通らせてもらうぜ！行くぞー起動っ！」

雄二の掛け声を受け、白金の腕輪が起動する。

雄二の腕輪の能力はフィールド作成。つまり、

「干渉ですか……！やってくれましたね坂本君……！」

「行くぞムツツリーニ！」

「……………任せろっ！」

異なるフィールドが同じ場所に展開されると、双方の効果が打ち消される。

僕と行平の腕輪なら、干渉を起こさずに相手のフィールドのみを消滅させるが、雄二の腕輪がこういうことに使えるのは、僕達とは違った利点だろう。

召喚獣がいない状態では、高橋先生は生身の女性。脇を通り抜けるのは楽だ。

僕が止めることもできるのだが、ここはあえて通らせておく。

『坂本たちに続けーっ！』

「起動っ！」

他の男子も雄二たちに続こうとしたが、それを僕が腕輪を使いフィールドを展開して防ぐ。

『試獣召喚！』

『Fクラス 七伏博人
生物 941点

&
Aクラス 七伏行平
生物 511点

&
Aクラス 佐藤楓
生物 520点

&
Dクラス 浅井海渡
生物 401点

&
学年主任 高橋洋子
生物 674点』

さすがに高橋先生でも、僕の生物には勝てないようだ。

まあ、唯一物理干渉ができるので、後ろで待機してもらおう。

「さて、速攻でつぶすよ！」

「ええ、了解です。打ち抜いて差し上げましょう！」

「撲殺と斬殺と毒死。どれがいいですか？」

「ネギの切れ味見せてやる！」

まずは僕がスピードを生かして突っ込む。

戦闘に展開しているFクラスの集団に、両手を頭上で合わせて、回転しながらクローで突っ込む。

「ドリルラ○ナー！」

直線で前に攻撃したので、それほど被害は出ていないが、相手集団の中心に入ることができた。

今度は広範囲に攻撃するため、クローを軸として鉤爪のついた足を広げて回転する。

普通なら攻撃に隙間ができてしまうが、黄金の腕輪の能力で、それをカバーしている。

相手の中心で回転していても、一度は被害が出てその後ただ回転しているだけになってしまうが、今はこれでいい。

回転する僕に向かって、行平が銃弾を放つ。もちろん僕の召喚獣の本体には当たらず、それは様々な方向に弾かれていく。

弾かれた弾丸は、周囲の敵を貫いていく。

さて、そろそろ回転が止まるので、軸としていたクローでいったん飛び上がり、メーブルの盾の上に着地する。

囲まれた状態での攻撃停止は自殺行為だからね。

そして、僕と入れ違いになる形で海渡が突っ込んでいく。

僕のように全方位攻撃はできないので、一人ずつ狙って切り裂いている。

海渡が堅実に敵の数を減らしている時に、相手側にも動きがあった。

「吹き飛べっ！……よし、次………ってうおい！危ねえ！」

敵の陰から強烈な攻撃をしてきたのは学年次席久保利光。一番厄介な敵だ。

「いったん下がれ、海渡！」

「すまん！」

久保君はまずこちらの戦力を減らすために、海渡を倒したかったようだ。

「行くぞ！久保君！」

第四十四問　〜 蠅を食べるシャクトリムシがいる　〜 (前書き)

サブタイトル　〜

ハワイに生息しています。

第四十四問く蠅を食べるシャクトリムシがいるく

第四十四問

久保君の召喚獣のもとへダッシュし、フェイントも何もなく一撃を放つが、案の定防がれる。

「甘い！」

すかさず反撃してくるが、軽く受け流してその勢いを利用して思いっ切りカチ上げる。

武器の根元部分でかろうじて防がれたが、相手は今宙に浮いている。

「見せどころをありがとうございます」

空中で動けない相手に対して、容赦なく行平の銃弾が襲っていった。

『Aクラス 久保利光

生物 0点』

意外とあっけなく終わったな。

でもまあ、敵の大將が沈んだ今、士氣もこちらの方が有利だ。

「来い！サムライアリ！」

点数を百点ほど消費して、サムライアリを10体呼び出す。

サムライアリは、クロヤマアリなどの巣を襲撃して、奴隷として働かせることで知られている。

他のアリに比べてアゴが鎌状に長いので、戦闘には向いている。

「行くぞ！」

僕の『昆虫召喚』で呼び出した昆虫は全部僕が操作するので、その分召喚獣の動きが鈍るのだが、たった10程度では問題ない。

サムライアリの群れとともに虐殺していたが、周りを囲まれそうになったので、華麗にジャンプして退く。

シュタツ ザシュ

『学年主任 高橋洋子

生物 0点』

.....あれ？

さっき何が起きたんだろう。

・僕の召喚獣がジャンプした勢いを殺すために右手を地面についた。

・左手は後ろに振り切っていた。

・振り切った左手で攻撃追加が発動。

・真後ろの高橋先生が斬殺される。

OK理解できた。

『……………全員突っ込めええっ！』

『理想郷！理想郷！理想郷！理想郷！』

先生の召喚獣がないので、こいつらを止めるすべはないが、少しでもと生身で意識を刈っていく。

『佐藤さん！今すぐ風呂に入っぎやあああああああああ！』

メープルになんてこと言ってるんだろうね？

『みぎやああああああ！ごめグヘッ！んなゴフッ！さぎやあああ
あ！！！』

全くうるさいなあ。

「さっすが私のナイト様っす！」

メープルがいい機会だと言わんばかりに抱きついてくる。

ふう……………ってしまった！何落ち着いているんだ僕は。

「離してよ、メープル」

「落ち着いてたのにつすか？」

それを言われると痛い。

しかしまあ、覗きの迎撃は失敗したが今日に限っては問題ないだろう。

『割に合わねえーっっ!!』

現在風呂に入っているのは学園長。まさに地獄だ。

処分通知文月学園第二学年

Aクラス七伏行平

Dクラス浅井海渡

Fクラス木下秀吉、七伏博人、吉井明久
を除く男子生徒

総勢144名

上記の者たち全員を
一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

僕とFFFと大激突（前書き）

今回は時間軸的には三巻の前です。

僕とFFFと大激突

僕とFFFと大激突

『『『もう我慢ならねえ……………!!』』』

愚者達は立ち上がった。

『これ見よがしにイチャイチャしやがって……………!!』

『学校の風紀を乱すヤツは死あるのみ!』

『キキキクククケケケケケケケ!!!!』

己の私怨のために。

『『『待っている!七伏博人!』』』

そして、愚者達と昆虫少年は激突する。

「ふう〜〜今日の授業は終了〜」

授業が終わり、残るはHRのみ。いや〜早く帰りたいなあ。

ガラッ

「お前ら席に着け。H Rを始める」

（以下省略）

さて、終わったことだし帰ろう。

「博人、ちょっと良いか？」

「どうしたの？雄二。ここで話すのも何だから、廊下に出ようか」

「…………チッ、鋭いな。皆！予定が早まった！祭りの時間だ！」

『Y e a r ! L e t ' s p a r t y ! 』

やはり何か不穏なことがあったか。

だがもう教室を出るところだ。後はそのまま帰宅すればいい。

と、余裕を持っていたところで、気がついた。

教室の中心に飴が一袋……………

重要度

危険（弱）＞飴一袋

そんなものにつられるわけが……

ドサッ × 4

重要度

危険（弱）＜飴五袋

くそおおおお！！

『よし、袋にしてやるぞ！』

『不純異性交遊の罪、ゆるすべからず！』

くそっ、囲まれた！こうなったら徹底抗戦だ！

「僕と敵対したこと自体が死亡フラグだとおもいしらせてやる」

まずはこのままでは数で押されるので、出口付近の敵を投げ飛ばす。

そのまま一旦教室外へ。

「学校の出入り口を封鎖だ！残りの部隊は追跡しろ！絶対に一人になるな！」

雄二が的確な指示をとばしてくる。

明久は参加していないので、制裁目標は坂本雄二とその他。
ミッションを開始する！

『さっき影が見えたぞ！』

『この近くにいるはずだ!』

敵人数は四人。この程度は楽勝だ。

まず、自分の反対側に飴玉を一個投げる。

『敵か!?』

反応したところを、縄で素早く四人まとめて縛り上げ、行動不能にする。

これで残りはだいたい四十人程度だ。

このままだと帰るのが遅くなるから、連絡入れておこう。

………ポチポチツとな。

よし、送信完了。

それじゃあミッション再開だ。

次の目標を確認。

『B部隊と連絡が取れなくなった。一瞬たりとも気を緩めるな!』

気を緩めようが緩めまいが関係ない。おまえたちに待つの^補はただ地獄^習だけだ。

今度は飴玉ではなく、小さめの爆竹を投げる。

パンツ

すぐ近くで大きい音がして、怯んだところを次々と捕縛していく。

……よし、ここは殲滅完了だ。

そのまま次なる獲物を求めて徘徊する。

僕とFFFと大激突？

僕とFFFと大激突2

敵の約四分の一を倒したので、校門の封鎖に二十人程度使っている
とすると、残る実働部隊は10人だ。

『くそつどこに隠れていやがる……………？』

『ダンボールを手当たり次第探せ！』

別に僕は蛇ではないぞ。

でもまあ、ターゲット発見。数は5だ。

『どこだ……………？』

『ブチコロブチコロブチコロブチコロ』

しまった！後方からも敵部隊確認。挟み撃ちだ……………

幸い、敵には気づかれていないので、前方の敵に攻撃をしかけ、活
路を開く！

腰に差してある捕虫網の柄を最大まで伸ばし、ダッシュで突っ込ん

でいく。

『いたぞ！七伏だ！』

「遅い！」

打突を食らわせ、バランスを崩したところを蹴り倒す。

声に反応してこっちに向いた二人目も、跳び蹴りで撃墜。

そのまま走り抜けていく。

『追え！追うんだ！』

こっからは持久走だ。へばったところを一網打尽にしてやる。

「ハク」。追われてるんすよね？」

僕を待っていたのか、廊下に立っていたメーブルも合流して一緒についてきた。

「うん。そうなんだけど」

「今すぐ後ろのを止める方法があるっす」

「どんな作成？」

「説明している暇はないっす。すぐに実行！」

しょうがない、やってみよう。

一番近い空き教室に入る。

その中央間でいくと、メイプルが向かい合ってきた。

僕のネクタイを引っ張って、引き寄せてキスをしてきた。

『『『追い詰め……………失礼しました』』』』

僕達の姿を確認すると同時に、気まずそうに去っていった。

その後記憶を消すため全員仕留めたのは言うまでもない。

「くっそ……………博人の野郎本気で殴りやがって…………」

「……………雄二、お仕置き」

「は？待て、話が見えないんだが」

「……………問答無用」

「博人の野郎、なんてことしやぎゃあああああああああ！」

「さて、ハク。助けてもらった人に何かする事があるんじゃない？」

「あ、うん。ありがとうメイプル」

「……………それだけ？」

「うん？そうだけど」

「キスとかもつと甘あい感じのないの？」

「ないです」

「じゃあ、恩人からの命令。動かないで」

「……………ハイ」

「それでは失礼して……………むぎゅ〜♪」

ほっ……………今回は抱きついてくるだけのようだ。

「ハクってホント柔らかくてスベスベだよねっ！」

その評価は男子として喜んで良いのだろうか？

というかこんなことやってるから恨まれるんじゃないかな？

……………でもまあ、メイプルの体温を感じていられるのだから、襲撃には目を瞑ろう。

僕とFFFと大激突？（後書き）

感想、誤字報告等、またはお気に入りをお願いします！

第四十五問くミズグモは水中に巣をつくって暮らすく(前書き)

今回から原作四巻の内容になります。

第四十五問　ミズグモは水中に巣をつくって暮らす

第四十五問

今日から覗きに参加した男子生徒の停学が明ける。

そんな日の朝に、ある連絡があった。

「ああ、そういえば今日からAクラスの稲垣が復帰だな」

この情報が後の波乱の伏線だった。

そんなSHRも終わり、やっとFクラス全員揃っての授業が始まる
かと思ったが、

一人、見慣れない来訪者が来ていた。

「やあ、明久。久しぶりだね？五年ぶりかな？」

「え……………？もしかして歌美？」

「うん、明久の幼なじみの稲垣歌美だね？」

ということは今朝言っていたのが彼女か。

「いつ戻ってきてたの？」

「4月からこっちに来ただけどね？ちょっと入院しなくちゃいけなくてね。久しぶりに会う幼なじみに元気な姿で会いたいと思ってね？こうしてサプライズしたわけだね」

「そっか……お帰り、歌美」

「ただいまだね？明久。それと約束、果たしてもらえるかな？」

「約束？ええと……」

「明久だから忘れているかもと予想したけどね？じゃあ、思い出すヒントだよ？」

彼女――稲垣歌美は明久にそっと近寄って軽くキスをした。

「さて、そろそろ授業開始だね？ここらで失礼するよ？」

なんというか、喋り方が独特だな。

でもまあ、今気にするのは――

「明久君、ということデスカ？」

「アゝキゝゝ！！！」

『諸君。ここはどこだ？』

『』『最後の審判を下す法廷だ！』『』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しい、これより――二一F異端審問会を開催する！』

明久の生命だ。

「歌美とは、小学校の時から幼なじみで、五年前に引っ越したんだ」

明久を救出し、敵に見つからないような場所で事情聴取を行っている。

「それで？約束って？」

「実は……歌美と別れる時に告白されたみたいなんだ」
みたいってなんだ。みたいって。

そんな僕の様子に気づいたのか、明久が説明してきた。

「実はそのすぐ後に姉さんから折檻を受けて、記憶が飛んでたんだ

「……………」

「それをさっきのキスで思い出したと？」

「うん……………」

しかし告白と約束がどう繋がるんだ？ある程度の予測はできたが、本人から聞いてみないとどうしようもない。

「告白された時に、次に会ったときに返事してほしいって言われたんだ。それが、僕たちの約束」

ふむふむ……………ところで……………

「キスで思い出したってことは約束の時もキスしたの？」

「なっ！？どうしてそれを！」

「予測だ」

だけど、今重要なのはキスの話じゃない。

「それで？明久はどう返事するの？」

「うっ……………」

「確か彼女、入院してたんだってね。それを乗り越えて明久に会いに来たんだから……………きっちり返事した方が良いよ」

それが彼女に対する最良の選択だ。

「でも、僕なんかじゃ歌美と釣り合わないよ……………」

「そんなことはどうでも良いんだよ。ただ、彼女が好きなら想いを伝えて彼女にふさわしいと思えるような人間になればいい。今明久が気にするのは自分自身の彼女に対する想いだ」

実際、明久はやればできる人間だ。目標さえあれば、大いに伸びるだろう。

「博人、それから明久。ちょっと良いか？」

二人で真剣に話し合っていると、こちらも真剣な様子の雄二が声を掛けてきた。

……………なにか面倒なことが起きたようだね。

第四十六問く歯が一本もなく、卵だけを食べる蛇がいるく（前書き）

今回は短めです。

第四十六問　歯が一本もなく、卵だけを食べる蛇がいる

第四十六問

「何？また何かトラブル？」

「……………（コクリ）」

「ああ。おまえのせいで面倒なことになりそうだ」

面倒なことか……………

「それで、面倒なことって？」

「……………Bクラスで試召戦争を始めようとする動きがある」

「試召戦争？Bクラスが？」

なるほど、けっこう面倒だ。

「でも、Bクラスが試召戦争しても僕たちには関係ないでしょ？」

明久の言うとおり、ふつうに考えればそうだ。

「明久、雄二がわざわざ面倒なことになったっていったんだよ？」

「Bクラスの狙いはFクラスだ。明久」

「どうしてBクラスがFクラスに？」

Bクラスよりも下位のクラスである僕たちと戦っても、通常ならば得るものはないはずだ。

「簡単に言えば、逆恨みだ」

「逆恨み？」

なるほど、納得の理由だ。

「この前の覗き騒ぎで、Fクラスがもつとも処分されていない男子が多いから、じゃないかな？」

「その通りだ。幸いBクラスも今は点数補充中だし、システムのメンテナンスで明日まで試召戦争はできない。今日なんとかできれば、宣戦布告はされないはずだ」

さすがに今日攻め込まれることになったら危なかっただろうが、1日あるならまだなんとかかなりそうだ。

「雄二、逆恨みと言っても男子が中心だろう？ Bクラス的女子はどんな動きをしているんだ？」

「Bクラス的女子は開戦には否定的だ。男子を説得しようとしているが、代表が根本だけに効果はあまりないようだ」

ふむ、これは良い情報だな。士気の低い女子はあまり参加しないだ

ろうから、Bクラスの男子約二十五人を倒せば終戦させられるわけだ。Bクラスレベルの二十五人なら、下手をしなればいけないはずだ。

「今日は覗きの点数を補充するために先生が駆り出されているから、ほとんど自習だ。これを利用して開戦を阻止するぞ」

「「「了解っ!」「」」」

とは言ったものの、どうするかなあ……………

うーん……………まずはBクラス的女子に話をつけてくるか。

でも、今は休み時間じゃない。適当に時間を潰すしかないな。

こんな時は、暇つぶしに本でも読もう。

え? もちろん常備してるポケット図鑑ですがなにか?

いや、図鑑を読むのも結構楽しいからね。

読んでいると気分が良くなってくるし。

さて、だいぶ読んだしそろそろ時間かな。

第四十七問くハツチョウトンボは一円玉サイズく

第四十七問

「こんな時間に話なんて悪いね。岩下さん」

「大丈夫よ。で、用件はいつたい？」

呼び出したのは岩下菊子さん。去年からけっこう話したりする。

「BクラスでFクラスに戦争しようとしている動きがある」

「それは知っているわ」

「男子は開戦派だけど、女子は否開戦派。そこで、僕たちは戦争を平和的に終了させるために、君たちに協力してもらいたい」

「内容は？」

「まず、Bクラス男子を殲滅する。その後、協定を結び終戦という流れにしたい。だから、お願いしたいのは協定を結ぶのと、あまり戦線にでないこと」

「……………わかったわ、みんなに話してみる」

交渉成功。いやー良かった良かった。

「ありがとう」

「別に良いわよ。私たちの為でもあるんだから」

さて次はどう活動するか……………

この後の動きは、一応代表である雄二に聞いておこう。

「雄二く B クラスの女子とは交渉おわったぞ」

「良くやった。ところで博人、B クラスレベルの相手なら、最低で何人倒せる？」

ふむ、代表としてまずは戦力を分析しているのか……

B クラスレベル相手なら何人だろう……………？

「最低で三十人かな」

最悪の状況ならそのぐらいだと思う。

「いったいどんな状況を想定しての最低だ？」

「教室内での五十対一」

狭い場所だと少し戦いにくい。それゆえ最悪の状況だ。

「一人ずつならどれくらいだ？」

Bクラス相手に一人ずつ……それなら、

「百人は軽くいけるけど」

だって無傷で勝てるし。

「そうか。それならBクラス戦で負けることはなさそうだ……だが、相手は根本だ。十分気をつけてくれ」

「わかってるよ。というか僕を封じる方法なんてどんなんがあるんだろうね？」

人質程度じゃ軽く見捨てられるし、普通の人間に襲われたところで返り討ちにできる。

メーブルを捕まえれば僕も本気で相手してあげるけど、メーブルは小さい頃から我が家の父上殿と関わって、いらん対人技術なんかを教え込まれているし、それに高い身体能力もプラスされているから、簡単に捕まえるのは不可能だ。

行平はまったく問題ない。むしろ相手さんご愁傷様です。

カチカチカチカチと……………

一応メーブルに気をつけるようメール送ったから、これで万全だ。

メーブルが危険な目にあうのは嫌だからね。

さて、次はどうしよっかな？

とりあえず指示が無い以上、動く必要はないだろう。

やっておいた方が良くないし……

まだ休み時間でもないのであまり大々的に行動できないし……

あ、自習の課題は終わらせただけ？

まあ、ひとまずは戦争のため、フィールドを作り召喚獣を動かす。

動作の確認や素振りをして、時間を潰す。

単純作業は時間が過ぎるのが早くていいなあ……

第四十七問　ハツチヨウトンボは一円玉サイズ　（後書き）

夏休みのはずなのに、学校があります。

こんなの夏休みじゃない……午前潰れるとか宿題が早く終わらないか……

第四十八問くナナフシは雌だけで増えるく

第四十八問

昼休み。

現在、Bクラスの連中にFクラスが何も気づいていないことを示すために、明久たちと散歩中だ。

Fクラスが戦争の準備を始めたら即宣戦布告してくるからね。

「うろつくってただフラフラ歩き回っていればいいの？」

一応今は休み時間だから、不自然なところはないが、あまりに露骨すぎるのもねえ……………

「確かにただフラついてるだけっていうのもつまらんな。何かゲームでもするか？」

「ん。オツケー」

「いいね、やろうやろう」

少なくともただ歩いているより良いだろう。

「んじゃ、英単語クイズでもやるか。英単語を言うから、その意味を答えるんだ。五問のうち一問でも答えられなかったら負けだ」

英単語クイズは、明久には勝ち目がない気がするなあ……………

まあ、なにも賭けていないから問題ないだろう。

「ん。オッケー。ドンと来い」

「よし。それじゃ、罰ゲームは『負けたヤツが勝ったヤツの言うことを何でも聞く』だ。行くぞ」

「え!?!」

何か最後に付け加えられたな……

「ちょ、ちょっと雄二!?!」

そう慌てることでもないだろうに。雄二じゃなくて僕が勝つんだから。

”Astronaut”

アストロノート。

けっこうわかりやすい単語だな。

でも明久は答えられるだろうか……………?

「明久、なんだかわかってる？」

「勿論わかるとも」

あ、わかってないな。

こう自信がありそうなときは大抵珍解答だ。

「じゃあ先に答えて良いよ」

解答を促す僕に、明久は焦らすように答えてきた。

「道路によく使われているアレだよね？」

「俺の勝ちだな」

バカにしたような雄二の勝利宣言だが、まあ当然のことだ。

「どうして最後まで聞かずにそんなことが言えるのさ！勝負は最後までわからないはずだよ！」

「明久、答えは”宇宙飛行士”なんだけど、道路のどこに使うんだい？」

「博人は正解だ」

「……………ケアレスミス、か……………」

「一度辞書でケアレスミスの意味を調べてくれば？」

明らかに注意を損なうようそはなかったはずだ。

「でも、負けは負けか……。認めるよ雄二」

ツッコミ街か？ どう考えてそういう態度ができるんだとかツッコんでほしいのか？

「今度は霧島さんか楓さんの番だね」

「……頑張る」

「戦略的撤退！」

「逃がさないっす♪」

なぜだ……。試召戦争で忙しいから今日は別々でお昼食べたから、居場所はわからないはずなのに…………

「ぶっ！？ しょ、翔子！ いつの間に！？」

反応が遅いぞ、雄二。僕のあの反応でもこのざまなのに…………

「いつの間にも何も、問題を出し始めたあたりからずっといたじゃないか」

「……雄二が『何でも言うことを聞く』って言ったのが聞こえたから」

「気配消すのつかれたっすよ」

霧島さんがいたのは気づいたが……さすがはメープルだ。

「それじゃ、霧島さんが雄二に。楓さんが博人に出題だね」

「……わかった」

「よくわかってるっすねー明久君」

恨むぞアキヒサア……

第四十九問くオオゴキブリは森に生息く（前書き）

サブタイトルくゴキだからって、家の中だけだと思ふな！というこ
とです。

第四十九問　オオゴキブリは森に生息

第四十九問

「正解すればいいんだ！ドンと来い！メープル」

「きっちり答えてやらあ！」

こうなったら自棄だ。運が良ければ僕が答えられる問題を出してくれるはずだ。

「l l l” Floccinaucinihilipilification”」（↑メープル）

「l l l” betrothed”」（↑霧島さん）

ダッ（身を翻す僕と雄二）

ガッ（その肩を掴んでくる明久とメープル）

「答えられないなら諦めていいなりになるっすよ♪」

なんでこんな長い英単語なんだ！？さては僕に勝たせない気だな！？

「あたりまえっす」

「雄二、どこに行こうとしているのかな？」

「明久、てめえ……！」

お互い詰んだようだな、雄二。

「霧島さん。いきなりトドメっていうのも可哀想だから、問題を変えてあげてよ」

「ハクに猶予はないっすよ」

こうなったら……やるしかない。

「意味は………ない」

「ファイナルアンサー？」

「うん………」

「ハイ残念！」

速い！速すぎる！せめて溜めてほしかった！

「意味がない言葉は”Supercalifragilistic
expialidocious”っす。今回出題したやつの意味
は、【無価値とみなすこと】っす」

あ、確か聞いたことがある。

まあ、負けは負けだ。諦めて帰るとしよう。

「なにちゃっかり逃げようとしているんすか？」

作戦失敗。

「きちんとルールを守ろうとしないハクには罰ゲームプラスっすね」

「はぁ……………で、いったい何を要求するの？」

「人前でそれを聞くっすか…………？」

「え！？ いったい何されんの！？」

激しく不安だ。

「冗談っす。ただ一緒に添い寝してもらっただけっすよ」

そののどこが『ただ』なんだ。

でも、罰ゲームは罰ゲームだからなあ……………認めよう。

『異端者三人を処刑せよ！』

『まとめてヤっちまえ！』

『逃がすなー！』

おや？ FFFのメンバーか。

僕―――メールと添い寝の約束

明久―――稲垣さんのキス

雄二―――霧島さんに負けたため、何か約束事

なるほど、奴らが許さないわけだ。

まあ今回は雄二^{生贄}がいることだし、一人で相手するより楽だろう。

「喰らえ！投げつける！」

雄二をがっしり掴み、FFFに向かって投げる。

「なんてことしやがる！」

「続いてとびひざげり！」

雄二を巻き込みつつFFFに攻撃する。

「博人おおおおおっ！ゴフッ」

僕に攻撃しようと突っ込んできた雄二に明久が一撃入れていた。

これで僕&明久VS雄二VSFFFとなった。

雄二の圧倒的不利。このまま雄二を沈めてFFFに差し出せば、僕たちに被害はない。

と思っていたら、いきなり首根っこ掴まれて

「博人、明久君、戦略的撤退っす！」

メープルに引きずられていった。

まあ、確かにあの場を雄二に押し付けるのは戦略的撤退だけどさ。

ちなみにメープルになぜ僕を引きずっていったのか聞いたら、『ハクが目の前の私を見てくれないからっす』といていた。

つい抱きしめそうになったのは仕方がない。

第五十問く日本産で毒をもつクモは一種類のみく（前書き）

サブタイトルく

カバキコマチグモというクモです。

まあ、現在は外来種で有毒のやつが入ってきているので、毒グモの危険は増えました。

第五十問く日本産で毒をもつくモは一種類のみく

第五十問

「ぜえ……ぜえ……やつと撒いたぜ……」

次の行動のため、教室で待っていると雄二が息を切らしてやってきた。

「おつー」

「だいたいテメエのせいで……」

労いの言葉をかけてあげたんだから、喜べばいいのに。

「で？ 次の行動は？」

「スルーかよ……まあいい、ムツツリーニは戻ってきているか」

「今戻ってきたね」

教室内を見回していると、タイミングよくムツツリーニが入ってくるのが見えた。

「お、戻ってきたか。偽情報はどうだムツツリーニ」

「……………首尾は上々」

この淡々とした受け答え。プロだな……………

「……………それで、次の仕事は？」

「ああ。今姫路が戻ってくる。そうしたら次の行動に移ろう」

？姫路さんに何か依頼してたのかな？

「そういえば、わざわざ手料理なんて作ってもらってどうするのさ」

そんな悪魔の儀式を依頼していたのか……………恐るべし。

「姫路の料理は暗殺用の武器だ」

納得できる使い道だね。

「暗殺用？誰を？」

「Bクラスの奴だ」

「つまり、流した偽情報に釣られてきたBクラスの使者を暗殺するんですよ？」

そのBクラスの使者がせめて楽に逝けるよう心の底から願おう。

「それから博人、お前に指示がある」

「なに？」

「今はBクラスと戦うのを先延ばしにするため動いているが、正直開戦を防ぐのは難しい。開戦したら、Fクラスの戦力はお前、姫路、明久、島田、秀吉のみだ。その中でもお前は主力で、お前によってFクラスの明暗がかかっているといっても過言ではない。だから、お前は明日のために今日はもう動くな。その代わり、Fクラスの連中を説得して、少しでもテストを受けさせろ」

「了解、できる限り頑張る」

「ああ、俺たちも全力を尽くす」

「そう、じゃあ疑って待ってるからね」

疑って待っている。その意味を雄二は理解してくれている。

『成功するか成功しないかは現時点ではわからないし僕はどちらの可能性も捨てられない。だから、変わる^{結果}ことのない事実を示せ』

僕は信じるという言葉はあまり好かない。

信じることは多くの可能性を切り捨てる、いわば一本道。

それに対して、疑うことは無限の可能性を受け入れること。一本道に対し、木のように広がっていく。

それが僕の疑う理由。

知を望み、手に入れ、事実を知るための手段。

確かに他の人とは変わっているだろう。

でも、それは僕が思想を変える理由にはならない。

大衆が正しいとは限らない。

そもそも善と悪、その判断をするのは僕だ。

まあ、信頼と信じることは別だ。

信頼はその人の今までの行動の考察からなる。

考察はいつでも変えられるものだが、そのキッカケがなければ信頼したままだ。

ゆえにメープルは信頼できるし、そのほかの人とも言わずもがなだ。

メープルが最初に挙げたのは偶然だ。

第五十問く日本産で毒をもつくモは一種類のみく（後書き）

感想よろしくお願いします！

第五十一問くペリカンアンコウは体色が透明に近いく（前書き）

サブタイトルく

透けて中が見えるようです

第五十一問くペリカンアンコウは体色が透明に近いく

第五十一問

「我々Bクラスは、Fクラスに対して宣戦布告を行う！」

翌日、朝のHRの時間にBクラスの使者が宣戦布告をしてきた。

ちなみに添い寝は試召戦争があるので延期してもらった。

放課後も活動していた雄二達の努力も、実を結べなかったようだ。

ここまでは問題ないが、一つ困ったことがある。

「……………（ボーツ）」

放心状態の明久だ。

「明久、どうした？」

「……………（ボーツ）」

……………やっちまうか。

ガッ！（明久の足を思いつきり踏みつける音）

「っ……………! (バタバタ)」

やっと気づいたようだ。

「で? 明久、どうしたんだ?」

「謝罪の言葉が一つもないのは気になるけど……………実は、歌美から今日告白の返事をしてほしいってメールが来て……………アドレス教える暇なかったけど……………僕はどうすればいいのかな?」

「アドレスはたぶんメールが教えたんだと思う。なんか気が合うんで、だいぶ仲良くなったらしいし。それは置いといて、明久。君は彼女をどう思っている?」

明久の行動を観察したところ、この質問返答に予測はついている。そして、その後何を言うかも。

「僕は……………歌美のことが好きだ。小学生の時から。でも……………僕みたいな駄目な人間が歌美と一緒に居ていいのかな?」

「明久、僕からのアドバイス、告白は付き合う付き合い合わないの話だけじゃない。自分の考え、決意を言うことも可能だよ」

明久には、今伝えるべきことがあるはずだ。

「それに明久、僕はお前に協力すると言った。自分の足りないものを補いたければ、そのときは相談してみて」

「ありがとう。僕はこの戦争が終わったら、キッチンと思いを伝える。」

それと………ありがとう博人、僕を導いてくれて」

こう面と向かって礼を言われるのも照れるな。

というかそれ死亡フラグじゃないか……？

「どういたしまして。さて、まずは目先の問題から消化しないとね」

「みんな、今からBクラスとの戦争だ。相手は上位のクラス。強敵だ。だが、勝機がないわけじゃない。全力で行くぞ！」

『おおおおおっ！！』

「さて、僕からも話があるよ。今回、敵となるのはBクラスの男子だ。少なくとも、女子は開戦を望んでいなかった。故に、いくら追い詰めても設備の入れ替えまではしない」

僕の話を聞くと、クラスにざわめきが広がる。

「この設備に対する不満があるのはわかる。だが、君たちFFFの皆に聞いてほしい。

君たちが学校の風紀のために活動していることは知っている。

だが、それは今日までにするべきだ。君たちには、人々の^{主に女子}幸せを願う集団になってほしい。

不純な異性交遊が許せないのはわかる。

でも、当人が幸せなら、少しは見逃すべきだ。だから、君たちがやるのはそれに対する制裁ではない。

君たちのやるべきこと！それは、もっと自分を磨き、女子を幸せにする事だ。

君たちにも、思う人が居るだろう。その人を幸せにできるなら、本望ではないか？少なくとも、今の状況に甘んじていれば、それはできない。

皆！そのための布石として、この戦争、絶対負けないぞ！」

『うおおおおおおおおお！！！！！！』

「あ、ちなみに坂本雄二への制裁は今まで通り」

『よっしやあああああ！』

キンコンカンコーン

ちょうど良いところで開戦の合図になった。

「よし！皆事前に話した役割を遂行するんだ！」

『おおおおおっ！！』

……………ふう。これで明久も僕も追われることはなくなった。

明久が付き合い始めたら、大変なことになりそうだからなあ……………

でも、これでクラスがよい方向へと向かってくれたら良きことこの上ないな。

第五十二問く鳥も毒をもちますくく（前書き）

サブタイトルく

ニューギニアの密林などに生息するズグロモリモズです。

第五十二問く鳥も毒をもちますく

第五十二問

開戦から十分。

クラスの戦力の大半をつぎ込み、相手を教室内へ押し込めることに成功した。

ここからは僕の出番だ。

「試獣召喚」

今回は秋音姉の物理フィールドだ。

『Fクラス 七伏博人

物理 796点』

今までFクラスのメンバーで削ったBクラスの人間は3人。

あと22人倒せば良いわけだ。

まず、手頃な相手に肉薄し、首を刈り取る。

黄金の腕輪の『攻撃追加』により、斬撃のエフェクトが広がりさらに二体葬った。

続いて動きが止まってる敵に狙いを付けて、突きを放つ。

そしてその場で腕を広げて回転する。近場にいた敵を五人ほど巻き込み、消した。

「く、くそっ！試獣召喚」

フィールドの召喚獣が減ってきたことによって、焦って召喚獣を呼び出してきた。

呼び出された瞬間に踵落として両断する。

召喚した瞬間は最も隙が大きい。それに気をつけなければいけないのに。

「来い、ハンミョウ」

腕輪の能力『昆虫召喚』を使う。

だが、地上には一向に何も現れない。

それを好機と見たのか、こちらにつつこんでくるヤツがいる。

そしてそのまま――消えた。

「な、なんだ!？」

あれ? わかってないのかな?

「『ハンミョウ』幼虫・成虫ともに肉食性の昆虫だ。そして僕が呼び出したのは、幼虫。その生態は地中に巣穴を掘り、近くを通ったアリなどの昆虫を引きずり込み捕食する」

そして、僕が呼び出したのは五体。相手の有利である人数も、動きを制限されてしまえば効果はない。

相手がハンミョウに気を取られている内に、僕はどんどん敵を狩っていく。

はっきり言って弱すぎる。

「来い、ウチワヤンマ」

さらに腕輪の能力で昆虫を召喚する。

肉食性であり、飛行能力も高いトンボはかなり使いやすい。

空からはウチワヤンマ、地中からはハンミョウ、そして地上は僕。それぞれが攻撃を続け、敵の数を減らしていく。

10……9……8……7……6……5……4……3……2、1

「さて、残るは君だけだ根本君」

「く、くそっ！おいつ、女子ども！こいつをやらないとFクラスと設備交換だぞ！」

「投降の意志なしと見て、撃破」

根本の首が宙を舞う。

「勝者、Fクラス」

「さて、Bクラスの子のみなさん。和平をしましょう」

「ありがとう、七伏君」

「僕たちもBクラスとの戦争で助けられた。お互い様だよ」

「わかったわ。それじゃあ、和平にて今回の戦争は終了」

双方の同意が得られたため、これで終結。

あ、そうだ

「根本君は勝手に処分して良い？」

「もちろん」

即答だった。

「佐藤さんと付き合っていなければ……」

ん？ 岩下さんがなんか言っていたみたいけど？

第五十三問／＼エジプトには黒と灰色のツートンカラーのカラスがいる／＼

第五十三問

さて、次の問題だ。

それはもちろん明久。

今は放課後で、どうやら稲垣さんを屋上に呼んだらしく、僕は陰から見守っている。

「いや／＼どうなるっすかねえ？」

なぜかメイプルもいるけど。

「そ、それじゃあ、僕からの、へ、返事を、するね……」

緊張しすぎだ、明久。

「うん………?」

それにしても稲垣さんはいつも疑問系だな。

「僕は………歌美のことが好きだ。」

でも、今の僕じゃ歌美と付き合うにふさわしい人間だとは思えない。だから、頑張って努力して歌美にふさわしい人間になるから、もう少し待ってほしい」

「……………明久はやっぱり変わってないね？」

でも、好きって言うてくれて嬉しかった。今ここでそれが聞けただけでも十分、いくらでも待つよ？……………あ、ちょっと待ってくれるかい？やっぱ二学期が終わるまでにキチンと私にふさわしいと思えるようになること。いいね？」

「わかった、約束するよ」

なかなか男前だぞ、明久。

「でも、付き合っていないとはいえ、両思いなんだから過度なスキンシップはいいよね？」

「え？それは……………」

ああ、稲垣さんがなんでメーブルと仲良くなったかわかった気がする。

「そこは絶対受け入れるべきですよ、明久君！」

って何やってんのメーブル！？

「別にスキンシップぐらい普通っす！それに、待たせるんだからそれなりの対価が必要っす」

ほら、こんな風なスキンシップは日常茶飯事っすと僕を引っ張ってぎゅーっと抱きついてきた。

「わかったよ。でも、あんまり他の人がいるところではやめてよ」

明久の了承を聞き、メーブルと稲垣さんはハイタッチしていた。

「あ、うたみんうたみん、このかっこよくて可愛い子が私の恋人っす」

「僕は七伏博人。一応七伏行平の弟であるから、名前で呼んでほしい」

「うん、わかったよ？私は稲垣歌美。名前で呼んでほしいね？」

「さて、それじゃあ帰るっすよハク。今日は添い寝なんすから」

忘れていてくれてたら良かったのにな……………

夜11時20分、ベッドには僕以外にもメーブルがいた。

もちろん僕は端っこに避難している。

そんな僕の手を取って、弄りはじめた。

「ハク……………あんま無理しちゃだめっすよ」

……………！

「700点を超えた力のフィードバック。少なからず疲労しているよね？」

「心配してくれてありがとう。でも、この程度は問題ないよ。まあ、ひとりでAクラスと戦えばひどいことになりそうだけどね」

行平とメープルを相手したら特に。

「まあ、今日はそういうことでもいいけど、本当に無理しないでね」

「大丈夫、僕は自分を優先するからね」

「さて、この話題はここまでで、早く寝よう？」

「おやすみ」

翌朝。

目を明けてみると、肌色が目に入ってきた。

……まさか……

おそるおそる顔を動かしてみると、案の定メーブルの胸に顔を埋める形となっていることがわかった。

がっちりホールドされているので、逃げられそうもない。

それにしてもメーブルのパジャマは不自然なくらいはだけている。

ボタンも半分以上外れているし。

おそろくわざとだろう。

でも、体温が暖かく肌も柔らかいので心地いい。

もうちょっとこのままでもいいかな………？

「……………
(計画通り)
」

第五十四問くカメガエルは水中にはいると溺れ死ぬく

第五十四問

Side 明久く

梅雨前線の影響を受けないこの季節にしては珍しく、午前中に雨が降った日曜日の午後。

僕は遊びに来た歌美と一緒にゲームをしていた。

「よっ！ほっーとっ、と」

「あれ？むむっ？うりゃ？」

本当は先週発売されたボクシングゲームをやると思っていたんだけど、あれは体を動かすから、まだ体力が戻っていない歌美を考慮して某『大乱闘』をやっている。

それにしても歌美の声は可愛いなあ……

ーピンポーン

とそんなときに、甲高い呼び鈴の音が響く。

「ん？宅配便かな？まったく、今いいところなのに……」

「待ってあげるから早く行ったほうがいいんじゃないかな？」

「うん、行ってくる」

仕方がないので、僕は溜息混じりでゲームを一時停止して玄関に出ることにした。

「はい。どちらさまですかー？」

返事をしながら鍵を外し、扉を押し開ける。

少しだけ開いたその隙間からは、熱気と湿気を孕んだ風が流れ込んできた。

一瞬それに顔をしかめながらも、さらにドアを押し開ける。

すると、そこに見えたのは――

「……え？ あれ……？」

目の前にいる人物を確認し、思わず僕は自分の目を疑った。

僕の危険センサーが大音量で鳴り響く。

間違いない。この人は……

「……ね、姉……さん……？」

本来ならここではなく海外にいるべき人の呼称で問いかける。

するとその相手は、

「はい。お久しぶりですね、アキくん」

そう言って、短めに揃えられた髪をわずかに揺らしながら静かに微笑んだ。

「……なぜかバスローブ姿で。」

「なんでバスローブなのさ……っ!？」

この姉の奇行には度肝を抜かれた。

「日本は暑いですね、アキくん」

「今すべきは天候の話じゃない! どうしてバスローブをきているのさ!？」

「アキくん。玄関先でそんな大声を出すなんて……。姉さんはあなたをそんな常識知らずな子に育てた覚えはありませんよ?」

「まさかバスローブで公衆の面前を歩いてくるような人に常識の有無を問われる日がこようとは……。っ!」

絶対僕の方が常識人のはずなのに……!

「それに、人の話は最後まできちんと聞きなさい、とも言っているはずですよ？」

「明久く？何かあったのかな？」

大声を出していたからか、不審に思った歌美が玄関まで来ていた。

ゾクリ

「ーっ！？何だ、この悪寒は？」

「アキくん？姉さんはアキくんが一人暮らしをする時に、二つの条件を出しましたよね。まさかそれを、忘れた、なんて言うつもりじゃないですよね？」

「すっかり忘れてたーっって言ったら、姉さんは怒る？」

忘れてたと言った瞬間姉さんの眉が動いた気がしたので、慌てて後半を付け加える。

今の内だ。今の内に思い出さねば………！

「いいえ。怒りませんよ」

「え？そうなの？」

「はい。怒りません」

「良かった。実は僕、約束あまり覚えてなかったー」

「ですが、代わりにチュウをします」

「――たわけないよねっ！そう、あれだよ！？『ゲームは一日三十分』、？『不純異性交遊の全面禁止』！」

「ええ、その通りです」

ふう……助かった。実の姉と唇が合わさるなんて冗談じゃない。まだ歌美ともししていないのに。

「それでは、懺悔は終わりましたか？」

「え？なんか悪いことした？」

少なくともさっきの約束を破った証拠は見つかって――

「家に女の子を呼ぶなんて、不純異性の現行犯です」

「待った！これにはわけがあるんだ！」

「目をつぶって歯を食いしばりなさい」

「さっき自分で人の話は最後まで聞けって言ってたよね！？」

明らかに理不尽だ。

「話せばわかるから……………」

「問答無用です」

ああ……こんな風に犬養毅が殺されたんだっけ……

「姉さん……遺言いい？」

「せめてもの情けです。聞いてあげましょう」

情けをかけるんだったら殺さないでほしいと言いたいが、今はツツコミよりこのチャンスを生かすことが最優先だ。

「アレはなんだろうね？」

明後日の方向を指差すと疑いもせずそちらを向いてくれる姉さん。

ーボタン。ガチャガチャンッ

その隙について、冷静かつ手際よく扉を閉じて鍵をかけた。

「どうしよう！？歌美？」

「ええー？いきなりすぎてわからないよ？」

とりあえず歌美を連れて部屋に引きこもろう。

籠城している間に姉さんを説得できれば生きていられる！

思いついた案を実行するために、歌美の手を引っ張って連れて行くこととするが、いきなりだったからか歌美が躓いてしまった。

手を握っていたのでそれに引かれ、転んだ体勢は――

僕が歌美に覆い被さっている状態だ。

「はわっ!？」

歌美の顔が赤くなっているけど、可愛いなあ……

ガチャガチャーガチャン

「姉さんも合い鍵をもって――」

終わった。もう逃げられない。

迫り来る姉さんに捕まり、僕の意識は闇へ落ちていった。

第五十五問く光るホタルは原始的く（前書き）

サブタイトルく

光は夜間のみにししか効果がありませんが、匂いは四六時中効果があるので、フェロモンでおびき寄せるホタルの方が進化していると言われています。

第五十五問く光るホタルは原始的く

第五十五問

『私は心の底から明久を愛しています』

『……仕方ありませんね。アキくんがあなたとお付き合いすることを認めましょう』

『ありがとうございます』

『ですが、もちろん不純異性交遊は認めません』

『わかってます。キチンとその辺はわきまえます』

『では、出来の悪い弟ですが、よろしく願います』

『はい、任せてください』

「ううん………？あれ、おはよう歌美」

目を開けると、心配そうにのぞき込んでいた歌美と目があったので、快調を表すため挨拶する。

「ああ、うん。おはようだね？ 明久」

ひとまず大丈夫だと判断したのか、ホッと一息ついてから返事してくれた。

「アキくん、本人から話は聞きましたが、今回のことは私の認める以前の行為として減点300です」

「ちょっといい？」

「はい。なんででしょう？」

「認めたって何を？」

「アキくんと歌美さんがお付き合いすることです」

「減点って何？」

「それは、アキくんが一人暮らしを続行あいても良いかどうかを判断する基準です。最終的に、振り分け試験と期末試験の結果を比べ、プラスであったなら一人暮らしの続行を認めます」

「……減点300って最初からピンチじゃないか」

しょうがない。心苦しいけど、また博人を頼らせてもらおう。

「ちなみに、点数のアップはどうすればいいの？」

「規則正しい生活や良好な学習成績などを提示してください。それによって判断します」

昔の僕だったらここで狼狽えていただろう。しかし、今の僕は違う。吉井明久mk2と呼んでも差し支えないほどだ。

食事、睡眠、学習、起床。どれを見ても標準的で、おかしな点などない。

こんなところでも博人の助言が役に立つなんて……こんど飴を差し入れしておこう。

「ところでアキくん。ここにお土産に買ってきたコーヒーがあります」

B〇SSの缶コーヒーはいつからお土産になったんだろう？

「はい、どうぞ」

ご丁寧にプルトップを引き上げて渡してくる。

「うん。ありがとう」

受け取ろうと手を伸ばすと、なんとなく予想していた通り、わざとらしくよろけて僕にコーヒーをぶちまけようとしてきた。

「あ、すいません。手が滑っー」

「ほいっ」と

すかさず回避行動を取る。余裕よー

「明久、それだけじゃ不十分だよ？」

え？

ガッ（脚払いの音）

ドスッ（姉さんが倒れた僕のマウントを奪う音）

ガシッーバシャ（歌美が僕にこぼそうとしたコーヒーをつかんだけど勢い余って歌美にかかってしまった音）

「ありゃ？」

「ちょっと姉さん！何やってんの！？」

「アキくんの不注意です」

どこをどうとつたらそうなるんだろう。

「仕方ありませんね、アキくんは。歌美さん、そのままではいけませんから、シャワーを浴びてきてください」

「はい、わかりました？」

ごめんね、こんな姉さんに巻き込んで……………

第五十六問　カンタンは故事から名がついた　（前書き）

サブタイトル　邯鄲一炊の夢ということわざが生まれた故事です。
鳴き声がとても美しく夢の中に引き込まれるようであるから、カンタンと名づけられました。

第五十六問くカンタンは故事から名がついたく

第五十六問

シャアアアアア

日本国民は正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し……

チャプ……………

我らと我らの子孫のために風呂の覗きをし、再び戦争の惨禍がおこらないように風呂に突撃……………

「だああああーっ！ー！！！」

理性が！理性がものすごい勢いで削られる！

歌美の服の入った洗濯機を回すという小学生でもできるミッションがこんな罠があるなんて……

歌美がシャワー浴びてる音とかどうしろと！？

はつきり言って拷問だ。

ま、まあなんとか洗濯機は回せたから早く退散しよう。

その後姉さんが着替えを持っていつてくれたんだけど……

「なんでワイシャツだけなのさーっ！っ！」

裸ワイシャツ。まさかこの目で拝める日がこようとは……。

「ああ、心配ありませんよ。アキくん」

「心配しかない状況の中でいったい何が心配ないのさ」

「ちゃんとノーブラですから」

「アウトオオオオオッ！」

なんでこの人は僕の理性を削るようなことをするんだろう？

「できればパンツもない方が良かったのですが……」

良くない。明らかに良くない。

「うう……明久あ……恥ずかしいよお……？」

「グハッ！」

床に座り込んでワイシャツの前を押さえながら涙目で上目遣い……
……だと……？

ハハハ……………良かった……………破壊力がありすぎて僕の足が動かなくなったのが幸いだ。

……………足が動いていたら確実に襲いかかっていただろうから。

「アキくん。早く結婚してください。こんな可愛い義妹がほしいです」

まさか姉さんまで惑わせるとは……………恐るべし。

「姉さん……………写真撮ったら早く着替え用意してあげて」

「写真撮るの！？早く着替えさせてよお……………？」

直視できない！だけどこのままがいい！

パシヤアアアアアアア

姉さんは高速でカメラを連写した後、着替えを取りに行った。

「明久……………この格好変じゃない？」

「変だと言えば変だけど……………似合いすぎてて困る」

「あ……………ありがとう？」

耐えろ、耐えるんだ僕の理性。

（襲っちまえよ、こんなチャンスめったにないぜ？）

出たな僕の中の悪魔。

（ノーブラな上にシャワー浴びたばっかだから少し濡れてて透けるんだぞ？今みないでいつ見るんだ？）

姉さんがいるんだからそんなことできるわけないだろ。

（そうだよ。ヘタレ明久にそんなことできるわけないよ）

上等だ天使、表に出ろ。

（だいたいお前のことが好きなんだ。襲っちまっても合意の上だろ）

歌美とはまだつきあってないじゃないか。

（それはお前の我が儘でそうだったんだろ？向こうはお前を望んでるぞ）

「着替えを持ってきました」

残念だったな悪魔。姉さんが来たからには、襲えるわけがない！

「ところで、どんなの持ってきたの？」

「はい、

ナース服です」

「普通のにしろーっ!!」

「コスプレはもういいですよ……?」

第五十六問　くカンタンは故事から名がついたく（後書き）

感想・指摘等お願いします。

第五十七問く多雪地ではブナの葉の面積が大きいく

第五十七問

「『雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……帰りたいくないんだ』つと。よし。送信送信」

学校に向かいながら雄二にメールを打つ。歌美の家に泊めてもらうわけにはいかないし……主に理性の面で。

本当なら今日は僕の家でボクシングゲームの再戦をする予定だったけど、姉さんが帰ってきているいまはそうはいかない。

このまま家にいたらまた減点もらいそうだし……

是非とも雄二に頼み込んで家に泊めてもらいたい。

メールの送信完了を確認してから携帯電話をポケットにしまう。

なんか雄二が酷い目にあってる気がするけど、まあいいや。

S i d e 博 人

「……………」

「……………」

シュパッ

ガッ

「……………」

「……………」

「どうしたの雄二？なんで僕の腕を掴むのかな？」

「お前こそ、その携帯をどうする気だよ？」

やれやれ……………そんなこともわからないのか……………

「通報するためだよ！」

「まて、誤解だ！」

「ワイシャツとトランクス一枚のヤツが何を言っている！？」

「流石にそれはないっすよ、雄二君」

ほら、隣にいるメーブルも退いてるじゃないか。

カシャ

「さて、この画像を校内にまわしましょうかね」

行平は手際よく雄二の姿を写真に納め、さらに発信しようとしていた。

「これには！これには理由があるんだあっ！」

「わかったわかった。警察署でゆっくり聞いてあげるよ」

「てめえ！俺をなんだと思ってんだ！？」

「変質者」

「否定材料が……………ない」

ほら見たことか。公衆の面前で裸ワイシャツなんて変質者じゃなければ何だと言うんだ。

「翔子だ！翔子にやられたんだ！」

あー、やっぱり？

「だからといってその格好はどうかと思う」

「俺にどうしろと！？」

「早く学校行けば？」

「ちくしょおおおお！！」

おー、涙を流して走り去っていった。

あんな大声出せば注目集めるのに……

「さすが代表っす。あんな面白いことを考えつくなんて」

「少なくとも面白いからあんなことしたんじゃないと思うけど」

ただ単に雄二の裸ワイシャツが見たかったのだろう。

正直その思考は理解できないが。

「……………帰ったら裸ワイシャツやってみるっすかね? (ボソッ

」

あれ?なんか嫌な予感なんだけどいいことのような微妙な予感がする。

第五十八問くカラスの行水は一般的く（前書き）

サブタイトルく

カラスが水浴びをする時間が短いことからできたことわざですが、水浴びは羽根が重くなるので天敵に見つかる大変危険な状態です。なので、どんな鳥でも水浴びは素早くすませるので、カラスが特別早いわけではありません。

第五十八問くカラスの行水は一般的く

第五十八問

「おはよー、って雄二どうしたの？」

おや、明久が登校してきたようだ。

「明久………そういう趣味の人もいるんだ。察してあげて………」

「ごめん雄二………何かつらいことがあるなら、相談に乗るから………」

「そもそもテメエのせいだ明久！ テメエのせいで俺は、下半身超クールビズ仕様で登校する羽目に………！ 死んで償えこのクソ野郎！」

「えええっ！？ いきなりどうしたの！？ 一体何があったのさ！？ 」

「黙れ！ 死ね！ 制服をよこせ！」

見苦しい八つ当たりだなあ………。

『おい、知ってるか？ 坂本の話』

『ああ、裸ワイシャツで登校してきたんだってな。画像が回ってき

てたぞ』

『俺のどこにもまわってきてたぞ……。流石としか言いようがないな……。最近女装は見慣れてきたが、アレには度肝を抜かれたぜ……。』

おお、もう結構写真が広まっているようだ。

流石は行平、仕事が速い。

「あゝ、すみません坂本さん。そういう趣味の人は歌美に悪影響を与えかねないのでちょっと……」

「なんだそのよそよそしい態度！何気に距離とってんじゃねえよ！そもそもお前が送ってきたメールを翔子に見られたせいでズボンを奪われたんだボケ！」

朝はとにかく弄ってたから詳しく聞かなかったが、一体どんな内容が書かれているのだろう？

「明久はどんなメール送ったの？ちょっと読んでみて」

「えーと、雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……。帰りたくないんだ！」

??? いたって普通の頼みごとじゃないか？

「別におかしな点はなかったよね？博人」

「うん。同意」

「朝からお主らは何をやっているのじゃ？」

「聞いてくれ秀吉。実はこのバカがこんな朝早くから公序良俗に反するような発言をしたんだ」

「明久……。お主、朝っぱらから助平なことを言っておったのか？」

「違うよ！僕はそんなムツツリーニみたいな真似はしないよ！」

「……………失礼な」

ムツとしたような声でムツツリーニが返事をしてくる。

噂をすれば影ってやつかな？

「おはようムツツリーニ。どうしたの？随分荷物が多いけど」

ムツツリーニの両手には学校の鞆の他にも、大きな包みや袋を提げていた。

今日は体育がないからジャージではないだろうし……………

「……………ただの枕カバー」

「そのわりには包みが大きすぎる」

「……………そんなことはない」

おなじみの否定のポーズをとってくるが、逆にそれが怪しさを増し

ている。

「ごめんムツツリーニ。ちょっと中身を見せてね」

「……………あ」

明久が大きな荷物が邪魔で動きの鈍いムツツリーニから素早く包みを拝借する。

なにが入っているのだろうか？

そして、中から出てきたのは——等身大の明久うせーラー服ver）がプリントされた白い布。

「…………ムツツリーニ…………何、これ…………？」

「……………ただの抱き枕カバー」

「ただの、じゃないっ！今すぐ抱き枕カバーを回収して、歌美のに換えて持ってきてよ……………あ、ごめん。やっぱいいや」

「ほう？どうしてじゃ？」

「だって…………歌美の許可はないし、何より僕は抱き枕で妥協したくないからね」

おお、なかなか言うようになったね。

僕は抱き枕なんて考えられないからね…………

メーブルに見つかったらその後ずっと添い寝させられる………

第五十九問 くムカデの毒で死ぬこともあるく (前書き)

普通のムカデはさほどではないですが、20cmあまりのナンベイオオムカデは猛毒です。

第五十九問くムカデの毒で死ぬこともあるく

第五十九問

「ところで、先ほどのお主らの話はなんじゃったのかの？」

「あ。えっと、何の話をしてたっけ？」

「俺が明久に裸ワイシャツでの登校を強要された、という話だ」

「明久、お主……」

「誰が雄二のなんか！そんなことするんだったら歌美にもう一回やつてくれるよう頼むよ！」

「……え？裸ワイシャツ見たことあるの？」

「っていうかちょっと危ない状況だな……」。

「まず、このことを歌美がうっかりメーブルに漏らす。」

←「メーブルが裸ワイシャツの実行を決定する。」

←「家に帰ったら実行される。」

←「えらいこっちゃ！」

最悪のパターンだ。

ま、まあ歌美がメーブルに裸ワイシャツの件を話さなければ問題ないはず……………。

「……………明久、その話を詳しく」

流石はムツツリーニ、エロの話への反応が速い。

「まあ、その話は後にしておけムツツリーニ。要するに、明久が送ってきたメールのせいで翔子が何かを勘ぐって、それが原因で俺が酷い目に遭ったって話だ」

「メール？それは今朝の明久の様子がおかしいのと何か関係あるのかの？」

ふむ、確かに今日の明久は……………

「いつもより顔色が良くて、制服がに糊が利いていてパリッとしてるし、寝癖もないね」

「確かにおかしいな。最近顔色はまあまあ良かったから違いはわからんが、制服がきちんとしているのは妙だ」

「……………明久らしくない」

どんどん分析されてるね。これはちょっとまずい状況なのかな？

「たまにはそういう気分の日もあるんだよ！それより、そろそろチ

ヤムが鳴るよ！鉄人がくる前に席に着かないと！んじゃ、そういうことでっ！」

多少強引だけど、話を打ち切って逃げていった。

「「怪しい……」」

あ、そういえば明久のお姉さんが帰ってきてるって秋音姉が言ってたな。

明久のお姉さんと秋音姉は結構仲が良い友人らしいが、変わってる人だって言ってたからなあ…………

その関係かもしれないな。

「さて、それじゃあお昼にしようか明久」

「あ、うん。そうだね……」

近くの卓袱台を合わせ、ご飯を食べられるようにする。

「あれ？珍しいね明久。弁当作ってきたんだ」

いつもならおにぎり数個と買った弁当だったはずだ。

「あーうん、気分だよ気分」

なんかごまかそうしてるみたいだな。

「明久、お姉さんが帰ってきたんだって？（ボソッ）」

耳打ちして話すと、明久は一瞬動揺したが、僕が小声で言ったのを理解してか、同じく小声でかえしてきた。

「そうなんだよね……それで、良好な生活態度を見せないといけな
いんだ………」

なるほどねえ。そういうわけでこんなにしっかりしていたんだ。

「明久君……もしかして歌美ちゃんに作ってもらったんですか？」

おっ、なんか最近ぎこちなかった姫路さんだ。

「いや、自分でつくったんだけど………」

「嘘ですね」

『おい、吉井のやつ稲垣さんに弁当つくってもらったってよ』

『まったく羨ましいやつだな』

『ああ、ちょっとスキシップしてこようぜ』

『ブレーンバスターでいいよな？』

「逃げるぞ明久！」

「了解！」

スキ^{制裁}ンシップは最高でも5人までだが、奴らの攻撃力は半端じゃない。

ここは逃げが吉だ。

第六十問くオウムガイはアンモナイトから進化したわけじゃないく（前書き）

サブタイトルく

似てますが、どちらかというオウムガイがアンモナイトに深海に
追いやられたから生き残っています。

第六十問くオウムガイはアンモナイトから進化したわけじゃないく

第六十問

「博人、どこ行く!？」

「Aクラスを頼ろう!」

「了解!」

Aクラスならメーブルがいるし、さらに行平、歌美もいる。

「失礼します!」

廊下を音をたてずに爆走し、Aクラスまでたどり着いた。

「あれ? ハクどうしたっすか?」

「うん? 明久もどうしたのかい?」

Aクラスの中に入ると、メーブルと歌美が出迎えてくれた。

「ちょっと追われててね……………」

「お疲れっす」

「ああ、ちょうど良いところに。Fクラスにとっては重要そうな情報がありますが、聞きますか?」

重要そうなって言ってるんだから、聞かないわけではないだろうが、まあ様式美というやつだろう。

「もちろん聞く」

「わかりました。試召戦争が今学期中は禁止されるそうですよ」

「理由は？」

僕たちFクラスにとって試召戦争は死活問題だ。

それこそ正当な理由がなければ皆納得しないだろう。

「まずはメンテナンスですね。最強調子が悪いようで、結構頻繁にメンテナンスをしています。最近秋音姉さんの帰りが遅いのもそのためです」

なるほど……でも、それだと――

「メンテナンスって夏休み前に終わる予定だったはず」

「ええ、もちろんそれにも理由があります」

「生徒が試験召喚システムの本質を見失っている――ってこと？」

「その通りです。校舎の破壊や教頭室の爆破、学年全体での覗き、そしてまた試召戦争騒ぎ――学生の本文からはずれている行動が目立ちますからね」

「そういえば文月学園はスポンサーがいて成り立っているんだもんね。ここまで問題行動起こしてちゃ世間からもあまり良い印象はもたれないよね」

おお、明久がちゃんと理解してる。勉強の成果かな？

「まあ、その代わりと言っては何ですが、特別にシステムのリセットをオマケしてくれるそうです」

「それは都合が良いね」

今のFクラスにとってこれほど良い条件はないだろう。

「システムのリセット？」

ああ、明久はこれはよくわからないみたいだ。

まあ、システムのリセットなんてする事は滅多にないし、覚えておくことでもないからね。

「システムのリセットってことは、召喚獣の装備も白紙にもどされるんだよ。つまり、今回のテスト次第で、明久の装備がランクアップするかもしれないってこと」

「おお！よし、勉強頑張ろう！」

「うん、明久が早く私と付き合うためにも、頑張ってるね？」

「ハクは頑張ったらご褒美あげるっす♪」

「よし、今までと同じ位でいいや」

「結果があがってなければオシオキっす」

「全力でやらせていただきます！」

オシオキだったらご褒美のほうがいいや……………

まあ、僕も装備は強くなった方が良いし、今回のテストは頑張ってみるかな？

そういえばメーブルと行平は振り分け試験の時に不調だったから、今回で装備が強くなるんじゃないかな？

うむ……………恐ろしい。

第六十問　〱オウムガイはアンモナイトから進化したわけじゃない〱（後書き）

感想等よろしくお願いします！

第六十一問く武家に役立つクツワムシく（前書き）

サブタイトルく

クツワムシは大きな音で鳴く昆虫ですが、人の気配で鳴り止むので、忍者の侵入を察知したそうです。

第六十一問　武家に役立つクツワムシ

第六十一問

試召戦争お預けの連絡を聞いた後、なんか明久が家宅捜査される流れになって、放課後家まで連行されていたが、歌美もついていったみたいだし大丈夫だろう。

さて……………一応テスト勉強やるかな……………

「ハク、どうっすか？」

ダッ（逃走を試みる音）

ガッ（つかまれて失敗の音）

ダン！（地面に叩き伏せられて馬乗りされる音）

わかっていたさ……………逃走が不可能なことぐらい……………

「まったく、どうして逃げようとしたの？せっかくの裸ワイシャツなのに」

それが原因だよ。

「逃走しようとした罰として、なんかやっちゃいましょうかな？」

「あれは逃走ではない！」

こうなったら僕の巧みな話術で回避してやる！

「へえ……じゃあなんだったの？」

「トイレです」

「……………」

「あ、やっぱりちょっと喉が渴いたんで、甘いものでも飲もうかと」

「……………」

「えーと、ちょっと外の空気を吸ってこようかと」

「……………」

「それじゃあ、えーと、ちょっと待って………メープルが魅力的だったから、つついっ動いちゃったとか？」

「……………私とは逆方向に？」

「うっ！それは……………ごめんなさい！」

「もう良いよ。今日はハクで遊ぶことにしたから」

「うえ？」

今、なんとおっしやいましたか？

「さあて、まずはどうしようかな〜♪」

メープルは馬乗りしたまま顔を近づけてくる。

「それじゃあ最初は……………ふーっ」

「ひゃあっ！」

耳に息をかけられた。耳は弱いのに……………

「やっぱり可愛いなあ……………んじゃ、お次は……………っと」

さらに耳を甘噛みしてきた。

「ひゃうっ！やめて、やめてよお！」

「あーもう！なんでこんな可愛いかなあ？凜々しい時との差が大きいね」

「ふう……………ほら、もう良いでしょ？」

やっと地獄から解放される……………。

「まだだよ。本当の目的は、裸ワイシャツの感想を聞きにきたんだから」

裸ワイシャツの感想……………ねえ……………

「なんというか………目のやり場に困る」

「ほほう？」

あれ？選択肢ミスった？

「どうして女の子の気持ちが理解できないかな」

「え？だって感想言えって言われたし」

「そこは普通褒めるものなの！」

「褒める……とは言っても、メーブルなんだから似合ってるのは当然だし………」

「そこで自然にほめ言葉がでるのに………」

「まあ、よくにあってるんだけど、刺激が強いかなあってことで」

「そう。ところで………触ってみたい？」

「いえ、結構です」

あ、ついうっかり即答しちゃった。

「へえー、そんなに触りたくないんだあ？（怒）」

「イヤイヤ、ソウイウケジャンイデス」

「じゃあ、ほら、触ってみて」

そう言って僕の手を取り、胸まで運ぼうとする。

「いや、ダメだって！」

慌てて手を引っ込めるが、それを逆手に取られてメープルを抱き寄せることになってしまった。

「もう、大胆だなあ」

もう……どうでもいいや………

「さて、遊びはここまでね。それじゃあ勉強頑張ってね」

第六十二問くキノコの形は航空力学に基づくく(前書き)

サブタイトルく

胞子がより遠くに飛びやすいようになっていきます。

第六十二問／＼キノコの形は航空力学に基づく／＼

第六十二問

「……………ということがあったんだ……………」

翌日、明久と僕は昨日起きたことの愚痴を言い合っていた。

明久は家宅捜査され、さらに女子まで家に来たことから不純異性交遊とされて、さらに減点されたそうだった。

現在の合計は－450点。振り分け試験のときの点数は800点程度だったから、目指すは1250点。

ちなみに本来なら－500だったのだが、生活態度が良好だったために50点プラスされたそうだった。

「それじゃあ、放課後雄二でも誘って勉強会やってみるよ」

「僕が力を貸せないばかりに……………すまない」

今日は家の料理当番なので、遅くまでの外出はできないんだ。

「別に良いよ。いつも助けてもらってるんだし」

「うーん、それじゃあ、明日ウチに来ない？行平もいるから世界史のブースターにはちょうど良いだろうし」

「ありがとう。それじゃあ、明日お邪魔するね」

「んじゃ、詳しくはまた後ほど連絡するよ」

さて、今日は勉強よりも趣味に時間を費やそう。

というわけで我が家の飼育室第二の自室にはいる。

この部屋の鍵は自分の部屋と違ってコインでは開けられないので、メーブルは入ってこれないだろう。

……………鍵開けとこうかな？

まあ、それはまず作業が終わってからだ。

去年羽化したヒラタクワガタのハンドペアリングをやっておきたいし……………

アオダイショウにも餌をやっとかないと。

他には……………カラスアゲハはしっかりユズの木を与えたから大丈夫だし……………

とまあ、そんなこんなで一通りの作業は終わった。

鍵を開けて、現在は鑑賞をしている。

「やつほゝハク」

「いらっしゃい、メープル」

「私のためにわざわざ開けてくれるなんて、ハクはそんなに私が好き？」

「……………なぜわざわざ開けたことがわかった？」

「ハハハ何言ってるかよくわからないよ」

「そう……………それじゃあ正直にさせるしかないね？」

「すみません、メープルが入ってこれるように開けました」

ふっ、この驚くほど早い降伏。

はつきり言ってこんなスキル身につけたくなかった。

「そう、それじゃあ、嘘ついた人にはきちんと罰を与えないと」

OK、詰んだぜ兄者。

（ふむ……………諦めましょう）

「……………っ！なんだ！？いま^{兄者}行平の—アドバイスが聞こえたような？」

というかできればこの境地を逃れられる案を出して欲しかった。

「さて、昨日に引き続きどんなこととして遊ぼうかな♪」

めっさ上機嫌だし、メープル。

もう………なすがままで良いや………

第六十三問く湿気を好むサソリもいるく(前書き)

今回は短めです。

第六十三問く湿気を好むサソリもいるく

第六十三問

「「「お邪魔します」「」」

「いらっしゃい」

翌日、明久、歌美、秀吉、雄二、ムッツリーニが家やってきた。

そういえば、メープルが連れてきた愛子もいるな。

「まずはお茶出すからリビングで待ってて」

「「「「はい」「」」」」

というわけで勉強会が始まったわけだ。

まずは明久の世界史を行平が、秀吉の古典をメープルが、ムッツリーニの英語を歌美と愛子が、そして僕は雄二の数学を担当している。

「というわけで秀吉君。用言の活用形は以上っす、わかりましたか？」

「うむ、完璧じゃ」

「それじゃあ、助動詞のマスターをするっす」

「ーーーーということですが、わかりましたか？」

「うん、ここまでわかりやすいなら楽勝だよ」

「そういつただけるとありがたいです」

「これで動名詞の説明は終わりだけど何か質問は？」

「……………ない」

「それじゃあ、次はボクが不定詞の説明をするね」

「いや、雄二に説明は必要ないから出題されそうな問題を解かせるだけですんで楽だよ」

「まあ、このぐらいはできなきゃAクラスなんざ夢のまた夢だからな」

「さて、ご飯ができたよー」

一番手が空いてるということで僕が夕飯を作った。

大人数に合わせて、鍋にしてみました。

……………いえ、決して面倒だからとかじゃないですよ。

ただここらで刺激がほしいかと思って何か良いもんじゃないかなあと思ってキムチ鍋にしたわけだ。

決して鮭や白菜が余ってたからじゃない。

『いただきます』

みんなで席につき、鍋をつつく。

いやゝ、日常ですな。

みんなより早く食べ終わり、先に片付けを始めた。

そうしていると、みんなも食事が終わったのか、会話が聞こえてきた。

『ところでメーちゃんは、博人君のどこが好きになったの？』

『あ、私も気になるかな？』

『ふむ……………難しい質問っすね……………簡単にまとめるなら全部。細かく言うなら心遣いができて、それでいて輝いているところっす』

『『輝いている？』』

『そうっす。ハクは昔から昆虫を追いかけていて、目が輝いていたっす。今と変わらないその光に惹かれたのもあるっすね』

そう言われると、恥ずかしいな……………

『……………惚気やがって……………リア充爆発しろ……………』

っておい男子ども。心の底から憎しみを込めた声を出すな。

第六十四問 実際ティラノサウルスは最大の獣脚類じゃない (前書き)

サブタイトル)

ギガノトサウルス、カルカロドントサウルス、スピノサウルスなどの方が大きく、腕もしっかりしています。

第六十四問 實際ティラノサウルスは最大の獣脚類じゃない

第六十四問

『まあ、好きなところってわけでもないっすけど、イタズラすると慌てたりすることか、私から逃れられないところとか、可愛いっすね』

『でも博人君結構人気あるから不安にならない？』

『あ、それは大丈夫。ハクは責任感強いっすからね。初めてをハクにあげたので、逃げようとは思わないっす』

「さて！そろそろ勉強を始めようか！」

やっと片付けが終わり、公開処刑を中断させる。

「しょうがないっすね。後でハクとデートするのを代償としてやめてあげるっす」

「そのぐらいなら別に良いけど………」

「やった♪」

『……………んんっ！』

おおっと、咳払いされてしまった。

「んじゃあ、今度は教科をかえてみたほうが良いよね？ 明久は一旦世界史をやめて……古典やっという方がいいかもね」

『お邪魔しましたー』

勉強会が終わり、みんな帰っていった。

……………風呂入って寝よう。

そう思い、えらく上機嫌だった行平に先に入る了承をとり、風呂のドアを開ける。

「いらっしやい♪」

なぜ……………メープルが入っている……………？

ここに来たときは電気ついてなかったのに。

というか自宅の入ればいいのに。

わざわざウチで入らなくても……………

というかあれか？ 行平が上機嫌だったのはこれが予想できたからなのか？

「ほら、早く入らないと風邪引くよ」

「いいよ……一旦でるから」

「んじゃ私もすぐ出るから、ちょっとだけ待ってて」

全く……心臓に悪いことしてくるなあ。

風呂場の外に出て待っていると、後ろに軽い衝撃がきた。

「出たよ」

「ん、わかった」

できる限りメールプールの方をみないようにして風呂場に入る。

しかし、まわりこまれてしまった。

「いったい何の用？」

「いや、どうして目を逸らすのかなって」

「最近薄着だから目に悪いんだよ……」

それも一理あるが、やっぱり風呂上がりなのが一番だ。

なんというか……いつも以上に魅力的だ。

「……………ほう……………ハクは風呂上がりがすきなんだ……………」

ハイ、なんかバレた！

しょうがないじゃん！なんか濡れた髪とか色っぽいんだから！

絶対風呂上がったあと迫ってくるよ………

まあ、しょうがないからさっさと風呂に入ろう。

第六十四問 実際ティラノサウルスは最大の獣脚類じゃない（後書き）

どうかお気に入り登録してください！

第六十五問くウナギの血には毒があるらしいく

第六十五問

「おはよう雄二」

「おう、博人か」

はっはっは、能天氣に挨拶なんか返しちゃって。

「雄二、昨日遅くまで女子と一緒に外出してたわけだけど、霧島さんに聞かれたら大変なことになるんじゃない？」

「……………」

おお、『やっちゃった……………』って顔してる。

「大丈夫だ、やましいことは一つもない」

「……………言い訳なら、後で聞く」

おっナイスタイミング。

「なぜ翔子がここに…………？」

「……………優しい人がここに来ると良いことがあるって」

よしっ、ナイスだ行平。

「待て翔子、さっきも言ったとおり……」

「……………うん。言い訳は向こうで聞かせてもらう」

雄二&霧島さん退場。

ミンミンミンミンミン

その直後、メールの通知音が鳴り響いた。

携帯を取り出して確認してみる。

【M e s s a g e F r o m 坂本雄二】

たすてけ

きっと『助けて』って打ちたかったんだろうと思うと、笑いがこみ上げてきた。

隣で一部始終を見ていた明久に見せると、雄二の消えていった方向に敬礼していた。

「勉強スペースがやばくなったね……」

「今日は雄二の家でやる予定だったもんね」

「昨日一昨日で結構できたからしばらく学校でだけにする？」

「うーん……今の状況だともっと点数あげないとキツいんだよね……」

「……吉井」

あ、霧島さんが戻ってきた。

服に赤い斑紋がついているけど、あれはケチャップだろう。

「……勉強に困ってる？」

「あ、うん。そうなんだよ」

「……それなら、私も協力する」

「え？ 協力って？」

「……週末に、皆で私の家に泊まりに来るといい」

皆で泊まりーーつまり、遅くまで勉強できるな。

さらに霧島さんにも教わることができる。

明久にはありがたいことだ。

「いいの、霧島さんっ？」

「（こくり）……吉井にはいつかお礼をしたいと思っていた」

「皆で、ということは僕たちも良いの？」

「……勿論」

それじゃあ、メープルたちも誘ってみよう。

「雄二は参加できるのかな？」

「……大丈夫」

「あ、そうなの？」

「……その頃には、きっと退院してる」

「そっか。それは良かった」

皆でにこやかに頷き合う。

……嫌がらせでお見舞いにカイロ持って行ってやろう。

バカの改革と教育方針（前書き）

今回の話は、少し時間を遡ります。

バカの改革と教育方針

バカの改革と勉強方針

『言ってみたい言葉!』

七伏博人

「気をつけろ、そいつは幻影だ!」

七伏行平

「泣いて許しを請えばいいと思います」

佐藤楓

「すでに私の掌の上だよ」

杉本秋音

「こう、物理的に」

稲垣歌美

「私を幸せにしてね?」

浅井海渡

「あいや、待たれよ!」

テスト期間前、今日もいつもの平穏が訪れるかと思ったのだけど……

「FFを失った俺たちを導いてくれるのはお前しかない！」

となぜか須川君に土下座され、カウンセリング的なことをすることになった。

「まずは須川君。君に特技とか好きなこととかは？」

「料理だ」

「じゃあ、それを伸ばしていったほうが良いと思うよ？まあ、勉強も必要だけど、きっちり基礎やればまあまあとれるから、余った時間で料理を特訓するようにしてみれば？あ、勉強だったらわからないところは教えるよ」

「ありがてえ……導師様、これからは俺のことは気軽に呼び捨てにしてくれ」

「じゃあ、導師様って言うのはやめてよ」

その後も導師様と呼ばれるのを止めさせつつ話を聞いていたら、全員終わらせることができた。

まあ、今回利用したのはポケ○ン理論。

まずは重要な差別化から話をした。

自分と似た能力のものと比べて、優位性を際だたせることだ。

実際、ある程度能力が低くても差別化すればやっていけることもある。

ゲームでは、アンコ持ちとか、Sの高めのやつだ。後は特性と技。

まあ、本来マイナーポケに使うことが多いものだから、低能力のFクラスにはぴったりだ。

長所を伸ばせば面白い集団になるだろう。

実際Aクラスの人間は、エリートと呼んでも差し支えないだろう。

ただ、エリートとじゃ天才と呼ばれる人間の劣化。

伝説が不可だから高種族値で代用するようなものだ。

Fクラスにはそれほどの力はない。なら、特別な強みを伸ばして戦うのみ。

これがAクラスに対するFクラスの差別化だ。

まあ、行平とかメープルはエリートを超えた天才、といっても良いほどの上に、独自の強さがある。

ありゃあどうしようもない。

まあ、それは置いてまずは今回のテストで自信を持たせ、そこから自主的に勉強させる……これが理想の流れだ。

結果――――

一週間で全体がEクラスレベルになりました。

恐ろしい、一週間でEクラスとは……………

さらに、クラスの大半はやりたいこと見つけて生き生きしている。

異端審問会も完全消滅して、クラスで浮いた話がある人がいても『羨ましいぞ、コノヤロー』というノリでじゃれ合って技等をかけているだけだ。

あのドラゴンスクリューは見事だったな……………

とまあそんなわけで良好なクラスになったわけだが、教師は未だに慣れていないようで、この教室に入るたび頬を抓っている。

まだ改革から一週間なので他クラスからの評価はさほど変わっていないが、じきに認識を改めることになるだろう。

そうすれば教室中で華麗な技が見られるんだろうなあ……………

まあ、僕にはほとんど攻撃できないわけだから、関係ない。

バカの改革と教育方針（後書き）

前半のものは気にしないでください。

伏線でも何でもありませんから………たぶん。

第六十六問くアンモナイトは平面だけで巻いてないく（前書き）

サブタイトルく

異常巻きと呼ばれるものはU字型に蛇行したり、サザエのように塔型に巻いていたります。

第六十六問くアンモナイトは平面だけで巻いてないく

第六十六問

問 あなたの方までの異性とのお付き合いや経験について、正直に答えなさい。

七伏博人の答え

『……………恋人に……………襲われました』

佐藤楓の答え

『てへっ♪』

吉井玲のコメント
ノーコメントです。

稲垣歌美の答え

『キスをしました』

吉井玲のコメント
まだつきあっていない状態では、少し行き過ぎな感じもします。

吉井明久の答え
『キスされて裸ワイシャツも見ました』

吉井玲のコメント

左手一本差し出しなさい

吉井明久のコメント

認めてくれたんじゃないの!?

吉井玲のコメント

それとこれとは別問題です。

「……………いらっしやい」

呼び鈴を鳴らしてしばらく待っていると、ドアを開けて霧島さんが出迎えてくれた。

「「「お邪魔します」」」

流石噂に聞いたとおり大きい家だな。

ウチも結構大きい部類に入るが、ここまでの豪邸は始めて見た。

先導してくれる霧島さんの後ろをついていく。

長い廊下には、部屋がいくつもあった。

「ちょっと質問良い？」

「……………何？」

「あの鉄格子はまってる部屋って何に使うの？」

「……雄二の部屋」

なるほど、良かったな雄二。

婿入りの準備はできているぞ。

「……そしてここが、勉強部屋」

しばらく歩いたところで、立ち止まってドアを開ける。

中には誰もいなかったのどうやら僕たちが最初のような。

ちょうど部屋についた時、呼び鈴が再び鳴った。

「……ゆっくりしてて」

そう言って霧島さんは部屋を出て行き、来た道を引き返していった。

「それにしても立派な家ですね」

「ホントね。噂には聞いていたけど、ここまでとは思わなかったな
あ」

「住み込みの家政婦さんとかもいそうだよな」

「まさしく豪邸だね」

「こんだけ広い敷地ならいろいろできるんだろうな」

「七伏邸も庭の面積はそれなりでしょ？」

「敷地面積に対して家は普通だからね……………そのおかげでバタフライガーデンがつくれたんだけど」

「そもそもそれが目的ですからね」

心落ち着く三人（ただし権力が対等とは限らない）で会話していると、霧島さんが来訪者を連れてやってきた。

「やっほー。今日も頑張ろうね」

「うむ、こんにちはじゃ」

「……………今日はよろしく」

やってきたのは、工藤さん、秀吉、ムッツリーニの三人だった。

第六十七問 トゲナナフシ トゲナナフシモドキ (前書き)

サブタイトル

トゲナナフシはトゲのあるナナフシ

もともとナナフシは、節の多い枝に似るということから、七節のもどきとされていて、これが略されずに

トゲのある七節のモドキから、トゲナナフシモドキです。

つまり、モドキは本家と同じです

第六十七問 トゲナナフシ トゲナナフシモドキ

第六十七問

その後もみんな続々来て、残りは明久だけとなった。

その明久もさっき呼び鈴がなったので到着したようだ。

少したって明久が来るが、今はそのことを気にしている暇はない。

「だから、恩恵が多い雨パが良いっすよ！」

「いいえ、相手を削りつつ耐久もあがる砂ですよ」

「Sに振らない分耐久に振れて、高速高火力高耐久が実現できるトリパだよ」

『……………』

「仕方がないっすね。こうなったらハクを懐柔するしかないっす」

っ！つくづく卑怯な……………！

しかし、簡単に屈するものか。

徹底的に抗戦してやる！

「さあて、どんな方法で誘惑するっすかねえ？」

.....。

「まずは、むぎゅーっ」と

.....やーらかい.....。

「続いてちよつと位置を変えて.....」

.....良い匂い.....。

「じゃあ最後に.....ちゅっ」

.....ふぁ.....。

「さて、雨パはどうか？良いところたくさんあるよね？」

「と、トリパが一番なのは変わらないけど、すいすいの速さとか技の強化とか認めても良いかなって思っても良いけど。別に、メーブルの説得に応じたわけじゃないからねっ！」

メーブルがそこまで言うので、ちよつと見直してあげただけだ。

決しているいろいろ気持ち良かったとか、メーブルの誘惑に負けたとか、そういうことでは、ない。

「.....何やってんの？」

お、明久いたんだ。

「いや、どのパーティーが強いのか議論してたんだけど」

「それであんなことに発展するのが謎だね……………」

「その辺はメープルだからしょうがない」

「むしろ、バカッフルだから仕方がない、ではないですか？」

そんなことを言われるのは心外だな……………

「清く正しくおつき合いしていると思ってるけど……………」

「「あれで!?!」」

ダブルツツコミをされてしまった。

むう……………そんなに酷いかな……………?

「まあ、そんなことは置いといて、全員集まったんだし勉強会を始めようよ」

最初は明久とギクシャクしていた姫路さんと島田さんは来ないかと思っていたが、失恋を乗り越ったのか、もうほとんど以前と変わった様子はない。

まあ、僕としては明久には歌美が似合うと思うので、彼女らに協力できることはない。

未練がましく引きずっていても鬱陶しかったし、このような結果になったのは純粹に嬉しい。

明久からさらに減点をされてしまったと報告を受けたので、結構余裕が無かったりする。

前回の合計より100点悪くなって、－550点。

正直キツいかもしれない……………

第六十八問く毒のないヤドクガエルく（前書き）

サブタイトルく

ヤドクガエルは食物から毒を得ているので、ペットショップなどで売られているものは、無毒になります

第六十八問く毒のないヤドクガエルく

第六十八問

「ところで雄二は？」

「……雄二を連れて来た」

ドサッ

絨毯の上にぐるぐるに巻かれた雄二が転がされた。

「ん？明久。どうしてお前たちがここにいるんだ？」

「……ああ、うん。霧島さんの厚意でね……」

そんなことよりなんでロープで縛られてるんだろう？

「雄二よ。お主は今日の勉強会の話h霧島から知らされておらんかったのか？」

「ああ。何も聞いていない。いつものように気を失って、目が覚めたらここにいただけだ」

いつものようにって……まあ、雄二だし良いか。

「それで、勉強道具は？」

「……大丈夫。準備は万全」

霧島さんは雄二の鞆を掲げていた。

着替えもあるようだし、手抜きはないようだ。

「さて、それでは本当に全員そろったし、始めよう

「そうじゃな。それがいいじゃろ」

『それは違うよっ！世論調査では成人女性の68%以上がーー』

『………違う。世界保険機関の調査結果では成人男性の72%以上が賛同している』

『またそうやって屁理屈を……！』

『………屁理屈じゃなくて事実』

『くう……っ！こうなったら、今度のテストでムツツリーニ君を抜いてボクの方が正しいって証明してみせるからね！』

『………学年一位の座は揺るがない』

『そうやって憎たらしいこと言って……ムツツリーニ君なんてこうだよっ！（ピラッ）』

『………卑劣な……っ！！（ブシャアアア）』

早く勉強を始めないと、大変なことになりそうだ。

そう、メープルが感化されて色仕掛けをしてこない内に！

「さて、それでは明久。宗教は世界の歴史でも重要です。宗教によって起こった出来事も少なくありません。というわけで復習問題です。儒教、仏教、ジャイナ教の創始者をそれぞれ答えなさい」

「儒教が孔子、仏教がゴータマ・シッダールタで、ジャイナ教が……マハーヴィーラだったっけ？」

「ええ、正解です。それでは次の問題です。聖人体質とは、どういったものですか？」

「いきなり禁書〇録ネタ!？」

「おい島田。秀吉は今まで全問正解してるんだが、お前ももうちょっとしっかりやれ。お前は問題文さえ読めれば即戦力なんだから、弱点を強化しろ」

「うう……。ウチは別に畳と卓袱台も嫌いじゃないのに……」

「雄二よ。次の問題はまだかの？」

「なんだ秀吉。ずいぶん熱心だな」

「うむ、楓に教わってからなんだか古典がわかるようになってきての。それに古来からの男らしさを学べば少しは男らしくなるとおもっての」

「そうか。じゃあ、次の問題だ。【『はべり』の已然形を用いた例文を書いてみる】

「以前食べたケーキはベリーデリシヤスでした」

「恐れはべれば申さず……というのはどうじゃ？」

「秀吉は正解だ。島田はちよつとそこに正座しろ」

「裏切ったわね木下………」

「普通にできてて問題ないレベルの問題なのじゃが………」

第六十九問くケラは地・空・水対応く（前書き）

サブタイトルく

ケラは普段は地中を潜っていますが、空も飛べ、泳ぎも上手です

第六十九問くケラは地・空・水対応く

第六十九問

「ムツツリーニ君。さすがにこの問題はわからないでしょ？」

「……………中一で70%。中二で87%。中三で99%」

「どうしてこんなことまで知ってるの!？」

「……………一般常識」

「うう……。正攻法で勝てる気がなくなってきたよ……」

「……………工藤はまだまだ甘い」

「こ、こうなったら……。あのね、ムツツリーニ君。実はボク……」

「……………?」

「ーいつも、ノーブラなんだよね」

「……………っ!?(ボタボタボタ)」

「え？それなのにどうして形が崩れないのかって？それはね……実は（ボソボソ）って感じのマッサージをいつも（ゴニョゴニョ）ってなるまで、毎晩毎晩――」

「……………殺す気か……………っ！（ブシャアアッ）」

「殺すだなんて人聞き悪いなあ。別にボクは、ムッツリーニ君が出血多量でテストで実力が出せなくなるというのに、なんてことも考えてないし」

「……………この程度のハンデ、どうということはない」

「ふーん。そんなこと言うんだ」

「……………お前には、負けない」

「そこまで言うなら遠慮無く。――それで、さっきの続きだけど、（モニョモニョ）を身体が熱くなるまでやったら、最後には（ホニヤホニヤ）を使って（ヒソヒソ）を――」

「……………死んで……………たまるか……………っ！」

愛子とムッツリーニは相変わらずだな。

「ハク――、日本書紀に赤烏ってのがでるんですけど、いったんどんなものなんすか？」

「カラスが黒いのは、アミノ酸のチロシンが酵素によって酸化されてできるメラニンによっているんだけど、この黒または灰色の他に

も赤褐色から黄色のメラニンをもっているんだけど、なんらかのことがあって、黒のメラニンだけが生成されず赤褐色が現れた。ってことだったと思うよ」

「なるほど」

「……そろそろ夕飯だから、別の部屋に来て」

気つくとも霧島さんの声が聞こえた。

もう六時か……………

「よし。島田、秀吉。とりあえず古典はこれくらいでいいだろ。飯にしようぜ」

「うう……。活用形ってなんなのよ……。知らなくても生活には困らないのに……」

「古典作品はなかなか面白いのじゃがのう……………」

メープル……………ちよつと教えただけで秀吉がえらく変わってるよ……………。

「……………生き残った……！」

「ムツツリー二君。また後で、じっくりボクとお勉強しようね」

「……………断る」

この二人は仲が良いのか悪いのか……………

「さ、行こうメープル」

座っているメープルに手を差し出して、立ち上がりやすいようにする。

「ありがとうっす」

「どういたしまして」

「……案内するから、ついてきて」

『はい』

先導してくれる霧島さんに雑談しながらついていく。

「いやー、最近はやんとした料理が食べれて嬉しいよ」

「明久はもうちょっと食費を増やしてもいいんじゃないかな？」

「歌美が言うならそうするかな」

「その……なんならご飯作りにいっても………?」

「いや、食事くらいは自分でやるよ。歌美に頼りっきりは駄目だしね」

部屋を出てすぐに、なにやら匂いがしてきた。

「……この部屋」

霧島さんが案内した部屋には、ご馳走の良い匂いが広がっていた。

「す、凄い……っ！」

「わぁ……」

「これはまた、贅沢じゃな」

一般家庭ではみないような大きさのテーブルに、所狭しと料理が並んでいた。

第七十問く有毒哺乳類は古いく（前書き）

サブタイトルく

現在は毒でじわじわ弱らせるより、走って捕まえてその場で殺すのが主流です。

第七十問く有毒哺乳類は古いく

第七十問

「ところで、ここで食事を摂るのはワシらだけかの？霧島の家族はおらんのか？」

「……………うん。私たちだけ」

部屋の中には僕たち12人のみ。

「翔子の家はそれぞれが自由に暮らしているからな」

「……………うん。だから気兼ねしないで好きに過ごして欲しい」

確かに雄二の部屋があるほどなんだから、だいぶ自由なのだろう。

「……………それじゃ、適当に座って」

指示に従い、手近な席に座る。

『いただきまーすっ』

みんなで手を合わせて、食事に入る。

栄養は迅速に補給しろ！

「これはまた、絶品じゃな……！」

「お、美味しいです……！うう……また食べ過ぎちゃいます……」

「……………鉄分補給」

「翔子。なぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ」

「……おかしな薬なんて入ってない」

「ボク中華料理大好きなんだよねー」

まるで高級ホテルの貸し切り部屋だな。

「吉井君。ボクがたべさせてあげる。はい、あーん」

「ハクっ！今すぐやるっすよ！」

「いやだ」

「嫌よ嫌よも好きの内っす！」

「だが断る」

「心からのお願いをそんなネタで返す人にはお仕置きが必要っすね」
♪

「すみませんっしたあー！」

「でも許さなーい」

「なにゆえ!？」

「ほら、口開けて。恥ずかしかったら目閉じてて良いから。あーん」
確かに目をあけたままよりか、閉じた方が周りの反応がわからないから、恥ずかしくないだろう。

ここで拒否しても後の展開が読めないなので、大人しく目を閉じて少し口を開ける。

すると、まず感じたのは柔らかい感触。

次に、口の中に入ってきた食物の味。

ん?なんかおかしくないか?

目を開けてみると、入ってきたのは目を閉じて僕と唇を合わせているメーブル。

これって………口移しじゃないですか!?

明らかに「はい、あーん」より高度なあれじゃないですか!

「えへへ、ごちそうさま、ハク」

いきなりこんなことされたんだけど、みんなにみられたのが少し恥ずかしかったのか、頬がうつすら染まっているメーブルにはなにも
いない。

強いて言えることがあるなら、

「お粗末様でした」

ということだけだ。

一万ユニーク記念(前書き)

読んでいただきありがとうございます！

一万ユニーク記念

一万ユニーク記念

「「試獣召喚」」

お馴染みの魔法陣のような幾何学模様が現れ、そこから召喚獣が出現する。

いつもと違った、動物をモチーフとした姿で。

「うんうん、実験成功だね♪」

一万ユニーク記念『本当にありがとうございます！これからもよろしく願います！』

「さて、この小説も一万ユニークを達成できたというわけで、記念をすることになったんだよね」

「記念ですか……まあ、いくつかコーナーでもやりましょう」

「んじゃ、最初は最近出番の少ないというかない私、秋音がいくよ

」

「海では出番があるっすよ！」

『杉本秋音の動物召喚獣！』

「今回は私が、召喚者の本質に応じた動物を象った召喚獣がでてくるように、システムをいじってみたよ！んじゃまあ、早速やってみよう♪」

本質に応じた動物か……まあ、動物にもいろいろあるので、どれだけ特徴が動物の生態や見た目の情報から得たイメージに似ているかってことだろう。

「それじゃあ、私とハクが先頭で」

「了解。いくよーー」

「「試獣召喚」」

おなじみの魔法陣が浮かび、僕らの召喚獣が現れた。

僕の召喚獣はいつもと同じクローと足の鉤爪。

肘のブレードは外れ、全身に鱗状の模様の服と、少しの羽毛を装備していた。

「これは……………？」

「うん、デイノニクスだね」

「ああ、学名の意味が恐ろしい鉤爪の、獣脚類の恐竜で、良く動く鉤爪を持った、あの有名な恐竜の」

デイノニクスの特徴か……………

「つまり、速さと攻撃性ってことだろうね」

「ハクっぽいね」

さて、続いてメーブルの召喚獣だが……………

やたら複雑な形の殻を被っていた。

「これは……………ニッポニテスだね♪メーちゃん」

「説明お願い、ハク」

「了解。ニッポニテス……………Nipponites mirabilisは異常巻アンモナイトと呼ばれる一種で、日本を代表する化石。複雑な形の殻を持つが、その巻き方は規則的で、対称面を中心にU字形の蛇行を繰り返して巻く。うーん……………特徴というと、規則的に巻くこと、そして、成長の段階で殻口の向きが変わらないこと……………あ、これは異常巻アンモナイト全般にも言えることだけだね。まあ、成長するたび向きが変わっていると、捕食や敵から逃げるときに不利だからね。」

規則的ということから、巻き方は決まってるってことだよね？ つま

り、決まった形……物事を予定通りにする……策士ってことじゃないかな。

で、向きの変わらない殻口は……本体の向きが変わらない……
…いつでも自分らしく、ってことだと思う」

「メーちゃんらしいね」

「んじゃ、秋音さんとユキも召喚してみて」

「わかりました」

「「試獣召喚」」

まず、行平の召喚獣は……

赤と黒の体色で、トカゲのような頭を被っていた。

……まさかこれは……

まんま行平だな。

流石行平の特徴。こんなものを出すなんて……プククッ

「博人？なにひとりで理解して笑っているのですか？」

「いや、だって……すみませんでした！」

危ない……恐ろしく危なかった……なんか懐に手を入れ始めたよ……

いったい何を出す気だったんだ……？ まあ、怖いから聞かないけど。

「それでは説明よろしくお願いします」

「行平の召喚獣はヒーラモンスター、和名アメリカドクトカゲだよ。名前の通り毒を持ってるんだけど、蛇と違ってすぐに毒を相手の体内に入れられないんだよね。だから、相手に噛みついたままで、じわじわと毒を染み込ませていくんだよね。じわじわと相手をいたぶっていくところが行平にぴったりだよね」

「ほほう……………」

「博君、行君は確かにちょっとSだけど、根は優しい紳士だよ！」

「ありがとうございます、秋音姉さん」

「にやはは……………どういたしまして」

さて、お互い見つめ合っているところ悪いんだが、次は秋音姉の召喚獣だ。

「これは……………マルハナバチだね。空気の粘り気を利用していることから、物理ってことだろうね」

「あとは、空飛ぶぬいぐるみとも呼ばれていますし、可愛らしい、ということではないでしょうか」

「行君……………／／／／」

「さて、全員やったし、次の企画いこう！」

一万ユニーク記念（後書き）

記念と言いつつ話をまたぐ暴挙にでます！

一万ユニーク記念？

一万ユニーク記念？

『フリートーク！』

博人「さて、フリートークなんだけど、何話す？」

秋音「暇だからしりとりしてみる？」

行平「良いですね」

メープル「それじゃあ、スタート」

博人↓行平↓メープル↓秋音

リストロサウルス↓酔↓スリランカ↓角運動量保存の法則↓

クロノサウルス↓巢↓スエズ運河↓ガウスの法則↓

クロアゲハ↓歯↓羽田↓ダークエネルギー↓

ギフチヨウ↓鵜↓ウクライナ↓波↓

ミカドアゲハ↓葉↓ハワイ↓因果律↓

ツリテラ↓羅↓ラトビア↓アーンショーの定理

『……………』

メープル「何でそんなに趣味全開なの!？」

秋音「メーちゃんだって、一文字の言葉しか言っていないよ」

メープル「キッチンと意味もあるから全然セーフだよ!」

博人「僕だって全然問題ないよ」

行平「私も問題ありません」

『……………』

博人「しりとりは止めよう」

行平「そうですね。これ以上は不毛です」

秋音「でも、話すネタが無くなっちゃうよ?」

メープル「じゃあ、なんかお題を出そう」

『博人のカバンの中身』

博人「なにゆえ!?!」

メーブル「いやあくほら、気になるなあと」

行平「というわけで、早速探ってみましょう」

秋音「わくわく」

博人「させるかぁーぐえっ!」

メーブル「これも企画だから、ちよつと動かないでね」

行平「ナイスホールドです。まずはサブポケットの方から開いてみましょう」

ガサゴソ

十徳ナイフ を てにいった!

秋音「特におもしろいものにじゃないから先に行こー!」

博人「勝手に人のカバン開けといて何その態度!?!」

ガサゴソ

懐中電灯 ラジオ ドライバーセット 小型メジャー USBメモ
リ 爪切り ミニライト 小銭 テレフォンカード を てにいった
メーブル「かなり応用がきくね」

秋音「災害にでも備えてるのかな？」

行平「シークレットというほどの物はありませんね。それでは、本戦行きましょう」

博人「せめて自重はしてよ……………」

ガサゴソ

ハツカ飴 を てにいった

博人「あ、一つ食べて良い？」

メープル「はい、あーん」

行平「さて、お次は……」

ガサゴソ

メープルの写真 を てにいった

『……………』

博人「あ、それはムツツリーニから渡されたヤツだ」

秋音「カバンに入ってたってことは、肌身離さず持ってるんだね」

博人「いや、ただ忘れてーー」

メープル「無理やり口をふさいでやるー」

行平「はいはい、バカップルバカップル」

秋音「さて、もう探すものはないし、そろそろ締めにいこうよ」

博人「今まで、このような拙い文章を読んいただき、ありがとうございます」

行平「これからも、偶数日更新で頑張っていきたいと思います」

メープル「いろいろと至らない面もありますが、」

秋音「よろしくお願いします!」

一万ユニーク記念？（後書き）

これからよろしく願います！

第七十一問くミノカサゴは同種にも毒を使うく

第七十一問

まわりからの暖かい視線を乗り越えたところで、雄二と霧島さんが話し始めた。

「……雄二」

「なんだ翔子」

「勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配はいらねえ」

「……本当に？」

「ああ。次のテストではお前に勝ちまうかもしれないぞ」

「……そう」

「そうしたら俺は晴れて自由の身だな」

楽しそうに笑う雄二をみて、霧島さんの目が細くなった。

「……そこまで言うのなら」

「ん？」

「……勝負、する？」

霧島さんは普段あまりしない挑発的な目で雄二を見ている。

「勝負だと？」

「……うん。雄二がどの程度できるようになったのか、見てあげる」

「ほほう……随分と上からの目線で言ってくれるじゃねえか」

乗せられてる、乗せられてるぞ雄二。

「……実際に、私の方が上だから」

「くっ。上等だ！勝負でもなんでもしてやろうじゃねえか！本当の実力の違いってヤツを見せてやらあ！」

それにしてもうまく言葉に乗せられるなんて、霧島さんがからむと冷静じゃなくなるな、雄二は。

僕なんてどんな冷静にしていたっていつの間にかメーブルの罠に嵌められてて、もうすでに手遅れなんてことがあるから、言葉の一つ一つに気を付けているというのに。

まあ、それでも大した効果はないんだけど。

「……わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テストで勝負」

「おうよ！今までの俺と思うなよ！」

「……それで、私が勝ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「は？」

目が点になる雄二。

そんなこと言われたんだから、即反撃しないとどうしようもなくなるぞ。

まあ、雄二は負けても良い状況だ。

「霧島さん、ゴメン。杏仁豆腐を食べたいから刃物を貸してくれないかな？」

「……今持ってくる」

「待て翔子！今のコイツに刃物を渡すな！俺の命に関わる！」

「大丈夫だよ雄二。ただ勝負に集中できなくなるくらい傷を付けるだけだから！」

「そんなんだったらむしろ殺せ！妬みで殺せ！」

「ハハハ、なに言ってるの雄二。僕には歌美がいるんだから、妬む必要なんてないじゃないか」

「こんのバカップルが！」

「いや、まだつきあってないし」

「……代わりに、雄二が勝ったら吉井と一緒に寝るのを許してあげる」

「驚くほど俺のメリットがねえぞ!？」

いや、雄二が負ければ既成事実というメリットがあるじゃないか。

「いいな。そういうの、面白そうだね。ボクもなんかやりたいなあ」

いやいや、そんなことやっぺの誰も得しないって！

「……愛子も勝負する？」

「それもいいけど、折角だから――」

わざと一呼吸入れる愛子。まさか――

「――そのテスト、皆で受けて、その点数で部屋割りを決めようよ」

最悪のセリフだっ！

「そんなことして良い訳ないじゃないか！」

「でも、保健体育の実戦とか、博人君も復習したほうがいいんじゃないか」

ない？」

「な、な、復習って何のこと？」

「何のことだろうね？」

「大丈夫っすよ、ハク！ちゃんといろいろ教えてあげるっすから」

「いいわけないでしょ……………」

第七十二問くミイデラゴミムシは百度以上の気体を発射するく

第七十二問

「面白そうだから、私もやろうかな？」

なんと歌美まで参加してきた。

「えっ！？う、歌美……………その……………」

「あ、明久が希望するなら……………そういうことも……………？」

「あははっ。もうこんなに参加者がいるんだから、博人君も逃げられないんじゃない？」

「くっ。逃げられなくても……………逃げる！」

「うん、無理」

ぎゃー。羽交い締めされた。

「…………じゃあ、まだ開けてない新品の模擬試験を持ってくる」

「待て翔子！俺はまだ承諾してないぞ！」

「……決定事項。さっき雄二は勝負するって言った。反対意見は認めない」

「ぐっ……っ！そ、それはそうだが……！」

雄二は目を泳がせて何か考えているようだ。

そして、テーブルの上を見て、霧島さんに見えないような角度でなにやら毒々しい色の液体が入ったコップを傾けた。

「っと、すまん翔子！服にかからなかったか？」

「……大丈夫」

ああ……そういうことか。だいたい雄二の作戦はわかった。

「いや、大丈夫じゃない。お前には見え辛いかもしれないが、服の裾のそのへんにかかったみたいだ」

「……それは困るかも」

「悪い。俺の不注意でー」

「……あの薬は繊維を溶かすから」

「待て。お前は俺の飲み物に何を入れたんだ」

おお……こぼれた液体が絨毯と反応して煙を出しているよ……。けっこう強そうだな。

「……着替えてくる」

「そうした方がいいだろうが……それなら、ちょっと早いが先に風呂にしないか？腹ごなしも兼ねてな」

ふむ……やっぱり風呂の間に何か仕掛けるつもりだな。

「……わかった。それなら先にお風呂にする」

「んじゃ、模擬試験はその後だな」

「……うん」

霧島さんが同意し、僕たちは着替えようの部屋に行くことになった。



「さて、行くか」

部屋に入って数分すると雄二が立ち上がった。

「覗き？」

「……………任せておけ」

「お主ら……………」

秀吉は一人で別の部屋に連れて行かれたが、こっそりこっちにやってきていた。

「違うぞ。俺が行こうと言っているのは翔子の部屋だ」

「やっぱりか……………」

「大方、さっきの話にあった模擬試験の問題でも盗み出すのではないですか？」

「ああ、そうだ」

「けど、別に僕らは問題を盗む必要なんてないんだけど」

「（こくり）……………それより、覗きが大事」

「あ、ムツツリーニ。歌美をみたら殺すから」

「……………肝に銘じておく」

「本当にそう思うか？」

雄二の十八番ともいえるもったいぶった口調で明久達に聞いていた。

「なにが言いたいのさ」

「いいか明久、よく考えてみる。お前の家に今帰ってきている姉貴は、何を禁止していた？」

「？『ゲームは一日三十分』、？『不純異性交遊の禁止（相手が歌美の場合はある程度は認める）』だけど？」

「女子と一緒に寝ることになったらどうするんだ？」

「え？歌美なら大丈夫だけど」

「協力しなければデマをバラまく」

「外道っ！この外道っ！」

まあ、わかっていたことだ。

「それにムツツリーニ。お前も危険だぞ」

「……………どうして？」

「出血多量で死ぬ。確実に」

「……………この俺が、死を恐れるとでも？」

なんか無駄にかっこいい気がするが、実際はただの過度なスケベだな。

「だが、予想されるテストの順位を考えろ。上位の人間から相手を選んでいくとなると」

たぶん

？メープル、行平、僕のどれか。科目によって変わる？霧島さん？歌美、姫路さん？愛子……………だろうな。

「楓は言うまでもなく、霧島が雄二、稲垣が明久となると、工藤愛子は誰を選ぶかのう」

待て、言うまでもないってのは少しおかしい気がするんだ。

「工藤はムツツリーニを選ぶだろうな」

「……………まさか」

「さっきの言い争いもある。ムツツリーニを失血死させて、保体の王者の座を奪うつもりじゃないか？」

「……………っ！つくづく、卑怯な……………っ！」

なんか妙なライバル関係だな。

第七十三問くオオゴマダラは蛹が金色く（前書き）

サブタイトルく

結構有名なことですね。

周囲の光を反射するので、保護色になります。

第七十三問くオオゴマダラは蛹が金色く

第七十三問

「……………あんなスパッツごときに、殺されるわけには……………っ！」

死ぬのではなくスパッツで殺されるのが嫌なだけって……………つくづくお前はこういう考えしてるんだと疑問に思うのだが。

「というワケだ。協力してくれるな？」

「わかったよ。協力するよ」

「……………やむを得ない」

「七伏兄弟はどうだ？」

「私は関係ありませんので」

ごもつともだ。

「僕も必要ないね。簡単な復習テストっていったから、多分満点で決着を避けられるし」

というかテストは基本メーブルが一番有利なんだよな……

言語系は科目多いし……

行平なんて地歴公民特化だから、僕とメープルよりも点数が取りにくい。

まあ、それでも同程度取ってくるんだけど。

「ワシも協力しよう」

「え？ 秀吉が？ どうして？」

「どうしても、じゃ」

まあ、秀吉にも複雑な理由があるんだろう。

「よし。そうと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するに、テスト問題はアイツの部屋にある。そこに忍び込むぞ。」

「「了解」」



『霧島さん。お風呂はどんな感じなんですか？』

『……大浴場と露天風呂がある』

『おお、すごいね？』

『それは楽しみっすね』

『ボクも楽しみだよ。温泉も、姫ちゃんに、楓、歌美のこれを直に見るのも、ね』

『きゃっ。ど、どこ触ってるんですか工藤さんっ』

『本当におっきいよね。何が入ってるんだろ？』

『……羨ましい』

『やっ！き、霧島さんまでっ』

『さすがにこの大きさは反則じゃないかな？』

『歌美ちゃんと佐藤さんはウエストがバッチリじゃないですかっ！』

『ハクのためっす』

『まったく、不公平よね……。平均しても、十分目立つぐらいになるんじゃないかしら……。』



ふう、サッパリした。

広い風呂というものもたまにはいいものだ。

まあ、実際やることは変わらないわけだから気分の問題だな。

ウチの風呂がでかくたって邪魔なだけだ。

さて、現在は女子たちがまだ風呂から出ていないので、お泊まりの定番といえるトランプを三人で（雄二とムッツリーニはあれ以後確認できず）やっているのだが……

「……………レイズ」

「……………コール」

「えっと……………コール？」

結構本気のポーカーをやっている。

もちろん役を揃えるだけじゃなくて、チップをかけて、その点数を競う、マジルールだ。

現在の点数は僕＞行平＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
明久だ。

ウチではトランプはよくやっているの、明久程度では相手にならない。

実質僕と行平の勝負だ。

まあ、ポーカーはどちらかと言えば僕の方が強い。

その代わりブラックジャックでは行平の強い。

さて、相手の表情、賭け金の吊り上げ。

そこから相手の手札を予想しなくてはならない。

一瞬の油断が命取りとなるゲームだ。

この勝負……本気で行くぞっ！

第七十四問くヤマカガシは首に毒があるく（前書き）

サブタイトルく

首というか頭の後ろあたりですね。

掴むと毒が飛び出します。

第七十四問くヤマカガシは首に毒があるく

第七十四問

ポーカー勝負は僕の勝ちに終わった。

そして結局テストは中止となった。

どうやら秀吉が活躍したらしい。

雄二達が戻ってきてまた勉強を始めて、数時間。

日付が変わったので、そろそろ就寝となった。

こんなに起きていたのは久しぶりだな。

朝方の生活習慣を心掛けているから、夜は早く寝るし。

まあ、今日くらいは夜更かししよう。

くくくそんなわけで男子部屋くくく

「坂本雄二から始まるっ」(雄二のコール)

『イエーッ!』(合いの手)

「古今東西っ」

『イエーッ!』

「爆ぜれば良いと思う人間の名前っ」

おい!なんだそのテーマ!

パンパン(手拍子)↓雄二の番

「【吉井明久】!」

「やんのかコラ!」

パンパン(手拍子)↓ムツツリーニの番

「……………【須川亮】」

「え?アイツリア充だったのか!?」

パンパン(手拍子)↓秀吉の番

「え、えつとえつと【坂本雄二】じゃ!」

パンパン(手拍子)↓僕の番

「【浅井海渡】！」

うん、アイツについては後で詳しく述べよう。

パンパン（手拍子）↓行平の番

「【七伏博人】です」

『同意』

大変不本意な回答だな。

パンパン（手拍子）↓明久の番

「えっと【七伏行平】？」

「……………これはダウトだ」

「そうだな」

「ええ、私にお相手なんていませんから」

「杉本先生は？」

「教師と生徒で恋愛など成立するわけないですよ」

ま、従姉弟なら成立してもおかしくないけどね。

「というわけで、明久。罰ゲームだ」

「はい、クジ引いて」

「なにになに？『女子部屋に行って歌美のホイッスルを返してくる』ってこれは僕の書いた罰じゃないか」

「なんだ明久。お前は随分とヌルい罰ゲームを書いたもんだな」

「え？そう？でも、女子部屋に侵入だよ」

ミッション自体は難しくないだろうが、リスクがでかいな。

「ところで、皆はどんな罰ゲームを書いたの？」

「俺は『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だな。当然、盗ってこれるまで何度でもトライしてもらおう」

「ワシは『本気女装写真の撮影』じゃな。ワシの苦しみを皆も味わうべきじゃ」

「……………『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めている写真はなかなか撮れない」

明らかに個人的な目的だな。もっと僕みたいに普通なやつにすべきだ。

「僕は『バック転土下座を決める』だよ」

「私は『厨二発言五十連発』です。もちろん動画サイトにupしてきます」

「晒し!？」

何を言うか。ただ難易度高めの普通の罰ゲームだろう。

第七十六問く毒をもつセシもあるく(前書き)

サブタイトルく

まあ、日本ではないですけどね。

第七十六問く毒をもつセシもあるく

第七十六問

ギイ……………

鍵は中に人がいないときしかかけないのか、ドアは簡単に開いた。

（俺は向こうに行く。そっちはそっちで上手くやれ）

（了解。そっちこそ、見つからないようにね）

万が一雄二が見つかったら、僕まで発見される可能性がある。

雄二のとぼちりなんて、まっぴらごめんだ。

そーっと歩き、ホイッスルがおいてあった場所を探す。

「ん……………」

誰かが寝返りをうつ気配を感じ、振り向く。

するとその先には、歌美が上体を起こしていた。

「明……………久……………?」

（うあ、歌美!?!こここコレは違うんだ!コレは、その、ホイッス

ルが落ちていたから返しにきただけで……………っ!」

ホイッスルを差し出しながら必死に弁明する。

すると、歌美は察してくれたのか、

「そのホイッスルをなくしたのは勉強が終わったあたりなんだけど、
どうしてすぐ渡さなかったのかな?」

「…………ごめん! やらしい気持ちはちよつとしかなかったんだ!」

つつい声が大きくなってしまったが、誰も起きていないようなので、一安心する。

「フフッ、言ってくれば恥ずかしいけど、何でもするのに……………
?」

「ダメだよ。歌美は自分の体を大事にしなきゃ」

「明久…………私、不安なのかな? 明久と離れてると、なんか…………
よくわからないけど、変なんだね?」

そうか…………確かに今の好きだけどつき合っていないという状況は不安定だ。

ましてや五年間も離れていたんだ。不安にもなるだろう。

「わかったよ。僕は、今回のテストで、歌美にふさわしいって言えるようになる。まだ、足りない部分もあるかもしれないけど、絶対幸せにするから」

「ありがとう……………?」

ってあれ?なんかプロポーズみたいなこと言っちゃったような………?

「明久?」

「ん?」

ちゅっ

僕を呼んだ歌美の声に反応すると、歌美の神秘的で、可愛い顔が目の前にあった。

その柔らかさに誘われてつい抱きしめて、もっと求めてしまう。

「ん……………ふぁ……………?」

(じーーーーー)

「「のわっ」」

起きてる!楓さんが起きてるよ!

カメラを持って、起きてるよ!

「いやゝなんか外から人が入ってきたのを感じたんで起きたんすけど、御馳走様っす」

「いや、ちが、それは」

「いやー、私も『絶対幸せにするから』なんて言われてみたいものっす」

ま、まさか録音とかされてないよね？

「さて、このまま弄り続けるのも良いっすが、ちょっとハクのところに侵入してくるのでここで失敬するっす」

楓さんはそうって音も立てずに出て行ってしまった。

第七十七問くタクに触手はないく(前書き)

サブタイトルく

触手ではなく、腕と触腕です。

第七十七問くタコに触手はないく

第七十七問

朝起きたら、メープルが横にいた。

いろいろツツコミたいことがあるが、まだ気持ちよさそうに寝ているので、延期しよう。

それにしても、近い。

吐息がかかるほどで、今にも唇が合わさりそうだ。

逃げたいところだけど、拘束が結構強いし、これを解くようだと、メープルは起きてしまう。

まあ、気にしても仕方ないので、寝よう。

唇が合わさっても意識しないように。

幸い右手だけは動くので、メープルの頭を丁寧になでてから、目をつむる。

綺麗な髪だったし、ものすごいさらさらだったなあ……………

二度寝して起きた（朝6時半）僕の視界に入ってきたのは、えらくどアップなメープルの顔だった。

つまり、キスされていた。

「あ、おはようハク」

「おはよう、メープル」

何をしていたか、なんて聞かない。

聞いたところで自滅するのは目に見えている。

まあ、僕としてもこの状況はちょっと嬉し……なんでもない。

まあ、こんな感じで勉強会の朝が始まったわけだ。

そして夕方。

霧島さんの家から帰ってきて、勉強したしもういっかー。

とだらけていたら、明久から電話がかかってきた。

まあ、内容を要約すると、

『玲さんのためにおいしい料理を作ってあげようと思ったのに、玲さんはテストで点が取れなかったときの言い訳にされても困る、と言った。』

ということだそうだ。

うーん……ここからは僕の推測も入るからあんまり自信はないけど……まずは一言、言っておこう。

「気をつけろ、そいつは幻影だ！」

「……………は？」

電話先から帰ってきたのは、純粹な疑問だった。

言いたいことをまとめすぎた上にネタに走ってしまったようだな。

「つまり、明久が感じていることだけが全てじゃないわけ。何か隠された事実があるかもしれないんだよ。あ、そうそう。知ってる？あり得ないことを消していけば最後には真実が残るんだよ」

「わかったよ……………姉さんがなんでああ言ったか、考えてみる」

「よろしい」

「あ、んじゃ切るね」

「ん。わかった。じゃあ最後に一言『冷蔵庫』」

あ、別に水受けで有名な電化製品お化けのフォームチェンジではない。

まあ、今の明久なら、ヒントをあげなくても気づいただろうけど、少しは勉強の手伝いをしてあげなくちゃだしね。

少しでも時間を減らしてやるべきだろう。

でもまあ、今の調子だとよほどのヘマをしなければ問題無いはずだ。

頼むからこれがフラグであってくれるなよ。

第七十七問くタクに触手はないく（後書き）

言ってみたい言葉、一人目回収

第七十八問くハチの巣は紙製く（前書き）

サブタイトルく

木などから作る種類はみな紙製です。

第七十八問くハチの巣は紙製く

第七十八問

いよいよやってきたテスト当日。

どうやら明久は昨日の件は解決したらしい。

そんなことも手伝ってか、だいぶスッキリした顔で勉強していた。

点数が取りやすい世界史を勉強していて、今は忘れそうなことをメモしているようだ。

まあ、僕は特に勉強することもないので、暇つぶしにルービックキューブをしている。

ストラップなので、持ち物検査には引っかからない。

よし、揃った。

タイムは52秒か。

まあ、この小ささじゃ仕方ないか。

今日のテストは六科目。

現代国語・英語・世界史・数学？・化学・保健体育の六つだ。

リーディング

今日は数学？、化学が狙い目だな。

他の教科はメーブルと行平に教わったことを思い出せば楽に取れるだろう。

「よしお前ら、席に着け。今日は期末テストの一日目だが――」
いつもの時間通りに西村先生がやってきて、連絡事項を告げた。

まあ、いつも通りのことだったので、特に気に留めることはなかった。

まあ、結果を言うところ――

成功だった。僕も明久も。

しかし、明久は玲さんが帰ることを望んではいないようだ。

僕の予想だと、昨日は玲さんが料理を作ろうと頑張ってたはずだ。

勉強で忙しい明久の為に、苦手な料理を、仕事で疲れているにも関わらず。

そんな光景を見れば、明久は玲さんを帰すわけにも行かず、引き止

めるしか無いわけだ。

まあ、いろいろ騒がしい日常を送ることになるんだろうが、それはまあ、文月式の日常というわけで。

さて、テストも終わったので、もうすぐ夏休みだ。

夏休みに入ってすぐは、戦争で潰れた分の補習があるから、その後から本格的な夏休みだな。

まず、山に行くのは毎年恒例だし…………

後は秋音姉の都合も聞いてみて、それから決めることになるな。

でもまあ……………楽しみだ。

「さて、中途半端に余ったので、雑談コーナー！」

「雑談、と言っても何を話すんですか？」

「いろいろ謎に包まれている七伏家についてはどうですか？」

「ああ、そうですね。そう言えば、父上と母上は今どこに？」

「さあ？でもきちんと仕送りされているから、問題ないでしょ」

「それもそうですね」

「二人はこんなチートなわけだけど、どんな教育を受けてたの？」

「いたって普通ですよ？」

「うん。ただ、小さい頃からお伽話とかのかわりに物理や生態系についてわかりやすく説明されただけだけど」

「私は各国の文化や地理的条件ですね」

「その時点からおかしいね」

「そうでしょうか？」

「メープルはどんなこと聞かされたの？」

「私は古典作品が中心ね」

「はいアウト」

「まあ、ウチの父も自称冒険家の義父さんの友人だからねえ……」

「まあ、父上に関わる人は皆おかしいようですよ。従姉である秋音姉さんもその例ですね」

「ていうか、いったいどうやって稼いでいるんだか。結構昔から気になってるんだけど」

「ああ、私もです」

「実は私も」

『まあ、尻尾をつかむのも難しいから、わからないんだけどね（ですけどね）』

僕とケンカとネガティブシンキング（前書き）

早めに謝っておきましょう。
内容があれでごめんなさい。

僕とケンカとネガティブシンキング

僕とケンカとネガティブシンキング

ある朝、僕はいつも通りに学校に登校した。

「あ、博人おはよー。今日は遅いね」

はぁ……………

トボトボと席に着く。

「はぁ……………」

さっきからため息ばかりがでてしまう。

「は、博人。どうしたの？」

「あ、明久おはよー」

「あ、うん。おはよう」

ふむ……………

「はぁ……………」

「ホントにどうしたの？」

「あれ？明久いつのまにそこにいたの？」

「さっき挨拶したよね！？」

「あ、ごめん。忘れてた」

うん、確かに記憶にはうっすらと残っている。

「で？ホントにどうしたの？」

ここまで心配されちゃあ、話すしかないだろうなあ……

「実は……………」

メープルとケンカしたんだ」

「へ……………って、ええええ！！！」

なんか予想以上のリアクションをされた。

「何！？何したら博人と楓さんがケンカするの！？」

「別に……………僕たちだってケンカはするよ……………。一番新しいのは、確か13年前だったかな」

「うん、まったくケンカしてないね。いつも一緒にいるのに、ほんとに何したの？」

「それなんだよ……………。メーブルはいつも僕と一緒にいるけど、そのせいでメーブルの友好関係が狭まったり、メーブルが不当な評価を受けたりしするのが嫌なんだ。でも、メーブルは僕と離れたくないと言うんだ」

「うん、ちょっと殴っていいかな？」

「なんで……。明久あ……………嫌われてないかなあ？」

「それはないから大丈夫」

なんか断言されてしまった。

「でも、どうやって仲直りすれば……………」

「謝ってくれば？」

「でも、今ちょっとアレだし……………」

「面倒くさっ！」

なんて言いようだ。こっちは真剣なのに……………

「とにかく！博人は謝ればいいの！まずはそこから！」

明久に言われた後も、踏ん切りがつかず、無駄に時間を過ごし放課後になってしまった。

仕方ないので、メールで家に呼び出した。

「お邪魔します」

すぐに、メープルはやってきた。

そして、僕は誠心誠意土下座した。

「ごめんなさい」

「……………顔を上げて」

指示された通りに顔を上げる。

「私…………寂しかったんだけど、今日ハクと話ができなくて」

「申し訳ありません」

「お弁当も一緒に食べれなかったし」

「この身で償います」

「ふうん…………じゃあ、誠意を見せて？」

誠意…………土下座じゃなくて、えーと…………

キス…………とか？

いやいや、待て待て。

そんなんで良いわけがない。

そもそもメーブルを寂しがらせた僕なんかのキスなんて何に価値が……

いや、それ以前に嫌われてないことも確かでないし……

「……………ヘタレ。仕方ない、ハク。目を閉じて」

もちろん反対する事はできないので、言われた通りにする。

すると、柔らかい何かが僕の唇に触れた。

少し気になって目を開けると、メーブルが。

つまりこれは、許されたと？

腕をまわしてきて抱きついていることからもうそう考えて良いだろう。

「……………ハクのヘタレ」

「……………ごめんなさい」

「寂しかった」

「もう、二度としない」

「ふふ……………それでいいよ」

一度離した唇をふたたび近づける。

僕とケンカとネガティブシンキング(後書き)

すみませんでしたーっーっ！

第七十九問くゴキブリは集合フェロモンで集まるく

第七十九問

遂に、遂にやってきましたよ、マイシーズン

夏だ！山だ！昆虫だ！

そして………補習だ！

なんというか………すごく納得がいかない。

試召戦争があったから、その分の遅れを取り戻すために補習があるのは良い。当然だ。

しかし………補習やらされるほど授業無駄にしたってのに、教室の設備が変わっていないのが、気に食わない。

僕は頑張ったぞ。敵戦力を悉く切り裂き、Bクラス戦のトドメを決めたし、メープル、行平、優子の三人を相手に勝利した。他にもBクラスと戦争になったときも、敵を壊滅させた。

ここまでやってるのに、座布団、卓袱台、畳ってのは、それもこれも全部雄二のせいだ。

まあ、今現在雄二はこのボロい教室の最も熱く、風通しの悪い場所

にいるから、少しいい気分だ。

そんな状況にあるせいか、雄二が脱走を企てているが、その計画に賛同しているのは、位置の悪い十人ほど。

明久は、期末テストの成績と覗き不参加のことから結構位置は良いので雄二の作戦には乗っていない。

まあ、参加者は絶対捕まるだろう。

しかも、西村先生はそれを察知したのか、黒板に向かって文字を書いていたのに、いきなり声を出した。

「全員動くなっ！」

「「「……っ!!」「」」

腰を浮かせて脱走の準備をしていたものは、その声によって機先を制されていた。

「貴様ら……。脱走とは良い度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

それにしても、流石は西村先生。

気配だけで脱走を察知するなんて……………。

一度御教授願いたいな。

「……そうか。お前らがそこまで退屈しているとは気がつかなかっ

た。これはつまらない授業をしてしまった俺の落ち度だな」

西村先生は今回は鉄拳ではなく、別の制裁を与えるようだ。

「詫びと言ってはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてやろう。

……脱走の意志の無かったものは耳を塞げ」

指示通りに耳を塞ぎ、僕は唇の動きが読めるので、さらに目も瞑っておく。

それから少しして目を開けると、教室には数人のFクラスの人間が転がっていた。

「それにしてもバカだなあ、雄二は。鉄人相手に脱走なんてできるわけないじゃないか」

「俺の席の状態だと、脱走は死活問題なんだよ……」

「全く……どうせ脱走企てるんだったら、きちんと行動してよ。

鉄人が雄二を捕まえにいったら逃げようと思ってたのに」

「デメエ……」

なんか雄二が殴りかかろうとしたようにみただけど、立ち上がれず卓袱台に頭を乗せてもがいているだけだった。

「なかなか良い作戦だね、明久。でも、多分外から鍵閉められるか

ら、脱走は難しかったと思うよ」

最初の脱走者を追うのを優先して、鍵を閉めないということも考えられなくはないが、相手はあの西村先生。おそらく鍵を閉めるだろう。

「そういえば、召喚獣の装備がリセットされたんだよね。ちょっと見てみない？」

「……あれ？確か今は学園長がシステム弄るのに失敗して、召喚獣が変なことになってるんじゃないかなかったっけ？」

「そーいやそーうだな。鉄人から召喚許可貰って、確認してみるか」

第八十問　ハナカマキリは自身の姿だけでも餌をおびき寄せられるらしい　（普

サブタイトル）

花にそっくりな形で有名なハナカマキリですが、花に擬態するだけでなく、その姿だけでも昆虫をおびき寄せられるそうです。

第八十問　ハナカマキリは自身の姿だけでも餌をおびき寄せられるらしい

第八十問

さて、どうしようか。

ここで下手に止めるとかえって怪しまれるだろうな。

うん、西村先生に許可を取るみたいだから、西村先生に一任しよう。

……………あれ？

なんか召喚許可を取りに行ったら、あからさまに『厄介なことになった』といった顔したよ。

ポーカーフェイスの欠片もない。

そんなんじゃない拷問受けたとき大変ですよ？

「あー……。いいか吉井。お前は観察処分者だ。人よりもずっと力があり、しかも物や人に触ることのできる召喚獣をもっている。そんな危険なものをみだりに喚び出すことは感心できんぞ。そんな余計なことを考えずにだなー」

先生……………あんた、隠し事に向いてないよ……………

「西村教諭。ワシらは別に悪巧みをしておるわけではないぞい。ただ、純粹に召喚獣の装備がどうなっておるのかが気になるだけなのじゃ」

ここでさらに秀吉の助けが入る。

「いや、しかしだな、木下。試召戦争でもないのに召喚獣を喚び出すというのはあまり良くないぞ」

「西村先生、そろそろ休憩終わらせましょう？」

「そうだな。ほら、席について次の授業の準備をするんだ」

この際強引に無視して強制終了しかない。

あのままバレルよりは、まだ可能性がある。

「ちょっと待った」

しかし、その可能性を否定するかのように、雄二が西村先生の腕を掴んだ。

「なんだ坂本」

「どうやら何かあったのは間違いなさそうだな。こうなりや召喚許可をよこせなんて言わねえ。ただし、何が起きたのか説明はしてもらうぜー」
アウェイクン起動っ」

雄二の呼び声に応じ、白金の腕輪が起動する。

雄二の白金の腕輪の能力はフィールド作成。

……………こういう時、僕の黄金の腕輪は使えないから困る。

干渉を起こさずに、僕のフィールドだけが残るのだから、全く意味がない。

「それじゃ、早速―――試獣召喚っ！」

明久が召喚をすると、おなじみの幾何学模様が現れ―――

「あれ？　なんだか僕の召喚獣が……………？」

おなじみでない姿の召喚獣が現れた。

「おいおい…………。明久のクセになんとか妙に贅沢な装備になったな。これは甲冑か？」

「剣まで持ってるわね。今までとは全然違うじゃない」

「それに、随分と背が高くないですか？」

明久の召喚獣は、白銀の甲冑に身を包み、一振りの大剣を携えていた。

「す、凄いっ！　なんだかかなり強そうに見えるよっ！」

「いやはや…………。こいつは凄いな。試召戦争が本物の戦争みたいになりそうじゃないか」

「そうじゃな。これならば本物の人間とさして変わらんからの」

強そうな装備になって、喜んでいるのか、明久が装備を見せびらかすようにクルクル廻っていると……………

頭が、首から離れ落下した

「「……………」」

明久達は、この異常な状況に絶句していた。その間、生首は畳の上で何度も回転し、卓袱台の脚にぶつかって、こちらを向いて止まった。

「「きゃああああーっ!?!」」

「えええっ!?! な、何これ!?! 僕の召喚獣がいきなりお茶の間にはお見せできない姿になっているんだけど!?!」

明久の召喚獣は、仁王立ちをしたまま、頭だけが転がっている。

デフォルメされていないので、結構グロい。

まあ、叫ぶほどではないだろ。どう考えても。

第八十一問く海棲ワニがいたく（前書き）

サブタイトルく

現在は絶滅してますけど。

第八十一問く海棲ワニがいたく

第八十一問

「あ………うん。はい、明久接着剤」

「ありがとう………って違う！説明を！説明をプリーズ！」

「せめてpleaseと言いなさい」

「発音はどうでもいいから」

『Fクラス 吉井明久

総合科目 1319点』

「わかったよ。点数見てわかるとおり、これは戦闘不能じゃない。実は、今喚び出される召喚獣は、化け物の類か何かになっているんだ」

「お化け、ですか？」

「うん。学園長のミスで、調整を間違えてね。以前試しに作ってたお化け召喚獣のデータが適用されちゃったわけ。現在復旧中だよ」

「けど、どうしてデュラハンなんだろう？お化けなら日本の妖怪とかもいっぱいいるはずなのに」

まあ、それは思うよね。

しかし、これは言っても良いのか……………？

「明久……………実はこれは、召喚者の特徴や本質から喚び出される妖怪が決定されるんだ」

「ほうほう……………って僕召喚システムにバカにされてるの!？」

正解だが、これ以上を答えるのはアレなので、サッと目を逸らす。

「じゃ、じゃが、こうして見る限りは以前の召喚獣よりも強そうではないか。武器も金属のようだし、鎧もつけておる」

「そ、そうだよね。前よりは強そうだよね」

強引に話題を変えにかかる秀吉だが、その話題もあまりよいものではない。

「俺には強くなったようには見えないけどな」

雄二は気づいているようだ。

「……………あ」

どうやら明久も重大な欠陥に気がついたようだ。

「む?…どうしたのじゃ明久よ」

「この召喚獣って……頭が落ちたらどうすれば良いんだろうね」

『……………』

「まあ、そういうわけだから、明久の召喚獣は強くなったわけではないんだ」

「頭を抱えたままでないで戦えないなんて、ハンデもいいところだな」

装備は強くなったけど、むしろ弱くなっている。

僕たちがそうやって騒いでいたら、クラスメイトが数人こちらにやってきた。

「吉井、さっきからなんか面白そうなことやってるな」

「これ召喚獣か？特徴や本質がどうか言ってなかったか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか」

違う……明久のバカは、良いバカなんだ！

……まあ、バカはバカで変わりないんだけど。

「そう言うのならそっちも喚び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣が出てくるからさ」

明久がそういうと、三人は揃って嫌な笑みを浮かべた。

「おいおい吉井。そんなこと言っているのか？」

「俺たちは今までとは違うんだぜ？」

「新しいスタートをきった俺たちが、酷い召喚獣を喚びすわけないだろ？ いいか、見てろよー」

「「「試獣召喚っ！！」」」

三人の声に応じて、召喚獣が出現した。

……ズズズズズ ↑ゾンビ登場

……ズズズズズ ↑ゾンビ登場

……ズズズズズ ↑ゾンビ登場

ああ、さっきヤツらが言ってたことと関係しているな。

新しいスタート↓復活↓ゾンビ

うん、見事にドンマイ。

第八十二話　石炭紀のゴキブリには産卵管があった（前書き）

サブタイトル

生きた化石といっても、変化はしているということです。

第八十二話　石炭紀のゴキブリには産卵管があった

第八十二問

「まあ、お前たち。まだ時期が早かったただけだ。そう気を落とさないで」

「導師さま……次こそは、格好いい召喚獣を喚び出してみせる！」

だから導師じゃないって。

まあ、三人で肩を寄せ合ってやる気を高めているから、今回は何も言わないでおこう。

次はないかもしれないが、頑張るんだぞ。

「しかしまあ、これはこれで面白いもんだな。秀吉はどんな召喚獣なんだ？」

「んむ？　ワシか？　そうじゃな……。ワシの特徴と言えはやはり演劇じゃからな。妖怪ではないが、舞台で有名なオペラ座の怪人あたりが妥当じゃろうか。……どれ。試獣召喚っ」

………ポンッ　↑猫又登場

「へえ。猫のお化けか。可愛いね。秀吉によく似合ってるよ」

「どうやら秀吉の特徴は『可愛い』ということらしいな」

「つ、ついにワシは召喚システムにまでそんな扱いを……」

まあ、人生そんなこともあるさ。

……………秀吉の場合は多すぎると思うけど。

「こうなったら私たちも……………」

「そうね、少しくらい褒めてもらいましょう」

「明久君、いきますっ！」

「あ、うん。楽しみにしているよ」

「試獣召喚ですっ」

……………ポンッ ↑サキユバス登場

「あ……………うん、僕はあっち向いとくね。姫路さん」

明久の反応があまり芳しくないな。サキュバスだし。

あまり刺激の強いものは歌美以外避けたいのだろう。

うん、考察しててバカップルっぷりがよくわかるな。

なぜか今、お前が言うなとか言われた気がするが、気のせいだな。

僕に思い当たるフシはないし。

ないと言ったらない。

……………ごめん、ウソ

「す、凄い召喚獣ね……。…………特に胸が」

「そこまで露出が多いわけでもないのに、随分と大きさが強調されているもんだな」

「と、とにかく上着を……。あうっ！通り抜けちゃいます……。っ！」

しょうがない、少し手伝ってあげるか。

アウエイクン
「起動！」

黄金の腕輪を起動し、生物フィールドを張る。

雄二のフィールドにいた召喚獣は、フィールドと共に消滅した。

「あ、ありがとうございます……………」

うん、姫路さんの召喚獣については、これ以上口に出さない方がいいだろう。

周りのみんなも同意見のようだし。

「そ、そういえば美波の召喚獣はどんなのかな？」

少々気まづくなり始めた空気を察したのか、明久が話題を変え始めた。

うんグッジョブだ。

「ウチなら、瑞希と違って何の心配もないから、妖精とか女神とか戦乙女とか、そういった可愛いのが出てくるはずだから。見てないー！ー試獣召喚っ！」

ゴゴゴゴゴ…… ↑ぬりかべ登場

笑笑笑笑笑wwww

ダメだっ！爆笑しそうだ………っ！

なんて面白いものを出すんだ………これがエンターテイメントというやつか………

第八十三問　辛さは痛さ　（前書き）

やっとテストが終わりました……………

サブタイトル　

辛さは痛みと同じ場所で感知します。

第八十三問／辛さは痛さ／

第八十三問

「と、ところで、ムッツリーニはどんな召喚獣なのかな？」

「そ、そうじゃな、ムッツリーニ、召喚してはくれぬか？」

「……………試獣召喚」

ムッツリーニが眩き、近くに顔色の悪い、タキシード姿の少年が召喚された。

「なるほど確かにいつも血を欲しているイメージがあるからな」

「若い女が好きという点も酷似しておるしの」

ヴァンパイアか。ちなみにドラキュラは固有名詞らしい。

まあ、ドラキュラ伯爵の名前だもんな。

「ここまでくると雄二と博人のも気になるよね。召喚してみてよ」

「ワシらと違って雄二の性格は攻撃的じゃからな。戦闘向きの妖怪が出てくるやもしれんな」

「確かにそうだね。おっきな金棒を持った鬼とか、ごついチェーンソーを持ったジェイソンとか、もしかしたら凄い鎌を持った死神なんかが出てくるかも」

「それじゃ俺からいくぞ。……試獣召喚っ！」

明久らの装備予想を受けつつ、雄二の喚び声に応えて召喚獣が現れた。

雄二の召喚獣は、鍛えられた肉体と、引き締まった肉体と、筋肉に覆われた肉体だった。

「また手ぶらじゃないかぁーっ！」

さすがは雄二の召喚獣だ。堂々と素手で現れた。

「っていうか、雄二の召喚獣は今までのよりも退化してない！？装備がズボンだけじゃないか！」

「しかも何の特徴もなく雄二そのものが出てきおったな。これでは服装以外雄二と区別がつかん」

「ちょ、ちょっと目のやり場に困りますね……………」

「せめて服ぐらいは着た召喚獣をだしなよ」

雄二の召喚獣は下にズボンを穿いているだけで上半身は裸。暑苦しいことこの上ない。

「雄二……。とりあえずその見る人全てを不幸にする召喚獣を早くしまつてよ……」

いや、霧島さんなら大喜びだ。

「わかつてる。こんなもん、俺だって見たくもない」

「じゃが、雄二の召喚獣は結局何の妖怪なのじゃ？これではさっぱりわからんぞ」

「……………ドッペルゲンガーとか？」

ドッペル『ゲンガー』！？

いや、必要ないところに反応してしまった。

それにしても、こいつは何の妖怪なんだろう？

「二人とも何を言っているのさ。これは最近日本で確認された新種の妖怪『坂本雄二』じゃないか。醜い用容姿と汚い性格で美人の幼なじみを騙すって話の」

「明久。召喚獣を喚び出せ」

「ん？別にいいけど。試獣召喚っ」

まだ明久は咄嗟のことには反応できるようにはなっていないようだ。

今回起こることを教訓として、軽はずみな返事をしないように心掛けてもらおう。

「目指せワールドカップ！（ガコッ）」

「あがあっ！蹴ったね雄二！？僕の召喚獣の首をサッカーボールに見立ててゴミ箱に蹴り込んだね！？なんてことしてくれるのさ！」

「まあ、落ち着くんだ明久。今回は明久が悪い。次からは、自分の安全を確保してから雄二をバカにするようにするんだ」

「そうだね」

「待てコラ」

「んむ？雄二。お主の召喚獣の様子が変じゃぞ」

「お？本当だな。何が起きるんだ？」

雄二の召喚獣が身震いをする、その口が大きく裂け、全身から毛が生えてきた。

「きゃあああーっ！！」

「……………狼男」

「なるほど。そういうことか」

「多分、明久の召喚獣の首が回転してて丸く見えたんだろうね」

「随分適当だな……………」

まあ、そこまで凝る必要はないし。

「さて、最後は僕だね。試獣召喚」

第八十四問ゝ人魂はガガンボ？ゝ（前書き）

サブタイトルゝ

ガガンボにつく発光バクテリアによって光り病になり、蚊柱を作ると、人魂のように見えるそうです。

第八十四問く人魂はガガンボ？く

第八十四問

僕の声に反応して、召喚獣が現れた。

そいつは――小豆を洗っていた。

「ああ、小豆洗いね。うん納得」

「え？まったく博人っぽくないじゃないか」

「一つ、ヒントをあげよう。小豆洗いの正体ってチャタテムシって
いう昆虫の出す音なんだよね」

『ああ、なるほど』

昆虫というキーワードがでた時点で、皆さん納得してくれたようだ。

つまり、僕の本質は『昆虫』。

「それはそうと、この召喚獣はきちんと次の試召戦争までには直る
のか？こんなのでクラス間戦争なんてやったら妖怪大戦争になっ
ちまうだろ」

「そ、それは困ります……。怖いのも困りますし、私の召喚獣は恥

ずかしいですし……」

「まあ、一応復旧の目処はたってるよ♪」

いきなり教室に秋音姉がやってきた。

（結構久しぶりの登場だ）

「しかーし！せっかく設定が変わったので、最初っからこの設定変更は肝試しのためということになったのだ！」

「それを言っちゃダメでしょ………」

「まあ、そういうところは良いんだよね。どうしても」

まあ、今更取り繕っても仕方ないか。

「というわけで、肝試し大会を始めるから、準備だよ」

『おーい！誰かその釘とってくれー！』

『暗幕足りないぞ！体育館からひっぺがしてこい！』

『ねえ、ここの装飾って涸れ井戸だけでいいのー？』

「これはまた、凄い騒ぎじゃな」

「うん。雄二が鉄人の補習をサボるために本気で手を回していたからね」

翌日、文月学園二階新校舎三階は、肝試しの改裝作業で賑わっていた。

「それにしても、まさかAクラスまで協力してくれるとは思わなかったよ」

「いや、メープル、行平、霧島さんっていう有力者が賛成したから、影響を受けて参加するのはおかしくないと思うけど」

メープルが参加した理由はもちろん僕がいるからだそうだ。

行平は秋音姉に頼まれたから。

「まあ、Aクラスとてワシらと同じ高校生じゃ。勉強ばかりでは息が詰まるじゃろうからな。期末試験も終わったばかりじゃし、渡りに船といったところじゃろ」

「というかお前ら……作業を手伝ってよ」

さっきから話しながらも装飾を作っているのに、こいつらは何もせず喋っているだけ。

働けよ、馬車馬のように。

というか僕は指示出したり、作業したり、先生と連絡とったりって………仕事おおすぎやしませんかね!?

さすがに少し疲れるって。

「お疲れっす、ハク」

「メーブルく手伝って……………」

「そんなに大変っすか？」

「うん、ちょっと疲れそう」

「この仕事量でちょっと疲れるだけだから、仕事を任せれるんだと思うっす」

「事実は事実なんだからしょうがないでしょ」

「まあ、何でも言うこと聞くというなら、手伝うっす」

「さて、ひとりで頑張るかな」

「断れば、手足縛ってやりたい放題っす」

「是非とも協力してください！」

僕は……………無力だ……………

まあ、メーブルのお願いなら良いけど。

第八十五問く昆虫は四億年まえに誕生したく（前書き）

サブタイトルく

トビムシらしき化石が発見されていて、それが最古の昆虫と考えられています。

第八十五問く昆虫は四億年まえに誕生したく

第八十五問

さて、仕事もだいぶ片付いたし、少し周りの様子を見てくるか。

『うわーっ！』

『なんだこりゃあーっ！』

『きゃあーっ！』

いつの間にか、準備していた教室は妖怪大戦争の戦場になっていた。

「「お前らうるせえんだよ！」「」

しかも先輩達まで怒鳴り込んできた。

なんだよこの展開は……………。

「騒がしいと思ったらやっぱりまたお前か！吉井！」

「お前はつくづく目障りな奴だな……………！」

「え！？僕被害者なんですけど！？」

とかいいたいどうしたんだこの先輩（笑）たちは。

「変たー変態先輩でしたっけ？」

明久、言わない方がよい事実もあるぞ。

「おい！？今言い直そうとしたくせに俺たちの顔を確認して言い直すのやめなかったか！？」

「お前俺たちを心の底から変態だと思っているだろ！常川と夏村だ！いい加減名前くらい覚えろ！」

「それで常夏先輩。どうしたんですか？」

明久が運んでいたロッカーを下ろして先輩達に向き直った。

「テメエ……。個人を覚えられないからってまとめやがったな……」

「さすがはあの吉井明久だ。脳の容量が小さすぎるぜ」

「覚えるに足りない人物だってことを理解して下さいよ、常夏先輩」

おお……明久、結構毒吐くようになったな。

「お前らうるせえんだよ！俺たちへの当てつけかコラ！」

「夏期講習に集中できねえだろうが！」

常村と夏川の後ろにいる先輩たちも「そうだそうだ」と騒ぎ立てて

いる。

「おいおい先輩たち、それは酷い言いがかりだな」

「確かに僕たちはうるさかったが、これも試験召喚獣を使った勉強の一つです。もちろん、学園長も許可しています」

「それに何より、ここは新校舎だ。古くでボロい旧校舎ならともかく、試召戦争という騒ぎを前提として作った新校舎で、下の階の騒ぎが上の階の戸を閉めた教室の中まで聞こえる訳がないだろ？」

うん、その通りだ。少なくとも真面目に教室で授業を受けていれば、ここの騒ぎが聞こえるわけがない。

「要するに、だ。センパイ方は勉強に飽きてフラフラしているところで俺たちが何か楽しげなことをしているのに気がついて、八つ当たりをしにきたってワケだ」

雄二の発言に凶星をつかれ、先輩達はバツが悪そうに目を逸らした。

「それじゃあ言わせてもらおうが坂本よお！お前らは迷惑極まりないんだよ！学年全体での覗き騒ぎに、挙げ句の果てには二年男子全員が停学だぞ！？この学校の評判が落ちて俺たち三年までバカだと思われたらどうしてくれんだ！内申に響くじゃねえか！」

自分が詰まったからって責任転嫁ってどうなのよ。

しかも二年男子全員ではないし。正確な情報も知らずに大声で叫ぶとか恥の上塗りだ。

というか先生の前でこんなこと言ってる方が内申に響くと思うんだが。

そもそも内申気にするくらいだったら、フラフラしてないで勉強すればいいのに。

「おい博人……思考が口から漏れてるぞ」

「ああ、わざとだし。すみませんね先輩。正論言ってしまったて」

第八十五問く昆虫は四億年まえに誕生したく（後書き）

今回が100部目です。

ここまで約6ヶ月……………よく続けました。

これからも頑張ります。

第八十六問　昆虫は地球の生物の種の数の約75%

第八十六問

少し挑発したら、すぐに常夏先輩は乗ってきた。

3年の先輩達に悪感情はないが、常夏は別だ。

文化祭の営業妨害の恨みがあるからね。

「だいたいお前ら二年は出来が悪い連中が多すぎんだよ。バカの代名詞の観察処分者だって二年にしかいねえし、学園祭で校舎を花火で破壊したのだってそのクズコンビだろ？」

「呼ばれたよ雄二。謝りなよ」

「お前のことだろ明久」

「お前ら二人ともだクズ」

「「そんなバカな!？」」

「なんでお前らはそこまで心外そうな顔ができるんだ!?! 普通に考えたら当然の評価だろ!?!」

常夏先輩……………できれば早く逃げて下さい。

「明久をクス呼ばわりなんて、覚悟はおーけいかな？」

「ちよっ……………！いろいろ落ち着くっす、歌美」

「そうですよ。もっとネチネチと社会的に殺してからでなくては」

「ちよっとうきは黙ってて！」

黒いオーラが！歌美から黒いオーラがっ！

チート性能のメープルもだいぶ手こずっているよ。

あ、体力が尽きたみたいだ。

どうやらまだ入院後の体力低下が戻っていないようだ。

そのため、あまりに全力を出したせいで、力尽きるのも早かったようだ。

「で、僕たちを罵倒して話は終わりですか？変たーーモザイク先輩」

新しい名前だな、さすがは明久だ。

「おい、なんだよモザイクって！？」

「忙しいんでしたら早くかえって下さい」

「……………ちっ！言われるまでもねえ」

「あ、先輩の皆さん方、夏の思い出として、肝試しを一緒にやりませんか？」

「お前今俺たちに帰れって言ったよな！」

明久……素なのか？素で言ってるのか！？

「先輩をバカにするとうなるか、教えてやるよ！」

「「試獣召喚」」

『Aクラス 常村 勇作

世界中 174点

&

Aクラス 夏川 俊平

163点』

「さっき坂本が言ったように、これはあくまで試験召喚獣を使った模擬戦だから問題ないよな？これだってうちの学校では立派な授業の一環だからな」

「やれやれ、受けて立ちますよ。モザイク先輩」

『Fクラス 吉井 明久

世界史 194点』

『……………』

明久より低い先輩達の点数（笑）

周りの三年生からも常夏に対する微妙な雰囲気漂っている！

第八十七問／＼寄生バチの中には、仲間が生んだ子を殺してから産卵するものがい

第八十七問

「ふむ、二体一というのも不公平ですので、私も参加しましょう。
試獣召喚」

さてそのこの悪魔。お前が参加したら公平なんて言葉は崩れ去るぞ。

『Aクラス 七伏 行平

世界史 687点』

ほら見ろこのチート性能め！

しかも呼び出した妖怪は……………なんだ？

随分きらびやかな着物姿だが……………

「秋音姉さんから聞いた話では、崇徳上皇だそうです」

崇徳上皇……………日本三大悪妖怪の一つ。大天狗の一種で、保元の乱に敗れた崇徳上皇が島流しされ、失意のうちに没し怨霊になったと言われる。

天皇だし、本質は高貴ということかな？

それにしても変だなあ…………

根は立派な紳士ってことか。

まあ、武器がアイアンメイデンとギロチンな時点で台無しだけどね！

ここから読みとれるのは、紳士が残酷さを着て歩いている。というのが行平の特徴だろう。

そういえば、メーブルの召喚獣はどんなのだろう。

まあ、あとで見せてもらおう。

きっと、いい感じのが出てくるにちがいない。

なんてったってメーブルだし。

「さて、邪魔なのではやく消えて下さい」

一撃。それだけで先輩達は消え去った。

具体的には、馬頭がいきなりアイアンメイデンにブチ込まれて、見るも無惨な姿になって、牛頭は一瞬でギロチンにセットされて、首と鮮血で教室を彩った。

「良かったですね、先輩方。私の腕輪の能力を使うまでもなく終わ

って。妖怪仕様だと、強制フィードバックが私の能力なんですよ♪」
勝負が決し、常夏達がぐくぐくぶるぶるしていると、二人の来客――秋音姉と学園長が来た。

「まったく……何をやってるさね」

「あ、学園長。こんにちは」

「ああ、こんにちは。さて、アンタ達に伝えたいことがあってきたんだよ」

「はい、何でしょうか」

「この肝試し、学園側が援助してやろうじゃないか。大掛かりな設営も召喚の為の教師も応援する。せいぜい派手になるこったね」

「そいつはまた、随分と気前がいいな。どういうことだね？」

「その代わり、作った物はそのままにしておくこと。盆休みあたりに一般公開でもしてやろうかと思ってるんでね」

「あ、行君。肝試しのPRの為、ネットに今回の様子を載せようと思っただけど、手伝える？」

「もちろんですよ」

行平は秋音姉と始終一緒にいるだろうから、リタイアだろうな。

「それと……折角だからね。三年もこの肝試しに参加しな。こんな

ところで小競り合いしているよりはその方が有意義さね」

学園長から通達されて、実は結構興味があつたのか、三年生達は特に嫌がる素振りも見せずに受け入れた。

「冗談じゃねえ。こんなクズどもち仲良く肩を並べて肝試しなんてやってられるか」

「だよな。胸くそ悪い」

常夏以外は。

まあ、常夏は邪魔なので、退場してもらうか。

「西村先生、お願いします」

「戦死者は補習！」

いやあ………行平はいい仕事したなあ………。

「さて、それでは先輩方。よろしくお願いします。折角ですから、勝負しませんか？」

三年生から、代表として一人出てきて、勝負の内容について質問してきた。

「驚かす側と驚かされる側に分かれて勝負するんですよ。今回の肝試しもその方式をとる予定でしたから」

「わかった。では、三年が驚かす側でいいか？ここまで二年が用意

してくれたからな。あとは任せてくれ」

三年生の申し出を受け入れ、二年生は驚かされる側になった。

先輩達がわざわざ仕事の多い驚かす側をやってくれるんだ。

僕たちもしっかりしないとね。

さて、細かいルールを直すか。

第八十八問くモンシロチョウは外来種く

第八十八問

そして、翌日。

文月学園新校舎三階は、お化け屋敷となっていた。

薄暗い雰囲気、外観からでも伝わってくる複雑な構造と、だいぶ手が込んでいた。

「こりゃ、三年も結構本気だな」

「流石は最高学年ってところだね」

僕もここまで良い出来のものが完成するとは思っていませんでした。

「こ、ここまで頑張ってくれなくても良かったんですけど……」

「そ、そうよね。頑張りすぎよね」

化け物の類が苦手な姫路さんと島田さんは、雰囲気満点な外装に、早くも怯えていた。

「雄二。僕らは旧校舎に集合だったよね」

「ああ。三年は新校舎3F、俺たちは旧校舎3Fでそれぞれ準備。開始時刻になったら1組目のメンバーから順次新校舎に入って行くって寸法だ」

現在旧校舎と新校舎の間の渡り廊下には、防火シャッターが下ろされていて、雰囲気は伝わるが、中の様子は窺えなくなっている。

「……………カメラの準備もできている」

今回の肝試しの勝負のでは、悲鳴をあげたペアは失格となる。

その悲鳴を判断するために、カメラを利用する事になったのだ。

また、他にも今回のルールは、二人一組での行動を必須とすることや、チェックポイントで召喚勝負をし、二年生が全滅する前にすべてのチェックポイントをクリアできれば二年生の勝ち、逆も然りとなっている。

まあ、カメラで撮った映像を使ってPVでも作ろうって思っているんだろうな、秋音姉と行平は。

「俺たちの準備は組み合わせ作りだけだな」

「あ。そっか。組み合わせをまだ決めてなかったよね」

ルールでは肝試しは原則二人組。まったく化け物の類を怖がらない人も盛り上がるように、というつもりの処置だ。

「ま、組み合わせは折角だから極力男女のペアになるようにするか。その方が盛り上がるだろ」

「え？雄二、いいの？」

いくらただの遊びとはいえ、勝負にこだわる雄二にしては珍しい。

「別に良いだろ。俺は地獄の鉄人補習フルコースをサボりたかっただけだからな。肝試しの準備も三年がやってくれたんだ。それほど勝負にこだわる必要もないだろ」

「ふーん。なるほどね。だから男女ペアってことにしたのか」

明久は納得したように頷いた。

「で、本音は？」

「翔子にペアを組むように脅された腹いせに全員を巻き込んでやろうと思った」

ものすごい予想通りだ。

「ハクーーー！肝試しのペアをお願い！」

「喜んで」

男女ペアにしといて本当に良かった。

このぐらいしか楽しみないもんね。

まあ、メープルも怖がらないから、僕も気が楽だ。

あ、でも怖がつてるメープルってのも案外良いかも…………

涙目で、ぎゅっと手を握ってくるメープル…………うん、ギャップがあって良いかも。

でもそうなるには、メープルに怖い思いをさせるのが前提だからなあ…………

怖がるものがない上に、有ったとしても、わざわざ怖い思いなんてさせたくはない。

まあ、メープルは笑顔が一番。

一緒に楽しめればいいさ。

第八十九問く幼虫の姿のままのホタルがいるく

第八十九問

「明久……ペアいいかな？」

「もちろんだよ。歌美」

おお、あっちでもペアが成立したみたいだな。

「おっす、博人」

「ああ、海渡か。ペアは………決まったみたいだね」

「ああ、もちろん美春だ。というかそれ以外にないだろう？」

「ハイハイ、バカップルバカップル」

「それこそお前に言われたくねえよ！」

……それは、そうかもしれないな。

先日ケンカしてから、メーブルを寂しがらせたりしないように、一緒にいてあげられるように、今まで以上に距離が縮まった。

まあ、気にするほどでもないな。

ちなみに海渡。

どうやら学力強化合宿のときから付き合い始めたらしい。

何でもうっかり告白したら、了承されたらしい。

やや不幸めな海渡にしては珍しいラッキーだ。

「まあ、今日は楽しんでくれたまえ」

「ああ、楽しませてもらうぜ。じゃあな」

どうやら清水さんのところに戻っていったようだ。

それにしても、僕たちの出番まわってくるかな？

なんか、投入したらすぐ終わるとか言われて一番最後にされたし。

折角手繋いで参加できるのに…………

《な、ねえ……。あの角、怪しくない…………？》

《そ、そうだな……。何か出てきそうだよな…………》

ムツツリーニが設置したモニターから、肝試しの映像が送られてく

る。

まず最初に向かうのはBクラスで、そこは江戸時代あたりの町並みをイメージした作りになっていた。

演出として、光量が絞られていて、なかなかうまくいった

《そ、そっ r じゃ、俺が先に行くから》

《うん……》

カメラは見るからに怪しそうな曲がり角を映していた。

そのペアは、ゆっくり、慎重に歩を進めていった。

《行くぞ……っ!!》

《うん……っ!!》

カメラが曲がり角の向こうを映し出す。

しかしながら、そこには何も映っていなかった。

あー、このペア終わったな。

《《ぎゃあああーっ!?!》》

予想通りモニターから、悲鳴が聞こえてきた。

まったく……少しは情報収集しなよ……

第九十問 く殺虫剤が強壮剤になることもあるく

第九十問

まったく使えない……………

最初の曲がり角で失格など、なにをしにいったんだって話だ。

「これだと最初のところになにがあるのかわからないね」

「あれだけではむしろ余計身構えてしまい、恐怖が助長されるだけじゃな」

まあ、最初はこんな物か。

少なくとも、三年生が本気であることはわかった。

「……………二組目がスタートした」

ムツツリーニがカメラ？のモニターを示す。

「今度は向こうがどんなことをしてくるかがはっきり映るといいね」

「そうじゃな」

「無理だよ、おそろくね」

残念ながら、二組目の様子をみると、僕の予想は当たるだろう。

「え？ 博人、それってどういうー」

《《ひゃあああーっ！？》》

「「きゃあああーっ！！」」

モニターの向こうの悲鳴にいちいち反応するなって。

何が怖いんだか……

「……………失格」

今度はさっきとは若干手前のポイントだった。

まあ、ポイントをずらさないなんて愚かなことはしないのは当たり前だ。

《《ち、血塗れの生首が壁から突然でてきやがった……》》

《《後ろにいきなり口裂け女がいるなんて……》》

いきなり後ろにいたら、まずは距離とって、戦えるようにするのが基本だろ？

「のう博人。さっきおぬしが言った無理とはどういうことじゃ？」

「カメラを使ってるのは、二年生だけじゃないってことっすよ」

流石メーブル、良いタイミングで答えてくれる。

「三年生もこの映像を見てるってこと？」

「むしろ、見ない理由がないね。こっちだけがカメラが使えるなんて、有利すぎるからね。向こうは向こうでメリットがあるんだよ」

「そうなの？僕はてっきり自信があるからだと思ってた」

今度は僕の代わりに、雄二が答える。

「まあそれもないわけじゃないだろうが……。こっちのカメラの映像を見ていたら、標的がどの位置でどこらへんに注意を払っているのかがわかるからな。驚かす側としてもタイミングが取り易いし、死角から襲いかかるのも簡単だ」

「あ、そっか」

位置確認なら他の方法もあるが、注意を払っている場所なんかは、カメラを使った方が断然わかりやすい。

「それに、普通の召喚獣は物に触れないしね。障害物をすり抜けるなんてお手のもの。位置と方向がわかれば、相手の背後に配置するのも簡単だろうね」

「なるほどのう。何台もの固定カメラを用意しなくともワシら自身が相手に情報を与えておるのか。それは向こうもさぞかしやりやすいだろうな」

「……………召喚獣を使った肝試しならでは」

モニターには、三組目が映されているが、またも失敗。

チェックポイントに至るまではいかない。

「あまり切羽詰まってもなくても勝負は勝負だからな。一方的にやられたままっていうのも気に食わねえ」

負けず嫌いな雄二らしいな。

「んじゃあ、Fクラス部隊を投入する？」

「ああ、それがいいだろうな」

第九十一問く鳴くゴキブリがいるらしいく

第九十一問

「皆！順番変更だ！Fクラスの須川&福村ペアと、同じくFクラスの浅倉&有働ペアを先行させてくれ！」

雄二が指示を出すと、しばらくしてカメラ？と？のモニターに見慣れたFクラスの顔が映った。

《行ってくるぜー》

《カメラは俺が持つぞ》

時間をずらして突入するので、朝倉君と有働君には待機してもらって、まずは須川君と福村君がカメラを持ってスタスタと進んでいく。まったく怖がる素振りもなく、件の曲がり角へ迫っていった。

「あ。こうやって何でもないように映してもらうと、さっきよりも怖くなくて助かります」

「そうね。これならまだマシよね」

怖いか怖くないかはおいといて、脅かす側からしてみれば、ズンズン進まれるのはイミシングが取りずらいだろう。

《お。あそこだったか？何か出るって場所》

《だな》

早くも三組のペアがやられやがった曲がり角をカメラが映す。

二人がカメラを構えたまま曲がり角を曲がって、横の壁を映すと、

「「きゃああああーっ!!」」

そこには血みどろの生首が浮いていた。

そして、そのままカメラが背後を映すと、耳まで口が裂けている口裂け女がいた。

「「きゃあああああっ!きゃああああーっ!!」」

まったくうるさいなあと思っていたら、急に耳に入ってくる音が小さくなった。

どうやら後ろからメープルが耳を塞いでくれているようだ。

メープル……………気遣いもできるなんて、やっぱりいいなあ……………

《おっ。この人、少し口は大きいけど美人じゃないか?》

《こちらの方も美人だと思うぞ。首から下がなからスタイルはわからないけど、血を洗い流したら綺麗なはずだ》

全員このくらい冷静なら、僕も助かるんだけど。

「な、なんでアイツらあんなに平気そうなのよ!? アキたちも! 怖くないの!? あんなにリアルなお化けなのよ!?」

顔を青くして島田さんが叫ぶが……………

「別に命の危険があるわけじゃないからね」

「グロいものはFクラスで見慣れたからな」

『女性相手に怖がるなんて言語道断だ!』

うん、Fクラスのメンバーもキチンとした心構えだ。

「グロいものなんてよく見るしね。解剖とか」

「ハクが大丈夫なら大丈夫っす」

《それにしても暗いな……。何かに躓いて転びそうだ》

《ああ。それなら丁度良い。あそこにある明かりを借りて行こうぜ》

モニターに装飾として飾られている提灯が映し出される。

須川君と福村君はそれを拝借するため、近づいていった。

――ボンッ

「「きゃあああーっ!!」」

いきなり提灯に顔や手足が現れた。

セツトの中にお化け提灯か……なかなかうまいな。

それにしても、この人の本質はなんだろうな？

提灯が証明器具であることから、性格が明るいかだろうか？

《お？これ掴めないぞ？》

《召喚獣なら掴めるだろ。試獣召喚っ》

相手の演出は無視して福村君らは、更に先に進み始めた。

「な、なんか……かなりシュールな光景ね……」

「そ、そうですよね……。TVを見ているみたいです……」

「……雄二。怖いから手をつないで欲しい」

「黙れ翔子。お前は全然怖がってなかっただろうが」

「……怖くて声が出なかった」

「嘘つけ。悲鳴をあげるタイミングを計り損ねただけだろ」

まあ、確かにこんな面白い映像は、P Vを作るのに秋音姉と行平も喜んでいるだろう。

……あれ？なんかメーブルが僕の手を握ってきたけど？

ああ、せっかくつないでも不自然じゃない状況なんだから、繋いでいたいってことか。

メーブルの考えを理解し、僕の方からもメーブルの手を握る。

……所轄、恋人握りとかいうやつになった。

第九十二問くカラスは鳥目ではないく（前書き）

サブタイトルく

夜でも目がききます。

第九十二問　カラスは鳥目ではない

第九十二問

そのまましばらく須川君と福村君の快進撃が続いた。

ある程度時間が経ったので、カメラ？を持って、朝倉君と有働君も突入した。

「んむ？　そう言えば雄二。お主、肝試しは極力男女ペアにするといっておらんかったかの？」

まあ、確かにさっきの須川君と福村君、今回の朝倉君と有働君、全員男だ。

「だいたいそうなるようにしてあるんだけどな。俺たちFクラスは殆どが男子だからどうしても数が合わないんだ」

学年全体では男女比はほぼ等しいが、Fクラスは48…2。

夏期講習に参加していたメンバーは男女比がほぼ等しかったから、Fクラスの分だけ男子が多いことになる。

全員が男女のペアになれないのは、仕方あるまい。

まあ、僕にはメープルがいるからね！

《あー、畜生。どうせなら女の子と一緒に良かったぜ……………》

《アヤメちゃんは学校違うから……………》

《ああ、駅前で不良から助けたことで知り合って、現在はお前の彼女の人か？》

なんというテンプレ展開。

《羨ましいか》

《ねえよw》

《死ね》

おお……………なぜかいきなり殺伐としてきたぞ。

《テメエアヤメちゃんの可愛さがわかってねえからそんなことが言えるんだよ》

《何言ってるんだ。ここであいついていないことをアピールしたほうがポイント高いだろうが》

それを口に出さなければね。

《まあ、非リアは頑張ってくれや》

《ああん？ あんま調子乗ってんじゃねえぞ》

《なんだ？ 非リアの逆ギレか？》

《オモテに出ろやコラ！》

あ、音声メーターが赤に。

「……………失格」

何をやっているんだ何を。

全く……メーブルが一番可愛くてきれいに決まっているのに。

「けど、須川君たちのおかげで相手の仕掛けがわかったね」

「だな。朝倉たちもいることだし、チェックポイントまで行くのも時間の問題だろ」

少し間をあけてから突入した朝倉君たちもだいぶ進んでいた。

井戸からろくろ首、柳の下から一つ目小僧などオーソドックスなものから奇抜なものまで、いろいろな演出があった。

しかし、後発の何組かは来るものがわかっていたのに失格になっていた。

まったく情けない。

だがまあ、他の組は概ね順調と言っても問題ない。

その後、朝倉君たちがチェックポイントに到達した。

そこには三年生の人が二人と、布施先生。

つまり、教科は化学だ。

《おお。チェックポイントか。結構余裕だったな》

《Bクラスの教室だけあって長い迷路だったけどな》

ここまでうまく進んできたんだが、チェックポイントはもうだろうか？

《《《《―――試獣召喚っ》》》》

布施先生がフィールドを展開し、それぞれが召喚獣を喚び出した。

まずは三年生の点数が明らかになる。

『Aクラス 近藤良文

化学 326点

&

Aクラス 大竹貴美子

化学 263点』

ふむふむ……………だいたい高いな。

朝倉君たちは大丈夫だろうか？

第九十三問　ツチハンミョウは密室に入っている　（前書き）

サブタイトル　

ツチハンミョウの幼虫はハチにくつき、土に巣が作られ、卵を生むときに侵入し、その後親バチによって巣が閉じられ、密室で成長します。

第九十三問 くツチハンミヨウは密室に入っているく

第九十三問

続いて二年生側の点数。

『Fクラス 朝倉正弘

化学 87点

&

Fクラス 有働住吉

化学 82点』

相手は三年生のトップクラス。

開始早々押されている。

《くそっ！戦力が違いすぎる！》

《当たれええー！っ！》

為すすべもなく二人はやられた。

しかし最後、朝倉君の攻撃が相手を掠め、点数を20点ほど削った。

それだけだが、点数が3〜4倍ある相手にダメージを与えたんだ。

十分仕事はしたと言える。

「というかあれE〜Dクラス並みの点数だよな」

「さらっと勉強方法教えただけなんだけどね」

まったく勉強してなかっただけに、すればするほど伸びる。

これは今のFクラスの強みだな。

「流石はハクっすね。この調子で私に保健たいいk
ーー」

「よし、これでチェックポイントまでの全容がわかったね！これで
勝率はだいぶあがった！一気に勝負に出よう」

今のは別に逃げたわけじゃない。

確かにメープルとベタベタになったけど、情事とかはダメ。

いろいろあれだし。うん、アレ。

「そうだな。今の連中に対抗できそうな点数のペアはドンドン突入
してくれ！」

雄二が待機している皆に声をかけてくれる。

『『俺たちに任せとけっ！』』

「お前たちはなしだ」

『『『ガーン（◇。◇。！』』』』

全員でOTLやってるよ……………

まあ、どうせカッコつけたいだけだから、放っておけば良い。

《よしっ！Bクラス制覇！》

《やったね真一君！》

朝倉君たちが撃破されてから七組のペアを投入し、そのうち五組が
チェックポイントへ到達した。

今回の勝負は点数補充はできないので、何回戦ってか消耗させれば
クリアすることは造作もない。

Bクラスをクリア……ということで次から入るペアは、Dクラスか
らとなる。

《それじゃあ、引き続き俺たちはDクラスに向かうぞ》

《がんばろうね、真一君》

モニターには、Bクラスを突破した二人がDクラスに向かう様子が

映し出されていた。

ここから先はまだ知らないエリアだが、仕掛けは変わったとしても僕にとっては関係ないな。

第九十四問くは虫類の卵は上下の位置が変わると、死ぬく

第九十四問

《怖かったらいつでも言えよ真美。俺が守ってやるからな》

《うん。ありがとう。頼りにしてるからね真一君》

『』『チ……ッ！』『』

モニターからの二人の会話に対して、教室の至る所から舌打ちが聞こえてくる。

やっているのはCやBクラスの男子たちだった。

Fクラスのメンバーはそんなことはしない。

「さて、ちょっと『祝福』してくるか」

「いやいや、『お祝い』の方がいいだろう」

「待てよ。『祝』しかないだろ。やっぱり」

『祝福』『お祝い』『祝』についてはノーコメントだ。

ヒントは、恋愛の試練(?)とその後のささやかな(×100以上)サポートだ。

「頼りにしてるよ、ハク」

「うん、僕も頼りにしてるよ、メープル」

僕たちの間では、頼りっぱなしなんてない。

お互いがお互いを考えているからこそそのギブアンドテイク。

もらった分だけ助きたい。

お互いそう思っている。

……………さて、惚気はここまでにして、ゲームに意識を向けよう。

Dクラスの教室は、Bクラスに比べて狭く、三分の一程度だ。

単純に言えば、クリアは楽なんだろうけどー

《きゃああああっ！》

《え！？どうした真美！？何かあったのか！？》

《な、何かヌメツとしたものが首筋に……！》

やっぱり、そう簡単にはいかないよね。

「ねえ。今の、何をされたか見えた？」

「いや。カメラには何も映らなかった」

Dクラスのセットは、暗く、ごみごみした装飾だ。

これのせいで、脅かされた本人も、何が起こったか、よくわからないだろう。

まあ、逆にそこから原因を推理はできるけど。

《うきゃあああーっ!》

《おいっ! どうした!?》

Dクラスに投入された二組目も失格。

「……………恐らく、直接接触」

「だろうな」

「まあ、十中八九そうだろうね」

こんな時の定番といえば、コンニャクだろうか？

《おわあっ!? へ、蛇!?》

《か、カエル! カエルが降ってきた!》

「ちょっと回収行ってくる!」

「落ち着くっす、ハク。あれはおもちゃっす」

なんだ……………つまらない。

「というか本物があるわけないと思うよ、博人」

ふっ……………甘いな明久！

「実はカバンの中に今朝拾ったアオダイショウが……………」

「ごめんなさい」

チッ…………折角御披露目できると思ったのに。

第九十五問 ヲユーカリは毒によって他の植物を排除する (前書き)

サブタイトル

アレロパシーといいます。

第九十五問　ユーカリは毒によって他の植物を排除する

第九十五問

「それにしても三年生もなかなかうまいよね」

「だな。うまく切り替えてきやがる」

「切り替えるって、脅かし方を？」

「そうっすよ。与えてくる刺激を、視覚から触覚に変えてきたっす」

「向こうも頭を使ってるね？」

さっきまでは、目に見える恐怖。

そして今度は、物に触れる恐怖。

そう簡単に切り替えはできまいから、しばらくは失敗が続くのは、仕方あるまい。

「それならこっちだって手を打ってやろうじゃねえか。Fクラス部隊第二陣、出撃準備だ！」

『『おうっ!』』

気合いの入った返事をしてくれる八人。

まあ、以前よりはそこそこ使える人材たちだけど、根っこがFクラスなのはかわらないからなあ……

今度は一体どんな珍事を起こすのやら。



《おい。坂本や戻ってきたヤツの話だと、どうにもここは何かよくわからん物を当ててくるらしいぞ》

《そうなのか。それだとさっきまで見ていたBクラスよりやりにくいな》

《ああ》

Fクラス第二陣一組目がモニターに映る。

どうやら周りを警戒しているようだ。

さすがにFクラスといえども、今回の相手は少しやりにくいらしい。

《そこで、俺はちよつとした対策を考えてきたんだ》

《対策？なんか良い方法があるのか？》

《おう。とっておきの方法だ。……いいか？突然触ってくるものが怖くなって悲鳴をあげるんだろ？》

《ああ。そうだな》

《なら、話は簡単だ。すべて、打ち落とせばよいのだろう？》

《なっ……………この闘志……………》

こやつ、できる……………！》

《開　　眼（カッ！）》

ヒュッ……………ペタン

《……………》

あ、顔面にコンニャクが乗っかってるよ。

一瞬カメラに映ったからわかるが、十分取れる速さだったぞ。

《ヤレヤレ……………だからお前はダメなんだ……………この中二病患者め……………》

《くっ……………無念》

.....。

《こういうのは、そう、イメージだ》

《な.....なんだと!》

そのリアクションは何なんだろうね。

《これこそが俺の案ーーーーー》

無駄にタメをつくるな。

第九十六問く昆虫とクモはかなり遠縁く

第九十六問

イメージワールド
《幻想世界……………これこそがここを突破する俺の案だ》

中二臭いどころの話じゃないぞ、おい。

《俺たちに必要なのはシチュエーションだ。そう、ここは夕焼け色に染まったグラウンド。そして、飛んできたボール。その進行方向には、可憐な少女》

あつ、モニターに飛行物が映ったぞ。

《ふっ！》

パシィッ！

見事にキャッチしていた。

《ここで、お怪我はありませんか？ーと、ってぎゃあああああ
っ！！》

＜キリッ＞とでもいいかげな顔をイメージの女性に向けたのは良いが、その顔を向けた先には、妖怪（男性）がいた。

そのせいで悲鳴をあげ、失格だ。

何がしたかったんだ？あの二人は。

ただ二人で中二を暴露したただけだろ。

「これだけの人をまとめるなんて、ハクは大変っすね。よしよし」

メープルが柔らかい手で頭をなでてくれる。

労うような、穏やかな撫で心地が良い。

うん、絶対に勝利に導いてみせよう。

「明久、現状はどう？」

「今の二人はともかく、他の三組は順調そうだね」

「そうだな。突然の接触到驚きはするものの、悲鳴をあげるほど繊細な神経をしている連中じゃないからな」

声が出ても失格にならないレベルだ。

「そう。それじゃあ、そろそろ向こうも動きをみせるんじゃないかな」

「ああ。向こうもこっちの様子は筒抜けだからな。また別の方法で

落としにかかってくるだろう」

お互いの情報がリアルタイムで伝わる以上、即対応されるのは避けようがない。

「そうなる、今度は何をしてくるのかな？」

「さあ。見当もつかないがーん？」

モニターからの映像の、雰囲気が変わった。

どうやら広い場所に出たようだ。

「何も仕掛けがなさそうに見えるね」

「うむ。広めの空間だけのようじゃ。あとは……中央の上部に証明設備らしきものが見えるくらいじゃな」

流石は秀吉。

演劇についてなら、ケーブルだけでスポットライトがわかるらしい。

《なんか不気味だな》

《ああ。よくわからねえけどヤバい感じがする》

モニターから、固唾を呑む二人の様子が伝わってくる。

誰がどう見ても、ここが勝負どころであるのは、明らかである。

「……………人の気配」

ムツツリーニが小さく呟く。

確かに画面には、暗闇の中に静かに佇む、人影がある。

向こうの仕掛けか、それとも囿か。

判断はつかないが、少なくとも重要な役割を担っていると見える。

《突っ立っていても仕方ない。先に進むぞ》

《わかった》

第九十七問 イルカは大きくなるとクジラになる (前書き)

サブタイトル

イルカ、クジラの判別は、体の大きさだそうです。

つまり、大きいイルカは鯨で、小さい鯨はイルカといった感じです。
分類上に差異はありません。

第九十七問くイルカは大きくなるとクジラになるく

第九十七問

二人が暗闇の中、歩を進めていく。

そして、空間の中央まであと三步というところで、

バン！

という音をたて、荒々しく照明のスイッチが入った。

そして、暗闇から一転した画面に映っていたのは、常夏コンビの片割れ、坊主頭の変態である、夏川だった。

ーーー全身に可愛らしいフリフリがついた、ゴシックローリータファッションで。

『『ぎゃあああーーーっ!!』『』』

画面の内外から、心の底からの恐怖を現した悲鳴が聞こえる。

幸い僕はあの醜悪な物体を恐れてはいないが、飾ることのない、純粹な気持ち悪さをあのカス坊主に感じている。

「大丈夫？メープル」

「うん、嫌悪感ハンパじゃないけど」

「あれは流石にね……。深呼吸して、まずは少し嫌悪感を和らげよう」

「それよりも抱きつかせて。気分が良くなるから」

胸に寄りかかってくるメープルを、しっかり包み込む。

「……………うん、もう大丈夫」

「それは良かった」

ふう、と呼吸を整えて、メープルは僕から離れる。

それにしてもあの坊主、あまりの気持ち悪さにビククリしたな。

あとで写真をバラまいて……駄目だ。

被害が大変なことになる。

「坊主野郎めっ！やってくれたな！」

「汚いっ！やり方も汚ければ映っている絵面も汚いよ！」

「悲鳴の音は苦手なのにな？……その上気持ち悪いし？」

「ぎゃあああーっ！お化け！いや、お化けじゃないけどお化けより怖いです！」

「うううう……っ！夢に見る……！絶対ウチ今夜は眠れないわ……」

「……気持ち悪い」

「あれは流石にワシも耐えられん……！」

周りのみんなからも、悲鳴をあげられている。

ホントあの坊主は人の気分を害する天才だな。

《なんだ？今、こっちの方から何か聞こえなかったか？》

《ああ。間違いない。そこで悲鳴がーーぎゃああああーっ！》

まずい。二組目もやられてしまった。

しかし………今の状況では打つ手がない。

彼らは非常に残念だったが、避けられなかった犠牲ということで、必ず敵は討とう。

《ぎゃあああーっ！誰か、誰か助けー！》

《嫌だ！嫌だ嫌だ嫌だ！頼むからここから出してくれ！》

《助けてくれ！それができないならせめて殺してくれ！》

《があああああああああーっっっ！！！》

「……………突入部隊……………全滅……………っ！」

「くそおっ！皆あっ！」

突入したものは、全滅。

彼らは精神に多大なダメージを受けてしまったかもしれない。

まあ、メープルが直接見ることがなくて、本当に良かったとは思っている。

第九十七問　イルカは大きくなるとクジラになる　（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

感想、意見等よろしく願います。

第九十八問くバナナがなるのは葉らしいく

第九十八問

『坂本っ！導師様っ！仇を……！アイツらの仇を討ってくれ……！』

『このまま負けたら、散っていったアイツらに申し訳がたたねえよ……！』

クラスの皆が、僕たちに訴えてくる。

だから、導師じゃないって。

というツツコミはひとまず置いて、まあこれ以上画面にあのゴミを映すのは、メープルにとっても良いことではないので、これには賛同だ。

「わかってる。あちらがそう来るなら、こちらもそれ相応の手段をとらせてもらう」

「突入準備をしている連中を全員下げろ！ムツツリーニ&工藤愛子ペアを投入するぞ！」

『』『おおおーっ！』『』『』

流石はあの保健体育ペアだ。

名前だけで教室の志気を上げてくれた。

『『ムツツリーニ！ムツツリーニ！』』』

『『工藤！工藤！』』』

うん、お前らちょっとうるさい。

もう一回ダウンしてて。

志気があがるのは良いが、うるさいのは嫌いだ。

「だってさ。よろしくね、ムツツリーニ君」

「……………（コクリ）」

ムツツリーニに、緊張している様子は見られない。

あのR-18指定されてもおかしくないグロ画像を見ても平然としていられるのはたいしたものだ。

「頼んだぞ二人とも。なんとしてもあの坊主を突破して、Dクラスをクリアしてくれ」

雄二が二人の目を見て話しかける。

Dクラスの教室の広さからすると、坊主で結構スペースをとってい

「皆！もうすぐあの衝撃映像がくるよ！女子は全員目を閉じるんだ！」

ムツツリーニと愛子のカメラが、目的地に近づいていく。

まあ、僕はもう耐性できたし、メープルも然りなので、目を閉じる必要はない。

《ムツツリーニ君。あの先だっけ？さっきの面白い人が待ってるのって》

《……………準備はできている》

ムツツリーニは、その準備とやらか、何かを抱えている。

「やっぱりまた真っ暗になってるね」

「突然現れる方が効果があるだろうからな。タイミングを見計らってスポットライトを入れるんだろ」

モニターの闇の中に、人影を捉えた。

第九十九問く酵母菌って菌だけど菌じゃない?く(前書き)

サブタイトルく

酵母菌は、細菌類などの属するモネラ界ではなく、キノコやカビなどの属する菌界の生物です。

第九十九問く酵母菌って菌だけど菌じゃない？く

第九十九問

「そろそろくるぞ」

「うん……………っ！」

教室中から、息をのむ気配が伝わる。

……………くるっ！

バンッ！（スポットライトのスイッチが入る音）

ドンッ！（ムッツリーニが大きな鏡を置く音）

ケポケポケポッ（坊主が嘔吐する音）

《て、てめえ！なんてもんの見せやがる！思わず吐いちゃったじゃねでか！》

《……………吐いたことは恥じゃない。それは人として当然のこと》

《くそっ。想像を絶する気持ち悪さに自分で驚いたぜ……。道理で着付けをやった連中が頑なに鏡をみせてくれねえワケだ……。》

こんな化け物の着付けをさせられるなんて、不運な人がいたもんだ。

《ムツツリー二君。この先輩、ちょっと面白いね。来世でなら知り合いになってあげてもいいかなって思っちゃうよ》

《ちょっと待てお前！俺の現世を全面否定してねえか！？っていうか生まれ変わっても知り合いどまりかよ！》

《あ。ごめんなさいあまり悪気はなかったんですゲロ野郎。あとやっぱり知り合いも生理的に無理です》

《純粋な悪意しか見られねえよ！って待てやコラ！てめえナ二人のこんな格好を撮ろうとしてやがるんだ！》

《海外のホンモノサイトにUPする》

《じよ、冗談じゃねえ！覚えてろおっ！！》

坊主は　にげだした！

「にしても、愛子はだいぶ毒舌だったね」

「普段はああいうことは言わないっすけどね。行平じゃあるまいし」

「となると、誰かの入れ知恵か」

「そういえば工藤は突入する前に清水に何か聞いておったな」

「ああ、納得」

海渡というときはだいぶ性格が柔らかくなっているとは言え、清水さんはやはり清水さん。

罵倒のレベルは依然として落ちていないようだ。

……まあ、聞きに行った相手が清水さんでよかった。

行平に聞きに行ってたら………ガクガクブルブル。

廃人一人が確実に生産されるだろうな。

《………先に進む》

《多分チェックポイントまであとちょっとだよね》

坊主が走っていった方向に、二人は向かっていく。

少し歩くと、三年生らしき二人が待ちかまえていた。

さっきの仕掛けのスペースが大きすぎたのだろう。

すぐそばにチェックポイントがあった。

「あれ？このチェックポイントは坊主先輩じゃないんだね。ってきりあの人が出てくるものだと思ってたよ」

「別にそういう決まりは作ってないからな。後のAクラスかCクラスにでもいるんだろ」

「出てこないってことはないだろうね」

「あれだけ挑発したんだ、出てくるだろ」

まあ、今までの点数を見た限り、それほど厄介ではないからね。

あれ相手なら楽に戦えるだろう。

第百問 百話記念？（前書き）

今回から百九問まで、記念としていったん本編は中断します。

第百問 百話記念？

100話記念

「さあ、始めました。100部記念企画。バトルロイヤル！」

「司会は私、高橋洋子と」

”名も無き司会さん”がお送りします」

「まず気になるのは名も無き司会さんについてです。いったい誰なのでしょうか？」

「あ、実際名前のないキャラです。司会をできるキャラがいないので、こうして私という即席使い捨てのキャラが軸によってつくられたわけです！名前をつけてあげたい、今後も出番をあげたい、というかたは感想までよろしくお願いします！眼鏡っ娘の美少女ですよ！」

「そうですか。それにしても随分慣れている感じですね」

「それはそうでしょう。なんといっても司会のためだけに生まれたわけですから。司会じゃなくなればその時点で終了ですよ。存在消滅ですよ」

「随分卑屈ですね」

「こうでもして自分の不憫さをアピールしないと感想で出番を望む声がないかもしれませんからね」

「そうですか。時間もおしてきましたので、今回の企画を紹介しましょう」

「今回の企画、『文月学園バトルロワイアル』は文月学園の二年生全員で召喚獣を呼び、最後まで生き残ったものが勝者です。召喚フィールドは校舎全体、科目はエリアによって変更です」

「特別参加として、杉本秋音先生も加わっています」

「さて、それでは予定時間になりましたので開始カウントダウンを始めたいと思います。5……4……3……2……1……0！スタートです！」

ルール

・行動範囲はフィールド内のみに限る。フィールドを出た場合は失格とする。

・各階で旧校舎、新校舎ごとにフィールドが異なる。

・科目は特殊ミッションによって切り替えることができる。

・途中での回復試験は受けられない。

・生徒が腕輪によってフィールドを展開することを禁止する。

・最後に残ったものを優勝者とする。

十分前から校舎を歩き回って、クラスに関係なく校内に散らばっていた僕たちに開始の合図がかかった。

今回はバトルロワイアル。最後まで生き残ったものが勝ちということなので……………

逃げようと思う。

わざわざ後半で不利になる必要もないし、どうせそこらでつぶし合いをしてくれるだろう。

もちろん、闇討ちできる状態にあったら、高得点者はできるだけ暗殺する。

飛び道具がないのが暗殺としては不利だが、相手がバトルしている最中や、気を抜いた瞬間パッとやってしまおう。

とにかくメープル、行平、秋音姉に当たった時に、こちらが有利になるようにしないと。

まあ、どうせ同じことを向こうも考えているのだろう。

Side 明久

よし、今回は豪華賞品が用意されてるってことだから、強くなった力で、優勝を目指してみようと思う。

多分博人なんかは突破できないだろうけど、最後まで足掻いてやるし、少なくとも雄二には引導を渡してやりたい。

日頃の恨みにボコボコにしてやる……………！

さて、敵はいないかな？

カツカツカツカツカツ……………

！どうやら誰か近づいてきているみたいだ。

僕だって最近は点数が高くなったんだ。

操作技術もあるし、ここらで記念すべき一人目を倒すというの悪くない。

よしっ！覚悟っ！

「おや、明久ではないですか」

第百問 百話記念？（後書き）

百話に至るまで読んでいただき、誠にありがとうございます。
これから、どうぞよろしくお願いします。

第百一問 百話記念？（前書き）

ごめんなさい、投稿の順番の間違ひがありました。

百一話と百話が逆の順番でした。

すみませんでした。

第百一問 百話記念？

第百一話 百話記念？

「さて、ご存知司会さんが前回までのあらすじです！
始まったバトルロワイアル！

まだまだ戦闘は序盤。ほぼ全員無傷の状態です！

今回の注目は4人。まさに四天王と呼ぶべき実力者です。

一人目、高速高火力、『速攻』の代名詞、七伏博人！

二人目、紳士でありながらSでもある、七伏行平！

三人目、ラブラブイチャイチャ甘い空気はお手の物、佐藤楓！

四人目、低めの身長に幼い顔。ホントに成人してるのか？杉本秋音先生！

今回の勝負は、この四人がキーですね。

ちなみに現在は博人君が三階新校舎、化学フィールド。

行平君が一回新校舎、世界史フィールド。

佐藤さんが二階旧校舎、英語Wフィールド。

杉本先生が四階旧校舎、物理フィールドです。

それぞれ得意な科目で戦えるワケですが、やはり最も得意な教科がある、佐藤さんと杉本先生が有利でしょうか？

七伏兄弟には、是非ともミッションをクリアして、フィールドの変更をしてほしいところです。

さて、解説はいったんここまでにして、実際の戦場を見てみましょう」

S i d e 博 人

どうやら今現在校舎に張られているフィールドは、

一階の新校舎に世界史、旧校舎に数学。

二階の新校舎に日本史、旧校舎に英語W。

三階の新校舎に化学、旧校舎に現代文。

四階の新校舎に古文、旧校舎に物理。

理系科目の中で、最も強敵と出会う可能性の低い化学を選んだ。

物理はもちろん秋音姉、数学には海渡がいるだろう。

ミッションによって、科目を変えられるというが、さすがに序盤からミッションはないので、正直言って僕は今することはない。

行平のように遠距離で攻撃できるなら教室に陣取って入ってきたものを射殺、という方法もあるが、あいにく僕は近接戦のみ。

というわけで現在校舎の外壁にいる。

今回のルールでは、『校舎』に張られたフィールドを出た時点で失格、とあるが、『校舎内』とはどこにも書いていない。

つまり、この外壁はルールの的にセーフだ。

他人は見つけることができないので、最高の隠れ場所だ。

『Fクラス 七伏博人

化学 743点』

Side行平

さて、空き教室を拠点として、入ってきたものを射殺する体制も整いました。

先ほどから、時々この教室に入ってくる人もいるのですが、ドアをあけた瞬間に敗退しています。

頭のない召喚獣をマヌケな顔で見ている姿は滑稽なものです。

まあ、そのような雑魚は前菜のつもりません。

やはりメインは博人との勝負でしょう。

博人と全力で戦うと、血が踊るというものです。

もちろん、メープルと秋音姉さんとの勝負も同じく楽しみです。

それまでには、Aクラスの上位程度が前菜の役割を果たしていただけると嬉しいのですが。

まあ、それでも物足りなければ、明久を狩るのも面白そうですね。

フフフッ。先が楽しみですよ。本当に。

世界史

766点
『

第二百二問 百話記念？

百二問 100話記念？

「さて、今回も司会さんの解説から始まります。

高橋先生、なぜ皆さんここまで必死になっているか、ご存知ですか？」

「優勝商品が豪華と聞きましたが……」

「その通りですよ、高橋先生。なんと今回の商品は――――

なんと！願いを叶えることができます！」

「つまり、可愛い服を着せ替え――あれ？何を言おうとしていたのでしょうか？」

「おそらく、別世界の影響でしょう」

「よくわかりませんが、そうなのでしょうか」

「さて、まあ気を取り直して、本戦を観ていきましょう」

S i d e メ ー プ ル

フフフツ！

今回のバトルロワイヤル、まあなんと学園長も気前の良いことだ。
なにせ常識的な範囲とはいえ、願いを聞いてくれる。

これで――――――

ハクに言うことを聞いてもらおう。

いつもはできないようなこととかを実践する良い機会ね。

エヘヘ……………

ちょっとくらい強気に出てもらうように命令したりして……………

あ、他には……………少し、良いようにされたり……………

あれ？こう考えるともしかして私、ハクに責められたかった？

そういえばいつも私が主導権握ってるから、可愛い姿をみせてくれるけど、そんはことしてるから凜々しい姿を見せてくれないんだ。

だから、ハクに主導権をとりたいのね。

ああ、考えるだけでも楽しみ。

まあでも、そのあとはあまり調子に乗られないようにきっちり主導権は握らないと。

私の目的のために、この勝負は本気の本気だ。

『Aクラス 佐藤楓

英語W 730点』

S i d e o u t

「さて、試合開始から、だいぶ時間がたちました。

多くの選手が、脱落していきました。

しかし、勝負はまだこれから。

現に、四天王はまだ無傷です。

このまま四天王の独走をゆるすのか、それとも誰か挑戦者が現れるのか。

それが中盤の見所になりそうです。」

S i d e 博人

……………なんか、この勝負は負けられないような気がしてきた。

自分の身の安全ということもあるけど、何より僕自身に願いがあるからだ。

それはもちろん—————

ミカンの木だ。

アゲハはミカン科植物を食草とするのが多いから、ここで手にはいるとふところが非常に嬉しい。

まあ、このぐらいしか望みなんてないしなあ。

だからといって、気を抜くつもりはないが。

そろそろ脱落者が増えてきたが、まだこの場から離れる必要性は感じないな。

おそらく、勝負を促すためにフィールドの範囲が小さくなるだろう。

その時になれば、我が家の人間にはこの場所にとどまることなど危険以外のなんでもないので、本格的な活動をせねばならんだろうな。

第百三問 百話記念？

第百三問

百話記念？

Side行平

「さて、中盤に入ってきましたので、戦闘エリアを制限します。今から15分後に、一階新校舎、世界史フィールドを封鎖します。中にいる生徒は、速やかに移動してください。なお、時間内にフィールドから出なかったものは失格となりますので、ご注意ください」

スピードから、司会の少女の声が聞こえてきます。

ふむ……………悪状況ですね……………

仕方ありません。時間ギリギリに上の日本史フィールドに……………

いや、ここは殲滅のチャンスですね。

幸いここで多くの敵を殲滅すれば、またどこかーおそらく一階旧校舎か、四階のどちらかがー封鎖されます。

そうなれば、こちらとしても悪いことではないので。

まずは私は、階段上から優雅に射殺するとしましょう。

ククク……………ハハハハハハハハ！

『Aクラス 七伏行平

日本史 788点』

Side 明久

まずいことになったなあ……………唯一の得意科目が……………

しょうがないから、移動しよう。

以前の僕なら、何も考えずすぐに移動しただろうけど、キッチンと考
えれば、こっちで時間つぶしてからのが断然有利。

頭が良くなってるのが実感できるね。

ま、そろそろいい時間だから、移動しよう。

ちょうど、階段にさしかかった時だった。

「これで十四人ですね。次は……………明久ですか、死になさい」

容赦なく行平から銃弾が放たれる。

「どうわぁっ！」

マズいマズいマズいマズいマズい

掠ったよ、今掠ったよ！

掠っただけなのにこの激痛。

化け物か、アレは！？

階段が使えない以上、一階旧校舎に逃げるしかない。

タイムアップギリギリ、というところで、なんとか数学フィールドに入れた。

雄二を殺すまで、負けるもんか……………

『Fクラス 吉井明久
数学 95点』

フィールド封鎖から数分後、まだ僕は落ち着ける場所を見つけてな

かった。

そんなとき、突如としてネギが飛んできた。

「どうわあっ！」

間違いない。このネギ。

「疲れているところ申し訳ないが、消えてもらうぜ」

Dクラスにして、Aクラスレベルの成績優秀者、浅井海渡……………

『Dクラス 浅井海渡

数学 432点

VS

Fクラス 吉井明久

数学 95点』

第百四問 百話記念？

第百四問 百話記念？

S i d e 海渡

観察処分者、吉井明久。

バカの代名詞………といったところだが、今戦っている相手は、バカと呼ぶには強すぎる。

観察処分者としての操作技術の高さ、低くない点数。

早めに、かつ最小限の被害で潰すべき存在だ。

召喚獣に、ネギナタを構えさせ、突っ込んでいく。

まずは、見切りにくい突き。

吉井はこれを転がってかわすが、突きの体制から切りかかり、追撃する。

今度のこれも、直撃はせずに受け流された上に体を移動させられたので、回避された。

武器は完全に振り切ったので武器での攻撃はあきらめ、威力ではなく、牽制目的の蹴りを入れる。

受け流された時のまま、防御の姿勢であった木刀によって直撃ではなくなったが、壁にかなりの勢いで激突させた。

「どうしたよ？こんなもんか」

「いてて……………まだまだ……………」

「早くくたばってくれと助かるんだがな」

再び距離を詰め、ネギナタを振り抜く。

紙一重、というところかわされ、隙をさらすことになる。

攻防逆転。

相手の木刀を受け続けることになる。

しかし俺だってわざわざこんな強敵相手に戦いを挑んだわけがない。

連続で振るわれる木刀の嵐をネギナタで受け続けながら後退し、ゴミ箱の中に召喚獣を入れる。

ドゴォ！

対観察処分者用の戦術。

相手が物理干渉をすることを逆手に取らせてもらった。

物理干渉のない、一般召喚獣ならゴミ箱をすり抜け、中に隠れることができる。

しかし、観察処分者の召喚獣では、相手の召喚獣に攻撃を当てる前に、ゴミ箱が障害物となる。

よって、相手は無防備。

今がチャンスだ。

「くたばれえっ！」

そのチャンスを活かすため、強力な一撃を――――

「貴様雄二っ！そっちがくたばれ！」

「うるせえ！死ね！」

Fクラス代表、坂本雄二が打ち込もうとした。

その後も、目の前で醜い争いを続けている。

「両方くたばれ」

一閃。

お互い攻撃を放つ直前のポーズで、真っ二つに切り裂かれた。

「ぎゃああああああっ！痛いっ！あっ、追撃やめてっ！みじん切りはダメだから！」

ストレス発散完了。

勝負はあやふやになっちゃったが、二体の強敵を葬れたのは手放しで喜ぼう。

坂本は点数が高いからな。

無傷で倒せたのはヤッパリいろいろバカだからだな。

S i d e 秋音

ふんふんふふーん♪

準備完了♪

これで私の有利は揺るがないね。

S i d e 博人

さて、だいぶ人数が減ってきたので、外壁から離れ、校舎内を動き回ることにしたのだが、今度は四階新校舎――古文フィールド――が封鎖されることになった。

三階であるここにも流れてくる者がいるだろうから、再び身を隠す
としよう。

第百五問 百話記念？

第百五問 百話記念？

「さて、戦いもそろそろ終盤になってきました！未だ四天王は無傷！流石と言ったところです！ここからどんな勝負があるのでしよう！？」

S i d e 博人

現在、使えるフィールドがかなり制限されて、範囲は二階と三階のみ。

それも、教科は日本史、英語W、化学、現代文だ。

ここで、少しおかしい点がある。

初期のフィールドと得意科目から考えて、もといた場所を追いやられたのは二人、行平と秋音姉だ。

行平は日本史に移ったとして、秋音姉は？

ここ化学フィールドは僕のテリトリーであることがわかってくるだろうから、入ってくることはないだろう。

他の二人のところもだ。

そう考えると、秋音姉は現代文フィールドにいるのだろう。

だが、ミッションがあるのに、科目を変更しようとしていない。

おそらく、何か策があるのだろう。

「よう、良いところであつたな。博人」

考え事の最中、海渡が勝負をしかけてきた。

『Dクラス	浅井海渡
化学	223点
VS	
Fクラス	七伏博人
化学	743点

ここでは僕の方が圧倒的有利なのだが、何を考えているのだろうか。もしくはただ戦いを求めてきたか。

おそらく後者だな。

まあ、どちらにしる潰すのみなので、特に返事もせず切りかかる。

「うおっと！あぶねえな」

振り下ろした右の一撃をかわされたので、地面にその右手をつけ、支点とし、体全体を使って蹴りを放つ。

今度はキチンとヒットし、攻撃をガードしたネギナタごと吹き飛ばす。

そのまま追撃を行うため、一直線に駆け出す。

渾身の右の一撃はかろうじて起き上がった海渡から外れた。

しかし、読み通りだ。

そのまま回し蹴り、左手の斬、肘のブレードとつなげていく。

「くっそ………容赦ねえなおい」

『Dクラス 浅井海渡

化学 67点』

「悪いが、僕は負けることができない（ミカンの木のために）」

「俺だって、勝つためにやってんだよ」

「なるほど。お前は『勝たむとして』であり、僕は『負けじ』というわけか。僕としては、相手に勝つことよりも、負けないことを重要視するからこの言葉を選んだのだが、なかなか互いの認識が言葉に現れておもしろいじゃないか。まあ、今のは徒然草で、『勝たむとうつべからず。負けじとうつべきなり』ってところから引用するなら、僕のが戦いに向いているようだ。まあ、双六について記述なんだけど」

負けは即ち死と直結する。

相手に勝てば負けないワケだから、今みたいに勝つことも多々あるがね。

「おしゃべりはここまでだ。じゃあ、終わりだ」

死に体の海渡に武器を振り上げる。

「悪あがきはさせてもらうぜ！」

短く持ったネギナタで顔面を狙ってくるが、その程度の予想はできている。

首を動かして掠ることもなく回避。

そして、一撃。

『Dクラス 浅井海渡

化学 D E A D

V S

Fクラス 七伏博人

化学 743点』

無傷で勝利、満足のいく結果だ。

『科目変更！科目変更！ただいまより、このエリアは公民となります！』

スピーカーからアナウンスが響く。

それは、悪魔の襲来を告げた。

「おや、心外ですね」

第百七問 百話記念？

第百六話 百話記念？

悪魔、襲来。

「さて、存分に死合いましょう」

どうする！？

選択肢としては逃げるのが一番無難だ。

だからこそ、何かしら対策があるかもしれない。

まずは、様子見で速攻してみよう。

召喚獣を駆け出させる。

行平はボウガンを構え、迎撃。

放たれる銃弾の嵐を避けられるものは避け、捌けるものは捌いていく。

ある程度近づいたところで、バックステップされ、距離を取られ、

また乱射される。

それを後退しつつかわす。

そして、そのまま逃走。

「まあ、今のところはこれで良いでしょう」

S i d e メ ー プ ル

「さて、そろそろ出てきたらどうっすか？ 秀吉君に康太君」

虚空に向かって問いを放つ。

「……………どうしてバレた」

どうして、ねえ……………

「そんなの私がハクの種類だからっす」

「妙に納得してしまうのはなぜじゃ……………？」

さて、どうやら同盟を組んでいるこの二人には、私の願いのために、退場してもらおう。

「それじゃあ、バイバイっす」

一瞬で距離を詰めて、秀吉君に片手刀を振る。

「……………危ないっ！」

ガキンツと音を立てて割り込んできた康太君が防ぐが、点数差により吹き飛ばし、秀吉君もそれに巻き込まれた。

「いやあ、かつこよかったっすよ康太君！お姫様を守った騎士っすかね！でもまだまだ足りないっすよ！せめて体を温めるくらいにはなってよ？ハクを下さなくちゃならないっすから！」

戦いの空気に、テンションがあがってくる。

勝ち続ければ、ハクといろいろできるからね。

ああ、わくわくが止まらない。

この衝動が今すぐ叶えられないなら、欲求不満程度はぶつけでも良いよね？

「あなたがたの末路をオノマトペで表現してみると、ガリガリ、プチプチ、グチャグチャ、バラバラってところね」

体勢を立て直して構えを取った二人に、刀を投げる。

私の点数から放たれる凶器は、刃だけでなく、たとえ柄が当たってもただではすまない。

慌てて飛び退いた二人に肉薄し、盾を使って裏拳。

グシャッ！と康太君の頭を吹き飛ばす。

驚いている秀吉君の召喚獣も、手刀で首を切る。

うーん、呆気ない。

最初は楽しめるかと思ったんだけどなあ。

ヤッパリハクとかと戦わないと満足できないかな？

「さて、次は歌美っすか？」

「あれ？バレてたのかな？」

強敵を察知し、急いで武器を拾う。

『Aクラス 佐藤楓

英語W 730点

VS

Aクラス 稲垣歌美

英語W 387点』

第一百七問 百話記念？

第一百七問 百話記念？

「んじゃ、問答は必要ないっすよね」

「うん？当たり前のことだね？」

歌美はレイピアを、私は刀と盾を構える。

緊張状態の中、先制攻撃をしかける。

速攻は、おっと………恋人の得意技である以上、私もキチンと目に焼き付けてあるから、行動に移せる。

まずは、威力のない牽制の斬。

もちろんかわされて、レイピアで反撃されるけど盾で受ける。

相手の武器はレイピア一本なので、一回攻撃を受け止めれば、二撃目がすぐにくることはない。

その隙について、足を払う。

ジャンプして避けられるけど、狙い通り！

空中の歌美に刀で突きを入れる。

レイピアで軌道は逸らされたけど、それでも軽くはない切り傷を入れた。

そして、私の腕輪の能力も。

攻撃が当たる瞬間に『毒』を武器に付与した。

後の大勝負のために、最も点数の消費が少ない、武器に付与という方法の上、一瞬だけなので、減った点数は一点だけ。

これで相手も心理的に急ぐだろうから、やりやすくなったかな？

長期戦になればこちらが断然有利なので、いったん距離を大幅にとる。

すかさず歌美が距離を詰めてくるけど、多少の焦りが見える。

それでもある程度は冷静なようで、大振りはなく、絶え間ない連撃を放ってくる。

どうやら、まずは一撃入れて、そこを起点にして流れを持っていきたいみたいね。

私からしてみると、ちょっと甘いかな。

ハクだったらいつも以上にフェイントしかけて錯乱させてくるだろうし、ユキだったら毒なんてお構いなしにいつも通り撃ち殺そうと

してくるだろう。

でもまあ、今はまだメインじゃない。

連撃を続けて集中力が切れ始めてきた歌美の攻撃は、だいぶ読みやすくなってきた。

その一撃を受け流し、カウンターを入れる。

勢いよく吹き飛ばけど、容赦はない。

そのまま相手の落下地点まで追いつき、刀を振り下ろす。

「あれ？負けちゃったかな？」

『Aクラス 稲垣歌美

英語W 0点』

「科目変更！科目変更！三階新校舎、旧校舎のフィールドが物理フィールドに変更されます！また、二階の新・旧校舎は現時点より五分後に閉鎖されます」

……………え？

つまり、実質全フィールドが物理ってこと？

やってくれたな、秋音さん。

そして、その後三階旧校舎も封鎖され、四人が集まった。

第百八問 百話記念？

第百八問 百話記念？

四人――僕、行平、メープル、秋音――が集まった。

どうやらこれが最終決戦のようで、他の人の気配は感じられない。
いいね、全力で潰し合えるわけだ。

「にやはは、ゴメンねー私も勝ちたいから」

「まさか、ここまで用意周到に進められるとは思いませんでした」

「まあ、どんな条件だろうと、私は負けないから」

「負けない。それだけだ」

まずは、恒例の僕が突っ込む。

続いて、メープル、行平も動き出す。

――――標的を秋音姉に向けて。

「落ちろっ！」

腕をクロスさせ、クローで斬りかかる。

それをチェーンソーで防がれるが、行平の射撃で、追撃を免れる。

『Fクラス 七伏博人

物理 642点

VS

Aクラス 七伏行平

物理 452点

VS

Aクラス 佐藤楓

物理 431点

VS

物理教師 杉本秋音

物理 975点』

点数は、秋音姉がぶっちぎり。

それゆえ、全員で狙っている。

この戦いは、勝者のみが願いを叶えられる。

それならば、最も勝者に近い者が狙われる。当然だ。

もちろん、秋音姉の点数がある程度下がったら、次は僕だろう。

だが、それはそれで楽しそうだ。

まずは、秋音姉との戦いを楽しませてもらおう！

「こい！『Dynastes hercules ecuatorianus』《ディナステス・ヘラクレス・エクアトリアヌス》」
！『Dorcs titanus palawanicus』！
ドルクス・テイタヌス・パラワニクス

昆虫召喚を使い、特に攻撃向けの昆虫を呼び出す。

そのまま自分を含め、三体で取り囲む。

一体一体フェイントも入れて、慎重に攻撃していく。

「あーもう！鬱陶しい！」

秋音姉が、周囲に腕輪の能力である電撃を放ってくる。

バックステップで最大限遠ざかったが、それでもいくらかダメージが入る。

「そこっ！」

強烈な電撃によって、一瞬姿を覆うほどの光が発生し、それに隠れ第二撃を放つ用意を終えた秋音姉が紫電の槍を飛ばしてくる。

――回避、不能

ダメージを最小限に抑えるために、体を捻るが、左手に当たる。

フィールドバックで激痛が走るが、無視する。

「こい！『オオカマキリ』『アオオサムシ』」

さらに肉食性の昆虫を召喚。

一気にたたみかける。

しかし、再度電撃で吹き飛ばされて、距離をあけられる。

「さて、どうするか……………タッチ」

召喚獣に、近くの壁にあるスイッチを押させる。

「科目変更要請。教科は保健体育」

三階新校舎の科目変更のミッション――設置されたスイッチをすべて回ること――を達成する。

『科目変更！科目変更！残りフィールドが一つなので、現在より、三階新校舎の物理フィールドが保健体育フィールドとなります！』

「さて、同じ土俵で死合おうか」

第百八問 百話記念？（後書き）

学名って格好いいよね。

そういう話でした。

ちなみにヘラクレス・エクアトリアヌスとパラワンオオヒラタクワガタです。

いままでありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第百九問 百話記念？（前書き）

今まで読んでいただき、誠にありがとうございます。
これからも、駄文ながら頑張っていきたいと思います。
今後とも、どうぞよろしくお願いします。

第百九問 百話記念？

第百九問 百話記念？

『Fクラス 七伏博人
保健体育 432点

VS

Aクラス 七伏行平
保健体育 450点

VS

Aクラス 佐藤楓
保健体育 419点

VS

物理教師 杉本秋音
保健体育 449点』

スコアは全員ほぼ同じ。

よって、誰を初めに狩るか、などは決まらない。

まあ、そんな状況でも、僕の安定行動は速攻だ。

日頃の恨みを込め、行平に突っ込む。

死ねっ！

「ごめんハク！でもハクにも利があることだから！」

「それが怖いんだよ！」

行平に攻撃するのを、メープルが横から攻撃を入れてくるので回避する。

反撃したいところだが、標的を行平の射撃を防いでいる秋音姉に変える。

「あっ！この卑怯者めっっ！」

「そっくりそのまま返す！」

クローで裏拳をするが、チェーンソーで弾かれる。

すると行平が射撃をしてきた。

ちらりと見ると、その隙にメープルが攻撃していた。

なんというか……………

『ややこしい!!』

「全員まとめて相手する……………こい！『ハンミヨウ』『クビキリギス』『オオゴキブリ』！」

「毒弾三方向！」

「紫電！」

全員思ったことは同じようで、敵全員に攻撃を仕掛けた。

まあ、全部防がれてるけど。

「こうなったら決めにいくか……………『飛蝗現象』」

『Fクラス 七伏博人

保健体育 12点』

点数のほとんどを使い、大量の『サバクトビバッタ』を召喚する。

飛蝗現象―――無数のバッタの大群が植物を食い尽くしながら移動する現象

「いけっ！」

そのバッタの大群が、三人に襲いかかる。

廊下は羽音で満たされ、声は聞こえない。

球状に動くバッタたちによって、中にいるその姿は見えない。

さすがにこの大群を操るのは至難の業で、自然と解除されてしまう。

その災害の跡地に残ったのは――

行平とメープルだった。

だが、メープルはもう虫の息。

地面に伏している。

行平はおそらく、腕輪の能力『絶対防御』を使い続けたのだろう。

外傷はなかった。

『Aクラス 七伏行平

保健体育 31点』

能力を使いづつけたから、点数は減っているが……………

集中力を使い果たし、点数も劣っている僕に、勝機はないだろう。

「それでも……………それでも僕は、行平に復讐したい！」

底をついた力を振り絞り、召喚獣を突っ込ませる。

行平は狙いを絞って、必中させる気だ。

速く、速く、速く！

跳躍し、クローを振りかぶる。

対する行平も、引き金に力を込める。

そして――――

飛来した刀が二人を貫いた。

『……………え?』

「私の勝ちね」

見ると、メーブルの召喚獣が伏せたまま投擲を終えた体制になっていた。

『ここに、勝者が決定しました! 勝者は、Aクラス佐藤楓さんです!』

一番最後に処理すればいいかと油断していたのが仇となったか。

……………全身に悪寒を感じているのだが、どうすれば良いのだろう。

「おめでとうございます。メーブル」

「ありがとう、ユキ」

「それで、願い事は何をするんですか？」

「ちよつとご主人さま……………ハクにお願いを聞いてもらおうと」

「ご主人様！？何！？何要求されんの！？？」

「それは……………キャツ」

「逃げる！」

「またあとでね」

「くそおおおっ！」

その後、要求を吞まされたんだけど、メープルが冗談のつもりで言
った

『たまにはこういうのもいいね……………お父さん♪』

には、背筋を凍らせざるを得なかった。

ガクガクブルブル

第百九問 百話記念？（後書き）

百話記念が終わったところで、申し訳ありませんが、一週間ほど、投稿を休みます。すみません。

第百十問 蝶は前足に人間でいう舌とおなじ器官がある（前書き）

一週間ほどお待ちしました。

第百十問 蝶は前足に人間でいう舌とおなじ器官がある

第百十問

《《試獣召喚っ》》

画面をみると、召喚をしていた。

ムツツリーニは吸血鬼、愛子はのっぺらぼうだ。

「工藤さんの召喚獣がのっぺらぼうなのはどうしてなんだろうね？」

「さあな。顔がない、つまり素顔を見せないところに何かがあるのかもしれないな」

いや、それは深読みしすぎ。

「そう言えば、ワシは前に演劇の題目の怪談話を探しておったのじやが、その中ののっぺらぼうの尻目というものがあっての」

「尻目？」

「うく。そののっぺらぼうはなんでも、人に出会くと全裸になったそうだ」

うん、わかりやすい。

「それはそうと、こっちもだけど、向こうも向こうで分かり易いお化けだね」

「そうだな。おかげで敵の行動も予測しやすそうだ」

三年生の召喚獣は、フランケンシュタインの怪物とミイラ男もしくは透明人間かもしれないーだ。

ちなみにフランケンシュタインは、怪物を作った博士の名前なので、フランケンシュタインはお化けの名称ではない。

おそらく特徴は、根は優しいとか、怪我をしやすいかだろう。

透明人間だった場合は、影が薄いかだろうけど。

『Aクラス 市原両次郎

保健体育 303点

&

Aクラス 名波健一

保健体育 301点』

点数は三百点越え。なかなか優秀なヒトのようだ。

でもまあ、『なかなか』程度では、勝ち目があるとは思わないが。

なにせー

『Aクラス 工藤愛子
保健体育 479点

&

Aクラス 土屋康太
保健体育 557点』

この点数だ。

勝負は一瞬。

あまりの戦力差により、一度も組み合うことなく、決着はついた。

保健体育に置いては、この二人は教師にも負けないだろう。

まあ、僕は本気なら負けることはない。

本体のスペックで圧倒できるからね。

「ねえ。今の勝負、何があったか見えた？」

「ああ。はっきりと見えたわけじゃないが……ヴァンパイアの方は、一瞬で狼に変身してフランケンを切り裂いて、また人型に戻っていた」

「それで、のっぺらぼうの方は？」

「僕ははっきり見えたんだけど……一瞬で全裸になってミイラ男をボコボコにじて、また服を着ていた」

なんで服を脱いだのかは理解不能だ。

「あと、ムツツリーニはその一瞬で出血・止血・輸血を終わらせていた」

そのスケベ心には、僕も驚愕を覚えた。

それにしても、なぜか握っていた手が、メイプルの胸でギュッと抱かれているのはなぜだろう。

ふわふわで柔らかか……げふんげふん

ああ、召喚獣とはいえ、全裸を見たからか。

メイプル以外には興味ないのに。

第百十一問　カマキリは、頭を食べられても交尾を続ける

第百十一問

《じゃあ、Bクラスもクリアってことで。次はどこに行けばいいんだっけ？》

《……………Cクラス》

《はい。了解。……ところでムツツリーニ君。どうして鼻にティッシュ詰めているのかな？》

《……………花粉症》

《へえ。ふん。花粉症ねえ》

何かティッシュの理由に思い当たるのか、愛子はニヤニヤしていた。

うん、まあ理由なんてバレバレなんだけどね。

《あれ？この口が二つある女の人ってなんのお化けだっけ？》

《……………ふたくち女》

《じゃあ、あっちの身体が伸びてる女の人は？》

《……………高女》

《そっちの毛深い男の人は？》

《……………どうでもいい》

なるほど、ずいぶんムツツリーニらしい紹介だな。

「順調だね。このままだとあの二人で全部突破できちゃうんじゃない？」

まあ、確かにあの二人はお化けで悲鳴をあげるなんてことはないだろうが……………

「いや、そうでもない。さっきの保健体育の点数を見て向こうもムツツリーニの正体に気がついただろうからな」

「そろそろ対策をしてくるだろうね」

「え？．．．どうということ？．．．」

「三年はムツツリーニって名前は知らなくても『保健体育が異常に得意なスケベがいる』ってことぐらいは知っているだろう。そうになると、弱点もバレている可能性が高い」

「弱点？弱点って言っても、ムツツリーニは鼻血を噴いて倒れるだけでしょ？別に悲鳴をあげることはないじゃないか」

「ああ。悲鳴はあがらないかもしれないな」

やはり、強ければ強いほど情報が筒抜けになる分、デメリットもデカいなあ。

「それってどういう意味さ雄二」

「悲鳴じゃなくても標的に大きな音を立てさせるのは可能だってことだ。例えば、鼻血の噴出音とか、な」

「あ、あはは………。何を言ってるのさ雄二。まさか三年生がそんなことを」

「まあ、見ていればわかる。……そろそろくるぞ」

モニターは『ムツツリーニ対策』とみられる女性の姿を映していた。

《………っ！（くわっ）》

《む、ムツツリーニ君？何をそんなに真剣な顔をーって、なるほどね……》

徐々に姿が鮮明になってくる。

その女の人は結い上げた髪の切れ目の美人だった。

まあ、メイプルには及ばないけどね！

その女性は着物を着崩しているが、メイプルがやった方が色っぽいと思う。

うん、さすがメイプル。僕の思考がメイプル一筋になっている。

『……………（グッ）』

Fクラスの面々は、感動を分かち合うために、力強い握手を交わしていた。

うん、叫ばないだけ良いことだ。

第百十二問くアブラムシはメスだけで増えることもく

第百十二問

まあ、霧島さんに近いタイプの人だから、舞い上がるのは仕方ない
………のか？

「……雄二」

「み、見ていない！俺は全然見ていないぞ翔子！」

「……私だって、着物を着たらあんな感じになる」

おー、珍しいな。自分と似たタイプの人間だから対抗意識からかム
ツとしている。

「ああいや、別にお前に着物着てほしいとは言っていないんだが」

「……丁度良かった。結婚式にどちらを着るか迷っていたから」

「ん？ドレスと着物か？まあ、誰と結婚するかは置いて、悩む
くらいなら両方着るって選択肢もー」

「……じゃあ、着物と猫耳メイド服の両方着る」

「なんだその選択肢！？出席する両親も色んな意味で涙が止まらな

「いだろ!?!」

「ハクは、どっちがいい?」

「うーん、式場によるからねえ……………と言っても僕大学院は行くからだいぶ先だよ」

「それまで我慢かぁ……………」

《……………この……………程度……………で……………この俺……………が……………っ!》

《ムツツリーニ君。足にきてるみたいだケド?》

《……………(ブンブンブン)》

うん、ムツツリーニがピンチだ。

こんな理由でいちいちピンチになるやつがいるのは、この学校のめんどくさいところの一つだろう。

「すごい!あのムツツリーニがここまでの色気を相手に鼻血を我慢するなんて!この勝負は勝ったも同然だよ!」

成長したとは確かにいえるが、この程度で勝てるわけないだろ、普通。

「いや待て!まだ何かある!」

「え？」

雄二の声によって、勝利を確信していた明久が正氣に戻った。

《ようこそいらっしやいましたお二方。私、三年A組所属の小暮葵と申します》

小暮葵先輩は頭を下げて挨拶しながらも、着崩した着物をそれ以上はだけさせない。

なんて無駄な技術を習得してるんだ。

《小暮先輩ですか。こんにちは。ボクは二ーA所属の工藤愛子です。その着物、似合ってますね》

《ありがとうございます。こう見えてもわたくし、茶道部に所属しておりますので》

《あ、そっか。茶道って着物でやるんだもんね。その服装はユニフォームみたいなもんだよね。ちよっと着方はエッチだけど》

《はい。ユニフォームを着ているのです》

《そうですか。それじゃ、ボクたち先を急ぐので》

《そして、実はわたくしー》

《？なんですか？まだなにか》

《――新体操部にも所属しておりますの》

はだけられた着物を脱ぎ捨て、現れたのは、レオタードだった。

『土屋康太、音声レベルおよびモニター画像全て赤！失格です！』

第百十三問　昆虫は紫外線が見える　（前書き）

最近だんだん短くなってきているような……………

第百十三問 く昆虫は紫外線が見えるく

第百十三問

「畜生っ！やり方が汚ねえ！はだけた着物だけでも限界ギリギリだつてのに、その下に露出満点のコスチュームだと！？あのムッツリーニがそんなもんを直接見て耐えられるわけがねえだろうが！」

「全くだよ！なんて汚い手を使うんだ！とにかく雄二は、急いで対策を練って！早急に！画面に映らないように！」

歌美がなんか少し不機嫌になっているなあ。

大方、明久が少し目を奪われたとかだろうか。

あの先輩の対策をするよりも、歌美の機嫌をとる方が簡単だろうけど、まあそこは初々しいカップルらしさだろう。

いや？僕たちが周りを気にしないだけか？

まあいいや。メープルは変わらず手を握っているだけだし、問題はないのだから、

『あー、俺ちよっとトイレ行ってくる』

『丁度良かった。俺も行こうと思ってたんだ』

『いろいろあって手が汚れちゃったから、手洗いに行ってくるぜ』

『俺はなんとなく調子が悪いから保健室行ってくるぜ』

『大丈夫か？付き添いしてやるよ』

Fクラスのメンバーは、さりげなく教室から出て行こうとしていた。

何をする気か？というのは聞くまでもない。

まあとりあえず、落ち着け貴様ら。

まあ、言っても落ち着かないだろうから、黙っておく。

『『キターーーーーー!!』』

「……………全員失格したようじゃな……………」

「バカばかりだね？」

「まあ、文月学園っすからね」

ここまで悪くはない調子だったのに、ここでだいぶ駒を失った。

「このままだと全滅しそうだなあ……………よし、それじゃあ対抗策だ」

「女子に行ってもらってこと？それなら秀吉の出番だね」

「……明久よ。誤解しておるようじゃが、ワシとて異性に興味があるのじゃからな。特にお主にはそのことを覚えておいてもらわんと、ワシも色々と困」

「異性に興味があると言われても……………僕には歌美という心に決めた女性が」

「なぜか知らぬがいきなりフられたのじゃが」

残念だったな秀吉。他に良い人を見つけられるさ。

「とにかく、今は肝試しだ。皆、よく聞け！次は木下姉妹でいくぞ！」

「雄二よ！今お主、木下姉『妹』と言わなかったか！？」

「頼んだぞ秀吉」

「負担をなるべく減らすよーにするべし」

第百十四問く西洋ヒイラギとヒイラギは遠縁だけど形が似てるく（前書き）

本日12／24は異端者の祭の前夜祭だそうです。

FFF団に栄光あれ！

第百十四問く西洋ヒイラギとヒイラギは遠縁だけど形が似てるく

第百十四問

《肝試し……。困ったわね。アタシ、あまりこういうの得意じゃないのに》

《姉上。踏んどる。セットの唐傘お化けを踏んどるぞ》

《あ。ごめんなさい。壊れてないわよね》

ふむ……。

この二人なら、なかなか悲鳴をあげないだろうし、色仕掛けにもかからないだろう。

結構うまくいくかもしれない。

「これで問題なく先に進めるね」

「だな。あの二人なら色仕掛けに掛かることはないだろうからな」
何かに引っかかることもなく、小暮先輩の前までたどり着いたようだ。

《あら？あなた方は―――そうですか。女の子同士の組み合わせできましたか。それでしたら、わたくしにはできることはありませんね。どうぞお通り下さい》

《だって、秀吉。お言葉に甘えて行きましょ》

《むう…………。すんなりと通れたのにこにわかだまりはなんなのじゃ》

言ったとおり、小暮先輩は木下姉妹に道を開けていた。

「なんだか随分あっさり通過させてくれたね」

「そうだな。いくらなんでも無抵抗すぎる」

「何か仕掛けてくる可能性が高いね」

僕の予想通り、恐らく秀吉対策であろう、モヒカン―――とこな…………あれ？常村だったか。

「なんだろう？秀吉対策かな？でも、別にさっきの坊主戦mパイミたいに変な格好もしていないし、特に悲鳴をあげる要素なんて見あたらないけど」

「明久、つまりそれは、純粹にモヒカン男だけの要素によって悲鳴をあげることがあるってことじゃないかな？」

「恐らく歌美の言うとおりでだろう。また、相手を油断させる効果がないわけでもない」

召喚する様子はないので、恐らくモヒカン自身が何か仕掛けてくるだろう。

《来たか、木下。待っていたぞ》

《なんじゃ？ワシを待っていた？どういうことじゃ？》

《よくわからないけど、早く済ませてもらいなさい秀吉。アタシらは先に進まないと》

《そうじゃな。何の用か知らんが、手短に頼むぞい》

《ああ。大丈夫だ。時間はとらせねえ。……いいか、木下秀吉》

《なんじゃ》

真剣な顔で、モヒカンは秀吉に一步近づいた。

息を良く吸い、はつきりとした口調で、告げた。

《俺は――お前のことが好きなんだ》

瞬間、秀吉が本気で絶叫した。

第百十五問くヘラクレスオオカブトは紫外線によって羽が脱色され、白っぽく

第百十五問

「す、すまぬ。博人、雄二、明久……。このワシが、あれほどまでにみつともない悲鳴を……」

「気に病むな秀吉。同性にーーしかもあんなムサイ野郎に真剣な顔で告白されたら悲鳴をあげるのも無理はない」

「というか、ショックで意識を失ってもおかしくなかった」

「そうだよ秀吉。それに、お姉さんが『なんでアタシをさしおいてアンタが……!』なんて言いながら関節技をかけていたんだし、悲鳴で済ませただけでも凄いことだよ」

「姉上の関節技も確かに厳しかったのじゃが……『お前を想って書いたんだ』と言って自作のポエムを朗読されたのが一番苦しかったのじゃ……」

アレは酷かった。『お前は俺を照らす太陽だ』なんてフレーズは、正直精神攻撃だと錯覚したくらいだ。

生で聞かされた秀吉は、まともな生活を送れるだろうか……

「できれば姉上の力でCクラス突破を……それがならなくともせめて相手を消耗させるぐらいはしておきたかったのじゃが」

まあ確かに、小暮先輩を突破するのは、今の戦力では、厳しいかもしれない。

ここで投入する余裕があるのは一組だけだ。

そいつらがリタイアしたら、かなり厳しい。

「それは心配するな秀吉。向こうは向こうでこっちのメンバーのことをある程度知っているようだが、こっちにも対抗策はある」

「え？ そんな人いたっけ？」

Fクラスのメンバーは全滅したし、他のクラスでもどうなることだか。

「女子だとしても、さっきの坊主先輩の女装とモヒカン先輩の心理攻撃に怯えきっているだろうし……」

「いや、常夏コンビについてはもう大丈夫だろ。ゴスロリはあそこまでやればもう出てこないだろうし、告白は秀吉専用の作成だったみたいだしな」

「というわけで、頼んだぞ海渡」

『それにしても、俺たちが対抗策なんてなあ』

『ま、まあ、せっくなので楽しみましょう』

『そうだな。あんまりどっか遊びにいくとかしてないもんな』

『まったくです………』

なかなか良さそうなカップルだ。

あえて言うならリア充爆発しろ。

まあ、僕が言えたことじゃないが。

『ほれ』

海渡が清水さんに手を差し出した。

『せっかくだし、手繋ごうぜ』

『し、仕方がないので、繋いであげましょう』

『サンキュ、お嬢様』

『良きに計らえますわ』

第百十六問く世界最大の蝶は鳥に見間違えられたく

第百十六問

ラブラブカップルは、途中の道のりには屈することもなく、小暮先輩の前まで到達した。

『ようこそいらっしゃいましたお二方』

『あ、これはどうもご丁寧に』

対抗策とだけあって、新体操の服の小暮先輩の前でも平然としている。

『それでは、もっと奥行きたいんで失礼します』

『ほら、早く行きますよ』

これで第一関門はクリア。

続いてお化け屋敷を進んでいく。

『それにしても、どうしてあの先輩にまったく反応しなかったんですか？』

『は？ んなもん決まってるだろ』

俺にとって、最高の女は、美春だからだ』

『あ……………うう……………／／／』

ヒューヒューアツいねー（棒読み）

ぶっちゃけこの世で一番美しい女性はメープルなので、海渡の妄言はどうでも良い。

《お、チェックポイントに到達したみたいだ》

《意外と簡単でしたね》

《それにしても意外ね。葵のところが男子が突破できるなんて》

《ああ、あの着物の先輩ですか》

《うん。葵の魅力に絆されないなんて……きみ、もしかしてブス専？》

《自分の心に決めた人を裏切るような人間じゃありませんよ、俺は。それに、あのチート共にはあんなもんじゃ足止めにもなりませんよ。俺もそうそう負けてらんないんすよ》

ほう、僕たちを目標とするか。

なかなか険しい道だと思うがな。

《んじゃ、お喋りはこれくらいでー》

《《《試獣召喚》》》

『Aクラス 寿湊

現代国語 289点

&

Aクラス 中曾根みさお

現代国語 277点』

相手の三年生は、比較的戦いやすそうな300点未満のコンビ。

妖怪の種類は雪女とハーピーだ。

『Dクラス 浅井海渡

現代国語 315点

&

Dクラス 清水美春

現代国語 157点』

こちらは、海渡の妖怪が大蛇。蛇は商売と関係があるから、副店長であることが関係したのだろうか。

清水さんは、迷ひ神だ。

恐らく以前の特徴のままなのだろう。

第百十七問〱マイマイカブリを調べると、日本のでき方がわかる（前書き）

サブタイトル〱

マイマイカブリは飛べないので、地域変異がおこりやすいため、地形の動きがわかります。

第百十七問くマイマイカブリを調べると、日本のでき方がわかる

第百十七問

勝負は、ほんの数秒だった。

相手の召喚獣も清水さんの召喚獣も武器はなし。

それに対して、海渡の大蛇は尻尾というリーチの長い武器がある。

どちらが有利かは一目瞭然だ。

先輩方の召喚獣は、一度も攻撃を与えることなく、一方は尾に叩きつけられ、もう一方は巻き付きによって碎かれて消えていった。

ふむ……………

なかなか使い勝手が良さそうだな、大蛇。

僕の小豆洗いも物理攻撃しかないだろうから、相手の首捻切ったりしないからだからなあ。

面倒くさいもんだ。

そういえば、早くメーブルの召喚獣を見せてもらいたいな。

途中で終わらせるのはつまらないから、なんて言って最後に回されただけど、ちょっと理由が理不尽だ。

僕たちだって、悲鳴をあげ……………

……………あげ……………

……………

うん、有り得ないな。

いろいろ鳴かされることはあるけれど、悲鳴はない。

まあ、僕の事情は置いといて、これでCクラスは突破。

残るはAクラスのみ。

恐らく海渡達なら、相手ー！恐らく常夏コンビー！に手傷を負わせることは可能だろう。

海渡のレベルで死兵になってもらえば、相当な痛手になるだろう。

そうすれば、僕たちが行かなくてもクリアできるし……………

待て待て待て待て待て

そうすると、オカルト召喚獣を見る機会がなくなってしまう。

後で腕輪使って見るのもありだけど、戦ってる姿も見たい。

よし、というわけで負ける海渡。

どうやらAクラスの教室は広いため、あまり手が込んでいない迷路になっていて、シンプルなつくりだ。

それにもかかわらず、ある程度迷路を組み替えているからか、失格になる奴が続出している。

《うおわっ!?!》

《きゃあああーっ!》

「?と?は失格だね?」

出てきたお化けに驚く、というのは一般的なお化け屋敷のようで、前衛的な仕掛けに恐怖していた皆も、アトラクションを楽しんでいるようだ。

《さて、どっちだろうな?》

《海渡の好きな方にどうぞ》

迷路特有の構造も、楽しまれているようだ。

そのままどんどん進んでいく様子を見ると、ついに、開けた場所に出た。

どうやらチェックポイント到着のようだ。

《おう。来たみてえだな。随分と待たされたぜ》

《お前らが俺らのお相手一組目だな。三年の実力をじっくり見せてやるから覚悟しやがれ》

予想通り、待ち受けていたのは常夏コンビ。

立ち会いは木村先生なので、物理での勝負だろう。

第百十七問　マイマイカブリを調べると、日本のでき方がわかる（後書き）

感想、ご意見等、よろしくお願いします

百十八問くイリオモテホタルは冬に発光するく（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。

コイルのめざパ厳選をしていたらいつの間にか年を越していた作者ですが、今年もこの小説を呼んでいただけると嬉しいです。

百十八問くイリオモテホテルは冬に発光するく

第百十八問

「浅井君達は勝てるかな？」

「どうだろうな。清水はガチガチの文系だが、浅井の方はどちらかと言えば理系だ。さすがにAクラス相手は分が悪いな」

流石は雄二。試召戦争がらみで他のクラスについても調べたのだろう。

理系科目を選択する場合は、理系の人は物理と化学、文系は生物と地学を好むことが多いそうだ。

暗記と計算で学習方法が似ているからだそうだ。

まあ、僕は生物系の理系ーつまりは暗記が強いーなので、これには当てはまらないわけだが。

まあ、勉強は自分のやりたい分野をやった方が、モチベーションで差がでる。やりたいことをやった方が良い。

「三年は受験に照準を合わせて勉強しているからな。選択科目の物理で勝負してきたってことは、向こうはよっぽど自身があるんだろうな」

「ふうん…………でも、随分無謀なことをするよね」

「どういふことかな？明久？」

「だって、物理でも博人には勝てないでしょ」

「ハクにあんな変なキャラが適うわけないっす」

《《《試獣召喚》》》

『Dクラス 浅井海渡

物理 303点

&

Dクラス 清水美春

物理 101点』

海渡は得意な数学に劣るものの、十分戦える点数だ。

清水さんの方は、Aクラス相手には厳しいかもしれないが、Dクラスのカチガチの文系だという割には点数があるようだ。

「これで向こうが300点とかの点数を出してきたら危ないよね

「それは恐らく大丈夫じゃろう。相手は常夏コンビじゃからな」

「そうだね。わざわざ出てきてくれて助かったよ」

「……………先見の明がある」

「さすがに三年のトップクラス相手はきついからな」

召喚大会では200点くらいだったそうだから、まあ、得意でも250くらいか……………？

いや、わざわざ出てくるくらいだから、結構できるのかもしれない。

『Aクラス 常村勇作

物理 412点

&

Aクラス 夏川俊平

物理 408点』

「「「なにいつ!?!……………」」」

明久たちは思わずハモるくらい驚いていたが、すぐに落ち着いた。

「一瞬は点数の高さに驚いたけど、博人なら問題ないね」

「まるでAクラスの優等生のようじゃが、反則級ではないようじゃな」

「……………結果は確定」

「おいおいお前ら。博人ばっかに頼ってたら、いざという時困るだろうが」

全くその通りだ。

いくらあの常夏が調子に乗ってて秒殺できるような雑魚さでも、点数だけは立派だぞ。

《んじゃ、せいぜい頑張ってみせろよ後輩ども》

《散々待たされたんだ。ちょっとは粘ってくれよ？》

常夏コンビの召喚獣は、大きな金棒を携えた牛頭と馬頭だ。

そんな二人の召喚獣が動くよりも早く、海渡の召喚獣が動き出し、尾の一撃を見舞った。

《やっぱり速攻ってのは結構有効みたいだな》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176s/>

バカと速攻と昆虫少年

2012年1月2日21時50分発行